
輪廻の鎖

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の鎖

【Nコード】

N9898W

【作者名】

白銀

【あらすじ】

主人公の真冬は決まった夢を見た。とある少年が大切な人を守れなかった夢。その夢はあまりにも生々しく、真冬に強い喪失感を与える。その正体を確かめたかった。

そんなある日、真冬はとある少女に出会う。その少女は夢で見た少女だった。

少女は真冬と一緒に夢を見ていた。それは前世の記憶。輪廻の鎖に縛られ、何度も大切な人を失い続けた記憶。真冬はその鎖を断ち切る事を誓う。

のべぷろ！に投稿済みの作品です。

輪廻の鎖 1

輪廻の鎖

— 1 —

なぜ人は失いたくないと心から願うものを失うのだろうか。大切な宝物、家族、想い人、ずっと離したくない大切なもの。だが人はすぐに失くしてしまう。誰も失う事など求めていないのに。

少年は大切な人を守りたかった。命に代えてでも守りたかった。だが世界は嘲笑うように少年の大切な人を奪う。これが自然だとも言うように。

辺りは静かだった。不気味な静けさが少年と少女を包む。

「……死ぬな」

少年は抱きかかえている少女を揺する。生暖かい血が少年の手に伝う。

「無理を言わないで……ください」

少女はかすかに微笑む。儚い笑みが少年を絶望に突き落とす。

「俺は……君を守る護士なのに……」

少年は少女を必死に抱きしめる。

「よく守ってくれました……こんな中途半端な巫女を」

少女は少年の耳元に囁く。

「立派な巫女だったよ……ずっと守ってあげたかった」

少年の肩が震える。

「そうですか……よかった……では……お別れです」

少女の頬に涙が伝う。

「待ってくれ……待って……」

少年は少女の肩を掴む。

「それでは来世で会いましょう……」

少女は少年の瞳を見た。少女の口癖。何度も聞いた言葉。その意味は別れ。

「……それまでお元気で」

少女はその言葉を最後に壊れた人形のように力尽きた。少年の絶叫が静かな地を振るわせた。

*

少年はゆつくりと目蓋を開ける。視界に入ったのは見慣れた白い天井。

「また……同じ夢……誰だよ」

少年は独語してベッドから体を起こす。机の上にある鏡を見ると恋人を失った後のような喪失感に埋め尽くされた顔。あの夢を見るといつもこんな顔をしている。少年はこんな体験をした事はない。現在は護士や巫女などというファンタジーな言葉には程遠い世界。毎日、学校という閉鎖空間に押し込められ、毎日同じ人物と顔を合わせる。退屈ではないが、面白くもない。16歳となり高校にも通うようになったが何も変わらなかった。自分には何か足りない。必要な物が無い。胸にあるのは喪失感。だからあんな夢を見るのだろうか。

「真冬、ご飯できてるよー」

ドアの向こうから幼い声がした。知らない考え事をしていたら時間が立っていた。真冬は寝癖がついた黒髪を手で押さえながら部屋から出る。部屋を出ると少年より頭一つ小さい小柄な少女が愛らしい笑顔を浮かべる。真冬の妹である春だ。真冬と同じ黒髪を肩までの長さに伸ばした少女で、歳は3つ違う。

「おはよう」

春が笑顔で挨拶。名前通りに春を感じさせる爽やかな笑顔。心が洗われる。先ほどの夢が薄れるようだ。

「また変な夢でも見たの？ 冬の寒さで凍死しかけた顔してるよ」
春が顔を覗き込む。

「どんな顔だよ」

真冬は頭を掻いた。

「まあいいや。行こう、僕が愛を込めて作ったんだから」

春が笑顔で真冬の手を引いた。この家には他に家族はいない。両親は早くに亡くなり、二人で暮らしている。唯一の救いは二人が大学を出るには十分なお金を用意してくれていた事だろう。真冬は父親が何か危険な事に手を染めていたのではないかと思っている。だが死人に口なし。真相は分からない。

二人は丸テーブルに身を寄せ合って座り、手を合わせる。テーブルの上には魚、味噌汁、ご飯、卵焼き。定番のメニューが並んでいた。朝から挑戦はしたくないのでありがたい。この食事スペースに台所、それぞれの部屋だけのアパートの一室。だが十分だった。

「どう？」

春が拳を握って真冬に問う。

「美味しいよ」

卵焼きを口にして真冬が微笑む。春が満面の笑顔を浮かべる。この笑顔があるから。真冬には居場所がある。あの夢の中の少年とは違う。

「えへへ」

春が頬を赤らめて嬉しそうに笑う。真冬は春が作った料理を堪能してから、朝の準備をした。

*

整備された歩道。その道を歩く二人。黒い学生服を着た真冬と、セーラー服を着た春だ。真冬は頭上を見上げる。葉を落とした寂しい木々。今の季節は冬。ここは常月とこつきの国と呼ばれる四季がはっきりと分かれた国だ。国名だけではなく地名にも月という字がよく使わ

れている。常に月の祝福で満たされていた国らしい。今ではその事実は風化して真実は誰も知らない。

真冬は寒さを感じて学生服のポケットに左手を突っ込む。右手は布に包まれた木刀を持っている。両手をポケットには入れることが叶わないのは残念で仕方ない。春も同じように左手に布で包まれた木刀を持っていた。

「真冬、こけるよ」

春が真冬の腕をポケットから引っこ抜こうとする。だがビクともしない。

「真冬なのにどうして寒いのが苦手かな」

春が頬を膨らませる。

「お前は春なのにどうして寒いのが大丈夫なんだ。俺は寒くて仕方ないね」

真冬が肩を震わせる。

「なら、僕がマフラーでも編むよー」

春が笑顔で提案。無邪気な笑顔を見て真冬の頬にほろりと涙が伝う。嬉しくても泣ける事があるというのは本当らしい。

「ど……どうしたの？」

「いや……嬉しくて」

真冬はつい本音を言ってしまった。春は嬉しそうに一つ頷いた。

ほどなく歩くと道が二手に分かれた。右の道を行くと真冬が通う神月高校、左の道を行くと春が通う神月^{かみつき}中学校だ。名前の由来はここが神月と呼ばれる地名だからだ。

「またね」

春が元氣よく手を振る。真冬は軽く手を上げて答えた。緩む頬を引きしめる事がなかなかできなかった。シスコンだと思われるかもしれないが、あの子の可愛さは反則だ。

「なにをにやけてるんだ」

突如、肩を組まれた。左横を見ると茶色の髪を伸ばした少年がいた。幼馴染であり悪友でもある少年だ。端正な顔立ちに190センチ

チはある長身。気さくな性格もあり女性に人気がある。

「……よう」

真冬は慌てて表情を引きしめる。

「春ちゃん可愛いからな！。俺が狙ってやろうか。真冬が義兄とかい……」

言葉の途中で真冬の肘が少年の胸を強打。

「つまらん冗談は終わりか……藤堂？」

真冬は悪友を睨む。

「お前……春ちゃんが関わると冗談も通じないのな」

藤堂と呼ばれた少年が強打された部分を撫でる。藤堂の手を払いのけて早足で歩く。藤堂は長い足で大股に歩く。すぐに追いつくのがやけに癪に障る。

「機嫌直せよ」

藤堂が隣に並び苦笑。真冬は溜息をついてから悪友を見た。

「まあいいか。春がこんなつまらん男に振り向くものか」

真冬が拳を握る。

「幼馴染に冷たいねー」

藤堂はつまらなそうにあくびをした。だがすぐに瞳に生気が宿る。こういう時は決まったパターンだ。

「なんだ……また可愛い子でも見つけたのか？ 俺は道場に顔を出すから先に行くぞ」

真冬は悪友を置いて歩こうとする。この状態になった藤堂に付き合つと無駄な時間を浪費する。

「今回は……本物だ！」

藤堂が真冬の手を引いた。今までは偽者なのかと、内心でつぶやいて真冬は手を引かれて走る。こうなったらもう付き合っしかない。藤堂が手を離れたのを機に顔を上げる。

「……………」

言葉が出なかった。冬月高校のブレザーの制服を着た少女。腰まで伸びた艶やかな黒髪、人形を思わせる端正な顔立ち、真っ白な肌。

心臓が一度鳴った。自分はこの子を知っている。

「さすがの真冬も言葉が出ないかー、綺麗だよな」

藤堂が品定め。そんな藤堂を無視して真冬は歩を進める。最初はゆっくりと、次第に速く。いつの間にか走っていた。

「おい……真冬！」

藤堂の声が背中に聞こえた。だがそんな事は気にならなかった。

真冬は少女の左手を取った。少女は驚いて振り向く。

「……やっぱり……」

真冬はつぶやいた。やはり知っていた。この子はあの夢に出てきた女の子だ。夢の中で死んでしまった女の子。あの少年が守りたかった人。

「……はじめまして……という言葉がこれほどまでに似合わない出会いはありませんね」

少女が微笑む。うつすらと瞳に涙を溜めて。

「……俺は真冬……君は？」

「私は……雫です」

お互いが名乗る。その時を待っていたかのように。しばし見つめ合ってから雫が口を開いた。

「……放課後に会えますか？」

雫は決意を込めた瞳で真冬を見つめた。真冬は頷いた。

「……それでは……ごきげんよう」

雫はそれだけを言って去っていった。その言葉が妙に馴染んだ。

「おいおい……どうした？」

慌てて追いついてきた藤堂が口を開く。

「……夢で見た少女に出会った」

真冬はつぶやく。

「あまりの可愛さにおかしくなったか……可哀相に」

藤堂は哀れみの瞳を向けた。

「はは……おかしいのかもな」

真冬は力なく笑った。自分に足りなかったものを見つけた。それ

と共に生まれる喪失感。今までの日常が音を立てて壊れていく気がした。

「本当に大丈夫か？」

藤堂が怪訝な顔をしている。

「大丈夫だ。今度は失わないから」

真冬は戸惑う藤堂を置いて歩き出す。俺はあの少年ではないのだから。

*

教壇に立つ教師が歴史について熱弁を繰り広げる。真冬は話が脱線し始めた教師を無視して窓の外を見る。どうしても朝の事が気になつてしまう。真冬の教室は1階であるため別のクラスの体育の授業を見るにはうつてつけた。3階から見下ろすのもいいが1階の方がはつきりと見える。白の体操服に緑色のハーフパンツを着た学生がサッカーをしていた。緑色ということは同じ学年だろう。

「……あ……」

真冬はとある人物を発見して、思わず言葉が出てしまった。長い黒髪の少女。雫と名乗った不思議な想いが込み上げてくる少女。

パスのつもりで蹴ったボールが空高くに上がる。あれを取るのには困難だ。藤堂くらいの身長なら楽に取れるのだろうが。だが雫は高く上がったボールを小柄な体が嘘のように跳躍。胸でボールを綺麗にトラップ。すかさず空中でボールを蹴り、パスをした。大人しそうな顔をしてなかなか運動はできるらしい。

「おい、真冬」

後ろから小声が聞こえる。視線が教室に戻る。後ろの席に座る藤堂が話しかけてきたらしい。二人は窓際の後ろの席にいたため小声なら話しても問題はない。

「どうした？」

真冬も小声で返す。

「あの子を見てたよな？　一目惚れ？」

藤堂がにやりと笑う。

「そんなのではない。今度こそは守りたいんだよ……たぶん」

真冬はもやもやした心の中を言葉にする。

「なんだよ、それ。前世の約束か何か？　流行らないぜ、今は」

藤堂は溜息をついた。

「だよな……」

真冬はそれ以上は話さなかった。ちょうど教師の脱線も終わり、授業が再開されていた。

*

授業が一息ついて今は昼休憩だ。真冬は食堂に入る前に券売機にカードを通す。

「……生徒番号1322……優良生徒と認定……Aランチをどうぞ」
機械音声と共に赤い食券が券売機から出てきた。それを引き抜いて列に並ぶ。といっても前に並んでいるのはせいぜい5人。

「真冬ー、席を取ってくれー！」

藤堂が叫ぶ。真冬は後方を見ると30人は並んでいる列の最後尾に茶色の髪が見えた。この高校は成績、授業への出席率、部活動の結果等で優良生徒、一般生徒を分けている。優良生徒となればさまざまな特権が与えられる。昼休憩では食堂で並ぶ必要がない。優等生と認定されている学生そのものの数が少ないのであまり並ばないのだ。

「盛りすぎだろ……これ……」

Aランチを受け取った真冬は笑ってしまった。山盛りのご飯、具沢山の味噌汁。メインは鶏肉、副菜はサラダ。サラダといっても数えるのが面倒なほど野菜が入っている。

豪華な食事を運んで席に座る。藤堂はあと25人待ちだ。羨ましそうな視線を無視して鶏肉を口に運ぶ。

一人で食事をしていると背後に人が立つ気配がした。ゆっくりと振り向く。長い黒髪が見えた。目線で追うと雫が後ろを通過していく。呼び止めようとした時に学生服の右ポケットに雫が何かを入れた。慌てて確認する。この感触は紙だった。手元を確認すると手紙だ。

「直接、言えはいいのに」

真冬は手紙をポケットにしまった。

「お待たせ……ついでにいただき！」

藤堂が鶏肉を強襲。普段なら防ぐ所だが、今回はみすみすメインの鶏肉を渡してしまった。

「Aランチ、うまいな」

藤堂が自分のBランチを見てつぶやく。藤堂は一般生徒のためのBランチ。メニューはご飯普通盛り、ワカメと豆腐が浮かぶ普通の味噌汁。メインは豚カツだ。

「豚カツあればいいだろう。鶏肉食うな」

真冬はお返しに豚カツを奪う。

「おま……そんだけあればいいだろうが！」

藤堂が豚カツを死守。豚カツがなければご飯と味噌汁だ。死守したい気持ちは分かる。

「鶏肉と交換だ」

真冬は鶏肉を藤堂のBランチに置いた。

「真冬……」

「どうした？」

「お前は良い奴だな」

藤堂が嬉しそうに鶏肉を食べた。

*

授業を終える鐘が鳴る。窓際の席に座る春は腕を伸ばす。
「うー、終わったー」

解放感に包まれて一時至福の時間を過ごす。連絡事項を聞きながら帰りの仕度を開始、といっても机に教科書を押し込めて、布に包まった木刀を持つただけだ。春はずっと木刀を使った剣舞を習っている。最終的には真剣を使った舞を習う予定だ。見えない己と戦い、精神を鍛えるためだ。始めるきっかけは兄である真冬がやっていたからだ。

「では、終了。宿題を忘れるな」

教師の言葉を聞いて春は立ち上がる。

「春ー、今日も行くの？」

後ろからクラスメイトに声をかけられた。

「うん。急ぐから」

春は駆け足で廊下を走る。今から向かうのは真冬が通っている高校だ。歩いて10分。走れば5分でつく。真冬の妹として真冬が参加している部活動に参加させてもらっている。やましい事をしていく訳ではないので、両校共に黙認しているというのが現状だ。

息を切らせて春が走る。

「……早くつかないかな」

春は微笑んで独語した。唯一の家族であり居場所である兄の真冬。春にとっては何事にも変えがたい絆だ。高校の門をくぐり抜けて、道場を目指す。この学校は剣道、居合など剣術の部活動が盛んで、巨大な道場がある。整備された道を駆け抜けて道場のドアを開ける。道場の隅をこそそと移動して目的の場所へ。道場の一番奥で刀を持つて舞う老齢な男性。白髪を伸ばし、ほっそりとした体格が印象的だ。剣舞を教えている一刀斎だ。もちろん本名ではない。だがここまで似合う名前はないので皆はあえてつつこまない。春は本名を知りたいような、知りたくないような複雑な思いで一刀斎を見た。

「来たか……今日も雑念だらけだな」

一刀斎が刀を止めて春を見た。この人物に隠し事は無駄だ。全てを見通す眼力を持っている。これは長年を生き抜いた経験がなせる技だろう。

「えへへ……真冬は？」

春が目当ての人物を探す。だがどこにもいない。春は首を傾げた。いつもは先に始めているのに。

「うむ。あやつが遅刻は珍しいな」

一刀斎は顎に手を置いて思考。

「うーん。心配だな」

春は木刀を壁に立てかける。

「行つて来い。集中力がないと怪我をするので」

一刀斎は春に微笑む。

「うん！」

春は頷いてから道場を後にした。

*

真冬は屋上に上がる。手紙に書いてあったからだ。

「屋上で待ちます。覚悟があるなら来てください……か」

真冬は手紙の内容を口に出した。果たし状にも愛の告白をするための呼び出しにも見える手紙。だがそんな生易しいものではないのだろう。

階段を上り、鉄のドアを開けた。冷たい風が吹いて真冬の黒髪を揺らした。

「来てくれたんですね……来ないかもしれないと思いました」

屋上の塀に背を預けた雫は微笑んだ。

「来るさ……どうしても話を聞きたいから」

真冬はあの夢の正体が知りたい。

「あなたも夢を見るのですか？」

「ああ。君も見ろんだね。あの夢を」

雫の問いに真冬は頷いた。

「はい……あれは前世の記憶でしょう」

「……そうか……」

突拍子もない言葉。でも、疑う気持ちはなかった。あの夢はそれだけ生々しい。

「私の前世は巫女です。そして、今も巫女として生きています」

雫は胸の前で手を握る。

「巫女……神楽を舞ったり、祈祷したり、占いをしたりする？」

「それは表の仕事です」

真冬の言葉にやんわりと返す雫。

「……裏は？」

「……穢れを祓うのが巫女の使命です。穢れと呼ぶこの世界に招かれざるものを祓うのが巫女のあるべき姿なのです」

真冬の言葉に雫は真摯に答える。瞳を見れば分かる。嘘は言っていない。

「それを守るのが……護士か？」

真冬は確認する。夢の中の少年は護士だと言っていた。

「はい。巫女を守り、共に戦う者です」

雫が頷いた。

*

春は屋上に上がる階段を駆け上がる。少ない知り合いを辿りようやくここに向かっているのが分かった。

「中学生にも携帯電話は必要だよ」

春は頬を膨らませる。まだ小さいから駄目だと言って買ってもらえなかった携帯電話。真冬とすぐに連絡がとれないのが不便だ。ほどなくして屋上に上がる最後の階段が見えた。

「よし、真冬を見つけよう」

春は笑顔で階段を上りきった。

*

「私と共に歩んでください」

雫が真冬に手を差し出す。真っ白で細い腕。儚げで頼りない腕を。
「……嘘……」

春は信じられないものを見てしまった。兄が、真冬が見知らぬ少女に告白をされている。軽い気持ちの告白ではないの一言で分かった。

「春……？」

真冬は驚きと焦りがこもったような声が出てしまった。春が数歩後ずさる。

「ごめん、こんなつもりではなくって……」

春は背を向けて走り出した。

「春！」

真冬は追いかけようと一步を踏み出すが、そこで足を止める。

「行つて下さい。私のせいで仲がこじれるのはいけません」

雫は背を向けた。

「ああ。大切な妹だからな」

真冬は春を追いかけるために走り出した。

「……… 今日も一人ですか……… それにあの子は……… これもまた運命ですか。どれだけ生まれ変わろうと一緒になんです」

雫は寂しそうな表情を空に向けた。だがそれは一瞬だけだった。すぐに表情を引きしめて振り向く。

「例え一人でも……… 戦つてみせます」

雫は独語して歩き出した。

*

春は階段を駆け下りる。

「う………う………」

自然と涙が溢れた。唯一の家族を失う喪失感が春を襲う。いつか兄も大切な人が出来ると分かっていた。だがそれはもっと先だと思

っていた。それまでは側にいて欲しかった。兄に依存しているのは分かっていて。だが他に家族がないのだ。頼るべき人もいない。目の前が真っ暗になった。

「待てよ！」

後ろから真冬の声がした。止まりそうになる体を必死に動かす。今は話したくない。

「どれだけ速いんだよ」

真冬は溜息をついた。徐々に追いついているが、これは骨が折れそう。気合を入れなおした所で見慣れた茶色髪が前方から来るのが見えた。

「藤堂ー、春を捕まえろ！」

真冬が叫ぶ。

「よく分からんが……任せろ！」

藤堂はニヤリと笑い春に向かって走る。前からは藤堂、後ろからは真冬。春の足が止まる。

「お兄ちゃんの許可があるんで……遠慮なく！」

藤堂が春を抱きしめる。春は抵抗しなかった。力なく顔を落とす。瞳には涙を溜めて。

「どうした？」

藤堂が優しく声をかける。

「真冬が……知らない女性と……うう……」

春は言葉を途切れながらつぶやく。

「違うんだ。これにはいろいろと事情があるんだ」

真冬が追いついて春に言葉をかける。

「事情？」

春が振り向いた。真冬は一つ頷いた。

*

春と真冬はとりあえず運動広場に設置してあるベンチに座る。二

人は何から話していいのか分からずしばらく無言だった。

「そんなに深刻なのか？」

藤堂が缶ジュースを三つ持って帰ってきた。真冬にはカフェオレ、春には無糖のコーヒー、藤堂は炭酸のジュースだ。

「そんな事は……ないんだが。二人とも真剣に聞いてくれるか？」

真冬が二人を見た。春は顔を落としたまま一つ頷く。

「朝からおかしいぞ、お前」

藤堂は頭をかいた。だが聞いてはくれるらしい。真冬は雫が話した内容を順番に語った。

*

雫は通い慣れた歩道を一人で歩く。前方には楽しそうに話す学生。

「……………」

雫はその背中を寂しそうに見つめる。友達ができない訳ではない。ただ自然と距離を置いてしまう。友達に隠し事はしたくない、だが自分は巫女だと言って受け入れてくれる人間が果たしてどれだけいるのか。そんな葛藤に悩まされている。

「……ただの神社の娘でいいのでしょうかね」

雫は独語した。巫女として神社でお守りを売ったり、祈祷をしたりしていると言えいいだけ。裏の事は何も言わなければいい。それだけで目の前の光景は手に入る。だがずっと無理だった。結局は話してしまう。それ以降の扱いなど決まっている。電波娘と呼ばれるか、精神科に行ったほうがいいと言われてしまっただけだ。

唯一理解してくれそうな真冬とは結局ゆっくりは話せなかった。一つ溜息が出た。

*

二人は最後まで話を聞いた。途中で遮る事もなく。

「これで……全部だ」

真冬が言い切った。

「……分かった。真冬が雫さんの護士になるんだね」

春は顔を上げて微笑む。儚い笑顔が真冬の心を締め付ける。

「信じるの？」

藤堂は溜息をついた。

「うん。真冬が嘘をつく訳ないもん」

春が強く頷く。藤堂が頭をかいた。

「あーあー分かったよ。信じるよ。信じてやるさ！」

藤堂が叫ぶ。

「ありがとう」

真冬は二人に微笑む。

「でも……雫さんに真冬は渡さない」

春が真冬の腕を強く掴む。

「……つつ……」

真冬はあまりの強さに顔をしかめる。だが春は力を緩めない。

「僕が……真冬の巫女になる」

春の真摯な瞳が真冬を見つめる。

「春ちゃん、勢いでなれるのかよ」

藤堂が自棄になりかけている春の肩を掴む。

「そつだ。雫は特別なんだよ……たぶん」

真冬の言葉は頼りない。聞かされただけで護士が何なのか分からない。

「真冬は分からなくても護士になれる。なら僕も巫女になる」

春は真冬の腕を掴んだまま立ち上がる。真冬は慌てて立ち上がった。

「もしかして……雫に会いに行くのか」

「うん。全部聞くんだよ」

春は真冬の手を引いて歩き出す。

「俺は蚊帳の外だよ。後で続きを聞かせろよー！」

藤堂が二人の背中に叫んだ。

*

冬月高校から徒歩10分ほど歩いた所に石で出来た階段がある。その階段を上りきると一つの神社がある。

雫は階段を上りきって一息ついた。

「雫、今日は……分かってるな」

袴を着た老齢な男性が雫に話しかける。雫の祖父であり、この神社の責任者だ。70歳を過ぎ髪は白く染まっている。だがその体は衰えを知らない筋肉質。護士として戦い続けた結果だ。

「はい……例え一人でも成し遂げます」

短く言って雫は自室へと向かった。頭上を見上げるともう暗くなっていた。雫はこの暗さが嫌いだった。穢れは闇を好む。当然、闇が増したこの時間に活動する。この暗さは戦いを告げる合図なのだ。雫は自室に入り、素早く巫女服に着替える。机の上に置いてある鉄扇だけを手に取って部屋の外に飛び出した。

*

二人は石の階段を上る。ゆっくりと登る真冬とは違い、春は若干焦っているのかどんどん先行していく。

「春……落ち着け」

真冬がその背中に声をかける。春が振り向く。

「うん……」

春は一つ頷いてペースを落とした。だがすぐにペースが速くなる。真冬は春の変化がよく分からなかった。雫の護士になっても春との関係は変わらない。ずっと兄妹のままだ。

「行くね」

春は短く言って階段を駆け上がる。真冬も仕方なく階段を駆け上

がった。

*

雫は歩き慣れた道を淡々と進む。進むに連れて黒く澱んだ霧が濃くなっていく。発生源を鋭く見つめて歩を速める。

冷え切った空気。その冷たさは異常だった。この場に一時間もいれば凍死してしまうほどの冷氣。雫は山の上にいるのではない。場所はまだの公園。渴いた土が地面を満たし、周りにあるのは子供が遊ぶためのブランコ、鉄棒などだ。凍死をするような場では決してない。まるで自分が別世界に來た感覚がする。

「……我は望む……神聖なる温かさを……」

雫が瞳を閉じて言葉を紡ぐ。刹那、雫を柔らかな光が包む。光が徐々に雫の体温を上げていく。体が思うように動くのを確認してから鉄扇を開く。

「來なさい……その穢れを被います」

雫は前方を睨む。睨んだ先に現れたのは黒い裂け目。その裂け目から出てきたのは黒銀の狼。狼は雫を品定めするように左回りにゆつくりと進む。緊張の汗が雫の頬を伝う。その汗を見た狼は突如地面を駆ける。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

突如、現れたのは障壁。狼はガラスに衝突したように弾き飛ばされる。だが狼は空中で一回転して着地。損傷はない。

「……護士がいればいいのですが」

雫は悔しそうにつぶやいた。穢れを被うには、幾度となく祈りを捧げた武器で切り裂くのが一番早い。それを扱うのは護士だ。巫女を護り、穢れを切り裂く者。

動揺を感じ取ったのか狼の赤い瞳が輝く。刹那、雫目掛けて飛び掛る。

「……つつ……」

雫は後ろに飛んで深呼吸。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

雫の叫びと共に障壁が展開。再度、狼を弾き飛ばす。だが安堵の息をつく暇はなかった。狼は着地と同時に左回りに高速で走る。

「……つつ……」

雫は鉄扇を構える。今からでは障壁が間に合わない。護士の武器には叶わないが、雫が手に持つ鉄扇にも祈りを捧げてある。

狼の鋭利な牙を鉄扇で止める。雫は狼の赤い瞳を睨むのも一瞬、横に振り払う。それとほぼ同時に後ろから何かが割れる音が聞こえた。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

すかさず言葉を紡ぐ。言葉を紡ぐと同時に、雫の後ろに裂け目が出来る。刹那、もう一体黒銀の狼が飛び出す。後方からの奇襲。だが雫は振り向かない。それを絶好の機会と捉えた狼は口を開く。雫との距離はほんの数センチ。だが狼が雫を噛み付く事はなかった。遅れて発動した障壁が後方から飛びついた狼を弾き飛ばす。

「……」

後ろを見ることもなく雫は前方にいる狼に警戒を向ける。狼は後方からの奇襲で全てが終わると思ったのだろう。戸惑いを感じて一瞬だけ足が鈍る。その隙を雫は見逃さない。素早く地面を疾走。狼は気圧されて後退。鉄扇が月夜を浴びて煌く。舞ったのは黒い霧。狼の体から濃い霧が溢れて消えていく。

「まずは一体ですか……」

切り裂いた狼から素早く視線を後方の狼に向ける。狼は毛を逆立てて威嚇する。

「……どれだけ威嚇しても無駄ですよ。私は……怯みません」

雫は鉄扇を構える。それと同時に狼が地面を駆ける。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

言葉を紡いで障壁を展開。真っ直ぐに突撃してきた狼を弾き飛ばす。吹き飛ばされた狼には焦りはなかった。それは雫の様子を見ればすぐに分かる。額には汗が浮かび、荒い息を整えている。

「……はあ……はあ……」

激しい眩暈がする。ふらつく体を叱咤して鉄扇を構える。狼はお構い無しに地面を駆ける。鋭利な爪で幾度も障壁を切り裂く。

「……この程度の穢れで……苦戦なんて……」

亀裂が入る障壁を見つめてつぶやく。巫女の力には限界がある。

障壁を展開するだけでも多量な体力を消耗する。それに加えて鉄扇での接近戦、この空間特有の寒気から身を守るために身を包んでい

る光を展開するための力。やらなければならない事が多すぎる。

「……来なさい……」

雫は鉄扇をゆつくりと上げて地面を疾走。刹那、障壁が破れる。狼はその勢いのまま雫に鋭利な爪を振り下ろす。雫は鋭利な爪を見

なかった。見てしまえば避けようとしてしまうから。

「……消えなさい！」

雫は狼を鉄扇で切り裂く。狼から濃い霧が溢れる。だが狼は最後の力を振り絞り雫の左肩を切り裂いた。

「ぐう……」

雫は鉄扇を地面に落とし、肩を押さえてうずくまる。右手に生暖かい血が触れる。薄れていく意識を奥歯を噛締めて保つ。周りに残るのは黒い霧。雫は左肩から右手を退けて、両手を組んで祈りを捧げる。

雫から溢れるのは眩しい光の粒子。光の粒子は意思を持つように舞う。

「……光よ……穢れを清めよ」

雫が言葉を紡ぐ。肩から溢れる血を全く気にもせず。黒い霧は抵抗を示すが、すぐに薄れた。雫はゆつくりと瞳を開けた。

「……来世で会いましょう……」

ぽつりとつぶやいて立ち上がり、霧に背を向ける。一度、眩しい閃光が公園を満たした。

*

二人は神社の門を潜り一人の老齡な男に出会った。真冬は怪訝に思われると思ったが事情を全て話した。

「そうか……またあの時がくるのか」

老齡な男はぽつりとつぶやいただけで、こちらに怪訝な瞳を向ける事はなかった。

「あなたも事情を……」

真冬は一步を近寄る。

「ああ。我が名は刹^{せう}。雫の祖父にあたる。私も以前は護士であつたが……この年齡となり引退した身だ」

刹と名乗った老齡な男は自らを護士と名乗った。やはり雫が言っていた事は本当らしい。

「俺を……護士にしてくれ。何も分からないままなんて嫌だ」

真冬は刹を見つめる。

「僕は……真冬だけに背負わせたくない……可能なら巫女になる」
春も一步前に出る。

「……明日、雫を見てもその覚悟が揺らがないなら、私が鍛えよう」
刹は短く言い背を向ける。

「待ってくれ！」

真冬はその背に言葉をかける。

「もう遅い……帰りなさい。夜は危険だ」

それを最後に刹は振り向かなかった。二人はしぶしぶ家に帰る事にした。明日の雫の様子を見る必要があるなら、見てからでも遅くはないと二人は思った。

*

翌日。昨日とは変わり二人の話題は弾まない。

「どうした……朝から元気ないぞ？」

真冬と春の背に誰かが触れて、声をかける。振り向かなくても分

かる。藤堂だ。

「ああ……何だかすつきりしなくてな」

「うん」

二人の反応は鈍い。藤堂は昨日の話が脳裏によぎる。

「ならすつきりするまで待てよ。うじうじ無駄な事を考える必要あんの？」

藤堂は二人の背中を強く叩いた。

「痛いな」

「うー」

真冬と春が抗議の視線を向ける。だがすぐに微笑んだ。うじうじ悩んでいても仕方ない。そんな時に分かれ道が見えた。

「僕は行くね」

春が手を振って左に曲がる。真冬は手を振り返して、右に曲がる。

「……今は授業に集中するか」

真冬は遠くに見える高校を見上げてつぶやいた。

「そうそう。勉強は大切だ」

藤堂は軽く言って真冬の隣を歩いた。

*

授業に集中する。そうは言ったが真冬は授業に集中できなかった。昨日と同じように窓の外を見る。外では体育が行われていた。二日連続で同じ時間に体育を行ってから、別のクラスに移るしくみだ。真冬は黒髪の少女を探す。脳裏に浮かぶのは刹が述べた言葉。雫の様子はどうなっているのか気になった。昨日、見た時にはすぐに見つける事ができた。小柄ながらよく動き、活躍をしていたのだから嫌でも目についた。だが今日は見当たらない。真冬は嫌な汗が手の平に浮かんだ。

「……まさか……」

一度唾を飲み込む。

「真冬……目当ての子はあそこだ」

藤堂が後ろから声をかける。藤堂が示すのは校庭の隅。そこでボールをリフティングしている黒髪の少女。あの長い髪は見間違えはない。雫だ。

右膝、左膝で交互にボールを上げている。時折、胸、頭も器用に扱っている。落とす事なんて有り得ないと思える動き。それは一つの舞のようだった。どうしてこんな事をしているのか、その理由はすぐに分かった。雫は左腕に包帯を巻いていた。

「……っ……」

真冬は拳を強く握った。自分が知らない所で何かがあった。春を追いかけている間に。雫とはクラスが違うため昼休憩の時に尋ねようと思っていた。だがそうは言っていられないらしい。真冬は時計を見る。あと30分はある。焦る気持ちを抑えて、残りの時間を耐えた。

*

休憩時間。鐘が鳴ると同時に真冬は教室を飛び出した。怪訝に見つめるクラスメイトの視線を背に受けて走る。校庭まで止まらずに駆け抜ける。外に出た時にちょうど長い黒髪が見えた。数名のクラスメイトに囲まれ、話している。真冬は乱れた息を整える。

「……………」

雫は一瞬だけこちらに無言の視線を向ける。だがすぐにクラスメイトとの会話に集中する。真冬はどうするべきか一瞬悩む。その間に雫が近づいてくる。雫はゆっくりとハーフパンツのポケットから一枚の紙を取り出した。クラスメイトには見えないように真冬にだけ見せる。真冬が戸惑っていると雫が真冬の横を通りすぎる瞬間に手紙を真冬に握らせた。真冬はその手紙を落とさないようにしっかりと握る。

「なにあいつ？」

雫の隣を歩くクラスメイトが真冬を怪訝に見た。校庭まで走って来て、佇んでいるのだから怪しいのは確かだろう。真冬は慌ててその場を後にした。

*

昼休憩。真冬は藤堂を待つ間に手紙を開く。

「見ればわかるでしょうが、昨日は穢れとの戦闘を行いました。結果は見事撃退と言いたいところですが、この様です。護士になればあなたもこのような怪我を負う事になるでしょう。それでも……私と共に歩んでくれるのであれば神社を尋ねてください」

手紙の内容はこれだけだった。真冬は辺りを見渡す。雫は片手で食器を持って歩いていて、片手を上げて合図をしたが、雫は無視をした。

「無視されてるな」

藤堂がニヤリと笑い真冬の前に座る。

「……女性をよく分からねえ」

真冬は溜息をついた。直接言わないで手紙を渡す。共に歩んでほしいと感じられる手紙を渡すが、普段は関わらないようにしている。寄る気があるのか、ないのか分からない。

「だからいいんだろうが」

藤堂が同じ表情で笑う。

「さらに分からねえ」

真冬は腕を組んで思考。

「肉、いただき！」

藤堂が真冬のAランチを狙う。真冬は考え中なのか阻止しなかった。

*

放課後。道場の隅に真冬はいた。袴に着替え、木刀を握り一つ深呼吸。何か考え事をするにはこれが一番いい。木刀を上段に構えて振り下ろすのを最初に、右回りの回転斬り、半歩下がると同時に正常な位置に戻して、突き、横薙ぎの一閃。

「……真冬」

見かねた一刀斎が声をかける。真冬は木刀を止める。

「はい」

真冬は一刀斎を見た。

「何だその舞は……いいかげんにも程があるぞ」

一刀斎は腕を組んで指摘。舞にはある程度の流れがある。今の真冬はただ木刀を振り回しているだけだ。

「すみません」

「考え事があるなら……禅でも組むか、解決させて来い」

一刀斎は道場の外を見た。真冬は木刀を強く握る。

「真冬」、来たよ」

ちょうど春の声が聞こえた。

「……答えを見つけて来ます」

真冬は春に向けて駆け足で近寄る。

「ふむ。それもまたいいだろう」

一刀斎は二人が去った道場で一人静かに真剣を構えた。

*

微かに風が吹いた。神社の敷地にある巨大な木に背を預けて雫は頭上を見上げる。薄っすらと暗くなっていた。

「……………」

雫は無言だった。その表情から感じられるのは不安。もしかしたら真冬は来ないかもしれない。そんな気持ちを抑えるように雫はゆっくりと瞳を閉じた。

＊

黒髪の巫女は孤独だった。ただ一人で穢れを被い、皆の笑顔を守っていた。その笑顔が見られるならどれだけ苦しくても、傷ついてもよかった。結果、命を失ってもいいとさえ思っていた。その覚悟はあったから。

いつものようにボロボロになって帰ってきた巫女は一人の少年に出会った。少年は巫女とは違った。仲間に囲まれていた。巫女には眩しくて仕方なかった。

「君はどうして一人で頑張るんだ？」

少年は巫女に問うた。

「皆の笑顔を守りたいですから」

巫女は思った事をさも当然とばかりに述べる。

「なら俺と一緒にだな」

少年は巫女に笑う。

「一緒ではありません。あなたには多くの友が……仲間がいます」

巫女は少年の横を通り過ぎる。

「君も一緒に来ないか」

少年が巫女の肩を掴む。振り向いた先には屈託のない笑みを浮かべる少年。

「……私に関わると避けられない輪廻の鎖に捕らわれてしまいます」
巫女は顔を落とす。

「なら俺が断ち切ってやる。君の護士になつて」

少年が巫女に笑いかけた。

＊

雫はゆっくりと瞳を開ける。頬に一筋の涙が流れる。

「…………断ち切れなかったのですね……………」

ぼつりとつぶやく。前世の記憶。私もその輪廻の鎖を受け継いで

いるのだろうか。避けられない悲劇の運命に縛られているのだろうか。真冬はそれを知ったらどうだろうか。一緒に立ち向かってくれるだろうか。ただ前世の記憶があるというだけで。ただそれだけで命を懸けてくれるだろうか。

雫はゆつくりと巨木から背を離す。

「……あ……」

雫は短くつぶやいた。そこにいたのは真冬だった。隣には春もいた。来てくれた。自然と肩が震えた。涙が止まらなかった。これは前世の想いなのか、一人で戦っていた事の心細さから解放されたかなのかは分からなかった。雫は涙を拭って真冬に微笑んだ。

「……………」

真冬は声をかけられなかった。涙で濡れた雫の瞳があまりにも儚く綺麗だったからだ。

「真冬」

春が頬を膨らませて真冬の背を叩いた。真冬は平静を取り戻して、雫に一步步み寄る。

「……俺は護士になる」

真冬は短くつぶやいた。

「どうしてですか……前世がそうだからですか？」

雫が顔を落としてつぶやく。細い肩が震える。

「前世か……それもある。ただ……知りたいんだ」

真冬がさらに一步步み寄る。

「知りたい……？」

「ああ。どうして前世の記憶があるのか。その意味を……知りたい」
真冬はあの夢を見ると、どうしようもない喪失感を感じる。まるで家族や、恋人を失ったような喪失感。何か意味があるのだと思う。そして、この出会いにも意味があると思う。

「そうですね……それだけの理由なら……あなたは死にます……だからこれ以上は関わらないほうがいいです」

雫は顔を落としたままつぶやいた。その肩はまだ震えていた。強

がっているのはすぐに分かる。

「こういう大切な事は……嘘を言うべきではないと思うよ」

今まで黙っていた春が雫に歩み寄る。ゆっくりと抱きしめる。

「嘘なんてついてません。あ……足手まといなんです。私に関わる
と悲劇の鎖に……どれだけ転生しても離してくれない輪廻の鎖に捕
らわれてしまいます。今なら逃げられます」

雫が早口に述べる。

「……その鎖が雫を縛っているなら……俺が断ち切るよ」

真冬は雫に微笑みかける。

「そうだね。一人にはさせられないよね」

春も微笑む。

「……う……うああー……！」

雫は声を上げて泣いた。

*

雫が落ち着いたのを見て刹は刀と薙刀を持って現れた。

「話は聞いた……雫が世話になったな」

刹は二人を見て微笑んだ。昨日会った時は険しい顔をしていたた
め恐い人かと思ったが、家族想いの男である事がその微笑で分かっ
た。真冬は一つ安堵の息をついた。

「それは……真剣か？」

真冬は刀を見て質問する。

「化け物に対してだけはな。人に対しては木刀以下だ。だが刀は本
物だからあまり見せるな」

刹は刀を放り投げる。真冬は受け取り鞘から刀を抜いた。白銀色
に輝く刀。刀が月夜を浴びているだけではない、うつすらと光を帯
びているように見える。

「護士は巫女の祈りを受けた武器を使い穢れを祓う者だ」

刹が淡々と語る。

「これを使つて……相手は？ 穢れとは？」

真冬の質問に刹は頷く。

「異界の獣とでも思つてくれ。狼であつたり、巨大な獅子であつたりいろいろだ」

刹は瞳を閉じ、腕を組んで述べた。自らが戦つた者を思い浮かべているらしい。

「俺は木刀を使った舞ならやっているが……いきなり化け物と戦えるのか」

真冬は刀を見つめる。

「ある程度の技術は俺が鍛えよう。だが、その刀を持っている間は巫女の力が全身に伝わるだろう。低級な獣には遅れはとることはない。信じる……自らの巫女を」

刹は真冬の肩を掴んだ。

「ああ」

真冬は強く頷いた。

「僕はその武器なの？」

春が薙刀を指差す。

「ええ。春さんは私が鍛えます。あの薙刀は私の祈りが込められています。追加で春さんの祈りを込めてください」

雫が刹から薙刀を受け取る。それを春に渡す。春は大切そうに薙刀を掴む。戦いは恐い。だがこれが真冬との唯一のつながり。失いたくない家族のつながり。春は一度強く頷いた。

「では……また明日ここで会おう」

刹は短く言つて背を向けた。

*

翌日。雫は授業を退屈そうに聞いていた。ふと視線を外に向ける。昨日までは体育の時間を過ごしていた時間だ。

「……………」

雫は真冬を探す。護士になると述べた少年。どれだけ運動ができるのか気になった。同じサッカーをしているのなら分かりやすい。グラウンドを駆け抜ける茶色髪の男。周りから聞こえるのは黄色い声援。その声援に手を上げて応えるのは藤堂だ。少し前を走るのはボールを持った真冬。その真冬に対してディフェンダーが二人つく。

「……へえ……」

雫は感嘆の声を出した。ディフェンダーが二人もつくとはある程度運動ができると思われているのだろう。さて、どうするのか。このまま突っ込むのか。雫は窓の外を注視する。

真冬が選んだのはバックパス。

「あいよ」

藤堂は短く言ってパスを受け取る。真冬がディフェンダーを引き付けていたので余裕で突破。そのままシュート。おしくもキーパーに弾かれたがいい線はいつていた。

それ以降も真冬はある程度動けるのに藤堂のサポートばかり。時には突撃もするが、それは自分に意識を向けるため。

「……冴えないですね。いい所を見せてくださいよ」

雫はぽつりとつぶやいて授業に意識を向けた。

あまつぎ

「雨月さん……雨月さん！」

授業に戻った瞬間に呼ばれている事に気がついた。

「……なんですか」

なぜか不機嫌な声が出てしまった。慌てて口を塞ぐ。呼んでいた教師が驚いた顔をした。

「えっと……この問題の答えは？」

戸惑いながら教師が質問。

「は……はい。Bです」

雫が即答。

「正解。あまり外を見ていないでくださいね」

教師がやんわりと注意。雫は顔を赤らめて頷いた。

*

昼休憩。真冬はいつものように藤堂を待つ。その時にいつかの日のように後ろに人の気配を感じる。

「雫か？」

真冬は振り向いた。やはり見えたのは長い黒髪。この後の展開は予想できる。伸ばされた雫の手を掴む。雫は驚いた顔をした。

「……なんですか？」

頬を赤らめて雫が質問。

「いや……手紙ではなくて直接言えばいいだろう」

真冬が雫の顔を覗き込む。

「……変な噂が立ったら迷惑ですから」

雫は顔を赤らめてつぶやいた。危うく手紙を落とす所だった。

「そうだな。雫に迷惑か」

「いえ……あなたに迷惑です。そろそろ離して下さい」

雫が左腕を指差す。真冬は仕方なく解放する。刹那、雫は真冬のポケットに手紙を入れた。あまりにも速く反応できなかった。それから逃げるように去っていった。

「今度、アドレスくらい聞いておくか」

真冬は頭を掻いた。

「そんなに仲良くなったのか、お前たち」

藤堂が真冬の前に座る。

「いや……対して変わらないけど」

真冬はご飯を口に運びながらつぶやいた。

*

放課後。道場に顔を出した真冬は袴に着替えて、昨日受け取った刀を抜いた。

「ほづ……これは業物だな。お前にはちと早いのが」

一刀斎は刀を見てつぶやく。

「やはりそうですね。でも、一日も早く使いこなさないといいないんです」

真冬は素振りをする。ずっしりとした重さがある。

「そうか。忙しくなるな、真冬」

一刀斎は瞳を閉じてつぶやいた。真冬は驚いて一刀斎を見た。何か知っているのだろうか。

「真冬ー、来たよー」

だが春の声が思考を中断させる。

「……春、次はコスプレか？」

一刀斎が春を見てつぶやく。春は巫女服を着ていたのだ。手には薙刀を持っている。

「えっと……神社のお手伝いをしているんだ」

春は昨日考えた言い訳を口にした。

「そうか。寂しくなるのう」

一刀斎は短くつぶやく。

「行こう。真冬」

春が真冬の手を掴む。

「ああ」

真冬が手を引かれて歩き出す。

「真冬……春ちゃんを守ってやれよ」

一刀斎は寂しそうにつぶやいた。

*

二人が神社についたと同時に特訓が開始された。

「いつでもいいぞ」

刹那に白銀に輝く剣を構える。袴姿の真冬は刀を構える。地面を蹴って疾走。

「え……？」

真冬はまずは疑問の声が出てしまった。体が軽すぎる。

「踏み込み過ぎだ。これは格闘の間合いだ」

刹は剣を振り下ろす。真冬は慌てて刀で防ぐ。だがそれと同時に刹の左腕が迫る。確かに格闘の間合いだ。

「ぐっ……今なら！」

真冬は後ろに跳躍。だが間に合わずに刹の拳が胴を貫く。真冬は軽々と後方に吹き飛ばされた。

「ぐっ……」

「反応はなかなかだな」

刹は剣を構え直して、左手で手招き。かかってこいと言っているらしい。

「早く追いつかないとな」

真冬は刀を構えて再度、地面を蹴った。

春は薙刀を振り下ろす。雫は左に動いて綺麗に回避。鉄扇が薙刀を押さえつけて、高速の手刀。

「……我は望む……神聖なるまも……ぐっ……」

言葉を言い切る前に手刀が炸裂。

「障壁はある程度距離がある時だけにしてください」

雫が一度距離を取ってアドバイス。

「はい。すみません」

春が薙刀を構え直す。雫は正直驚いている。少し教えただけで障壁を展開できるようになってしまったからだ。薙刀は扱った事が無いと言っていたが、素人の動きにはとても見えない。

「やはりこの子を死なせてはいけませんね」

雫はつぶやいて鉄扇を構える。

「何か言った？」

春が小首を傾げる。

「いいえ。続けましょう」

雫が鉄扇を構え直して地面を蹴った。

*

翌朝。真冬と春はいつもの別れ道にたどり着いた。だがいつもと様子が違う。

「すまない」

低い声をした男が二人に話しかけてきたからだ。眩しい金髪をした背の高い男だった。二つか三つ年上に見えるが真冬と同じ制服を着ており、一年を示す緑色のバッチをしている所から見ると同じ年らしい。

「どうしました？」

真冬が微笑んで話しかける。

「冬月高校はこっちでいいの？」

金髪の青年の隣にいる小柄な少女が用件を口にした。強いウエーブがかかった淡い金髪を腰まで伸ばした少女で、不敵な微笑を浮かべていた。少女が指差したのは冬月中学校がある方向だ。

「あっちだよ」

真冬が笑顔で右の方向を指差す。

「ふーん。あっちか。見た所同じ高校のようね。案内して」

少女が真冬の腕を掴む。その瞬間に柔らかな感触がした。

「ちよっ……当たってる」

真冬が顔を真っ赤にしてつぶやく。

「な……なにしてるの！」

春が少女を放そうとする。

「この国の方が慎ましかたというのは本当みたいね。ただの挨拶よ」
少女が不敵に笑う。

「それくらいにしておけ、フリージア」

男がフリージアと呼んだ少女を注意する。

「分かったよ。相変わらず硬いな、カインは」

フリージアはカインと呼んだ男を見た。

「今日から転校してきたカインと……」

「フリージアよ」

仏頂面で挨拶するカインと、人差し指を立てて挨拶するフリージア。

「外国の方？」

真冬は信じられないものを見る目で二人を見た。この大陸以外の国については聞かされているが、直に見るのは少ない。この大陸から東にある国フェレアスの出身だろう。真冬は二人を案内して高校に向かった。

ホームルームの時間。なかなか静まる事はなかった。

「本日から転校してきたフリージアさんだ」
教師が紹介をする。

「フリージア・フェン・フィッツベルよ。よろしく」

ウェーブがかかった髪を跳ね上げて挨拶。どこかの貴族のような気品がある。男子達が雄叫びに近い声を上げた。

「ぬおーーーーー！ きたーーーーー！」

真冬の後ろで藤堂が雄叫びを上げる。

「うるっさ！」

真冬は耳を塞ぐ。女子は完全に呆れていた。

「おい。静まれ。特に藤堂！」

教師が声を上げる。皆がとりあえず口を閉ざす。

「さて……席だが……」

教師が場所を探す。

「決まっているわ」

フリージアが教師の言葉を待たずに歩き出す。周りの視線がフリージアに注がれる。フリージアはある場所で止まる。その場所は真冬の前。

「ここがいいわ」

真冬の右隣の席を指差す。そこに座る女子生徒が驚いた顔をした。

「お……おい。そんな勝手は……」
教師が慌てている。

「私はこの方が気になるの」
フリージアが不敵に笑う。

「ねえ……護士さん」

フリージアが真冬の耳元で囁く。真冬だけに聞こえるように。真冬は驚愕に瞳を見開いた。

「こいつがいいならこの席はどうだい」

藤堂が自らの席を勧める。

「真後ろ……いいわね。ありがとう」

フリージアは天使のような笑顔を浮かべて藤堂に手を差し出す。藤堂も手を差し出して握手をした。真冬は昼休憩が終わるまでずっと緊張をしていた。特に何かをしてくる訳でもない。だが観察をするような視線がずっと真冬を見ていた。

*

昼休憩。真冬は雫を探した。

「どこだ……本当にアドレス聞いておこう」

真冬は嫌な汗を流して、目印の長い黒髪を探す。

「誰をお探しですの」

視界を塞ぐのはフリージア。真冬はAランチを落とす所だった。

「はいはい。座ろう」

フリージアは席につく。真冬に座れと視線で述べていた。

「ああ」

真冬は仕方なく席についた。

「……………」

真冬は終始無言。嫌な汗が流れるのみ。

「……何も聞かないの？」

フリージアは見かねて口を開いた。

「……俺は何も知らない」

言いながら視線は雫を探す。そして、ついに見つけた。だが開いた口が塞がらなかった。カインと名乗った男と一緒に食べていた。凄まじく険悪な雰囲気だ。

「あちらは交渉中。手を引けとね」

フリージアは淡々と述べる。

「……話が見えないんだけど」

真冬はフリージアを見た。

「……なるほど。成り立てというのは本当ね。いいわ、教えてあげる」

フリージアが微笑んだ。

「ああ」

「私達はエクソシストよ」

フリージアの言葉を聞いて真冬は頭を押さえた。

「えーと、電波か同業者かどちらだ？」

「……どっちでもない！」

フリージアは真冬の足を蹴り飛ばした。

「巫女みたいな胡散臭いのと一緒にしないで。私達は神聖なる神のもとに活動しているのだから」

フリージアが胸の下で手を組んだ。よく見ると胸元には金色の十字架が輝いていた。

「……こちらにも神聖なる神ではないのか」

真冬は首を傾げた。

「歴史が違うわ。戦い方もね」

フリージアが人差し指を立てて自慢げに微笑む。

「ふーん。それで何を交渉中？」

真冬は食べながら質問。些細な差は関係ない。同じ穢れを狩る者なのだろう。つまりは味方だ。

「この地から身を引くように」

フリージアは低い声でつぶやいた。真冬は目を見開いた。

「な……」

「目的が同じなら味方だと思ったの？ それはないわ」

フリージアは呆れながらつぶやいた。

「どうして？」

「……宗教の目的が同じ人を救う事だとして……それでも争うのはなぜ？」

真冬の質問にフリージアは質問で返した。

「……」

真冬は答えられなかった。

「そういう事よ。答えなんて出ないわ」

フリージアは呆れながら溜息をついた。

「そんなの馬鹿らしい」

真冬は首を振った。

「……それは同意するわ」

フリージアは一つ頷いた。

「え？」

「馬鹿らしいのよ。カインもあの女も……力を合わせればなんでもできるのに」

フリージアは二人を憂いを含んだ視線で見つめた。

「そうだな。協力者が増えれば何でもできる」

真冬は拳を握った。

「能天気ね。嫌いではないけど」

フリージアが微笑む。真冬はこの少女の真意を測れずにいた。

*

放課後。真冬は体を伸ばしてから道場に向かための準備をする。

「真冬、校内を案内して」

フリージアは真冬の腕に自らの腕を絡める。

「ほ……他の奴に頼めよ。藤堂とか」

真冬は慌てた。頼むからこれは止めてほしい。

「さっさと行くわよ」

フリージアが廊下に出る。その瞬間に長い黒髪が見えた。雫は真冬を見て次にフリージアを見た。

「……不潔です」

雫は汚い物を見る目で真冬を見た。

「これは……違う。雫……待って」

慌てて雫を止めようとした瞬間に雫の手が触れた。渡されたのは手紙。一瞬だけ真剣な瞳が重なる。真冬は視線だけで頷いた。

「ふーん。また古風な連絡手段を取っているのね」

フリージアは不敵に笑った。その瞬間に聞きなれない音楽が鳴った。

「おっと」

フリージアは真冬を解放して、携帯電話を取る。

「はい。……緊急の案件……？ 分かった。また後で」

フリージアは表情を引きしめて早足で歩いていく。

「ごめんなさい。急用ができたわ。また案内してね」

フリージアは慣れた様子で道を進んでいく。

「案内しているのか？」

真冬は独語して手紙を開いた。

「本日、午後８時に神社に集合して下さい。実戦の可能性がありません。覚悟だけはして下さい」

短い手紙だった。実戦という言葉がやけに生々しかった。

「うん？ まだある？」

閉じかけた手紙にはまだ続きがあった。

「追伸 フリージアというあの少女とベタベタしすぎです。不快ですで見えない所でして下さい」

内容を見て真冬は何が言いたいのかわからなかった。

午後8時。真冬は神社の前で汗を拭った。今の今まで特訓をしていたのだ。無駄な足掻きに見えるかもしれないが急な実戦だ。何かしていないと落ち着かなかった。

「……私一人でも何とかありますから、気張らないでください」

巫女服を着た雫は鉄扇を一度開いてから、また閉じる。

「気をつけてね」

同じく巫女服を着た春はお留守番だ。さすがに危険なので連れたいけない。

「ああ」

「大丈夫です」

二人はそれぞれ頷いてから歩き出した。

*

カインとフリージアはそれぞれ修道着に着替え、公園で合流した。以前、雫が狼を撃退した公園だ。

「いつも思うが、その服どうにかならないのか？」

カインがフリージアの服装を見て声をかける。フリージアは動きやすさを重視して、下を修道着と同じ布で作ったショートスカート、靴はアサルトブーツである。

「ちゃんと十字架をつけているんだから問題ないわ」

フリージアは胸元で光る十字架を掲げる。

「それを忘れたら話にならないな」

カインは短く言って歩きだした。その後をフリージアが続く。

*

湿った葉を踏みしめて二人は歩く。場所は神社から10分ほど歩いた先にある森だ。

「な……なんだ」

真冬は黒い霧を見て身構える。

「……やはりここですね」

雫が霧を睨んで一步を進む。真冬は雫を守るように先を進む。

「ぐっ……」

突如、真冬を寒気が襲う。顔面を蒼白にして震え始める。とてもではないが震えを止められない。凍死しそうなほどに冷たい。

「……我は望む……神聖なる温かさを」

雫が言葉を紡ぐ。二人を光が包む。

「あれ……寒くない？」

「穢れがいる場所は凍死するほどに冷たいです。身を守るための手段の一つです」

雫が光を指差して解説。

「あとは障壁を張れるんだよね？」

「ええ。守りに特化しているのが巫女ですから。道具を使えばまだいろいろ出来ますけどね」

雫は巫女という部分をやけに強調した。

「道具？」

「ええ。式神とかですね」

雫がつぶやく。

「式神は陰陽師ではなかったか？」

「似たようなものだという事です。巫女は式神の専門ではありませんから、使う人は限られていますけどね」

雫は淡々と述べた。歩いているとだんだんと霧が濃くなっていく。

「そろそろか？」

真冬は刀を鞘から抜いた。

「ええ」

雫が瞳を閉じた。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

雫の言葉が合図だった。裂け目から現れたのは黒銀の狼。無造作

に生えている木を掻い潜り二人に迫る。狼はまずは障壁を爪で切り裂く。だが途中で障壁に弾き飛ばされる。

「真冬！」

雫の叫びを聞いて、真冬が接近。刀を振り下ろす。だが狼はあざ笑うように横に飛んで避けた。

「ちっ……」

真冬は舌打ちをして刀を構え直す。狼は素早く真冬と雫を見た。狙いをつけたのは真冬だった。狼が真冬の首元を狙い飛び掛る。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

雫は真冬の前方に障壁を展開。狼を弾き飛ばす。

「今なら！」

真冬は着地したばかりの狼に刀を振り下ろす。狼は絶叫を上げて黒い霧となった。

「やったのか……？」

真冬は震える右手で刀を強く握る。極度の緊張状態だった。無理もない。初めて化け物を斬ったのだから。

「真冬……下がって下さい！」

雫は叫びながら真冬の前に立つ。刹那、裂け目が3つ。真冬は警戒して刀を構えようとした。だがそれよりも速く狼が前方、左右から飛び掛る。

「右の狼をお願いします」

雫は真冬を見ずに指示を出す。真冬は一つ頷いて狼に刀を向ける。飛び掛ってきた狼を右に動いて回避。狼は着地と同時にすぐに方向を変えて、真冬にもう一度飛び掛る。

「……大丈夫だ……舞と同じだ……イメージするんだ」

真冬は深呼吸をする。緊張が抜ける。真冬目掛けて飛んだ狼の胴に刀を向ける。真冬の一閃が狼を切断。

「雫は……！」

急いで後ろを見た。雫は飛び掛る狼の爪を鉄扇で弾き飛ばす。もう一体の爪は障壁で防ぐ。表情を崩さずに淡々と凌ぐ。

「真冬、手伝ってください」

雫は真冬を見ないで声をかける。真冬は急いで雫の隣に立った。自分の助けなんていらんのではないかと思っただが、隣に立ってようやく気づいた。雫は疲弊している。なんとか隠そうとしているがもう辛そうだ。

「大丈夫なのか？」

「ええ。ただもう障壁はあまり張れません」

質問した真冬に対して雫は一つ深呼吸をして鉄扇を構える。出来る限り障壁を張らない気だろう。

「……そのための護士か」

真冬は雫の前に立つ。

「ええ。あちらは本気のようなですから……気をつけてください」

雫は額の汗を拭う。目の前には大きな裂け目一つ。

「……最初から厳しいな」

真冬は震える体を叱咤して地面を疾走。雫と戦っていた狼が二体真冬に飛び掛る。

「一体だけなら……」

真冬は右から飛んできた狼の爪を刀で防ぐ。動きが止まる。それを好機と見て左から狼が飛んだ。鋭利な爪が真冬を狙う。だが不思議と恐くはなかった。予想通り鉄扇が煌いた。

「無茶な突撃は止めてください」

雫が鉄扇で狼を叩き落とす。

「雫、交代だ！」

真冬は強引に飛び掛ってきた狼を振り払う。次の瞬間には雫に叩き落されようやく起き上がった狼に刀を振り下ろす。自らが振り払った狼は見ない。

「……………」

雫が無言で鉄扇を構えて真冬の背中を守る。後ろでは黒い霧が舞った。雫は胸の鼓動を抑える事ができなかった。今までの戦いとはまるで違う。今までは信じられるのは自分の力だけだった。だが今

は真冬がいる。信じて背中を預けてくれる。だから自分も信じられる。

「これならどんな穢れでも被えます」

雫は強く宣言する。狼は怯まずに雫に飛び掛る。

「二人でならな」

真冬が雫の前に立ち狼を切断。迷いを感じさせない一撃だった。

狼は全て倒した。後はあの巨大な裂け目だけ。二人は緊張した面持ちで裂け目を見た。中から現れたのは2Mはある黒銀の狼だった。

「……これが……最近穢れが増えた原因ですか」

雫はつぶやいた。やたらと狼が多いとは思っていたが、原因はこれだ。

「穢れも子供を生むのか？」

「いえ……自らの分身を作る事はありません」

雫が鉄扇を構えてつぶやく。悠長に説明している暇はないらしい。

「……分身が小さい狼か」

真冬はとりあえず納得して雫の前に立った。

*

春はずっと祈っていた。手を組んだまま動かずにいる。

「風邪を引くぞ」

刹が神社の中から出てきた春の肩に厚手のコートをかけた。

「……真冬が無事で帰ってくるように祈らないと」

春は祈ったままつぶやく。

「彼らなら大丈夫だ。お前は自分の身を心配したほうがいい」

刹は顔を落とした。

「僕は平気だよ」

春は少しだけ微笑んでつぶやく。

「……前世と同じ悲劇が繰り返されるといっているのであれば、一番最初に死ぬのは君だ」

刹は顔を落としてつぶやく。

「……そうなんだ。どうして死んだの？ 前世の僕は」

春は落ち着いていた。薄々気づいたようだ。

「……前世の真冬を庇って……」

刹は言葉を濁した。まだ若い少女に死刑宣告をするようなものだ。さすがに堪える。

「……やっぱりそうか。僕らしいね。真冬を庇って死ねるならいいかな」

春は儚く微笑む。

「……どうしてだ？ 生きたくないのか？ 今からでも輪廻の鎖から逃げられる」

刹は落ち着いた声からだんだん声を荒げる。

「僕が逃げたら真冬が死ぬんだよね？ 嫌だよ……そんなの。死ぬのが運命なら受け入れる。真冬なら断ち切ってくれるよ。来世まで会えないのは少し寂しいけどね」

春は微笑んだ。春の頬に一筋の光が煌く。月夜に照らされて輝いた涙。

「すまない……俺は最低な大人だな……」

刹は顔を落とした。

「うつん。教えてくれてありがとう。僕はいつまで生きられる？」

春が立ち上がる。

「……そこまでは分からない。ただ……」

「分かった。明日はゆっくりしたいな……真冬と一緒に」

春は月を見上げた。

*

森を修道着を着た二人が駆ける。カインとフリージアだ。

「……我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

フリージアは両手に光で出来たナイフを二本ずつ出現させ、森を

縫うように疾走する狼を睨む。数は左右にそれぞれ二体ずつ。

「消え去れ……！」

気合と共にナイフを投げる。ナイフが狼を貫く。

「次が来るぞ」

カインがフリージアの前を疾走。前方に見えるのは裂け目が三つ。フリージアは前方ではなく周囲を警戒する。

「まとめて蹴散らす」

カインは裂け目に向けて突撃。

「……我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

カインが手に持つのは2Mを超える光で出来た大剣。大剣を両手で持ち深呼吸。

「消え失せろ！」

横薙ぎの一閃。裂け目を木々をなぎ倒す剛剣。狼の叫び声だけを残して裂け目が消えた。次に聞こえたのは木々が倒れる音。

「……加減しなよ」

フリージアは後ろで溜息をついた。守りに特化してお互いを守りながら戦うのが巫女と護士ならエクソシストは攻撃に特化した能力を扱い圧倒的な攻撃力でなぎ倒すのがセオリーだ。そうであってもこれはやりすぎだ。木々を切り裂く必要はない。

「無駄な力を使いたくはない。一撃で終わらせる」

カインは大剣を手に持つて、葉を、枝を踏みしめて疾走。フリージアは辺りを警戒しながら後ろに続いた。

*

狼の巨大な腕が真冬を襲う。

「くっ……」

真冬は後ろに飛ぶ。さすがに受け止めるのは無理だ。轟音。狼の腕は地面を抉り、枝と枯れ葉を撒き散らす。真冬は顔を腕で覆う。枝が全身に無数の傷をつくる。

「真冬！ 我は望む……神聖なる」

雫が言葉を紡ぐ。

「必要ない！」

真冬は着地して次の攻撃に備える。雫は途中で言葉を止める。残りの発動回数は2回が限度だろう。感情に任せて発動はできない。狼の狙いは真冬だ。雫が疲弊しているのは目に見えて分かる。それは真冬にも伝わっている。先ほどから体が雪山を登るように冷たい。おそらくここに入ってから発動させた力の効果が切れている。雫は真つ青な顔をしていた。肩は震えている。こんな事を一人で続けていたのだろうか。

「……こんな事を……たった一人で」

真冬は刀を握る手に力を込める。自然と寒気はとごかにいった。

「ぬああー……！」

真冬は叫んで突撃。雫が目を見開く。あまりにも無謀だ。雫は深呼吸をして口を開く。

「我は望む……」

狼の巨大な右手が振り下ろされる。まだ障壁は発動できない。真冬は右横に飛ぶ。轟音と共に大地が揺れる。狼は右手を退けてから左手で地面をなぎ払う。

「……神聖なる」

雫は焦る気持ちを抑えて言葉を続ける。着地した真冬に狼の左腕が迫る。

「間に合え！」

真冬は上空に向けて跳躍。ぎりぎりで腕を回避。狼の腕が木々をなぎ倒す。真冬は木々を足場にしてさらに跳躍。狼の上空まで上がった真冬は刀の刃を下に向ける。そのまま落下。狙いは狼の頭部。

「食らえ！」

狼の頭部に刀が突き刺さる。溢れるのは黒い霧。狼は右手で真冬を落とそうとする。

「護りを！」

雫の力ある言葉。狼の腕を弾き飛ばす。その間に真冬は刺さった刀を抜いて跳躍。着地と同時に前を見た。だが狼は倒れなかった。弱る所か狼は霧を噴出させながら突撃してきた。

「嘘だろ」

真冬は右に飛んで避けようとする。だが間に合わない。

「詰めが甘いわね」

挑発的な声が耳に届いた。刹那、光のナイフが狼の足を貫く。狼の勢いが削がれる。

「邪魔だ」

冷徹な声と共に真冬は突き飛ばされる。真冬は突き飛ばされながら光輝く大剣を見た。

「消え去れ！」

大剣を頭上まで上げ振り下ろす。嵐のような剣風。剛剣が狼を切断して、地面に穴を開ける。その様子を真冬は呆然と見ていた。あまりにも違いすぎる。

「……これが……エクソシスト……」

真冬は自然とつぶやいていた。

「……………」

カインは何も言わずに背を向けた。

「真冬……今回は貸しにしとくよ」

フリージアは微笑んで背を向ける。もうここに用はないと、その背中がつぶやいていた。

「光……よ……」

雫は地面に両膝をつける。真冬は慌てて雫に歩み寄る。

「……穢れを清めよ」

辺りの黒い霧が薄れる。残ったのは温かな光。その光を見つめて雫は力を失ったように地面に向けて倒れていく。真冬は雫を支えた。

「大丈夫か？」

「ええ」

雫は一つ頷いて空を見上げた。登っていくのは浄化された光。

「……来世で会いましょう……」

雫は光に向けて微笑んでつぶやいた。

「どうして……?」

真冬は雫を信じられない目で見た。今までこちらも殺そうとしていた相手に向けて言う言葉とは思えない。

「……来世で会った時は……心優しい存在になっているかもしれないですから……そうあってほしいのです」

雫はゆつくりと語った。

「……そうか。なら大丈夫だ」

真冬は雫の細い肩を支えながらつぶやく。

「どうしてですか?」

「ちゃんと伝わってると思うから」

雫の質問に真冬は空を見てつぶやいた。

「そうだいいです」

雫は微笑んだ。

*

真冬は朝日を浴びて目を開けた。見慣れた天井。あれから雫と神社まで戻り、春と一緒に家に帰った。それからあまり覚えていない。おそらくベッドに倒れ込んでそのまま寝てしまったのだろう。

「真冬ー、起きたー」

ドアの外から春の声がした。

「学校か……だるいな」

真冬は独語して立ち上がる。ここが戦いだけの不思議な世界なら化け物がいない時はゆつくりできるだろうに。そんな下らない事を考えながらあくびをする。

「まーふーゆー!」

春が外で叫んでいる。

「起きてる。まだ学校の時間ではないだろう?」

時刻は7時だ。8時開始だからまだ時間はある。のそのそと歩いてドアを開ける。

「真冬、寝ぼけているの？」

ゆったりとした白いセーターにロングスカートという私服姿の春が顔を覗き込む。

「……なぜ私服……？」

真冬は首を傾げる。

「今日は祝日だよ」

春がカレンダーを指差す。

「あー、そうか」

真冬はあくびをしながら春に背を向ける。

「待って……何で背を向けるのー」

春が真冬の腕を引っ張る。

「二度寝……」

真冬はベッドに倒れ込む。引っ張っていた春も一緒に倒れ込む。

「……………」

春は顔を真っ赤にして真冬を見た。目の前には無防備な真冬の寝顔。

「真冬……お願いがあるんだ」

春は表情を引きしめる。

「なんだ？ 二度寝が終わったら付き合うぞ」

真冬は眠そうだ。

「今日は出かけよう。僕の……うっん……私の最後のわがままだよ」

春が儚く微笑む。

「春のわがまま？ 珍しいな」

真冬は瞳を開けた。妹の頼みだ。それを冷たくできないのが兄といつもの。それに何か春の様子がおかしい。

「お願い」

春が真冬に抱きついた。

「なんだか今日は甘えん坊だな。10年くらい前を思い出す」

真冬は笑った。

その頃の春はずっと真冬の側を離れなかった。ずっとくっついて甘えていた。だが7歳になってからは口調も変わり触れる事もなくなった。春も成長したのだと思ったものだった。春が口にする一人称である僕は男である真冬には馴染みやすく好きだった。そのため気にせずに10年が経った。

「たまにはいいよね？ ご飯冷めるよ」

春は立ち上がって真冬の手を引いた。

「ああ。冷めたらもつたいない」

真冬は立ち上がって春に続く。温かな朝食が並んでいた。まるで昨日の出来事が嘘のようだった。

*

時刻は8時。巫女服を着ている雫はふらりと立ち上がる。場所は自室だ。昼は高校、夜は鍛錬か穢れとの戦闘。部屋にいるのは寝る時か、護士が使う武器に祈りを込めているかのどちらかしかない。そのため部屋はすっきりとしている。机にベッド。あとは必要最低限の物だけだ。

「……徹夜で祈るのは疲れますね」

雫は真冬の刀を壁にかける。そのまま着替えずにベッドに倒れ込む。急激な睡魔が襲う。このまま寝てしまおうかと思う。だがなぜか真冬の顔が頭に浮かんだ。

「……………」

再度、立ち上がる。ふらつく足取りで浴室まで向かった。

*

空は晴天だった。雲一つない爽やかな空だった。

「うー、気持ちいいね」

春が腕を伸ばす。

「……寒い」

真冬は着ているコートに両手を突っ込んだ。二人がいるのは商店街だ。高校に向かう途中にあり、日用品から、服、アクセサリーの店と何でもある。

「頭からこけるよ」

春が真冬の左手を引っこ抜いて、右手で握る。

「……今日は本当にどうした？」

真冬は妹の行動に戸惑う。

「今日は真冬とデートなんだ」

春が笑顔を向ける。幸せそうな笑顔。

「そうか」

真冬は笑った。こんなに幸せそうな笑顔をしているのならデートくらいはしてあげようと思う。真冬は兄妹というのは今は忘れようと思った。今日は妹の可愛いわがままに付き合おうと決めたのだから。二人は手を握り合ったままゆっくりと歩く。

「真冬、見てよ」

春がとあるアクセサリーショップを指差した。

「いいのがあるのか？」

春に手を引かれて真冬が続く。まず目に入っただのは棚にある銀色のピアスだ。淡いピンクの宝石がついたピアスを春が耳に当てる。

「どう？」

「……似合ってるけど……」

笑顔で問う春に対して真冬の反応は鈍い。

「そこははっきりと似合ってるのか……可愛いねとか……言うもんだよ」

春が頬を膨らませる。

「いや……ピアスはちよつとな……」

耳に穴を開けるなんて理解不能な真冬である。

「真冬はたまに時代に取り残されてるよね。護士だからかな？」

春が笑いながらピアスを棚に置いた。

「お前も巫女だろう」

真冬は横を向いた。

「すねないでよ。なら……あっちらはどうかな？」

春が真冬の手を引いた。

「お……おい！」

真冬は春の背中を追いかける。こんなに積極的だったのだろうか
真冬は心の中で思った。

春は気持ちを抑えられなかった。今まで我慢していたものを全部出してしまっている。これが最後だから。もうこんな日はこないからだからやりたい事を全部したかった。

春が真冬を連れていったのは、高価な指輪が並ぶ店だった。

「どうかな？」

春は迷わずに指輪を取る。シルバーのシンプルなデザインだった。

「シンプルなものいいな」

真冬は指輪を覗き込む。

「はい」

春は笑顔で真冬に指輪を渡す。それから左手を差し出す。

「分かったよ」

真冬は左手の薬指に指輪をつけた。

「綺麗……」

春は指輪をうっとりとした笑顔で見つめる。真冬は満足そうな笑顔
顔を向ける。

「いるのか？」

真冬は財布を取り出す。

「うっん。これは……いいよ……これは貰ってはいけないものだから」

春は儚く微笑んだ。次の瞬間には真冬の顔は驚愕に変わる。春の
頬に一筋の涙が流れたから。

「……おかしいな……こんなに幸せなのに……涙が出るなんて」

春は涙を拭う。

「……春？」

真冬が心配そうに顔を覗き込む。

「幸せ過ぎて涙が出たんだよ。気にしないで」

春は慌てて指輪を戻した。それから逃げるように店を飛び出す。

真冬は仕方なく後を追いかけた。

「……私の馬鹿……買ってもらえばいいのに……」

春は涙を拭う。後ろから真冬が追いかけてくるのが分かる。深呼吸をして平静を取り戻す。

「春！」

真冬が春の肩を掴んだ。

「ごめんね。泣いてる顔を見せたくなくてさ……平気だよ」

春が笑顔を向ける。

「……本当か？」

真冬が顔を覗く。

「うん！」

春はまた真冬の手を引いた。今日一日春は真冬の手を引いて歩き回った。真冬は幸せそうに笑う春の笑顔をずっと見ていた。

*

雫はベッドの中で薄っすらと瞳を開けた。

「……」

毛布と厚い蒲団を退けて立ち上がる。時刻を見るともはや夕方だ。

「……寝すぎました……」

雫は溜息をついた。せつかくの祝日を寝て過ごす高校生がどこにいるだろうか。どうせなら真冬の家を訪ねるのもよかったかもしれない。

「……また真冬ですか……」

なぜか真冬の顔が頭に浮かぶ。前世の記憶がそれほどまでに強烈

だったのだろうか。一度、心臓が鳴った。

「これは私の想い……それともあなた？」

雫を胸に手を当てて問う。だが誰も答えてはくれなかった。一度、溜息をついて巫女服に手を伸ばす。今からでも薄い黄色の就寝用の服からちゃんとした服に着替えようと思ったのだ。

「……うっ……」

巫女服に手を伸ばした時に異変に気づいた。全身を襲うのは寒気。「近くにはいない……こんなに離れているのにこの寒気……これは……？」

雫は急いで巫女服に着替え、部屋を飛び出す。

「雫！」

外に出た時に刹に呼び止められた。雫は一つ頷く。

「これは……」

そこまで言葉を出した瞬間に止めた。急に寒気が引いた。

「何かが来る……」

雫は真っ直ぐに前を睨んだ。

*

真冬と春は狭いテーブルにすき焼きを入れた鍋を置いて、二人でつつく。

「温まる」

春が牛肉を食べて表情をほころばす。

「そうだなー」

真冬も牛肉を食べた。冷え切った体が温まっていく。今まで外にいて芯まで冷え切った体が温まっていった。真冬は次の牛肉を掴んだ時に異変を感じた。

「……なんだ……これ？」

急激な寒気。震えを止めようとしても止まらない。

「……なに……寒いよ」

春は肩を抱いて寒さに耐える。真冬は辺りを警戒する。これが以前と同じなら穢れがいる。少しでも早く雫と合流しなければいけない。立ち上がろうとした所で違和感が消えた。

「あれ……？」

寒気が消えた。徐々に体が元の熱を取り戻す。とりあえずは安心して一息ついた。

「……来るんだね。何かが……」

春は震えていた。

「大丈夫だ。春は俺が守るよ」

真冬が春の肩を掴む。

「うっん。違うよ。僕が……真冬を守るんだ」

春は決意を込めた瞳で真冬を見た。

「そうか。ありがとう」

真冬が笑う。春はその笑顔を中心に刻み込んだ。

輪廻の鎖 1（後書き）

もし読んでいただければ感想、批評をお願い致します。

輪廻の鎖 2

輪廻の鎖

「2」

異様な寒気が薄れて数分が立った。とりあえず真冬と春は食事を再開した。このままにしておくのはもつたいない。

「……………」

だが会話は弾まない。気になって仕方がないから。無言で箸を伸ばした時に、突如聞きなれた音が聞こえた。慌てて真冬はジーンズのポケットに入っている携帯電話を取り出した。

「…………知らない番号？」

真冬はいぶかしんで通話ボタンを押した。普段なら無視をしたいが、先ほどの事もある。重要な連絡かもしれないと思ったのだ。

「…………はい」

真冬は携帯電話を耳に当てて緊張した声を出した。

「やっと出た…………遅いわよ」

挑発的な声。この声は聞き覚えがある。

「フリージア？」

「確認するなんて失礼ね。助けてあげたのに」

どうやらフリージアらしい。呆れが半分混ざった声をしているが、声だけで当ててくれたのは嬉しいのか弾んでいるようにも聞こえる。

「どうして番号を？」

「この国のセキュリティなんてあってないようなものよ。私が少し本気を出せばこんなもんよ」

真冬の質問にフリージアは自慢するようにあっさりと答えた。フリージアの不敵な微笑が脳裏に浮かんだ。

「…………警察に通報していいか？」

「待ちなさいよ！　こちらは重要な事を伝えてあげようと思ったのに！」

通話を切ろうとする真冬に対してフリージアが叫ぶ。

「重要な事？」

「ええ。さすがにさっきのは分かったでしょう？」

フリージアが急に声のトーンを下げる。本題に入るらしい。

「ああ。近くにいますのか？」

「今はいない……おそらくまた来るわ」

真冬は緊張した顔で携帯を握る。

「なあ……俺は素人だから分からないけれど……姿が全く見えなくてもあの寒気は感じるのか？」

「……基本的には穢れのいる空間に入らなければ大丈夫よ」

フリージアはそこで言葉を切る。真冬は言葉を待った。

「今回の穢れはかなり危険よ。だから知らせておこうと思ったの。あなたは手を出さないほうがいい。昨日、今日で護士になった人間が戦える相手ではないわ」

フリージアは素人だと馬鹿にしている訳ではない。心配してくれているというのが伝わってくる。

「フリージアとカインでだけで倒すのか？」

真冬は確認する。

「そのつもり……ただね……」

「ああ」

フリージアは急にしおらしくなる。言葉を聞き逃さないように耳を澄ます。

「協力できたら……うつん……なんでもない……またね」

それだけを言って通話が切れた。

「……こういう時くらい頼れよ……」

真冬はつぶやいて部屋に置いてあるコートを掴む。羽織りながら部屋を飛び出す。

「……真冬！」

春の声を背に感じた。

「雫に会ってくる」

真冬は短くつぶやいた。

「僕も！」

春も立ち上がり、後続いた。

＊

雫は神社の前の開けた空間で鉄扇を構える。一つ深呼吸。ゆっくりと瞳を開けて、横薙ぎの一閃。

「……………」

雫は落ち着いていられなかった。今の力量で先ほどの穢れを祓う事ができるのだろうか。春を守りきる事ができるのだろうか。前世と同じ不幸をまた繰り返してしまうのだろうか。

「……………させません」

雫は鉄扇を再度構えて、一度振り下ろす。それから横薙ぎに一閃。動作を淡々と繰り返す。鋭さを増した一閃が暗闇を切り裂いた。その時に階段を上ってくる気配を感じた。

「雫……………」

聞こえてきたのは真冬の声。隣には春もいる。

「……………今日はおそらくあの穢れは現れませんよ」

雫は二人を見てつぶやいた。

「知っている。フリージアが知らせてくれたから」

真冬は一步步み寄る。

「……………エクソシストとずいぶん仲良くなったものですね」

雫は低い声でつぶやいた。

「仲良くなってるじゃないよ。ただ同じ穢れを祓う者だ。協力しないといけないだろう？」

真冬は雫に笑いかける。雫は驚愕の表情を浮かべた。

「協力……………をする……………正気ですか？」

雫は危うく鉄扇を落とす所だった。

「何か不都合があるのか？」

真冬は首を傾げる。雫は顔を落とした。

「過去に……巫女とエクソシストは幾度か衝突を繰り返しています。その中でどれだけ血が流れたか」

雫は顔を落としたまま拳を握る。

「……嘘だろ……どこに争う理由があるんだ？」

真冬は震えた。

「……神月の国と……フェレアスの戦争……私達巫女は神月の国に、エクソシストは当然フェレアスに……酷い戦いだっただけです。戦争をしていない今でもその関係が修復できないくらいに」

雫は祖父から聞いた話を思い出して肩を震わせた。

「……でも……今は関係ないだろう！」

真冬は叫ぶ。今は戦争なんてしていない。

「それは真冬が……巫女や護士の家系に生まれていないからです」
雫は冷たく宣言した。護士にはなった。でも、それはつい先日だ。争っていた理由も今になって知った。

「そんな……フリージアはそんな事を言っていなかった。協力だつて必要としてくれている！」

協力し合えない巫女とエクソシスト。馬鹿らしいと思った。それに同意してくれたフリージア。本心なのは分からない。だが嘘ではないと信じたい。

「……こういう事は本人が言う事だとは思いますが……フリージアというエクソシストは途中参加です。戦いに巻き込まれて……エクソシストになった者です。考え方があなたに似ているのはそのためです。だから、やたらとあなたに絡みたがるのでしょうか。あなたは根っからの護士ではないですから」

雫の声は冷たかった。殺気すらこもっていきそうな声。

「……関係ない」

真冬は拳を握る。雫は真冬に対して嫌悪を明らかにした。

「……あなたは誰の味方なんですか？」

雫はつい本音が出てしまった。

「俺は……雫の護士だ」

真冬ははつきりと述べた。雫は先ほどの言葉が失言だったと今になっと思う。

「ごめんなさい」

雫は顔を落とす。

「俺は雫を縛る輪廻の鎖を断ち切る。それは……何度転生しても成し遂げられない困難な事だ」

真冬は雫に言葉をぶつける。

「……ええ」

雫は頷いた。真冬が言いたい事が分かってきた。

「同じ敵を持つ者が一緒に戦う……こんな簡単な事ができなくて出来るのかよ！」

雫の予想通りの言葉が返ってきた。

「……あなたという人は……」

雫はあまりにも真っ直ぐな真冬を見て笑ってしまった。何十年も衝突をしていた巫女とエクソシスト。その二つが手を組む事が簡単だと言つてのけた。だがそれくらいの事を簡単にできないのであれば、輪廻の鎖を断ち切る事はできないのだろう。

「……仲間が多ければ何でもできるよ」

今まで黙っていた春が言葉を口にする。儚い笑顔を浮かべて。自分が消えても、多くの仲間がいれば安心だと言っているように見えた。

「……手段を選んではいられませんね。私が一度頭を下げればいいのかでしょう」

雫は決意を込めた顔で頷いた。

「ありがとう、雫」

真冬が雫の手を握る。雫の頬がみるみる赤くなっていく。

「……離してください」

雫は顔を逸らした。

「真冬……そういう時は抱きしめてあげるんだよ」

春が真冬の背中に声をかけた。真冬は違和感を覚えた。こういう時は強引にも手を離そうとするのに。後ろを見ると春は笑顔に向けていた。祝福するように。

「だ……抱きしめるなんてあり得ないです！」

雫が手を振り払って真冬を突き飛ばした。それから逃げるように神社に戻っていった。

「俺……なにかしたか？」

屍餅について真冬は春を見た。

「うっん。大丈夫だよ」

春は笑顔で返す。この兄が雫とフリージアのどちらを選ぶのか。それを見届けられないのが残念でしかたなかった。

*

一人の巫女は兄が好きだった。愛していると言ってもいいくらいに。だが、その気持ちはどこかに封印した。許されない想いだから。だから妹は兄の前では自らを僕と呼ぶようにした。女性でいると、この気持ちを抑えられないから。

それに兄にはお似合いの巫女がいる。長い艶やかな黒髪を伸ばした巫女。兄が護士になると決めた少女。

寂しいとは思った。でも、よかった。最後に兄を救えたから。

体は鋭利な刃物で切り裂かれていた。だが倒れない。必死で名前を呼ぶ声が聞こえる。だがもう耳には入らなかった。

「……さよなら……大好きだったよ」

巫女はつぶやいて地面を駆けた。体からは血が溢れる。でも、止まらない。薙刀の一閃が黒衣を纏った死神を切り裂いた。

*

春はベッドの中で瞳を開けた。頬には涙が伝っていた。

「……僕と同じなんだね。酷いな……こんな運命を何度も繰り返させて」

春は涙を拭う。

「……どうか……真冬を救えますように」
春は天に祈った。

*

通いなれた道。これが最後かと思うとなんだか感慨深いものがある。今日は一人で学校に行く道を歩いていた。家には書置きと朝食を用意しておいた。

時刻は7時。そろそろ真冬が起きた頃だろう。春は今日、早起きをした。ゆっくりと歩きたかったから。真冬との思い出を辿りたかった。

「……うん……もう大丈夫」

春は笑った。いつもの陽だまりのような笑顔がそこにあった。

*

時刻は7時30分。場所は高校の屋上。そこで向かい合っているのはエクソシスト二人と、雫だ。

「用件はなんだ」

カインは腕を組んで巫女を睨む。

「……カイン、睨まない」

フリージアが溜息をついた。わざわざ雫から呼び出してきたのだ。おそらく昨日の事だろう。

「今日か明日には昨日一時的に現れた穢れと戦う事になるでしょう」
雫はカインの鋭い瞳を受け止めて言葉をかける。カインは溜息を

ついて睨むのを止めた。

「ああ。離れていてもあの特有の寒気を与える穢れだ。そうとうな力を持っているのだろうな」

カインは瞳を閉じてつぶやく。

「無理を承知でお願いします」

雫が頭を下げた。

「何のつもりだ」

カインは常に冷静だった。

「どうか力を貸して下さい」

雫は頭を下げたままつぶやく。

「必要ない」

カインは冷たく言い切った。雫は拳を握る。

「……なっ……あんた……それは」

フリージアが驚愕の表情に変わる。あのカインですらはつきりと表情に変化が出た。雫は地面に膝をついた。そして、頭を床につけた。土下座だ。

「どうしても……力が必要なんです」

雫は額を地面につけたままつぶやく。

「止める……」

カインは雫の腕を取った。強引に立たせる。

「止めません！」

雫が強い声で叫ぶ。

「どうしてそこまで自棄になる？」

カインは表情を歪ませる。

「……あの子を……春を守りたいですから。私のせいで……死なせたくないです」

雫の表情が曇る。

「話は分かった。今回の敵は危険だ。力は貸そう」

カインは瞳を閉じてつぶやく。

「ありがとうございます」

雫がもう一度頭を下げた。

「共同戦線か……いいのかもね」

フリージアが微笑む。

「俺と雫で行く」

カインはフリージアを見てつぶやいた。

「なっ……」

フリージアは瞳を丸くした。

「途中参加のエクソシストが戦える穢れではない。真冬という護士も今回は置いていく」

カインは冷静につぶやく。言い返せないのが悔しい。フリージアは拳を握った。

「そうですね……」

雫はぽつりとつぶやいた。

*

昼休憩。真冬は落ち着かなかった。起きてみれば書置きと朝食。いつもは春と一緒に食べて、一緒に登校をする。いつもの日課がなただけでこうも落ち着かないものだろうか。

「……こんなに可愛い子が目の前にいるのに考え事なの!」

声が聞こえたと共に真冬の足に強烈な痛みが走る。目の前にはフリージアがいる。なぜか昼はフリージアと食べるのが日課になっていた。藤堂は気を利かせて離れて食べている。

「痛い……」

真冬が足をさする。

「今日の事?」

「それもあるけど……最近、春の様子がおかしくてね」

真冬は腕を組んでうなる。

「……そう……あの女のせいかな……」

フリージアはチラリと雫を見た。雫は視線に気づいてこちらをチ

ラリと見た。だがすぐに視線を逸らした。フリージアは拳を握る。

「フリージア？」

「ねえ……真冬……」

真冬は最近自分だけが蚊帳の外な気がする。何か大切な事を知らされていない気がするのだ。対してフリージアは上目遣いでつぶやく。

「なんだ？」

「エクソシストにならない？ 護士なんて止めてさ」

フリージアが真冬の手を握る。すがりつくような瞳。

「……俺は雫の護士だよ。彼女を縛る輪廻の鎖を断ち切りたい。俺が逃げたら……彼女は一人になってしまうよ」

真冬は儚く笑った。フリージアは表情を曇らせて手を離れた。

「……それで……が………死んでも？」

フリージアがつぶやく。

「誰かが死ぬ？」

真冬がフリージアの肩を掴んだ。

「え………知らないの……？」

フリージアは肩を震わせた。

「誰が死ぬんだ。教えてくれ……そんな運命は俺が変える……命に代えても」

真冬はフリージアの肩を強く掴んだ。フリージアは雫に瞳を向ける。話していいのか判断に迷う。雫はゆっくりと立ち上がる。そして、こちらに近寄ってきた。

「止めてください。困ってます」

雫は真冬の手に触れた。

「ああ………すまない」

真冬は席についた。

「話してないの………こんな大事な事を？」

フリージアが雫の腕を強く掴む。怒りを含んだ瞳で睨む。

「………当人には話をしてあります」

雫は顔を落とした。

「…………… あんたねえ」

フリージアが立ち上がって雫の頬を叩いた。雫の冷静な顔が、淡々とした口調が我慢できなかった。先ほどの弱々しい雫の方がまだ受け入れてもいいと思えた。雫は頬を押さえる事もなく、ゆっくりとフリージアを見た。

「…………… 今度こそは変えたいですから…………… こんな残酷な運命を…………… そのためなら恨まれてもいいです」

雫は視線を晒さないでつぶやく。

「ふざけないで…………… 出来もしない事を！」

フリージアが再度手を振り上げる。

「止める……………！」

真冬がフリージアの手を止める。

「止めないで…………… あなたは平気なの…………… 妹が死んでも！」

フリージアが必死に叫ぶ。

「春が……………？」

真冬は全身が震えた。今になって春がおかしかった理由が分かった。

「私の最後のわがまま……………」

真冬がつぶやく。ようやく意味が分かった。膝から力が抜ける。とても立ってはいられなかった。

「ちよっと……………！」

フリージアが真冬を支える。

「……………」

雫は無言で顔を落とした。強く拳を握る。

「つまらん話は終わったか？」

見上げるとカインがいた。腕を組んで真冬を見下ろす。

「つまらない…………… だと？」

真冬はカインを睨む。

「さすがにカインでもその言葉は…………… 許せないよ」

フリージアも一緒に睨む。

「ふう……こんなのが戦力になるのか？」

カインは真冬を睨み返してつぶやく。

「……私の護士です。先ほどの話を聞いて、今後協力してくれるかは分かりませんが……」

雫は顔を落としたままつぶやく。

「俺は分からない。どうして隠していた」

雫を見上げて真冬はつぶやく。

「言えば……あなたが死ぬかもしれないですから」

雫は弱々しくつぶやいた。

「春が死ぬくらいなら……俺が……」

そこまで言って言葉を切った。カインが真冬の胸倉を掴んだ。

「ふざけるなよ……輪廻の鎖を……こんなふざけた運命を断ち切る
と言つてのけた男がこの程度か……言つたからには変えてみる。守
つてみせる！」

カインが叫ぶ。真冬はカインの瞳を真っ直ぐに見た。

「……変えて見せる。春は死なせない……だから力を貸してくれ」

真冬はカインの瞳を真っ直ぐに見た。

「力がないから他人に頼るのか？」

カインは怒りを含んだ声を出した。同時に真冬を解放する。

「寝言は寝て言え……」

カインは背を向ける。

「……今回は私とカインで対応します」

雫も背を向けた。これが雫とカインが出した結論。こうしてカインがここまで来たのは真冬を見極めるためだ。

「……俺も行く」

真冬は二人の背に言葉をかける。

「一人で何ができる？」

カインが真冬を睨んだ。

「二人でなら何とかなるかもしれないわ」

フリージアが真冬の腕を取った。不敵な笑顔を雫に向ける。一度、雫がフリージアを見つめた。だが何も言わなかった。

「ふっ……勝手にしろ」

カインは背を向けて歩いていった。雫は拳を握ってカインを追いかけた。

「放課後……付き合いなさい」

フリージアが真冬に微笑んだ。

*

放課後。真冬はフリージアの後についていく。

「どこに行くんだよ」

真冬はフリージアの背中に問う。

「……せっかちな」

フリージアは振り向かないでつぶやく。真冬は仕方なく口を閉ざした。フリージアの後に続いてたどり着いたのは小さな教会だった。フリージアは教会には入らずに右手に見える開けた広場に向けて歩いていく。真冬は仕方なくついていった。

「一度は私の武器は見たわよね？」

フリージアが振り向いてつぶやく。真冬は頷いた。光輝くナイフだった。

「エクソシストは攻撃力に特化してるの」

フリージアは瞳を閉じる。

「……我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

フリージアの力ある言葉。手には光輝くナイフが握られていた。投擲用のナイフか……」

真冬はナイフを見てつぶやく。フリージアは頷いてからナイフを消した。

「さて……見せてもらいますか！」

フリージアは一度肩を回す。それから教会の隅にある物置から木

刀と、木製のナイフを取り出した。木刀を真冬に投げる。

「おい……まさか」

真冬は戸惑う。フリージアは不敵に笑い地面を蹴った。真冬は仕方なく木刀を構えた。

フリージアはナイフを下から振り上げる。真冬は素早く木刀で防ぐ。

「へえ……」

フリージアは感心して微笑んだ。これが防げないのなら話にならない。

「一度……実戦を経験してるんでね」

真冬は強引にナイフを押していく。

「なら……これでどう？」

突如、真冬の胸に痛みが走る。気づいた時には回し蹴りが炸裂していた。

「う……ゴホっ……」

真冬は咳き込む。

「ふーん。やはりまだ素人なんだ」

フリージアは手を差し出す。真冬はその手を取った。

「なあ……」

「なに？」

フリージアが小首を傾げる。

「戦い方を教えてくれ……少しでもいい……強くなりたい」

真冬はフリージアの手を強く握った。

「女の子に頼む事かな？」

フリージアは溜息をついた。だがすぐに優しく微笑む。

「守りたいんだ」

真冬は立ち上がる。

「……誰を？」

フリージアが真っ直ぐに真冬を見た。

「……皆を」

真冬はつぶやいた。誰か一人ではない。側にいる人をただ守りたい。

「そっか。私は厳しいよ」

フリージアが真冬を突き飛ばす。それからゆっくりとナイフを構えた。表情はかすかに微笑んでいた。

*

闇が辺りを包む。巫女服を着た雫は月を見上げていた。場所は公園だ。

「定刻通りか」

低い声が耳に届く。視線を下に向けると修道着姿のカインがいた。「遅刻なんて論外だからね」

その後ろからは同じく修道着姿にアサルトブーツという不釣り合いは恰好のフリージアに、袴を着た真冬がいる。

「……………」

雫は無言で真冬に近寄る。

「どうした？」

真冬は雫に声をかける。

「武器なしで戦うつもりですか」

雫は刀を真冬に押し付けた。真冬は受け取って鞘から抜いた。白銀に輝く刀。以前よりも輝きを増していた。

「ありがとう」

真冬は微笑んで礼を言った。

「いえ……………」

雫は短くつぶやいただけだった。

「いくぞ……………」

カインが短く言う。三人は頷いた。

「待って！」

その時に声がした。声の方向を見ると巫女服を着た春がいた。

「春！」

真冬の表情が驚愕に変わる。

「連れて行って！」

春は力の限りに叫んだ。

「……いいだろう」

カインは頷く。雫は顔を落としたただけだ。

「どうして……春は……」

真冬は戸惑う。

「彼女が決めたの……止める権利はないわ。ただ……付いてくるなら全力で守ればいい。私も手伝うから」

フリージアが真冬の肩を掴んで微笑む。

「……分かった。春……離れるなよ」

真冬が春を見る。春は一つ頷いた。

*

5人がたどり着いたのは一つの廃ビルだ。敷地に入った瞬間に凍てつく冷気が身を冷やす。

「我は望む……神聖なる温かさを」

春が言葉を紡ぐ。5人を光が包む。体が自然と温まる。

「行くぞ」

カインを先頭に皆が続く。向かうのは地下にある駐車場。そこから濃い霧が溢れている。

「あれか……」

真冬が霧の奥を見た。そこに立っていたのは黒衣を纏った死神。

「……」

春は死神を見つめた。あの夢の通り。自然と体が震える。だが突如、震えが止まる。

「……守ります……あなただけは……」

雫が春に身を寄せる。その前には真冬が、その隣にはフリージア

がナイフを構える。

「……我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

カインは叫び大剣を形成。死神に向けて疾走。

「……………」

死神は不敵に笑った。だが動こうとしない。カインは大剣を構えて横薙ぎに一閃。駐車場を支える柱を破壊する剛剣。だが、死神を切り裂く事はなかった。死神が視界から消えた。

「なに……………」

カインは驚愕の表情を浮かべる。死神は跳躍して大剣を回避。駐車場の天井を蹴って、カインに接近。大鎌が振り下ろされる。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。死神の大鎌を弾き飛ばす。

「真冬、合わせて！」

フリージアがナイフを投擲と同時に疾走を開始。死神は着地と同時にナイフを弾いた。その間に真冬が接近。刀を振り下ろす。だが死神は不敵に笑い大鎌で受け止める。

「退いて！」

フリージアの声を聞いて真冬はすかさず右横に飛ぶ。死神の表情が一瞬だけ驚きに変わる。真冬が横に飛んだ瞬間にナイフが飛んできたのだ。少しでも遅ければ真冬の背中にナイフが刺さっていただろう。

だが死神は大鎌で全てのナイフを弾いて見せた。舌打ちをしてフリージアが後方に飛ぶ。再度、ナイフを形成。その間に死神がフリージアに接近。

「世話が焼ける！」

カインが死神とフリージアの間に割って入る。大剣が大鎌を防ぐ。「ごめん」

フリージアが再度、後方に跳躍。

カインはフリージアが離れたのを着地の音で判断して、大剣で大鎌を押し返す。吹き飛んだ死神に追撃の刀を振るう。だが、死神はあ

つさりと回避して大鎌を構える。カインは地面を抉った大剣を持ち上げるために腕に力を込める。2Mはある大剣を持ち上げるのは大きな隙をつくる。

死神はカインの隙をついて大鎌を投擲。大鎌は高速で回転。円を描くように飛びカインを狙う。

「これくらいなら！」

真冬はカインの前に立ち大鎌を弾き飛ばす。大鎌は意思を持つかのように持ち主の元に戻る。

「厄介な相手だな」

カインは死神を見てつぶやいた。こちらは三人で相手をしているというのに死神には隙がない。それに比べてこちらはお互いを守りながらでないと致命傷を受ける危険性がある。

「……………」

死神は無言で大鎌を構える。次の瞬間には消えた。それぞれが武器を構える。現れたのはフリージアの前だった。高速の大鎌が襲う。フリージアはナイフで大鎌を受け止める。だがナイフはすぐにへし折れた。追撃の大鎌が振り下ろされる。

「……ナイフがないと何もできないって……」

フリージアが不適に笑う。振り下ろされた大鎌を右に動いて回避。「ざっけんな！」

すかさずアサルトブーツで大鎌を蹴り飛ばす。

「雫！」

フリージアが叫ぶ。死神は再度大鎌を構えて、横薙ぎに振るう。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が障壁を展開。死神の大鎌を弾き飛ばす。それと同時にフリージアが後方に飛んだ。着地した瞬間に死神が消える。

「次は……どこだ」

カインは大剣を構える。刹那、大鎌が煌いた。狙いはカイン。「各個撃破のつもりか……」

カインはつぶやいて大剣で大鎌を防ぐ。今からだと雫の障壁は間

に合わない。春は5人を包む光を展開するので限界らしい。そもそも二人までを包むのが限界の能力だ。無理もない。

自力で凌ぎきるしかない。死神の大鎌が煌く。一息つく間に人外を越えた速度で大鎌を振るう。カインが反応できたのは6撃目までだ。
「くっ……」

鮮血が舞った。カインの右腕を大鎌が切り裂いたのだ。とてもではないが防ぎきれない。

「ならば……真冬！」

カインは迫りくる大鎌を左手で掴む。死神はカインを空いた左腕で殴打。ハンマーで叩かれたような衝撃がカインを襲う。だが離さない。

「待ってろ！」

真冬は刀を構えて突撃。死神の左腕に向けて刀を振り下ろす。溢れたのは黒い霧。死神は対して気にした様子もなくカインを再度、殴打。

「ぐっ……」

カインは口から血を吐いた。左手が緩む。死神は大鎌が自由になったのを確認して、大鎌の柄でカインを殴打して吹き飛ばす。死神が大鎌を振り上げ疾走。

「させるか！」

真冬はカインの前に立つ。刹那、光輝くナイフが死神を狙う。死神は一度後ろに跳躍した。

「大丈夫？」

フリージアがカインの様子を確認。

「まだいける」

カインは大剣を支えにして立ち上がる。死神は刀の一撃を受けたが問題はないらしい。

「化け物が……」

カインは霞む視界で死神を見た。

春は荒い息を整えている。溢れる不快な汗を何度も拭う。

「私も障壁が張れば」

春は霞む視界で死神を見つめる。

「十分です。春のおかげで障壁を張るのに専念できます」

雫は手をかざす。深呼吸をする。いつでも障壁を展開できるように。

「真冬……私達でやるしかない」

フリージアがカインの前でナイフを構える。

「分かってる」

真冬は死神の猛攻に何とか耐えていた。だが視認できる速さではない。真冬の腕を足を大鎌が掠める。

「一度……下がってください！」

雫が叫ぶ。

「援護する！」

フリージアがナイフを連続で投擲。死神がナイフを弾く。その間に真冬、フリージア、カインが後退する。

「行きます……援護してください」

雫が鉄扇を開く。その右隣には傷ついた真冬。後ろにはフリージアだ。

「来るぞ！」

カインが叫ぶ。死神が地面を疾走。狙いは雫だ。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫は障壁を展開。それと同時に視界が霞む。限界が近い。だがそんな弱音を吐いてはいられない。真冬とカインは傷を負い、春はすでに疲弊している。フリージアも余裕はないだろう。

死神は障壁に大鎌を振り下ろす。障壁に亀裂が入る。障壁の強度が明らかに落ちていく。雫は悔しそくに障壁を見つめる。

「私が全ての原因なら……」

雫は鉄扇を持って駆ける。それと同時に障壁が割れる。振り下ろさせる大鎌。それを雫は避けない。左腕を大鎌が掠める。

「私でけりをつけます！」

雫は鉄扇を振るう。死神から霧が溢れる。再度、死神が大鎌を振るう。だが雫は引かずに鉄扇で受け止める。雫が死神を睨んだ。

「我は望む……神聖なる護りを！」

死神の後方に障壁を展開。

「フリージア！」

雫が叫ぶ。フリージアは死神の左に移動。

「消え去れ！」

フリージアがナイフを投擲。死神は逃げ道を探す。だが右には真冬が刀を構えている。死神が選んだのは前方。大鎌を強引に押してくる。鉄扇にヒビが入る。

「ぐう……」

雫は呻く。もう少しだけ耐えてほしい。決定打を与えるまでは。突如、湧いた割れる音がした。鉄扇が砕けたのだ。それと同時に光輝くナイフが死神を貫く。雫を襲う大鎌がピタリと止まる。

「あとは……任せました」

雫は短くつぶやいて力を失う。死神は雫に止めをさすために大鎌を構える。

「やらせるか！」

真冬が大鎌を止める。

「そのまま止めておけ」

カインが大剣を真つ直ぐに構える。そのまま疾走。死神を大剣で突き刺す。溢れたのは大量の霧。「やったの？」

フリージアはナイフを隙なく構える。今はカインがいるため投げれない。

「まだだ！」

カインは大剣を握む。死神に刺さり抜けない。死神は霧を噴出させながら大鎌で真冬を突き飛ばす。そのまま横薙ぎに一閃。カインは胸を斬られ、吹き飛んだ。

「カイン！」

フリージアは叫びながら足止めのナイフを投げる。だが死神は黒

い霧を噴出させながらナイフを弾いて接近してくる。フリージアの頬に汗が流れる。

「……どうすれば倒せるの」

フリージアはありったけのナイフを投げる。だが死神はそのまま接近。もはや回避すらしない。刺さったナイフからは霧が出るだけだ。

「……真冬、後は任せたよ」

フリージアはナイフで振り下ろされた大鎌を防ぐ。左手に握るナイフをすかさず死神に突き刺す。これで倒せればいい。だが死神はフリージアのナイフを砕いて、そのまま大鎌で切り裂いた。

「フリージア！」

真冬は死神の背を刀で切り裂いた。死神が一度だけバランスを崩す。ここまでの傷を受ければさすがに限界なのだろう。

「……諦めない」

真冬は再度刀を振り上げる。だが死神が振り向き様に横薙ぎの一閃。真冬の胸を切り裂く。

「……がっ……まだ……だ」

真冬は倒れない。強烈な眩暈がする。そして、全身を襲うのは凍死しそうなほどの寒気。寒気を感じて慌てて春を見た。

春は薙刀を持って地面を疾走。急に寒気を感じたのは春が力の発動を止めたからだ。兄を守るために妹が地面を駆ける。

「駄目だ……来るな……」

真冬は思うように動かない体で春に言葉をかける。だが無駄だ。家族が命を失いそうな時に止まっていられる者がいるだろうか。

真冬に迫るのは大鎌。もう避けることはできない。刀を振るっても相手の方が速い。衝撃を感じると同時に真冬は吹き飛んだ。突き飛ばした春に大鎌が迫る。

「……一度だけでいい……」

春は薙刀で大鎌を止める。歯を食い縛って一撃の重さに耐える。「守らせて！」

春の横薙ぎの一閃が死神を突き飛ばす。真冬は刀を支えにしてどうにか立ち上がる。

「春を……死なせたりなんてしない……こんな運命……俺が断ち切る！」

真冬はふらつく体で地面を蹴る。激しい眩暈、真っ直ぐ走れているのかも怪しい。だが死神だけは見えた。

「ぬああー……」

叫ばなければもう動けなかった。春は真冬の叫びを背中でも聞いた。兄なら大丈夫だと思った。この先も。死神はこちらを見ていない。狙いは真冬。死神は分かっているのだ。春がどうするのか。

「我は望む……神聖なる護りを！」

春は言葉を紡ぐ。真冬を狙う死神の一閃を弾き返す。もはや前しか見えない真冬は刀を振り下ろした。全てを懸けた一閃。死神はそれを受け止めた。真冬は全身から力が抜けた。膝を地面につけて顔をゆっくりと上げる。見えたのは死神の大鎌。

「なんだよ……こいつ……動けよ……守らないと……」

真冬をつぶやきを無視するように大鎌が振り下ろされる。舞ったのは鮮血。

「止めは……僕が決めるよ」

真冬を庇った春が薙刀を構える。巫女服を血に濡らして。死神は容赦なく大鎌を振るう。全身から霧を出して。春は避けない。後ろには大切な人がいるから。

「どっちが先に倒れるかな」

春は薙刀を振るう。死神も避けなかった。もはやそんな余裕はないらしい。

「やめろ……」

真冬はつぶやいた。この動かない体が恨めしかった。なんて残酷なのか。見ている事しかできないなんて。

「……真冬……」

春が薙刀を構える。同時に死神が大鎌を振り上げる。

「……大好きだったよ」

一閃。舞ったのは鮮血と、眩しい光。黒い霧は薄れ、辺りを覆うのは浄化の光。溢れる光に包まれて倒れていくのは春。

「春……？」

真冬は弱々しく語りかける。

「春……！！」

真冬の叫びだけが虚しく響いた。

*

ここにいるのはいったい誰だろうか。何度心の中でつぶやいただろうか。淡々と機械のように言葉を話す人形。

「春は……名前の通りに陽だまりのような笑顔で笑う……俺の自慢の妹でした」

人形が言葉を吐く。形式的な言葉を。葬式という儀式のために。虚ろな瞳でただ文章を読む。前にいるのは春の同級生だろう。皆、泣いていた。あれだけ素直な子だ。人気があったのだろう。真冬はそんな妹が誇らしかった。少しだけ力が戻る。読んでいた文章から視線を外す。

「……だから皆さんも……春と同じ笑顔を浮かべてください」

真冬は言葉をやっと出せた気がした。形式的ではない、人形ではない真冬という人間の言葉を。泣いていた同級生が顔を上げる。

「それが……一番喜ぶと思うから」

真冬は涙を浮かべて笑った。本当はだらと形式的な言葉が続く。春の中学校の教師が渡したものだ。だが真冬は無視をした。こんな物を読んでも伝わらないから。

「笑顔で送ってあげてください」

真冬は一度頭を下げた。

*

真冬は一人でお寿司を食べていた。この国は通夜が終わったら、なぜかこんな豪華な物を食べる。最後くらいは贅沢をしてすっきりと送るためだろうか。真冬には分からなかった。

「邪魔するわね」

聞き覚えのある声がした。ドアを開けて入ってきたのは入ってきたのはフリージアだ。フリージアは通夜にも参加してくれた。本人は隠しているつもりだろうが、健康とはとても言えない蒼白な顔をしている。

「ああ……食うか？」

真冬はお寿司を指差す。

「こんな時に……と言いたい所だけど……これがこの国の風習なら……従うわ」

フリージアは真冬の隣に座った。

「……カインは？」

真冬は短く聞いた。

「……今頃、大剣でも振り回してるんじゃない。悔しかったんだと思う」

フリージアはつぶやいて、鉄火巻きを口に運ぶ。

「そうか」

真冬は拳を握る。悔しいのはこちらと同じだ。その拳をフリージアが握った。

「あなたはここで止めたほうがいい」

フリージアが真冬を見つめた。

「なんだよ……エクソシストになれと言ったのに」

真冬は分からないという顔をした。フリージアは首を振った。
「妹を失っても……まだやるの？」

フリージアは信じられないという顔をしていた。

「……ああ」

真冬は頷いた。

「そんなに前世の記憶が大事なの……呆れるわね」

フリージアは頭を押さえた。

「……それだけではない。どうしても変えたい。来世の春には笑っていてほしい」

真冬は春が眠る棺桶を優しく見つめる。

「……そう」

フリージアは顔を落とした。

「それに答えてあげないとな」

「なにを？」

フリージアが首を傾げる。

「最後に……言っただよ。大好きだって」

真冬は優しく笑う。

「そう……なら変えるわよ……次に死ぬのは……」

フリージアが顔を落とす。小さな肩が震えていた。それだけで分かった。

「……もう誰も死なせない」

真冬は強くつぶやいた。

「……うん」

フリージアは弱々しく頷いた。

*

雫は月を眺めていた。結局、通夜にはいかなかった。

「薄情な女ですね……」

雫はつぶやいた。もちろん自分の事だ。だがどんな顔をして会えばいいのか分からなかった。そんな時、後ろに人が立つ気配だした。

「……こういう時は頭を働かせても無駄だ」

刹が腕を組んで語りかける。

「……ならどうすればいいですか？」

雫は月を見たままつぶやいた。

「思うまま動けばいい。感情に任せて動いたのなら後悔はない」
刹はそれだけを言って背を向けた。

「感情……」

雫はつぶやく。湧き出てくるのは激しい後悔。真冬に対して申し訳ないという気持ち。

「答えは……出ていますよね」

雫はつぶやいて駆け出した。

*

二人で黙々と寿司を食べる。特に会話は弾まなかった。こんな所で弾む方がおかしいが。

「さて……私はそろそろ行くわ」

フリージアが立ち上がる。

「そうか……」

真冬は顔を落とした。

「なに？ 寂しいの？」

フリージアは真冬の顔を覗き込む。

「そうかもな……」

真冬は顔を落としたままつぶやく。

「真冬は進むと決めた……だから悩む必要も落ち込む必要もない」

フリージアは言い切った。

「ありがとう」

真冬はようやく笑った。

「うん」

フリージアは手を振って部屋を後にした。

*

葬儀を行った会場を後にしたフリージアは一人暗い道を歩いてい

た。整備された道は無表情に見つめる。だが視線は前を向いた。見慣れた人物がそこにいたから。

「……やっとなたの？」

フリージアは無表情のままつぶやいた。前から走って来たのは雫だ。

「……フリージア……」

雫は立ち止まった。雫はフリージアを見て葬儀場を見た。

「行って来た……真冬は落ち込んでるわ」

フリージアが雫に一步近づいた。雫が戸惑う。

「私が出来たのは少し元気にさせてあげただけだった……やはり真冬にはあなたが必要なんだね」

フリージアが儚く微笑んだ。

「私が……？」

雫は戸惑う。

「真冬を元気にさせてあげて……それで許すわ。こんな残酷な運命に付き合わせた事を……末代まで呪ってあげたい気分だけどさ」

フリージアは雫の横をゆっくりと通過した。フリージアの声には敵意は感じられなかった。

「……すみません……」

雫が顔を落とす。

「あんたねえ……そういう時はありがとうでしょうが！」

フリージアが振り向いて人差し指を立てた。

「……ありがとう、フリージア」

雫はやんわりと微笑んだ。自然と力が湧いてきた。今なら真冬と会える。そんな気がした。

*

残されたのは真冬一人。寂しく天井を見つめる。

「……春……俺は進むよ……進む先に明るい未来があると信じて……」

…今のこの苦しみが強さに変わると信じて……」

真冬はつぶやいた。つぶやくと同時にドアの前に人が立つ気配がした。

「……雫？」

真冬は誰だかなんとなく分かってしまった。二度も後ろに立たれれば分かる。遠慮がちで踏み込むのを恐がっている雰囲気。表では何も恐くないという顔をしているというのに。

「……分かってしまってますね」

雫はドアをゆっくりと開けた。

「ああ」

真冬は微笑んだ。

「思ったよりも元気ですね。落ち込んでいると思いました」

雫は真冬の隣に座る。

「落ち込んでるよ」

真冬は弱々しく微笑む。

「そうですね。何か出来ませんか……これは私のせい……何か力になりたいです」

雫が早口で述べた。真冬は首を振った。

「無力な俺達のせいだ。雫のせいではない」

真冬は前を見てつぶやく。雫を責めても何も始まらない。

「でも……」

「どうしても気になるなら……力を貸してくれ……俺は今度こそ断ち切る……」

真冬は拳を握った。

「はい」

雫は真冬の拳に触れた。温かく柔らかい手が真冬の拳を温める。

真冬は溢れてくる涙を必死で堪えた。

「泣いていいと思いますよ」

雫は瞳を閉じてつぶやいた。真冬は声を押し殺して泣いた。

「春……どうかあなたの代わりに側にいさせて下さい。真冬が元気

になるまでは……」

雫は春に語りかけるようにつぶやいた。

輪廻の鎖 3

輪廻の鎖

— 3 —

朝日が差し込む。その朝日を受けて真冬は瞳を開けた。あれから一週間が過ぎた。世界は何事もなかったように流れていく。真冬は表向きは一人の高校生としての日常に戻りつつあった。

「…………… いかないよ」

真冬はベッドから抜け出す。体には上手く力が入らない。少しはましになったと思ったが、まだこの様だ。自嘲的な笑みを浮かべて、自室のドアを開けた。

「…………… どんな顔をしてるのよ」

目に飛び込んできたのは淡い金髪だった。フリージアが台所に立って朝食を作っていた。

「ちよっ…………… 鍵閉まってたよな」

真冬は慌てる。

「うん？ 閉まってたよ。まあ、私にかかれば数分で開くけどね」

フリージアは悪びれもせずスープをかき混ぜていた。

「はぁ……………」

真冬は溜息をついて丸テーブルに置いてある物を見た。トーストにサラダ、そして、今かき混ぜているスープで終わりらしい。

「座っててよ」

フリージアはスープを器に注ぐ。それを盆に載せて持ってきた。

「はい」

フリージアが笑顔で渡す。コンソメスープだった。真冬は素直に受け取った。

「なんだか悪いな」

真冬はスープに口をつける。

「いいのよ。春がいなくて寂しいと思ってさ」

フリージアがはにかんだ。時折、視線を向けてくる。

「美味しいよ」

真冬は素直な感想を述べた。

「こちらとしては具体的な感想を聞きたい所だけど、まあいいわ」
フリージアは微笑んでからトーストを齧った。

*

最近はフリージアと登校する事が多い。一緒の所に向かうのだからそれは構わない。だが真冬の腕に自らの腕を絡めてくるのが困る。生理的に。

「……いつも思っただけど」

真冬は隣にいるフリージアに声をかける。

「なに？」

フリージアが真冬を見た。ついでにわざと当てている胸をさらに押し当てる。柔らかな感触が真冬を襲う。

「これは勘弁してくれ……」

真冬は周りの視線が気になって仕方ない。

「いいでしょう……フェレアスのコミュニケーションよ」

フリージアが笑う。本当なのだろうか。そうしていると長い黒髪が見えた。横を早足で通り過ぎる。ついでにこちらを鋭く睨む。殺気がこもっている気がする。

「……不潔です」

雫は短くつぶやいた。背中を見れば分かる。かなり機嫌が悪い。
真冬は今日何回目かの溜息をついた。

*

真冬は教室に入り自らの席につく。周りはホームルーム前だとい
うのに教科書を読んでいた。あの藤堂ですら教科書を必死に読んで
いた。真冬は首を傾げる。フリージアに席を譲り、廊下側に移動し
た悪友に声をかける。

「藤堂……なにかあるのか？」

声をかけた瞬間に藤堂はこちらを見た。

「春ちゃんが不慮の事故で亡くなって現実逃避していたんだな」

藤堂は顔を落とした。確かに現実逃避したい時もあるが、精一杯
生きるつもりだ。護士として、一人の人間として。

「俺は平気だ。それで……何があるんだ？」

真冬はそろそろ教えてほしい。藤堂が見せたのはカレンダー。真
冬は思い出したような顔をした。

「ああ。テスト週間か」

真冬は聞いて損をしたというような顔をしている。だが藤堂が真
冬を逃がさない。

「余裕ではないか、真冬君」

藤堂が必死にこちらを見る。腕は万力のように締め付けてくる。

「痛いから！」

真冬は顔をしかめる。

「すみません……勉強を教えてください」

藤堂が頭を下げた。

「はあ？ テストなんて授業を聞いていれば余裕だろう」

真冬は何を言っているんだという顔をした。刹那、クラスメイト
の視線が真冬を貫いた。

「あ……あれ？」

真冬はその視線に耐えられずに、黙って席についた。

「……テスト週間ねえ。平和なものね」

後ろに座るフリージアがぼつりとつぶやいた。

「フリージアは勉強できるのか？」

真冬はとりあえず聞いてみた。フリージアはチラリと視線を向け

る。

「聞きたい？」

「ぜひとも」

質問するフリージアに真冬は頷いた。フリージアが顔を寄せる。

唇が触れそうなくらいに近い。真冬は驚いて目を見開いた。

「実はあちらの国では飛び級してとつくに大学を出てるの」

フリージアが小悪魔な笑顔を向けた。

「ならばなぜここにいる？」

真冬は首を傾げた。

「もちろんエクソシストとして……そして、途中参加した護士がい
ると聞いてね。まあ、あの女の鎖によって強制的にこの場に呼ばれ
たのかもしれないわね」

フリージアは溜息をついた。

「……フリージアさんってすごいんだな」

真冬は感心した。刹那、足に強烈な痛みが走った。

「……次にさん付けしたら怒るよ」

フリージアが頬を膨らませた。

「悪い、悪い」

真冬は足をさする。その姿を見て満足したのかフリージアは微笑
んだ。

*

雫は授業中にまた外を見ていた。体育の授業が行われていた。競
技はサッカーから変わり、バスケットボールだ。雫は前のように真
冬を探した。また地味にパスでもしているのだろうか。

外では歓声が飛んだ。真冬がスリーポイントを決めたからだ。

「さすが、スナイパーだな」

藤堂が真冬の背を叩いた。

「意味が分かん」

真冬は微笑んだ。やはり体を動かすのはいい。もやもやした気分が晴れていく。

「次はお前な」

真冬が藤堂の背中を叩いた。

その後は一方的だった。藤堂が敵地に切り込んでどんどん点をとっていく。藤堂にディフェンスが集まると、真冬にパスが渡る。当然するのはスリーポイントシュート。職人のように入れていく。

「……点をとっているのに地味……？」

雫は感想を述べた。明らかに突撃していく藤堂の方が目立っている。女子の歓声も藤堂に集まっている。

「でも……真冬らしいですね」

雫はつぶやいて微笑んだ。

「雨月さん……次は怒りますよ！」

教師が指示棒を向けてきた。

「すみません」

雫は顔を落とした。まさか二度も同じミスを繰り返すとは。

「ふっ……未熟」

右隣の席に座るカインが一瞬だけ微笑んだ。こんな表情もする事があるとは雫には意外だった。

*

昼休憩。真冬はいつものAランチを取って席に座る。最近は一ジアが前の席に座って食べるのだが今日は先に先客がいた。同じAランチを持った雫が座っている。

「……珍しいな」

真冬はそうつぶやかずにはいらなかった。

「……いけませんか」

雫はそつぱを向いた。その様子が何だかおかしかった。

「そこは私の席よ！」

後からフリージアがBランチを持ってきた。入学したばかりなのでBランチである。おそらく次のテストで結果を残して優等生まで上がるだろう。

「先に座っているのは私です」

雫に席を譲る気配はない。フリージアは仕方なく真冬の左に座った。

「二人とも仲良くな」

真冬が二人をなだめる。

「あなたにだけは言われたくありません」

「あんたが言うな！」

正面と左から容赦のない蹴りが炸裂した。

*

授業も終わり真冬は袴に着替えた。

道場に行くのもずいぶん久しぶりな気がする。真冬は刀を持っていつもの場所へ。そこには一刀斎がいた。その他にも巫女服を着た雫が舞を踊り、袴を着たフリージアが禅を組んでいた。

「……なんだこれ……」

真冬はつぶやいていた。

「邪魔をする」

立ち尽くしている真冬の後ろからは、袴を着たカイン。手には木刀を持っていた。邪魔にならない位置に移動して木刀の素振りを開始。ただ黙々と。統一性という言葉はどこかに置き忘れている光景だった。

「来たか……ここは何部だったかの？」

一刀斎は首を傾げる。

「剣舞愛好会です……」

真冬がぼつりとつぶやいた。人数の関係で部としては名乗れないのだ。心は部活動のつもりだが。

「お前が真冬か？」

竹刀を持った男が話しかけてきた。面までつけておりフル装備だ。確か同じ道場を使用している剣道部だ。

「はい、そうですが」

真冬は頷いた。

「すまないが、こんな統一性のない部……いや愛好会に道場を使つてほしくないんだ。他でやってくれ。前はちゃんと剣舞を舞っていたから許してはいたんだけどな」

剣道部の部員が申し訳なさそうに言った。確かにこの混沌とした愛好会を見るとやる気が出なくなるのだろう。

「ほう……道場破りか」

カインが素振りを止めた。道場なんて持ってませんから、と真冬が心の中でつぶやいた。

「私に挑戦……？ いい度胸ね」

フリージアが禅を止めて立ち上がる。

「……私を入れて4人……この場をかけて剣道で勝負というのはどうですか？」

雫が舞を止めた。

「雫まで……？」

真冬は頬に汗が流れた。何でこんなに血の気が多いんだ、こいつらは。

「……ただでだけはさすがにいけないか。剣道で勝負でならこちらは問題ない。そちらの人数に合わせて4人だ。勝者数法でいいな」

剣道部が竹刀を強く握る。やる気満々だ。

「もう勝手にしてくれ」

真冬はぼつりとつぶやいた。

*

それぞれが防具を装着して整列。相手はこちらに女性が二人いる

という事で女性部員を二人用意してくれた。

「では……これよりこの場をかけて剣道部対剣舞愛好会の試合を開始する」

一刀斎が開始の合図をした。一刀斎は剣道の経験もあり審判をしてくれるらしい。こちらは素人が多いので細かい形式は無視して進めるようだ。試合の結果が重要ということだ。

「よろしくお願いします」

皆が頭を下げる。

「では先鋒は前に！」

一刀斎が声を上げた。

「では、行くね」

フリージアが肩を回す。対する相手は2mに背が届きそうな大男。女性を二人用意してくれたが順番は公開していないので女性対男性の組み合わせもあり得る。

「運がないな、俺は剣道部の中では一番背が高いんだ。その身長で面が打てるか？」

剣道部の男がにやりと笑う。

「2流……いや3流のザコキャラのセリフね」

フリージアが溜息をついた。

「この女……可愛い顔をしていつてくれるねえ」

剣道部の男が礼をして竹刀を構える。フリージアも習う。

「開始！」

一刀斎の声が道場に響く。フリージアは男の面を見た。確かに届かない。無理をすれば当然届く。だがそれはかなり危険だ。狙いは小手が胴といった所か。

相手はゆっくり竹刀を上げた。これでは小手は狙えない。狙うは胴か。だがそれくらいは相手も分かっているのか胴に対する警戒心は強い。

「がら空きね……」

フリージアはぼつりとつぶやいて踏み込んだ。咄嗟に相手がフリ

「フリージアの面を狙うために竹刀を振り下ろそうとする。

「突き！」

だがそれよりも速く腰を使って繰り出されたのは鋭い突き。

「ごうえ……」

大柄な男がとんでもない声を出した。

「突き有り！」

一刀斎が手を上げた。剣道部が驚愕の表情を浮かべた。

「おい……突きなんて初めて見たぞ」

「あれは有効なの？」

「知らない……見たことないから。高校生以上は有りだった気がするけど」

剣道部が騒ぎ出した。

「さて……立ちなさい。もう一撃……プレゼントするわ」

フリージアが不適に笑う。

「ひっ……」

剣道部が震えた。

「容赦ないな」

真冬はつぶやいた。

「あいつは戦いで手加減はしない」

カインが試合を見てつぶやいた。

フリージアは今も試合中に隙あれば突きを狙おうとしている。相手はもはや戦えない。フリージアが踏み込むのを見たら体がすくんでしまう。

「小手！」

怯んだ相手の小手に一撃。

「小手有り！」

一刀斎が試合の終了を告げた。フリージアは一度礼をした。

「はい。一勝」

面を取ってフリージアが微笑む。仲間によかったと心底真冬は思った。

「では、俺が行こう」

カインが立ち上がり面をつけた。

「可哀相……」

フリージアがぼつりとつぶやいた。並みの高校生がカインの一撃を受けたらただではすまない。その犠牲者はなんと女性だった。見るからにか弱い。

「ぬっ……」

カインの表情が歪む。さすがに良心が反応したらしい。

「真冬……代われ」

カインが頬を引きつらせてつぶやいた。真冬は笑ってしまった。

カインは女性だろが関係なくなぎ倒すとばかりに思っていた。

「穢れ以外にはカインは優しいよ。たまに厳しいけれど……それはちゃんと相手を思っているから」

フリージアがつぶやいた。

試合が開始された。まずは様子見で竹刀を振り下ろす。

「きゃあ!」

竹刀が重なった瞬間に女性部員が悲鳴を上げた。カインは半分しか力を出していない。だがこの細腕の女性にはかなりの破壊力があるらしい。

「ま……まともに戦えん」

カインの頬に汗が流れる。それが隙となった。

「こ……小手!」

女性がカインの小手に竹刀を直撃させる。

「あ……」

カインが呆気にとられてつぶやく。

「小手有り!」

一刀斎が一本を宣言。

「駄目ですね……これは」

雫がつぶやいた。真冬もこの試合は諦めた。明らかにカインの動きがおかしい。剣が迷っている。

「面有り！」

一分もたたずに決着がついた。結果はカインの敗北。

「すまん……」

カインは面を取って座る。

「仕方ないさ。あそこで本気を出すのはいけない」

真冬は微笑んだ。フリージアも頷いた。

「俺もまだまだという所か」

カインが腕を組んだ。

「さて……次は私ですか」

雫が立ち上がって面をつけた。

「負けないでよ」

フリージアが雫の背中に言葉をかける。雫は一つ頷いた。

「雫なら負けないか」

真冬はつぶやいた。体育の時間を見て運動神経がいいのは知っている。剣道部ともまともに戦えるだろう。

「任せてください」

雫は一度礼をして竹刀を構える。相手は女性だった。

「雫が相手かー。これはいいね」

凛々しい顔立ちに短い黒髪の少女が微笑む。彼女は雫のクラスメイトで桜子という。幼い頃から剣道をしてきた少女で、その腕はかなりのものだ。女子部員の中では一番強い。強いだけではなく面倒見もよく剣道部の女子の中で人気が高い。

「私が参加するからですか？」

雫が質問。

「もち。あの時の屈辱は忘れないわ」

桜子が竹刀を強く握る。剣道の授業で桜子は雫に負けた。しかもあっさりと。

「執念深いですね」

雫はつぶやいて、一步引いた。桜子も一步引く。それが開始の合図だった。地面を叩きつける大きな音がした。これは踏み込みの音。

「小手！ 面！」

雫は踏み込んで小手を狙い、すかさず面を狙う。桜子は小手を回避、面を竹刀で防いだ。

「その細腕のどこにこんな力あるのよ！」

桜子は鏑迫り合いをしながらつぶやく。頬に汗が流れる。雫は表情すら変えない。

「勝たせてもらいます」

雫は桜子を吹き飛ばす。すかさず竹刀を構える。

「胴！」

雫は踏み込むと同時に桜子の胴に一撃。

「胴有り！」

一刀斎が一本を宣言。

真冬は雫の動きから目を離す事ができなかった。

「綺麗だな……」

自然と言葉が出ていた。

「そうだな」

カインも頷いた。二人が言っているのは剣捌きだ。無駄がなく理想的。

「悔しいけど、これは真似できないわ」

フリージアも頷いた。たかが高校生が勝てる相手ではない。一人で死ぬ気で戦ってきたからこそその動きだ。

「面有り！」

すぐに一本の声が出た。桜子は礼をする事もなく、その場で膝をついた。

「何者よ……」

「ただの巫女です」

雫は微笑んでから背を向けた。その様子を見て真冬が立ち上がる。

「さて……これで2対1です。ビシッと決めてください」

雫がすれ違いながらつぶやいた。

「ああ」

真冬はつぶやいた。現れたのは細身の男性。剣道部の主将だ。お互いが礼をして竹刀を構える。

「まさかここまでやるとは思わなかった。カイン君が本気を出していたら負けは確定だった」

主将が微笑む。

「負けませんよ」

真冬は竹刀を構える。

「いいだろう」

主将が竹刀をゆっくりと上げる。真冬は一つ息を吐いた。あの死神と比べたら何も恐くない。

振り下ろされる一撃。真冬は半歩下がって回避。

「小手！」

すかさず真冬は小手を繰り出す。だが剣道部主将は竹刀を再度上げて回避。そのまま振り下ろす。

「面！」

真冬の面を竹刀が襲う。それと同時に真冬は一步を踏み出した。竹刀が面に当たる。だが深すぎる。有効打突範囲ではない。

「胴！」

真冬は気合と共に胴を繰り出した。実戦なら頭と胴を斬られて相打ちだろう。だが、これは剣道。ルールに則れば真冬の勝ちだ。

「胴有り！」

一刀斎が一本を宣言。

「まさか踏み込んで来るなんて……恐くないのか」

主将がつぶやく。

「恐くないさ……世の中で一番恐ろしい目に合ったからな」

真冬はつぶやいた。大切な妹を目の前で失う。これ以上に思いはない。主将はその時に気づいた。勝てないと。背負っているものが明らかに違うのだと。

「だが……部を背負う身だ。全力で戦う」

主将は竹刀を構えた。真冬も手を抜くつもりはない。深呼吸。相

手の攻撃をイメージする。見えない相手と戦う舞いのように。

「小手！」

主将が選んだのは小手。真冬は咄嗟に動いた。主将の竹刀を弾いて、踏み込む。

「突き！」

鋭い突きが喉元を貫いた。フリージアの突きを見よう見真似で放っただけだ。放たして有効かどうか。

「突き有り！」

一刀斎が一本を宣言。

「勝った……」

真冬は震える手を握り絞めた。

「本当に負けるなんて……君は？」

主将が真冬を見た。

「雫を守る者かな」

真冬はつぶやいた。歓声が湧いた。特に剣道部の女性部員から。雫は顔を真っ赤にした。

「な……誤解を招くような事を言わないでください」

そっぽを向いて雫がつぶやく。

「さて……主将、これで文句はないな」

カインが腕を組んでつぶやく。かなりの威圧感。

「くっ……仕方あるまい。ただ剣舞愛好会というにであれば剣舞をしたまえ」

主将が立ち上がった。

「常月の舞か……気が向いたらやってみよう」

カインが一つ頷いた。

「ふー、これで存続ね」

フリージアが防具を外す。

「そうですね」

雫も防具を外す。

「ところで……お前たちは何しに来た？」

真冬は練習を開始する前に、なぜここにこの三人がいるのかが気になった。

「舞を踊るのでしょうか？　ならついでに私もやろうかと」

雫が扇子を取り出す。剣舞愛好会で、扇子を使った舞。ぎりぎり
いいような気もする。

「私は真冬がいるから」

フリージアが手を上げる。

「……ここに来るなら舞をしてくれ。無理なら隅で禅でもいいよ」

真冬は溜息をついた。

「なら禅でもしてるわ」

フリージアが隅で禅を組む。こんな部員がいてもいいだろう。さて、最後はカインだ。

「もう素振りしてる！」

真冬はカインを見てつぶやいた。

「安心しろ。俺の目の前には常に敵がいる。この素振りは敵を切り裂く一撃だ」

カインが木刀を振るう。これは一種の舞なのだろうか。真冬は激しく首を振った。

「ほほ……混沌だのう」

一刀斎が笑った。剣道部はこちらを奇怪の目で見た。そして、思った。こんな奴らに負けたのかと。

「本当にごめんなさい」

真冬はうな垂れた。

*

剣舞愛好会の活動も終わり帰路についた。外は真つ暗だった。頼れるのは月明かりと、所々にあつ電灯だけだ。隣を歩くのは雫だ。何だか本日は珍しい。雫がよく隣にいる。

「今日はどうしたんだ？」

真冬は聞いてみることにした。

「……フリージアはいいのに、私は駄目ですか？」

雫はそっぽを向いた。

「いや……いいよ。雫といると安心するから」

真冬は月を見上げた。

やはり春の事を思い出してしまう。先ほどまでは平気だった。剣道部とのバトルに始まり、バラバラだけど一緒の時間を過ごせた。一時だけは忘れられた。忘れてしまっていたのかは分からない。でも、ずっと沈んだ顔をしていると春を心配させてしまう。

「……そうですか。あの……今は一人で住んでいるのですよね？」

雫が頬を赤めてつぶやいた。真冬はいぶかしむ。フリージアではないのだから部屋まで押しかけてくる事はないだろう。さすがのフリージアもこの時間は家には来ない。

「そうだけど……」

真冬はつぶやく。なぜそんな事を質問するのか分からない。

「………それなら家に来ませんか？」

雫が意を決してつぶやいた。表情を見る限り真剣だ。

「……神社に？ 夕飯をいただくのはさすがに迷惑ではないか」

真冬は頭を掻いた。確かにありがたい。家事は全て春がやってくれた。出来ない訳ではないが春と比べれば素人同然だ。ご馳走してくれるなら飛びつきたい。だが、女性の家に行くのは問題がある気がした。

「ゆ……夕飯だけではありません。神社に来ませんか……部屋ならありますから」

雫が言い切った。真冬は思考回路が一瞬だけ停止した。

「な……なんだって？」

真冬は聞き返していた。雫は顔を真っ赤にしたまま睨んでくる。二度も言わせるなど言いたいらしい。

「えっと……刹さんはどう言ってるんだ」

まずは外堀から埋めようではないか。

「大歓迎らしいですよ。一から鍛え直してやる、とか言っていました」
雫が頬に手を当てて思い出す。何だか木刀を持って張り切っている刹那が頭の中に浮かんだ。

「なら……雫は？」

ついに聞いてしまったと内心で真冬はつぶやいた。

「……嫌なら言いません！ それに………に負けたくないですから」

雫は半ば自棄になって叫んだ。だが後半は聞き取れなかった。

「そうか……一人で春がいた場所にいるとどうしても思い出してしまっただ」

真冬は空を見つめてつぶやく。憂いを帯びた横顔を雫は見つめた。こんな顔をさせたくないから神社に来てほしいのだ。

「……神社で生活すればそういう気持ちは薄れるかもしれない。けれどそれでいいのか分からない。春は……俺に元気になってもらいたいと思ってくれていると思う。優しい子だからさ。でも、寂しがるのではないかと思うとさ」

真冬は二つの考えが頭の中を占拠した。

「春……寂しくなってしまうのならごめんなさい。どれだけ私を恨んでも構いません。でも、真冬は前に進むべきですから」

雫が真冬の手を掴んだ。

「おっと」

真冬は慌ててバランスを取る。雫が手を引いて走る。向かっているのは神社。

「春……俺は生きていくよ。お前の代わりに幸せを見つかる。来世で会ったときは、またわがまを聞くよ。だから許してくれ」

真冬は手を引かれながらつぶやいた。

「雫……お世話になるよ」

真冬は微笑んで雫の背中に言葉をかけた。雫は立ち止まって振り返り向いた。綺麗な笑顔を浮かべて一度だけ頷いた。

*

本日は土曜日。高校は休みである。真冬は神社の一室を借りている。まだ物は何もない。畳の上で毛布に包まって寝ている。今日のうちにアパートから必要な物を持つてくるつもりである。

「……真冬」

突如、自分と呼ぶ声。まだ朝日は感じない。4時から5時くらいではなからうか。真冬は眠いのでその声を無視する。

「……真冬」

呼ぶと同時に揺すってくる。勘弁してくれ、俺はまだ眠いんだ、と心の中でつぶやいて毛布を掴もうとした。

「……強行手段ですね」

真冬を包む毛布に手を触れ、一気に引つpegす。朝の冷気が真冬を襲う。一気に目が覚めた。

「さ……寒い」

真冬は覚醒した瞳で自分を起こした人物を見た。だいたい分かっているのだが。

「おはようございます」

巫女服を着た雫が挨拶をした。真冬は恨めしそうな瞳で雫を見た。……なんですかその目は。せつかく起こしに来たのに」

雫がそっぽを向いた。

「悪い。でも、明らかに早くないか」

真冬は一度あくびをした。

「いえ……毎朝5時には鍛錬をするのが雨月神社の慣わしです」

雫が立ち上がる。時計を見ると4時50分。あと10分で鍛錬が始まるらしい。

「はああ？」

真冬は慌てて立ち上がる。あと10分しかないではないか。

「袴に着替えて外に出てください」

それだけ言つて雫が部屋の襖を開けて出ていった。真冬は溜息を

ついて袴に着替えた。昨日のうちから言っておいてほしいものだ。

*

震え上がりそうな冷たい風が吹いた。だが真冬の頬には汗が伝う。
「来い」

刹が木刀を構える。真冬も木刀を構えて疾走。木刀を振り下ろす。
「ぬん！」

刹は木刀を振り上げる。木刀同士が触れた瞬間に右手に鋭い痛みが走る。それだけ力の差がある。木刀を吹き飛ばされる前に後方に下がる。

「……いい判断だ。だがまだ間合いの中だ。気を抜くな！」

刹は突きを放つ。真冬は自然と体が反応した。右に体を捻って何とか回避。攻撃に移ろうと思った時には、刹の木刀が横薙ぎに振られる。

「ぐっ……」

真冬が呻いた。木刀での横薙ぎの一閃が胴に炸裂した。

「まだ未熟だな」

刹が微笑む。この程度を凌ぎきれば話にならないという顔をしている。

「もう一回」

真冬は木刀を構え直す。

「むろん」

刹もゆっくりと木刀を構えた。

*

「……」
雫は神社の右端にある大木の前にある井戸から水を汲んだ。

雫はその水を決意を込めた瞳で見つめる。当然、体は震えている。

一度頷いてから水を頭から被った。一瞬で体が冷える。唇は真っ青、全身は震えている。

「……我は望む……神聖なる温かさを」

雫が言葉を紡ぐ。光が雫の体温を上げていく。そのまま発動を止めない。少しでも長く発動できるように毎日欠かさずに行っている。本来は穢れがいる独特の空間で修行をしたい所だが、それは叶わないのでこんな原始的な方法で行っている。

「さて……今日は新しい事に挑戦です」

雫は巫女服の袖から紙で出来た式神を出した。一つ深呼吸。

「……我は望む……神聖なる神の使いを！」

式神に力を込める。式神は重力に逆らって宙に浮いた。ここまでは何とか出来る。だが式神は力を失って地面に落ちていく。雫は再度力を込める。何とか維持に成功。

「やはり難しいですね」

雫は独語した。それと同時にイメージを送る。雫の前に移動して障壁を展開。

「う……」

雫は強烈な眩暈を感じた。まさかここまで力を消費するとは。これなら雫自身が障壁を張った方がましだ。だが障壁を一度展開すると再開まで時間がかかる。その間に式神を使って援護をしたいと思ったのだ。荒い息を整えてチラリと広場を見た。真冬に木刀が直撃していた。だが真冬は諦めずに立ち上がった。いた。

「……弱音を吐いている暇はないですね」

雫が再度、式神に力を込めた。

*

早朝の鍛錬が終わり、ヘトヘトになった真冬は一度自室に戻った。何も無い部屋を一度眺める。

「……疲れたから明日という訳にはいかないか」

真冬は独語する。あるのは毛布のみ。着替えも全てアパートだ。

「真冬、朝食の時間です」

雫が襖を開けて顔を覗かした。少し髪が湿っているような気がするの。は気のせいだろうか。いつもよりも艶を増した髪は綺麗だと思った。

「ありがとう……食べ終わったら一度、アパートに戻るよ。荷物、まとめないと」

真冬は一応、雫には伝えておこと思った。そんな時に聞き慣れた音がした。毛布の側に放置しておいた携帯電話だ。特訓に持っていけば壊れる危険性があるため置いておいたのだ。

「はい」

通話ボタンを押して一声。

「やっと出た。朝からどこに行ってるのよ!」

聞こえてきたのはフリージアの声だった。どうやらアパートまで来てくれたらしい。

「早朝から鍛錬をしていて……すまない」

真冬は苦笑いを浮かべてつぶやいた。

「……電話が終わったら来てくださいね」

雫は電話の相手が誰なのか察しがついたらしい。短く言って襖を閉じた。

「あの女と一緒になのね。先を越された」

舌打ちと共にフリージアがつぶやいた。

「ああ。昨日から雨月神社で世話になることにしたんだ」

真冬が何気なくつぶやいた。

「うええーーーー!」

電話の向こうから驚きの声があがった。真冬は携帯電話を耳から遠ざける。

「ど……どうした?」

真冬は再度、携帯電話を耳に当てる。

「ちょ……真冬、それは駄目でしょう。あの女、大人しそうな顔を

して……」

フリージアは冷静さを失っていた。

「なんだかよく分からんな。ところで何の用だ」

「休みだから……鍛えてあげようと思ったのよ。そして……ついでにお買い物とか……」

真冬の問いに対して、フリージアは珍しく歯切れが悪い。

「鍛錬はもう朝からしたからな。それに今日は荷物を纏めないと」

真冬は申し訳なさそうにつぶやく。

「……それなら手伝ってあげるわ。覚悟しなさい、真冬」

フリージアが謎の言葉をつぶやいて通話を切った。

「なぜ……手伝ってもらうのに覚悟がいるんだ？」

真冬は首を傾げた。

*

朝食は質素だった。世話になる身には文句は言えないが。畳の部屋には円形の卓袱台が置かれ、その上に並ぶのはご飯、大根の漬物、後は味噌汁のみ。卓袱台を囲み三人は黙々と食べる。

「……………」

「……………」

「……………」

雫と刹は無言なので真冬も無言で食べる。聞こえてくるのは味噌汁を啜る音と、漬物を食べた時の音のみ。

（…………耐えられない…………）

真冬は心の中でつぶやいた。雫に視線を向ける。だが漬物を口に運ぶのみ。会話をする気はない。次に刹に視線を向けた。視線が合った。真冬は口を開こうとした。

「…………雫」

刹が一言。

「はい」

雫は短く言って真冬の茶碗を掴んだ。真冬は茶碗を放す。そこに盛られたのは山盛りのご飯。

(……違う……！)

真冬は再度、心の中でつぶやいた。真冬の限界が近づいてきた。今までは春と一緒に楽しく話しながら食べていた。この無言が耐えられない。

「あ……あのー」

真冬は山盛りご飯を受け取ってから口を開いた。

「なんですか？ 食事中に」

雫は真冬を見た。この家庭はやはり食事中には会話をしないらしい。

「……いつも無言なの？」

真冬が雫に問うた。雫が驚く。

「ええ……」

雫が刹に視線を送る。刹が無言で頷いた。これが古き良き文化なのか。さすがは神社。真冬は無言の空間で山盛りご飯を平らげた。

*

真冬は朝食を終えてアパートを目指す。手伝ってくれるフリージアを待たせる訳にはいかないので若干早足である。

真冬にとっては見慣れたアパート。そして、見慣れた1階の部屋。その前で淡い金髪の少女が退屈そうに待っていた。手には折りたたまれたダンボールを手にしている。なんと準備がいい事か。

「遅い！」

腰に手を当ててご立腹のフリージア。

「悪い」

真冬は片手を上げて苦笑いを浮かべた。

「まあいいわ。さっさとやるわよ」

フリージアが微笑んだ。真冬が鍵を開けて中に入る。

「春の部屋の荷物は私が纏めるわ。ダンボールに入れればいい？」
フリージアが隅に折りたたまれたダンボールを置いた。

「ああ……なんだかすまないな」

真冬は顔を落とした。真冬自身がやりたいがおそらく一日経つても終わらないだろう。それだけあの部屋には思い出が詰まっている。
「本当に常月の人間は不便ね……。そこはありがとう、でしょう」
フリージアが微笑んだ。

「そうだな。さて……やるか」

真冬は自らの部屋に入って私物をダンボールに放りこんでいった。

*

30分ほど無言で機械のように手を動かしている。無心でやっているつもりだがふと手が止まった。

机に置いてある写真立てに手が触れた時だ。高校に入学した時の写真だ。登校する前に始めて制服を着た日。隣には始めてセーラー服を着た春が真冬の腕を取って満面の笑顔を浮かべていた。

「う……」

涙がこぼれてきた。一週間も立っているのに悲しみは薄れない。

無意識のうちに見ないようにしていたのか、自我が働かないくらいに打ちのめされていたのかは分からない。だが写真を直視した真冬は込み上げる涙を堪える事ができなかった。

「春……」

真冬は膝をついてつぶやいた。俺はたぶんこの部屋にいたら前に進めない。失う恐怖で足が竦んで動けなくなる。真冬は写真を抱きしめてひたすらに泣いた。その時に後ろでドアが開いた。

「……………」

無言でフリージアが真冬の背中を見つめた。真冬は涙を拭く。振り向こうとした時に背中に柔らかな感触がした。それと共に温かさと、甘い香りがした。

「……フリージア？」

「覚悟しなさいと言ったよね」

フリージアは真冬を抱きしめながらつぶやいた。

「……………ごめん」

真冬はフリージアの手に触れた。さすがにそんな気分にはなれない。

「分かってる。でも……………辛いなら……………少しでも忘れられるなら……………何でもしてあげる」

フリージアは腕に込める力を強くした。

「フリージアって……………優しいよな」

真冬はぼつりとつぶやいた。

「何を今さら言ってるのよ」

フリージアは頬を真冬の背にピタリとつけた。

「ありがとう……………元気出たよ。片付けないと」

真冬が立ち上がろうとする。フリージアは残念そうに真冬を解放した。これがもし雫だったら受け入れていたのだろうか。そう思うと悔しくて仕方がなかった。

*

片づけを終えて運搬会社に連絡を行い、引越しが完了した時にはもはや外は暗くなっていた。

「見違えるようだ」

真冬は一言つぶやいた。アパートから持ってきた厚い蒲団が敷かれたベッドが部屋の奥を陣取り、机に椅子まである。何もなかった部屋とはお別れだ。

真冬は疲労した体を休めるためにベッドに飛び込んだ。飛び込んだ瞬間に眠気が襲った。まだお風呂にも入っていないので、瞳を開けようとする。

「……………いいですか？」

眠気と戦っていると、襖の外から雫の声がした。

「ああ」

真冬はベッドから起き上がりながら返事をした。襖を開けて現れたのは薄い黄色の就寝着を着た雫だった。薄っすらと髪が湿っているのはお風呂上りだからだろうか。上気した頬がやけに色っぽかった。

「どうした？」

真冬は緊張しながら質問。普段見慣れない雫の姿にかなり緊張していた。

「お風呂が空いたので知らせに来ました。今日は疲れたでしょうからゆっくりして下さい」

雫は特に表情を変えないでつぶやいた。艶やかな黒髪を揺らして背を向けようとする。

「なあ……」

真冬はその背中に言葉をかけた。

「なんですか？」

雫が小首を傾げた。

「少し話さないか？」

真冬はベッドに腰をかける。そして、右隣を軽く叩いた。座ってほしいという合図のつもりだ。

「……いいですよ」

雫は隣に腰をかけた。湿った長い黒髪が真冬の手になんだけ触れた。触れた瞬間に驚いた。本当に柔らかい髪だと内心で思ったからだ。

「あんまりゆっくりと話した事はないよな」

真冬は天井を見上げてつぶやく。

「そうですね」

雫は短くつぶやいた。前だけを見ている。真冬は横顔を見つめた。特に表情はない。表情からは何を考えているのか全く分からない。

「……あまりジロジロ見ないで下さい。少し恥ずかしいです」

雫は赤らめた顔を逸らした。

「すまない」

真冬は一つ咳払い。

「何か話があるのですか？」

雫は本題が気になるらしい。

「いいや……ないよ。強いて言えばどうしたら強くなれるか……かな」

真冬は本日の特訓で刹の攻撃を避ける事はできなかった。実力の差がありすぎる。

「そのうちに強くなると思います」

雫は微笑んだ。

「アバウトだな」

真冬は頭を掻いた。

「何度でも挑み続ければきっと強くなれます。おじさんは手加減しませんから」

雫は微笑んだままつぶやいた。本日は木刀で10回以上は殴打された。確かに続けていけば格段に強くなるだろう。

「なら……心はどうしたら強くなると思う？」

真冬は自らの胸に手を置いた。今でも春の事を思い出して、沈む自分がいる。こんな状態で戦えるのか疑問だ。

「私には答えられません。私は感情を殺しています。感じる心があると辛いですから」

雫が顔を落とした。あの無表情は何も考えないようにしている結果らしい。

「そうか……それなら答えを見つかるよ。見つけたら一番に雫に教えてやるよ」

真冬は笑った。雫も微笑んだ。

「それは楽しみにしておきます」

「ああ」

真冬が頷いた。それからは特に話題はなかった。二人は無言で前

を見つめた。時折、雫が動くとき柔らかい髪が真冬の腕に触れる。真冬は雫の髪を見つめた。

「どうかしましたか？」

「いや……綺麗な髪だと思ってさ」

真冬は長い黒髪を見つめてつぶやいた。

「数少ない私の自慢の一つです」

雫が微笑んだ。嬉しそうに見えるのは気のせいではないだろう。

「……少し触れてもいいか？」

真冬はそれとなく聞いてみた。雫は顔を真っ赤にした。この反応はまた突き飛ばされると思い身構えたが雫は顔を落としただけだった。

「いいですよ……別に触るくらいなら」

顔を落としたままつぶやいた。真冬は優しく雫の髪に触れた。本当に柔らかい髪だった。二人は少しの間ゆっくりとした時間を過ごした。

*

刹は神社の外で木刀の素振りをしていた。だがふと手を止める。

「……………」

何か違和感がした。一瞬だけ寒気を感じたのだ。穢れが姿を現した際に感じる独特の寒気。だがもう感じない。

「気のせいかな？」

刹は一度瞳を閉じた。やはり何も起こらない。この場で寒気を感じるとは、巫女と護士に正面から喧嘩を売るようなものだ。もしそうであるなら返り討ちにするだけだが。

「明日は……みっちり鍛えよう」

刹は独語して木刀を構えた。再度、素振りを再開。刹の背後で黒い霧が一瞬だけ姿を現して消えた。

輪廻の鎖 4

輪廻の鎖

— 4 —

早朝の鍛錬を終えた真冬は朝食の席についた。本日も無言の朝食だと思つたが刹が口を開いた。

「昨日の晩だが……穢れの気配がした」

刹は瞳を閉じてつぶやいた。無表情でつぶやいているため心情は読み取れない。

「……そんな現れればすぐにでも……」

雫が驚いて箸を置いた。敵を感じできないのは致命的だ。雫の表情には焦りや、不安がはつきりと感じられた。

「気のせいである可能性も高い。一瞬だけ寒気を感じただけだからな」

刹は瞳を閉じたままつぶやいた。真冬は拳を握る。また穢れが現れる。

「……今度こそは誰も死なないで倒してみせる」

真冬は自らの声を聞いて驚いた。呪詛を含んだような低い声が出てしまった。

「……気持ちは分かるが……それでは穢れは被えない」

刹は溜息をついた。

「負の感情をもって穢れを斬っても倒す事は適いません。真冬……強い気持ちを持ってください」

雫が真冬の手に触れた。優しさが温かさが真冬の怒りを、憎しみを消してゆく。この温かさを守るために戦うのが護士だ。穢れへの憎しみで刀を振るってはいけない。

「ありがとう」

真冬は雫に微笑んだ。

「……はい」

雫は頬を赤らめて頷く。しばし見つめ合う二人。それは初々しい恋人のようなそんな雰囲気が出ている。それを見る事になる他人は、どうも居心地が悪い。

「……コホン」

刹がわざとらしく咳払い。雫は慌てて手を退けた。

*

朝食を済ませた真冬は自室から一步も出ていない。

穢れが出るのは夜。それまでは自由だからである。袴から、ハイネツクの長袖Ｔシャツにジーンズという楽な服装に着替えて椅子に座る。本日は日曜日である。外に遊びに行くという選択もあるだろう。

「………」

無言で読んでいるのは教科書。今はテスト週間だ。学生らしく勉強にでも励んでみようと思ったのだ。最近はいろいろとバタバタして集中できていない。その補完だけはしたかった。残り一時間で完了予定だ。

「ぐっ……」

だが集中力をやたらと削ぐものがある。机の上で携帯が揺れる。

勉強のために着信音をオフにして、バイブで知らせるようにしている。溜息をついて携帯を開いた。メールを知らせる表示。

「なに……昼から買い物？」

メールを送ってきたのはフリージアだ。当然、アドレスを教えた事はない。買い物くらい付き合ってもいいのだが、今日は勉強をしたい。あまり順位を落とすとせっかくの優等生の特権を失ってしまう。部活で活躍していない真冬は順位を維持するしかないのだ。携帯を触ったついでに冬月高校のホームページにアクセス。

「織部……と……」

自らの名字を打ち込む。ついでにパスワードの欄に0422と打ち込む。ついでにパスワードは春の誕生日である4月22日を使っている。改めてシスコンだと思っ真冬だった。ほとんどの学生が自らの誕生日を使っている事が多い。

テスト順位300人中、3位。運動成績は5位。授業態度、優。部活動成果、不可。結果、優等生権限あり。次回テスト5位以内で権限を継続可能。

真冬は頭を掻いた。やはり部活で頑張っていない分は、テストの順位を維持する必要があるらしい。親がお金を残してくれたが、優等生権限である学費8割カット、大学推薦枠優先確保は捨てがたい。

時計を見た、今は11時だ。昼間まで一時間しかない。ギリギリだ。「今日は止めておくか」

真冬は携帯を操作して、断りのメールを送る。さて、勉強再開。教科書を開いて文字を読む。再度、携帯が鳴った。送ってからまだ一分も経っていない。どれだけ文字を打つのが早いんだと、内心で真冬はつぶやいた。文明の利器がここまで邪魔だと思った事はない。溜息について携帯を開いてメッセージを読んだ。

「……ならそちらに行く」

内容をつぶやいて真冬はがっくりとうな垂れた。

*

真冬の部屋でベッドに横たわっているのはフリージア。白いセーターにロングスカートという私服姿だ。フリージアは退屈そうに天井を見ている。時折、視線がこちらに向く。

真冬は教科書を読んでた。出来る限りは見ないようにしている。自らの部屋に女性がいるだけで落ち着かない。しかも自らのベッドで横になっているのだから意識するなというのが無理である。

「……暇」

フリージアは今まで抱きしめていた真冬の枕を投擲。真冬は教科

書を見ながら左手を上げて見事にキャッチ。運動成績5位は伊達ではない。そのまま流れる動作で投げ返す。フリージアはそれを受け取って頬を膨らませた。

「うー、つまんない」

フリージアが呻く。呻くフリージアに教科書を投げつける。歴史の教科書だ。

「私に勉強しろと?」

フリージアが教科書を開く。その間に真冬は教科書を高速で読んでいく。もう少しだ。あと20分で完了予定。そのまま読んでいて下さい。

「……いいですか?」

襖の外から雫の声がした。

「はい」

フリージアが返事をした。俺の部屋なのだが、と真冬は内心でつぶやく。襖を開けて雫が部屋に入る。盆にはホットコーヒーが二つ載せられていた。

「気が利くわね」

フリージアが教科書を置いてコーヒーを手取る。

「ブラックでいいですか?」

雫がフリージアに問うた。

「なんでもいけるわ」

フリージアはコーヒーに口をつけた。二人が話している間も教科書をめくっていく。手は止めない。いつ外に連れ出されるか分からないのだから。

「雫はテストの順位はどうなの?」

フリージアは思いついたようにつぶやいた。

「確か……2位だったと思います」

雫が遠い目をした。過去の記憶を遡っているらしい。

「あれ……? この高校のホームページは結構しっかりしてるからすぐに分かるはずだけど」

フリージアが携帯を取り出した。ホームページにアクセス。雫が物珍しそうに画面を覗き込む。気づくと雫の顔が触れそうである。

「ちよっと……自分ので見なさいよ」

フリージアが離れようとする。

「私は持っていますので」

雫がはにかんだ。

「え……？」

フリージアが固まった。真冬も同時に固まる。なぜ手紙を渡してきたか今になって理解した。古風な連絡手段を使うと思ったら、直接言つか手紙を渡すしか方法がなかったらしい。

重大事実はとりあえず頭の隅において勉強を再開。

「仕方ないわね。雨月と……パスワードは」

フリージアが携帯を操作。

「1229です」

雫がつぶやいた。

「自分の誕生日か……単純ね。分かりやすいけど」

フリージアが携帯に入力していく。雫が驚いた顔をした。なぜ知っているのかという顔をしている。

「ふふ……ライバルの誕生日くらいは知らないかねー。その日は真冬を連れ出してあげるわ」

フリージアは楽しそうにつぶやいた。そんなやり取りをしているうちに結果が出た。

「テスト順位300人中、2位。運動成績は3位。授業態度、優。部活動成果、不可。課外活動報酬、有り。結果、優等生権限あり。次回テスト10位以内で権限を継続可能」

フリージアが文字を順番に読んでいく。

「なんだ？ 課外活動報酬って」

真冬は耳慣れない単語を耳にしたような反応だ。その報酬があるだけでだいぶ優遇されている気がする。5位までを維持するか10位までを維持するかではだいぶ違うだろう。

「それなら私もあるわよ。真冬も申請したらどう？ 護士なんだし」
フリージアが述べた護士という言葉がやけに引かかる。

「え……？ 護士？」

真冬は疑問の声を上げた。

「ここまで最先端を進もうとしている高校が護士の事を全く知らないわけがないでしょう？ エクソシストなら教会に名前を申請登録して証明をもらえば、この高校では課外活動と認められるわ。皆が寝ている時に戦っているんだから、これくらい優遇されないかね」

フリージアがやんわりと説明。真冬は教科書を落とした。世間一般には知られていない巫女やエクソシスト。だが、この世の中のかくみには溶け込んでいるらしい。真冬は急いで生徒手帳を開いた。

「……教会または神社で特別に認められた活動に従事する者は課外活動の報酬を与える……」

これを始めて読んだ時はやけに浮いた内容だと思った。全くもって意味不明。活動内容が細かく記載されていない。

「護士の申請はどこで……？」

フリージアに問うた。フリージアがゆっくりと指を動かす。その指が示すのは雫だ。

「神社です」

雫がやんわりと笑った。それは知っていて当然だ。

*

真冬はテストが始まる前に申請を済ませるために書類一式を記入。剎から承認の印鑑をもらった。明日でもいいのだが申請が遅れると厄介なので高校に足を運ぶ。書類を緊張した面持ちで高校の職員室へ。部活動をしている部もあるので、どこかの顧問だろう。真冬はこの教師を知らなかった。

「ああ、課外活動か。俺も内容は詳しく知らんが。それを見たら疑わずに印鑑を押す事になっている。雨月神社の印鑑もあるから問題

はないな」

押されたのは承認の印鑑。次に教師はパソコンになにやら打ち込んでいる。真冬は気になったが一度、頭を下げて職員室を出た。さっそく携帯でホームページにアクセス。

「課外活動報酬有り……信じられん。どうなってるんだ、この高校」真冬は携帯を見て唸った。この更新の早さも異常だ。

「まあ、巫女とエクソシストは貴重だからね。裏では教会やら神社の圧力があるのかもね」

職員室の前で待っていたフリージアが口を開いた。

「誰でもなれるのではないのか？」

途中参加の真冬は特別な過程を通り過ぎた覚えはない。それにフアンタジー小説のように炎を出したり、雷を落としたりなんてできない。だが護士である。雫が祈った武器を持てば誰でも護士になれると思っていた。

「……そうでもないわ。まずは……場所を移ろうか」

フリージアが周りを見渡す。二人が現在いるのは高校。休日ではあるが人はまばらにいる。二人はとりあえず近くにある森まで足を運んだ。

*

森に入り二人は向き合う。フリージアは一つ深呼吸をして瞳を閉じた。

「我は望む……神聖なる護りを！」

フリージアが巫女の言葉を紡ぐ。障壁を展開する言葉だ。障壁は展開できたが、すぐに形が崩れて消滅した。フリージアはゆっくりと瞳を開けて、視線を真冬に送る。真冬はゆっくりと口を開けた。

「……我は望む……神聖なる護りを！」

真冬の言葉に反応して障壁が展開。驚いて見ていたらフリージアが指で軽くつつく。それだけで簡単に割れた。

「……実戦では使えないな」

真冬は苦笑いを浮かべた。

「……分かったでしょう？ 人には出来ない事と、出来る事がある。適性があるのよ」

フリージアがつぶやいた。

「なら……護士の適性は？」

自分にそんな物があるのだろうか。

「護士は巫女の力をどれだけ引き出せるか……真冬はあの刀を持つと力が引き出せるでしょう？」

フリージアが問うた。確かにあの刀を持っている時は体が軽い。

「それは私には無理。誰でもなれる訳ではないの」

フリージアが溜息をついた。

「そういえばエクソシストにならないかと聞いたよな？」

真冬が思い出した。

「試してみたら」

フリージアが不適に笑う。

「それなら……我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

真冬は言葉を紡ぐ。閃光。慌てて瞳を閉じた。だが瞳を閉じていても分かる。確かに何かを握っている。

「やっぱり適性があった。カインと同じね」

フリージアがつぶやいた。真冬はゆっくりと瞳を開けた。手に握られているのは光輝く剣。

「……まさか出せるなんてな」

真冬が剣を一度振った。よく手に馴染む。

「エクソシストには二つタイプが分かれるわ。一つは近接武器を扱う者、もう一つは遠距離またはサポートに特化した武器を扱う者」

フリージアが説明。カインの大剣は明らかに近接戦闘向き。フリージアのナイフは後者だろう。

「うーん。護士でもありエクソシストでもあるのか？」

真冬は剣を振り回す。不思議なくらいに馴染む。

「真冬は巫女よりだけど……まだ完全に巫女よりではないから」

フリージアが真冬を見てつぶやいた。どこか憂いを帯びたような表情をしている。

「どちらかに偏ると使えなくなるのか？」

真冬が剣を見つめる。

「完全に使えなくなる事はないわ。私も障壁が張れたでしょう？でも、あの程度しか張れなくなる。以前は、雫並みには展開できたんだけどね」

フリージアが溜息をついた。

「なるほど。信仰が弱くなると力を貸してくれない訳だな」

真冬が神と信じるものが力を貸してくれる訳だ。非科学的だとは思う。だが今の科学で雫が張る障壁を出すのは不可能だろう。将来的には可能かもしれない。だが発生原理は明らかに違う。

「まあそうね。信じてくれる、か弱い子羊に力を貸してくれるのよ」

フリージアは笑った。その言葉に納得できてしまうのは自らがその渦中にいるからだ。今、目の前にある事を信じられない訳がない。

「さて……真冬はどちらを選ぶ！」

フリージアが真冬の手を取った。真冬は一度瞳を閉じた。

「あ……」

フリージアが言葉を発した。真冬は剣を消したのだ。それだけで分かった。真冬がどちらを選ぶのか。

「俺は……雫の護士だから」

真冬は微笑む。フリージアは再度、顔を落とした。握った拳は震えていた。

「分かってる……」

フリージアは弱々しくつぶやいた。

「……ごめん」

真冬は弱々しく微笑んだ。

フリージアは少しだけ期待した。もしかしたらエクソシストを選んでくれるかもしれない。そうでなくても落ち込んでいる自分に優し

くしてくれるかもしれない。だがどちらも叶わなかった。真冬の心もあの忌々しい輪廻に鎖が縛っているのだろうか。どれだけ転生しても選ぶのは雫。

「それなら…………断ち切ってあげるわ」

フリージアはぼつりとつぶやいた。

「フリージア？」

真冬がいぶかしむ。

「覚悟しなさい！」

フリージアが真冬を指差した。

「あ…………ああ」

真冬は意味がよく分からなかったが、一つ頷いた。

*

石の階段を修道着姿のカインが登る。昨日の晩一瞬だけ寒気がした。場所はここ雨月神社の近辺からだ。

「……………」

カインは階段を息を切らすことなく上がっていく。上りきった所で待っていたのは巫女服を着た雫だった。

「あなたも感じましたか？」

雫がカインに問うた。カインは一度頷いた。

「一瞬だけ寒気を感じた。どうやら巫女に喧嘩を売りたいらしいな」

カインが雫の前まで歩いて歩を止めた。空を見上げる。ちょうど昼時の時間。まだ夜には早い。

「…………もしそうなら被うまでです」

雫も空を見上げた。

「お前の護士は？」

カインが周りを見渡す。だがどこにも気配は感じない。

「…………出かけてます」

雫がそっぽを向いて頬を膨らませた。

「そうか……ならば待たせてもらおう」

カインはつぶやいて神社に向けて歩いていった。真冬を待つのか、穢れを待つのか、雫にはどちらを待つのかは分からなかった。

*

階段を上るのは真冬とフリージア。穢れの事も気になるので、あれからどこかに寄る事もなく二人は神社に戻った。

「ランチくらいは一緒にしたかったな」

フリージアが真冬の背につぶやく。

「戻れば食べ物くらいはあるだろう」

真冬は前を向いたままつぶやく。調理が必要なら台所を借りれば済む。

「まあ穢れが現れるかもしれないのなら仕方ないわね」

フリージアは前を見てつぶやいた。口調はいつも通りだが、どこか冷たい声だった。

真冬は意外だった。もう少し文句を言ってくると思ったのだ。そういえばカインは、フリージアは手加減しないと saying いた。それは戦いに巻き込まれた途中参加のエクソリストだからだろうか。真冬は踏み込む事は止めた。こういう事は本人が言うまで黙っていた方がいいだろう。それにこれはただの真冬の勝手な想像。その通りではないのだろう。

二人は階段を上りきった。自らに与えられた部屋を目指すのは今でも緊張する。まだ自らの居場所だという感覚がないのだ。真冬の部屋は神社の左側に位置する。刹や雫の部屋は右側。中央は食事のためのスペースだ。

真正面にある寶銭箱を迂回して戸を開ける。ここが玄関。

「うん？」

なにやら靴が多い。それにこの靴は見た事がある。漆黒のブーツだった。

「あれ、カインが来てるんだ」

フリージアがブーツを見てつぶやいた。

「……まさか」

真冬は玄関を上がり、左側へ。そして、自らの部屋の襖を開けた。そこにいたのは部屋の中央にあぐらで座り、腕を組みながら瞑想をするカインだった。部屋の明かりはつけられておらずかなりの威圧感がある。

「来たか」

カインが瞳を開けて低い声でつぶやいた。人の部屋で何をしているんだ、この人は。

「何か用？」

真冬はとりあえず言葉をかけた。その言葉を待っていたといわんばかりに立ち上がる。

「手合わせ願おう。来るべき穢れとの戦いの前に」

カインが真冬の手を掴む。

「いや……あと数十分勉強をさせて……ほしい」

真冬はつぶやいた。だが無駄だった。真冬は外まで強制連行された。

「やれやれ」

フリージアは溜息をついて連れていかれる真冬を追いかけた。

*

カインと真冬が木刀を持って向き合う。こうして剣を交える事は始めてだろう。

「遠慮なくいかせてもらおう」

カインが一気に距離を詰めて木刀を振り下ろす。高速の一撃。真冬は咄嗟に木刀で防いだが、腕が吹き飛ぶような錯覚を感じた。

「ぐっ……」

真冬は激しい腕の痛みを堪えて半歩下がる。カインはさらに距離

を詰めた。威力が高く、それでいて速い。こちらに一息つかせてはくれない。守らず圧倒的な攻撃力でねじふせるのがエクソシストの戦い方。能力を使用していなくてもそれは同じなのだろう。

ならばこちらは護士の戦い方をするのみ。

「ほう……」

カインが感嘆の声を上げた。真冬は振り下ろされる木刀を綺麗に受け流してゆく。無理に反撃に移る事はしない。カインが隙を見せるのをじっと待っている。

「ならば……これは受け流せるか！」

カインは木刀を両手で握り、一撃に全ての力を込める。一閃。木刀ではあるが真剣すら破壊できそうな剛剣。だがまるで手応えがなかった。その瞬間にカインは負けを確信した。

「……………」

カインの一撃を回避した真冬は無言で木刀を首筋に当てる。

「……あれからだいぶ腕を上げたな」

カインは真冬に対して微笑む。

「ああ。刹さんに鍛えられたし、フリージアにも世話になった」

真冬が木刀を下げる。

「ほとんどは刹という元護士が鍛えたのでしょうかね」

フリージアが試合の結果を見て微笑む。

「……それと……もう失敗できないからな」

真冬は一度顔を落とした。春の笑顔が一瞬だけ脳裏に浮かんで消えた。

「……そうだな」

カインも一度だけ顔を落とした。

「辛気臭いわね。笑顔でないと天国にいる子は休めないよ」

フリージアが空を指差した。真冬は空を見上げる。それから首を振った。こんな顔をしていては駄目だ。

「皆さん、お昼用意出来ましたよ」

巫女服の上に割烹着を着た雫が玄関を開けてつぶやいた。三人は

顔を見合わせてとりあえず中に入った。

*

お昼を済ませてから雫は自室にいた。真冬の刀に祈りを込めているのだ。今日の夜に戦いがある。そのために準備だけはしておきたい。すでに一時間は経っている。

「……とりあえずはこれで……」

雫はつぶやいて瞳を開けた。額にはうつすらと汗が浮かんでいる。根を詰めすぎて実戦で障壁が張れなければ意味がない。机の上にある時計を見るとまだ15時だ。

「あまり現実から離れてもいけませんね」

雫はつぶやいて刀を壁に立てかける。机の側にあるイスを引いて座る。すぐに机の上に整理整頓された教科書に手を伸ばした。

「そういえば……一位は誰なのでしょう？」

教科書をめくりながら雫はぼつりとつぶやいた。1位になりたい訳ではない。ただ一つ上がどんな人物なのかは気になる。

「まあいずれ分かりますよね」

雫はつぶやいて教科書を読む事に没頭した。

*

真冬は椅子に腰掛けて教科書をめくる。左側にはベッドに寝転がり歴史の教科書を読むフリージア。後ろには無言で穢れが出るまで瞑想をするつもりのカイン。フェレアスの人間は遠慮という言葉を知らないのだろうか。

すでに補完は終了した。ならばなぜ教科書を見ているのかと言えば、2位がどうやら雫らしいからだ。身近に2位がいると知り、久しぶりに燃えてきたのである。目標があれば自然とやる気が出るものだ。「終わった」

隣でフリージアが教科書を閉じた。最初はフェレアスと常月の国の歴史解釈の違いに苦戦していたが、全てが違う訳ではない。飛び級少女は、ものの二時間で今回のテスト範囲の5倍はある内容の頭に入れたらしい。フリージアがのそりと体を起こして立ち上がる。ゆっくりと真冬の背に回り抱きしめる。柔らかい胸の感触が真冬を襲う。

「真冬」

フリージアが耳元で囁く。教科書を読もうとしても全く集中できなかった。

「カイン……こいつを連れ出してくれ」

真冬が後ろで瞑想をしているカインに向けてつぶやく。

「よかるう……ちょうど対戦相手が欲しかった所だ」

カインが立ち上がり肩を回す。

「ちよっ……待って……」

フリージアがカインに向けて苦笑いを浮かべる。カインは獲物を見つけたような鋭い目で訓練相手を見た。大きな手がフリージアの首根っこを掴んだ。真冬を抱きしめている腕に力を込める。だがすぐに持ち上げられてしまった。

「真冬の馬鹿……」

フリージアは空中でジタバタと手足を動かして抵抗を示すが、カインによってそのまま強制連行された。

「今のうちに……」。まあ、テストが終わったら付き合わないとな」

真冬は一度後ろを振り返った。

*

時刻は午後5時を過ぎた頃。神社の外に出るともはや真っ暗である。真冬は袴に着替えて外に出た。

「これを……」

先に外に出ていた雫が真冬に刀を渡した。新しく祈りを込めた刀。護士が唯一信じる事ができる武器。巫女と護士をつなぐ絆。

「ありがとう」

真冬は雫に微笑んだ。

「さて……本当に現れるのか」

カインが実戦形式の鍛錬を止めてつぶやく。

「……出なくていいわよ。もう疲れた」

フリージアが溜息をついた。

あれから二人は休憩を挟みながら鍛錬を続けていた。カインは平然とした顔をしているが、フリージアには疲労の色が見える。だが実戦が出来ないレベルではないらしい。その体力には少なからず感服する。

「まずは集まってください」

雫が指示を出す。四人が密集をする。右向きに真冬と雫。背を向けるように左向きにカインとフリージアが立つ。四人は緊張した顔で敵を待つ。

「……どうやら狙いは完全に俺達みたいだな」

真冬がつぶやいた。四人が集まった瞬間に黒い霧が溢れた。次第に濃くなっていく。体を感じるのはいつもの寒気。四人纏めてここで消すつもりらしい。

「我は望む……神聖なる温かさを」

雫が言葉を紡いだ。四人の体温を上げていく。

「今回は障壁に頼るな」

カインが瞳を閉じて集中。障壁まで力を回してしまえば雫の消耗が激しいためだ。

「我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

カインとフリージアがそれぞれ武器を形成。

「いえ……必要なら合図を下さい」

雫が前方を睨んでつぶやいた。

雫が見ているのは黒い霧。その霧が少しずつ形を成してゆく。

「霧の穢れ？」

真冬は見たままをつぶやいた。フリージアの鋭い視線を背中に感じた。霧の穢れを見ている。

「……こいつらはよくフェレアスで見かけるわ。霧で出来た穢れ。実体がないからゴーストと呼んでる。そして……」

フリージアが霧の穢れを睨んだ。霧の穢れ。突如、フラッシュバックのように幾つかの光景が浮かぶ。霧が発する音が地面を腐らせ、命を散らす光景。家族が壊死していく光景。フリージアは瞳に涙を浮かべて握ったナイフを強く握む。

「私の居場所を奪った……穢れよ！」

フリージアがナイフを投擲。だが穢れは霧を拡散させて回避。余裕で回避した霧の穢れは再度、霧を密集させた。

「――」

霧から耳慣れない音がした。意味がある言葉のようだが、真冬には理解できなかった。

「皆、散開しろ！ 危険だ」

カインが指示。皆は四方に飛んだ。今まで足をつけていた地面が黒く変色。生えていた草が一瞬でその命を散らした。

「……命を散らす怨念？ いや、呪いか？ 本当にゴーストだな」

真冬は額の汗を拭った。まさかこんな穢れがいるとは。

「フリージア！」

カインが叫び地面を疾走。

「分かってる！」

フリージアがナイフを投擲。霧の穢れは拡散して回避。

「消え去れ！」

カインが散らばった霧を大剣で切り裂いた。霧の一部が光となって消える。だが残った霧は別の霧を集めて再度、形成。

「――」

霧が再度音を発生させる。突如、異変が起きた。

「ぐああー！ー！」

カインが突如叫び声を上げた。大剣に霧が触れた部分が黒く変色している。大剣を通じてカインに何かしらの悪影響があるらしい。「なに……こいつ。こんなゴーストがいるの？」

フリージアは震えながらつぶやいた。今までのゴーストは霧を地道に浄化すればよかった。この空間にある一定以上の霧を浄化すれば形を形成できずに自然消滅する。カインの一撃は確かに霧を浄化した。だがカインが叫ぶほどの反動があるのなら迂闊に攻撃ができない。

フリージアは自然と体が震えた。故郷を壊滅させた穢れよりも力がある穢れ。それをたったの四人で倒さなければいけない。

「ぐ……この程度」

カインが平静を保って大剣を構える。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。カインを包むように障壁が展開。

「――」

霧が音を発生。動きが鈍ったカインを狙う。だが障壁が音の浸食を止めた。

「離れる！」

真冬が刀を構えてカインの前に立つ。

「すまん」

カインが一度後方に飛んだ。真冬は深呼吸をした。攻撃をすればこちらにも被害がある。攻撃を迷えば倒せない。真冬は動けずいた。

「一つ試すわ……真冬、霧を切断して！」

フリージアが平静を取り戻して指示。真冬は迷わず霧に突撃した。刀を上から下に振り下ろす。霧は拡散して回避。やはり初撃を当てる事は不可能らしい。

「消え去れ！」

フリージアがナイフを投擲。霧をナイフが浄化していく。

「やっぱりね」

フリージアが不適に笑う。どうやら手に持っていないければ反動は受けないらしい。

「方法が分かれば……単純だ」

カインが大剣を構える。それを霧に向けて投擲。高速で回転して霧に迫る。霧の穢れはすぐに拡散したが2メートル級の大剣を避けきれぬ事はできなかったらしい。霧が浄化されていく。

「畳み掛けるわ!」

フリージアがナイフを投擲。この敵を倒すにはこの武器が一番有効だ。このまま投げ続けて霧を完全に消してしまえばいい。

「――」

霧が音を発した。刹那、霧が実体を形成。刺さったナイフの傷口からは黒い霧が溢れた。ナイフが黒く変色していく。

「ぐっ……どうして」

フリージアは強烈な吐き気と、全身に痛みが走った。武器は手に持っていないというのに。

フリージアは敵を睨む。霧が集まって出来たのは一体の黒い怪鳥。赤い瞳でフリージアを睨む。武器を手にとっていないだけでは反動は避けられないらしい。実体を持っている時は武器を通じて攻撃できるらしい。この穢れは自分達が知っているゴーストと呼ばれる穢れではない。進化をしたのか、似た特性をもった別の穢れなのか。

「フリージア!」

真冬はフリージアに駆け寄る。フリージアは痛みで動けない。

「――」

怪鳥が口を開き、音を発する。真冬はフリージアを左手で抱えて飛んだ。フリージアは残った力で真冬にしがみついた。

「雫、着地と同時に」

真冬は飛びながら雫に指示。

「我は望む……神聖なる護りを!」

「――」

雫の言葉と、怪鳥の音は同時。着地した真冬を障壁が守る。

「ありがとう」

フリージアは顔を赤らめてつぶやいた。目の前には怪鳥を鋭く睨む真冬の顔がある。

「ああ」

真冬はフリージアを降ろす。それからチラリと雫を見た。額の汗を拭っている。あまり無理はさせられないだろう。

「実体があるというのであれば！」

カインが大剣を構え、疾走。

「それしか方法がないのかしらね」

フリージアがナイフを形成。カインがたどり着く前に投擲。怪鳥は避ける事はしなかった。ナイフが黒く変色していく。フリージアは吐き気と痛みを堪え、霞む視界でカインの背中を見た。

「消え去れ！」

カインの剛剣が怪鳥に振り下ろされる。怪鳥が体を再度、霧に変えていく。だが全てを霧に変える事は不可能だった。

大剣が怪鳥を切断していく。だが途中で止まった。大剣は黒く変色し、刃は腐食したようにボロボロになっていた。

「ぐ……」

カインの表情が歪む。ボロボロになっていくのは大剣だけではない。その所持者の体も確実にダメージがある。

「一度、離れろ！」

真冬がカインの背中に叫ぶ。カインは大剣を離して、ふらついた足取りで後方に飛んだ。入れ替わるように真冬が疾走。

「雫、刀に障壁を！」

真冬はカインと入れ替わるように怪鳥に向かって疾走を続ける。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。真冬の刀を障壁が包む。白銀に輝く刀がさらに光を増していく。怪鳥は慌てて全身を霧にしてい

く。「こいつは効くらしいな」

真冬は怪鳥が慌てているのを見抜いた。一閃。霧の8割を眩しい

光が切り裂く。切断した刀は障壁に守られて変色することはなかった。真冬には害はない。変わりに障壁が消滅する。

残りは2割。障壁を使用しなくても強引に消す事は可能だろう。残った霧は即座に集まり真冬に向かって突撃。即座に真冬を包囲した。機転が利く真冬を危険だと判断したらしい。

「我は望む……神聖なる神の使いを！」

雫が耳慣れない言葉を紡いだ。突如、式神が真冬の周囲を守るように飛ぶ。向かってくる霧を障壁を張って消滅させてゆく。

「う……」

雫が膝をついた。力が入らない。限界だ。だが、式神には力を送っていく。

「残り……2割」

カインが大剣を構えて疾走。フリーズアも一つ深呼吸をしてナイフを構えた。

真冬は四方から向かってくる霧に刀を向ける。左から向かってくる霧を式神が障壁を張って防ぐ、次は後方。右と前方からも同時に向かってくる。真冬は振り向いて刀で霧を切り裂いた。

「ぐあ！」

真冬の全身に痛みが走った。刀が黒く変色している。膝をついた所で霧が真冬を包んだ。式神が真冬に張り付いて障壁を展開する。

「まだ……倒れるわけには……いきません」

式神に力を送り続ける。だがまるで力が入らない。それと同時に式神も力を失って地面に落ちる。それと同時に雫は力を失って倒れた。

「これでは」

カインが大剣を構えて躊躇した。霧を斬る事はつまり真冬を斬る事だ。

「……………迷ってる暇はないわね」

フリーズアが白いセーターを脱いで、左手で掴む。右手にはナイフを形成。真冬は向かってくるフリーズアを霞む視界で見た。

「真冬だけは守るんだから！」

セーターで霧を吹き飛ばし、真冬に触れる。袴は黒く変色しており、真冬自身の表情は蒼白だった。フリージアの腕に痛みが走る。霧がフリージアに触れたのだ。だが痛みを無視して真冬を自らが作った道に放り投げる。

「さて……来なさい」

フリージアはナイフを構えて周囲の霧を睨んだ。次の狙いはフリージアだ。霧が迫るよりも速くフリージアはナイフを投擲。霧を切り裂いてゆく。だが周囲の霧は徐々にフリージアに迫る。

「まだまだ！」

フリージアはナイフを両手に持って霧を切り裂いた。黒く変色したのを見てすぐにナイフを捨てる。すかさず新たなナイフを形成。雫が倒れた事で凍死しそうな寒さを感じる。動きが鈍る体を叱咤して迫る霧を凌いでゆく。

霧は不利を感じて上空に向けて移動。

「離れるのを待っていたぞ」

カインが大剣を構えて投擲。高速で回転して霧を切り裂く。残り1割。真冬はふらつきながら立ち上がる。刀を構えて霧を睨んだ。霧は真冬から逃げるように移動。

「これで……最後だ！」

真冬は地面を疾走。跳躍して霧に接近。

「消えろ！」

真冬が刀を振り下ろす。これで終わる三人は安堵の息をつこうと思つた時だった。いつもなら眩しい浄化の閃光が溢れる。だが今回は違った。

「え……？」

フリージアは上空を見上げてつぶやいた。真冬が止めの一撃を当てた瞬間に多量の霧が溢れたのだ。その霧は着地した真冬を今も包んでいる。この空間特有の寒気はもうない。撃破には成功している。「なんだ……ぐっ……ゴホっ……ゴホっ……」

真冬は口を押さえる。全身に痛みが走る。咳が止まらない。

「真冬！」

フリージアが真冬を抱きしめる。

「止める……ゴホっ……そんな事をしたら！」

真冬は咳き込みながらフリージアを離そうとする。だがフリージアは離さない。霧がフリージアを襲う。

「真冬はやらせない……そして……私も生き残る……変えてやるんだから！」

フリージアが霧を睨む。こんな奴らに負けてたまるか。霧は役目を終えたように消えた。一度、閃光がこの場を満たした。

「ゴホっ……ゴホっ……」

フリージアが咳き込む。

「大丈夫か！」

真冬がフリージアの背中を撫でる。

「だ……大丈夫よ。ゴホっ……私を……」

フリージアは途中で口を塞いだ。

「早く病院に」

真冬がフリージアを抱き上げる。

「病院に行っても無駄だ」

カインが首を振る。おそらくそういう類ではない。系統としては呪いみたいなものだろう。自らを倒した者に行う最後の復讐。

「……そんな」

真冬が顔を落とした。それならば真冬が受けるべきだ。止めを刺したのは真冬なのだから。真冬は春が命を懸けて自らを守った瞬間が脳裏に浮かんだ。守る、断ち切る、そう言い続けた結果がこれだ。結局、守られている。

「大丈夫よ。この程度……ちょっと寒いけど」

フリージアは蒼白な表情で真冬を見つめた。どうやら咳は収まったらしい。真冬の胸にしがみついたフリージアの肩は震えていた。助けるためにセーターを脱いで、今は薄手のハイネックTシャツだ

けだ。さすがに寒いのだろう。それに加えて体調もよくはない。

「今日はここで休んでくれ」

真冬はつぶやいて自室まで運んでゆく。フリージアは一つ頷いた。

*

エクソシストの少女は護士が好きだった。対立を続ける巫女とエクソシストの中では異端だった。だが巻き込まれて参加した少女には、その対立が馬鹿らしかった。

「神は弱き者を救う存在。その役目をこの世界で行うのがエクソシスト……そのエクソシストが必死で皆を守ろうとする者に刃を向けるなんて……馬鹿らしいわ」

少女はいつも同じ事をつぶやいていた。刃を向けるのは穢れだけで十分だ。

「いつも言ってるな。でも、俺も賛成だ」

護士はエクソシストである自分の言葉を真剣に聞いてくれた。賛成もしてくれる。それが少女には嬉しかった。自らを理解してくれる存在が身近にいる事が。好意を抱くのにそんなに時間はかからなかった。

だがこの護士には想い人がいる。彼の巫女だ。どれだけ迫ろうとも彼は振り向いてはくれなかった。でも、この想いは止められなかった。

だから身を犠牲にして護士を守る事も厭わなかった。周りから奇怪の目で見られようと。自らが死ぬ事になろうとも。

*

フリージアはゆっくりと瞳を開けた。辺りに視線を向ける。見慣れた感じがしない。

「……そうか。真冬の部屋だったわね」

つぶやいてからふと視線を右に向けると真冬は椅子に座って寝ていた。次に時計を見ると時刻は4時。ずっと起きていてほしいものだが、さすがにこの時間は無理だろう。だが今日は起きていなくて良かったとも思う。フリージアの頬には涙が伝っていたから。

「あれは……私だ。環境が変わっても……前世であろうとやることは一緒なのね」

フリージアは微笑んだ。そして、振り向いてくれないのも一緒。

「でも……大丈夫。私はまだ……生きている」

自らに語りかけるようにつぶやいていく。

「まだ……生きているんだから」

ゆっくりと瞳を閉じた。生きているなら変えられる。運命も想いも。残りの寿命でやり遂げたい。あとどれだけ生きられるかは分からない。

フリージアは瞳を開けて真冬を見つめた。無防備な寝顔だった。あまりにも無防備なので少しだけ悪戯心が湧いた。ベッドから体を起こして真冬に近寄る。だが真冬は眠ったままだ。

「変えて見せるわ……」

真冬の肩を優しく掴む。ゆっくりと顔を寄せていく。

「あなたの運命を……」

フリージアは眠る真冬に口づけをした。

*

雫は徹夜で本を読んでいた。穢れについて記載された本だ。刹が交戦した穢れの記録が全て記されている。

「解決方法まで記載されている例があまりにも少ないですね」

雫が本をめくりながらつぶやいた。その時にふと手を止めた。

「……巫女の浄化術式？」

雫が注視して内容を確認していく。

「我は望む……神聖なる癒しを」

雫は本に記載されている言葉を紡ぐ。言葉を言うだけは簡単だ。戦闘中に楽にしようできるように短くしているのだ。問題は使用できるのかどうか、適性があるかどうかだ。突如、雫を淡い青色の光が包んだ。発動は成功。

「弱すぎる……」

雫は顔を落としてつぶやいた。とても抜いきることはできないだろう。だがこれで害を遅らせる事はできそうだ。雫は立ち上がって真冬の部屋に向かった。

ゆつくりとした足取りで通路を進んでいく。あまり音を立てると刹を起こしてしまう。

「真冬に用事？」

前から歩いてきたのはフリージアだった。

「いえ……あなたに」

雫がフリージアの右手を両手で握った。

「なに？」

フリージアは無表情で雫を見つめた。もし謝りでもするなら平手打ちを浴びせるつもりだ。

「巫女の浄化術式を試したい」

雫はフリージアを見つめた。真剣な瞳だった。

「私を治してどうするの？ 邪魔になるよ」

フリージアはなぜこんな言葉が出たのか自分でも分からなかった。

「邪魔になんてなりません」

雫が強く手を握る。痛いくらいに握っている。だがその痛みは不快ではなかった。雫の想いが伝わってくる。とても真っ直ぐで温かい気持ち。

「ごめん……忘れて……ただの嫉妬よ」

フリージアは雫に微笑んだ。

「……我は望む……神聖なる癒しを」

雫が言葉を紡ぐ。青い光がフリージアを包んだ。

「……少しは楽になったかな」

フリージアは儚く笑った。やはり完治はできないらしい。雫は顔を落とした。

「もっと力があれば……いいのですが」

「いいよ。私は自分で運命を変えるつもりだから」

フリージアは雫の手を優しく解いてから横を通り過ぎる。その後姿を雫は見つめた。

「ゆっくりしてると雫の護士をもらっよ」

フリージアが一度振り向いて微笑んだ。その微笑には敵意はなかった。

「あげませんよ。私の大切な人ですから」
雫も一度微笑んだ。

輪廻の鎖 5

輪廻の鎖

— 5 —

護士の少年はいつも守られていた。自らの妹に命を救われ、エクソシストの少女に自らが受けるべき呪いを引き受けてもらった。どちらも望んだ事ではない。出来れば自分が受けたかった。守ると言った相手に守られ、のうのうと生きている自分が許せなかった。深い絶望が護士の少年を襲った。一週間は何も食べられなかった。だが無理をしてでも食べた。こんな所で落ち込んでいる暇はないのだから。自分は平気だと見えるように微笑む。時ある事に妹の面影を感じては心を沈めながら少年は歩いた。

それでも守れなかった。また一人大切な人を失った。呪いのせいで動けなかったエクソシストの少女を守れなかった。また見ている事しかできなかった。

*

真冬はうつすらと瞳を開けた。椅子で寝てしまったためだろう体のあちこちが痛い。

「前世の記憶か……さすがに俺に似てるんだな。口先ばかり」

真冬は壊れた人形のように笑った。表情に張り付いているのは自嘲の笑み。真冬を知っている人間が見たら壊れていると思うだろう。実質、どこか欠落しているような気がする。それでも平気な顔をして生きていかなければいけない。止まっている訳にはいかない。こんな運命は変えなければいけないのだから。自らが死ぬ事になっても。それで運命を変えられるなら十分だった。一つ深呼吸をして辺

りを見渡す。平静を取り戻した真冬は日常に戻る事ができた。

「一度、起きたのか？」

真冬には毛布がかけられていた。おそらく一度フリージアが起きたのだらう。時計を見ると今は5時だ。ずっと起きているつもりが寝てしまった。ベッドを見るとフリージアが微かな寝息を立てている。その様子が安堵の息を吐いた。真冬は代えの袴に素早く着替える。もうすぐ鍛錬の時間だ。

「強くないとな。絶対に死なせないから」

真冬はフリージアを見てつぶやいた。表情を引きしめて真冬は外に飛び出した。俺はあの少年とは違う。

「俺は……織部真冬だ。あの少年ではない」

真冬は拳を握る。口先だけではない。守って証明してみせる。そう心に誓った。

*

外に出るとすでに刹は待っていた。

「行くぞ」

刹が木刀を構える。

「いつもよりも厳しくお願いします」

真冬が木刀を構えてつぶやいた。刹は一度瞳を閉じて思考。一つ頷いてから瞳を開けた。

その姿を横目に雫が井戸に向かって歩いていく。結局は寝ていない。寝ていてもいいのだが鍛錬をサボる訳にはいかなかった。

「少し待ってください」

真冬が振り下ろされた木刀を止めてつぶやく。視線は雫に向いている。

「寝ていないな」

刹も視線を雫に向けた。二人が同時に離れる。

「雫、今日はいい。少しは寝ている！」

刹が雫に叫ぶ。雫は眠そうな顔をこちらに向けた。どこか不機嫌そうな顔をしている。

「はい……」

雫はしぶしぶ部屋に戻っていった。小さな背中を二人は見送った。

「再開といこう」

二人が再び木刀を構えた。

*

朝食を済ませて三人は高校を目指す。真ん中に真冬、右に雫、左にフリージアだ。フリージアは現在、雫の予備の制服を着ている。なぜ予備があるかと言えば制服のまま穢れと戦う時もあるかららしい。破れた服で高校にはいけない。そのために予備を置いてい欲しい。身長がほぼ同じのため違和感はない。

「コホっ……」

フリージアが一度咳をした。

「大丈夫か？」

真冬が心配そうに顔を覗き込んだ。顔色を見ると健康的とはいえない。青ざめている。

「寒い」

フリージアが真冬の腕を取って体を密着させる。真冬は憂いを帯びた顔でフリージアを見た。これは自分の責任だ。そして、こうしてフリージアに触れられるのはこれで最後かもしれない。

「こんなに可愛い子が密着してるんだから喜びなさいよ」

フリージアが頬を膨らませる。変わらないなと真冬は思った。ここにいるのはフリージアであって、夢の中にいる少女ではない。心の中で真冬は言い聞かせた。

「これでどう？」

フリージアが微笑んでさらに体を密着させる。

「……さすがにくつつきすぎではないか？」

真冬はフリージアを右手で押す。負けじとさらに体を密着させてくる。

「私は寒いの！」

叫びながらフリージアは諦めない。

「……」

雫は二人をみつめた。自分もあれだけ素直に気持ちをつづけられたいのと思う。ふと真冬の腕を取って密着している自分が頭の中に浮かんだ。雫は顔を真っ赤にして首を振った。

「どうした？」

真冬がいぶかしんでこちらを見た。

「な……なんでもないです！」

雫はなぜか叫んでしまった。フリージアは意味が分かるらしく雫に微笑みかけた。以前は不適に笑いかけてくるフリージアだったが、雫に対する態度がたいぶ柔らかくなっている。雫は頬を赤らめたままフリージアに微笑んだ。

真冬だけは分からないという顔をして首を傾げた。

「真冬ー」

後ろから聞き慣れた声がした。何だか久しぶりな気がする。

「藤堂か？」

真冬が視線を左に向ける。そこには藤堂がさわやかな笑顔を見せていた。

「おうよ。両手に花とは朝から幸せだな」

藤堂が雫とフリージアを見た。雫は頬を赤らめる。フリージアは藤堂に微笑みかけた。

「本当に幸せ者よね。真冬にこのありがたみを教えてあげてよ」
胸と頬を密着させながらつぶやく。

「……羨ましい……」

藤堂が呪詛を含んだような瞳で真冬を見た。

「お前だってクラスの大半の女子から好意を受け取っているだろうが」

真冬がうな垂れる。

「あの中に俺の事を真剣に想ってくれる女性はいないっての」
藤堂が頭を掻いた。他にいい男を見つければすぐにそちらに移るだろう。

「……そうか」

真冬は戸惑った。今日はやけに藤堂が真剣だ。

「真剣に想ってくれるんだ。ありがたく思ったほうがいい」

藤堂は二人の少女に視線を向けた。二人は真冬を見た。

「そうだな……」

真冬はどこか悲しげに視線を落とした。こんな状況で恋愛の事を考えていていいのだろうか。

二人は真冬の様子を見てだいたいは理解した。

「こんな状況だからこそです」

雫が前を見てつぶやいた。

「いつ死ぬか分からない。だから……後悔はしたくないの」
フリージアがぼつりとつぶやいた。

「だからいつか……答えてください。あなたの気持ちを」

雫が真冬に微笑んだ。

「ああ」

真冬は微笑み返した。フリージアは静かに顔を落とした。

「……罪な男だな」

藤堂はフリージアの様子を見てぼつりとつぶやいた。

*

今日の授業は気合が入っていた。二日後にはもうテストがあるからだろう。真冬は昨日遅くまで起きていたため眠気が襲ってくる。だが眠るわけにはいかずに何とか瞳を開けた。

「ゴホっ……ゴホっ……」

突如、後ろでフリージアが咳をした。一気に眠気が吹き飛んだ。

真冬は後ろを気にする。

「……大丈夫」

フリージアは寒そうにしているだけで特に変化はなかった。真冬はとりあえず授業に集中をする。それから幾度かフリージアが咳を繰り返していたのが真冬には心配で仕方なかった。

真冬は制服のポケットに入っている携帯を操作。文章を作成して送信。

フリージアは携帯が振動したのを感じて隠れて開く。内容は「体調が悪くなったら言ってくれ」という簡素なものだった。隠れて送信したのだから仕方ないだろう。

フリージアは一度微笑んで携帯を操作。直接言わないのが雫みだいだと思った。送った内容は「無理して倒れたら真冬が運んでくれるから大丈夫」という内容だった。

前に座る真冬は一度だけ溜息をついたが、「分かった」と短いメールを送信した。

*

昼休憩。楽しい食事の時間であるこの時間だが、一つの集団だけは例外だった。

「私を外す。冗談言わないで!」

フリージアが机を叩いた。机が壊れるのではないかと思ってしまうような轟音。周りにいた学生が驚いてこちらに視線を向けるが、あまりの剣幕に視線を逸らす。

「あえて言おう……足を引く張るだけだ」

正面に座るカインが腕を組んでつぶやいた。

「私も反対です。それ以上無理をすれば命に関わります」

右斜め前に座る雫も首を振った。フリージアは視線を右に座る真冬に向けた。

「俺はフリージアの意見を尊重したい」

真冬はすぐに答えた。

「ありがと。でも、止めても無駄よ」

フリージアはいつもの不適な笑顔を二人に向けた。

「……」

カインが腕を組んだまま瞳を閉じる。どうすべきか思考しているらしい。

「それで死ぬ事になっても……ですか？」

雫がフリージアを見つめた。

「もちろん。でも、簡単には死なないわ。こんな運命……来世に持ち越しなんて有り得ないわ」

「そこまで言うのであればいいだろう」

フリージアの言葉を聞いて、カインが瞳を開けた。

「まとまったな」

真冬が三人の顔をそれぞれ見た。皆が一斉に頷いた。

*

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。真冬は外を見つめた。今日も穢れが現れるのだろうか。「分からない事で悩んでも仕方ないか」

真冬は独語して立ち上がった。向かうのは神社だ。今週は部活が禁止である。真っ直ぐに帰るだけだ。

「そつえばさ」

後ろの席に座るフリージアが立ち上がりながら声をかける。その間に雫が真冬の教室に入って来る姿が見えた。

「なんだ？」

真冬は首を傾げる。

「剣舞愛好会は合宿とかしないの？」

テストが終われば長期連休だ。各部が合宿の話をしているのを小耳に挟んだ。

「合宿か」

真冬は頭を掻いた。春と真冬しかメンバーがいなかった剣舞愛好会である。合宿なんて考えた事もなかった。

「楽しそうな話をしていますね」

雫が話に介入。

「でしょう」

フリージアが得意そうな顔をした。二人はやる気満々だ。

「なら雨月神社でやるか？」

真冬が提案。

「却下」

「それはいけません」

二人が即座に却下した。

「そ……そうなのか」

真冬は顎に手を置いて思考。やはりどこかに泊まって合宿するのがいいらしい。

「なら……いい場所がないか他の部に聞いておくか」

真冬の言葉に少女二人が頷いた。

「誰かいらないか？」

クラスを見渡す。だが皆教科書をバツクにしまつて早足で帰宅しようとしている。これは質問するだけでも大変だ。

「どうした？ クラス見渡して。帰らないのか？」

藤堂が真冬に爽やかに片手を上げて笑いかける。

「参考までに聞くが……合宿にいい場所を知らないか？」

「お、合宿するのか。早く言えよな。場所は任せろ」

真冬の問いに藤堂が何やらやる気を出している。

「これは期待していいみたいね」

フリージアが微笑む。雫は頬に手を置いて何やら考えている。しばらくして口を開いた。

「藤堂さんは剣舞愛好会に入ってますよね？」

雫の言葉に藤堂が固まった。この場の雰囲気完全に破壊する一

言だった。

「真冬、俺は決めた！ やるぜ、部活動」

「……はいはい。愛好会だけだな」

真冬の肩をがっちりと掴んで藤堂が宣言。真冬はまたあの場が混沌の空気で満たされる気がした。

「5人いれば部活動……というのが王道ではないの？」

フリージアが小首を傾げた。

「その辺りはどの高校も一緒だよ。でも、顧問がいない」

真冬は頭を掻いた。一刀斎は教師ではない。ただ真冬に剣舞を教えてくれるだけだ。その代りに昼からずっとあの道場で剣舞をしている。ギブ&テイクの関係である。

「教師ね……弱気な教師じゃないかしら」

フリージアが不適な笑みを浮かべる。何か邪な事を考えている。おそらく弱みでも握って顧問にする気だろう。

「正当な手段を使おう」

真冬が拳を握る。握った瞬間に背後に人が立つ気配がした。

「楽しそうな話をしているのう」

老人の声が後ろから聞こえた。真冬は驚いて後ろを振り向いた。そこには袴姿の一刀斎がいた。

「お……驚かせないでくださいよ」

慌てて言葉をかける。

「ほほ……まだまだ青いのう」

一刀斎は楽しそうに笑った。

「雫……気づいた？」

小声でフリージアが雫の耳元に囁く。雫は首を振った。気配がまるでなかった。ただの剣舞を教えている老人には見えない。

「今日はどうしたんですか？」

「それがのう。今日は道場が使えると言われてな」

真冬の問いに一刀斎が肩を落とした。それで尋ねてきたのか。剣舞以外にやる事がないのか、この老人は。

「テストまであと二日なので大人しくしててください」

真冬が一刀斎に微笑んだ。

「ふむ……仕方ないのう。ところでお主ら合宿に行くのか？」

一刀斎は瞳を輝かせた。子供のような無垢な輝きを放っている。その瞳を見れば分かる。

「連れて行ってあげれば……引率者がいれば許可もくれるでしょ」

フリージアが提案。雫は一つ頷いた。

「そうですね。行きましょう」

真冬が決定を下した。

「おっしゃー、では山に行くぜ！」

藤堂が拳を上げた。四人が肩を抱いた。明らかに寒そうだ。夏ならしいのだが。

「はっ……当然行くなら南の山だ。ちょうど今なら春先取りの温かさらしいぜ」

藤堂がお前ら甘いな、と言いたげな顔で微笑む。

「ほほ……それはいいのう。山ならバーベキューか？」

一刀斎はすでに乗り気だ。

「当たり前だ」

藤堂が一刀斎と固く握手をした。

「お主とは気が合うのう。ここだけの話だが夏は………なんてどうじゃ？」

「さっすが。王道だな、おい」

二人はついに肩まで組み始めた。ここまで息が合う人間がいるとは。

「なんだが……主旨がずれてませんか……」

雫が頭を抱えた。チラリと真冬を見る。真冬は微笑んでいた。それは無理をしていない心からの笑顔。一人の学生に戻った真冬の手元だった。雫はその笑顔を見て安心して微笑んだ。今は、この合宿は笑顔でいいのだと心からそう思えた。

*

穢れが現れない日常はすぐに過ぎた。そして、今はテストをしている。

この高校は一日でテストを終える。与えられた時間は8時間。その中で全てのテストを解く。どのテストからするかは自由。昼休憩はない。適当にパンなど軽く食べられるもので済ませて終わりだ。悠長に食べていてはテストは終わらない。

テスト開始から5時間。真冬は前から順番に解いていた。変な駆け引きはしない。片手にチョコでコーティングされたパンを持ち、時折齧りながら機械のように順番に解いていく。あと1時間でもあれば終わるだろう。

ただ気になるのは後ろの席だ。定期的なリズムで何かを書く音。まるで止まらない。そして、驚く事にとんでもなく速い。前と右に座る生徒にとんでもないプレッシャーを与えているのはフリージアだ。何か憑き物がついたかのように高速で問題を解いている。

だが急にピタリと止まった。気になってパンを齧りながら真冬は後ろを気にした。さすがに後ろを向く事はできない。

「どうした？」

教師が不審な瞳を向ける。それと同時に席を立つ音がした。

「終わったわ。簡単すぎよ」

フリージアは教師に答案を全て渡す。

「な……なに。5時間で終わる生徒なんて生徒会長か雨月くらいだろう」

教師が驚いて答案を機械に通した。機械が採点をしていく。

「じゃあねー」

フリージアが皆に手を振った。テストが早く終わった生徒は帰る事ができるシステムだ。点数はすぐに弾き出されて、ホームページにアクセスすれば分かる仕組みだ。

「なんだと……」

教師が震えている。

真冬は何となく分かった。さすがは飛び級少女。とんでもない点数を叩き出したに違いない。真冬はパンを一気に食べた。糖分を吸収した脳が問題を解くペースを上げていく。

「なんだ、雫も終わってたんだ。真冬はまだ終わらないだろうから合宿の買出しに行こうよ」

「いいですねー」

少女の笑い声が聞こえた。教師は複雑な顔をした。注意したい。だが、成績がいい者を怒る理由が見つからないらしい。

真冬は雑念を消して再度問題を解く機械になってシャープペンシルを走らせた。

*

フリージアと雫が商店街を歩いていた。雫はフリージアを横目で見た。少し前だったら絶対に有り得ない光景だった。ただ昨日の出来事があったからフリージアの様子が変わった。こちらに柔らかい笑顔を向けてくる。

「どうした？」

視線に気づいたのかフリージアは小首を傾げた。

「何でもありません。何が必要なんですか？」

「買出しと言っても必要な物が思いつかない。」

「それは服とか……？」

フリージアが顎に手を置いて思考。

「服ですか。私は必要ないですね」

雫の頭に浮かんでいるのは巫女服。毎日着ているので私服みたいなものだ。

「合宿まで巫女服！ そんなの有り得ない！」

フリージアが雫の手を引いた。

「そんなに走ったら……いけません」

雫が困惑する。体調はあまりよくないのに。

「ライバルに心配されるなんて落ちたものね」

手を引きながら溜息をつくフリージア。

「……仲間として……出来れば一人の友人として心配しています」

天使のような笑顔を浮かべる雫。女性であるフリージアですら可愛いと思える無垢な笑顔だった。

「……………これは負けるわけだ」

フリージアは雫に聞こえないようにぼつりとつぶやいた。

「服なら……あんな感じならどうでしょう？」

こちらの気持ちをすることもなく雫は一つの店を指差した。その店はなぜか登山ショップ。確かに行くのは山だ。だがこの店は標高の高い山を登るのに適した服が売っている。

「あんだねえ……」

フリージアが拳を握った。雫は腕を振りほどいて駆けていく。そして、温かそうな茶色のニット帽を被る。

「温かいです」

ほっこりとした笑顔を浮かべる雫。なんだか妙に似合っている。

「雫、ヒラヒラのワンピースとか……おしゃれなコートとか着たくないの？」

フリージアが向かいの店を指差す。その店は分厚いセーター、春を先取りした真っ白なワンピースなどが置かれおしゃれな感じがする。

「お譲ちゃん、似合ってるね。少し前は登山っぽい服装をするのが流行ったんだ。今も廃れてないぜ。その前は森の少女みたいな恰好が流行ったが……あれはもう時代遅れだ。ロングスカートなんて履いてる奴がいたら賞味期限が過ぎて……ぐおえ……！」

話の途中で店員が足を押さえた。

「悪かったわね！」

冬場にロングスカートばかりを履くフリージアには許せない一言だった。つい足が出てしまった。

「あ……これは濡れても大丈夫そうですねー」

マイペースな雫がダウンジャケットやら、濡れても大丈夫そうなパーカーやらを物色。現在はレインスパッツを足に装着している。

「なら一式揃えてやるよ」

店員が足を擦りながら服を選んでいく。雫はわくわくしながらその姿を見つめていた。

「頭痛い……絶対あつちのが可愛いのに」

フリージアは頬を膨らませて向かいの店にあるロングスカートを見つめた。数分後、試着室から出てきたのは一式を装備した雫だ。

厚手の白を基調としたネルシャツの上にレインウェアを羽織り、下は定番の茶色を基調とした山スカートに、ベージュを基調とした山レギンス。頭には先ほどのニット帽。

「どうですか？」

雫が両手を広げて微笑む。

「どこに行くのよ……あんだ」

フリージアが溜息をついた。

「山です」

満面の笑みで雫がつぶやいた。相当気に入ったらしい。

「どうする？」

店員が畳み掛ける。

「これで決定です！」

雫が頷いた。

「……………私は賞味期限過ぎてるのかな」

フリージアががつくりとうな垂れた。しばらく放心していると制服に再度着替えて会計を済ませた雫が歩いてきた。

「さて……次はフリージアの番ですね」

「私はいいわよ」

フリージアはまだ復活できていない。

「さあさあ行きましょう」

雫はお構い無しにフリージアの背を押した。

「……服よりも先にお昼にしたいわ。私は食べてないの」

自然と表情が緩んでしまう。もう少し早く打ち解けていればよかったと思う。

「ならあそこで軽食はどうでしょう」

雫が指差したのはドーナツの屋台だ。

「いいわね」

二人はそれぞれドーナツを買い、屋台の隣にある食事スペースに腰を降ろした。真っ白な丸テーブルに、真っ白な椅子が置かれたスペース。とてもシンプルだが落ち着いた気分になれた。二人はドーナツを食べながらゆったりとした時間を過ごした。

*

真冬は現在商店街を歩いていた。結局あれから一時間が経ってしまった。

「さて……順位は……」

携帯でホームページにアクセス。現在の順位は4位だ。おそらくフリージアが真冬を抜いたのだろう。大抵の優等生はもう試験を終えただろう。順位がここから変動する事はまずない。

「まあいいか」

極端に落ちた訳ではないので納得する事にして携帯を閉じる。周りをみるとすでに春服が置いてあった。黄色やピンクの色鮮やかな服。

「春……」

真冬は自然とつぶやいていた。突如、色鮮やかな服が色を失う。あんなにも鮮やかだったというのに。自分だけが取り残された感覚がした。

「……またか……駄目だよな。春は……一番好きだったんだから」

真冬は自嘲の笑みを浮かべた。一人になった途端にこれだ。深い悲しみが真冬を襲う。ふと顔を上げた。色を失った世界でたった一

っただけ色をもっていた。

目印の長い黒髪。どこか遠慮がちにしている少女。真冬の巫女がそこにいた。楽しそうにドーナッツを食べながら話している。自然と微笑んでしまった。

「……俺は……雫を守りたい。だからもう少し待っていてくれ。全部終わったら一番に会いに行くからさ」

ぽつりと真冬がつぶやいた。突如、世界に光が戻る。色鮮やかな春の彩り。真冬が大好きな春を感じさせる色が心を洗っていく。真冬は爽やかな笑顔を表情に張り付けて、雫の後ろに立った。

「買い食いか？」

雫の小さな頭に手を置いてつぶやく。

「頭に手を置かないで下さい。は……恥ずかしいです」

雫が頭を動かす。

「ずるい……私も！」

フリージアが頬を膨らませて抗議。

「悪いな。今日だけは……許してくれ」

真冬は儚い笑顔をフリージアに向けた。フリージアは一瞬驚いてから仕方なさそうに微笑んだ。

「仕方ありませんね」

雫は頬を赤らめてうつむいた。真冬は自分の心に光を燈してくれた雫をずっと守ろうと思った。この気持ちはあの少年ではなくて自分自身の気持ちであると強く信じたかった。

*

神社の前でフリージアと別れ、二人は神社の階段を上る。

「真冬はどう言いますかね」

雫は自然と頬が緩んでしまった。巫女服と制服、それと一度だけ就寝着を見せたくらいしかない。私服を見たら驚くだろうか、雫は緩みきった頬を引きしめる事ができなかった。いつもは苦勞する階

段もなんだか楽に上がってしまう。それだけ自分が浮かっているのだろう。

「私服姿か。そう言えば見てないよな」

真冬は顎に手を置いて思考。どうやら私服を想像しているらしい。「合宿は楽しみにしててください」

雫が微笑む。真冬も微笑んで頷いた。

「このまま笑っていらればいいですね」

雫がつばやいて階段を上りきった。上りきった所にいたのは刹だった。

「雫がちょうどよかった」

真剣な顔の刹。雫は緩みきった表情をすぐに引きしめようとする。だがなかなか上手くいかなかった。

「まだ時間はある。準備をしなさい」

刹は雫の頭に手を置いた。優しく撫でる。こんなに嬉しそうな雫は久しぶりに見る。

「少しだけ待つてください。これを置いたら……すぐにいつもの私に戻りますから」

雫は服が入った袋を抱きしめて自室に向かって駆け出した。

「雫！」

真冬は手を伸ばして小さな背中に声をかける。

「普通の女の子にもなれないのだな、雫は……。全ては俺の責任か」
刹が顔を落とした。雫にしてやれたのは巫女としての鍛錬のみ。

親らしい事は何もできなかった。

「……そういう甘えが許されない世界だから。俺も……浮かれては
いられない。油断すれば……誰かが死ぬから」

真冬の声はどこか冷たかった。大切な者を失った者のみが出せる
冷徹な声だった。

「真冬……背負うなよ」

刹は真冬の背中に言葉をかける。そうしなければ真冬は死に急いでしまう気がしたから。

「はい……俺が死ぬのは……運命を……輪廻の鎖を断ち切る時ですから」

真冬はつぶやいて自室に向かった。刹は一つ溜息をついた。

*

真冬と雫はそれぞれ袴と巫女服に着替えた。空を見上げるとすでに暗くなっている。

「これを……」

雫が刀を渡す。

「ああ」

真冬は短くつぶやいて刀を受け取る。真冬が雫の護士でいられる唯一の証。刀を強く握り締めて真冬は一步を歩んだ。雫はその背中を見つめた。どこか雰囲気が違う。

「……やはり私の護士なんですね」

雫は微笑んだ。何があっても守ってくれると思える背中。

「……行こう」

真冬はつぶやいて前だけを見る。今度は失わないために。

*

真冬と雫が現在いるのは商店街だ。昼に来た時とはまるで違う。

店はシャッターが閉じられており人気もない。どこか寂しさすら感じた。

「行きますよ」

雫が声をかける。二人は同時に一步を進んだ。その瞬間に世界が変わった気がした。耳が痛いくらいに無音だった。見た目はまるつきり一緒。でも、ここは穢れが存在する場所。現実の世界とは違う。石の上を鎧が歩く音がした。ゆっくりゆっくりと近づいてくる。

「我は望む……神聖なる温かさを」

雫が言葉を紡ぐ。二人の体温を上げていく。真冬は前を睨んだ。そこにいたのは黒い西洋甲冑を纏った穢れ。人ではないと分かるのは頭部がないからだ。鎧だけが歩いている。穢れはゆっくりと腰から黒く禍々しい騎士剣を抜いた。

「武器を使う穢れか……」

真冬は独語した。相手との剣技での戦いになる。単純ではあるが、技量で負けていれば勝ち目はない。真冬が地面を蹴るのと、相手が動くのは同時だった。

「俺が……」

真冬が刀を上げる。穢れは下から剣を振り上げる。

「終わらせる！ 全部！」

刀と騎士剣が激突した。激しい火花が舞った。穢れは強引に剣を横薙ぎに振るう。真冬は数歩後ずさる。力は相手の方が格段に上だ。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。追撃の刃を障壁が弾き飛ばす。

「消えろ！」

真冬が一步踏み込む。高速の一閃が鎧を切り裂く。穢れは数歩後ずさるだけだった。強固な鎧に守られダメージらしき物は見当たらない。

「くっ……何度でも」

真冬は再度接近。刀を横薙ぎに振るう。高速の一閃。穢れの胴を包む鎧が切り裂かれた。だが倒れる事はない。接近した真冬に対して騎士剣を振り降ろす。雫はタイミングを見て言葉を紡ぐ。

「我は望む……神聖なる護りを！」

障壁が展開。真冬は落ち着いて後ろに下がろうとした。

「そんな……！」

真冬は驚きの声を出した。慌てて後方に飛ぶ。穢れの騎士剣が障壁を一撃で破壊して、そのまま振り下ろしてきたのだ。ギリギリで真冬は騎士剣を回避。穢れは追撃のために地面を蹴る。その時にアサルトブーツが地面を叩く音がした。

「しゃがんで！」

言葉を聞いて真冬は屈む。背中すれすれをナイフが通過。穢れは騎士剣を使いナイフを弾き返す。真冬の後ろに立ったのはフリージア。その隣で大剣を構えるのはカインだ。

「二名追加だ」

カインが雫に言葉をかける。二人を光が包む。

「来るぞ！」

カインが叫んで大剣を構えて疾走。穢れが剣を構えて同時に疾走。振り下ろした大剣と、振り上げた騎士剣がぶつかる。剣響。激しい火花を撒き散らす。両者は一步も引かない。

「援護するわ！」

フリージアが左に回ってナイフを投擲。真冬は右に回る。突如、穢れがカインの大剣を吹き飛ばして後方に飛んだ。

「馬鹿な！」

カインは大剣を構え直して驚愕の表情を浮かべた。まさか自分が力で押し負けるとは。フリージアのナイフを剣で弾きながら穢れは真冬を見た。

「その剣を破壊すれば！」

真冬は刀を一度鞘に戻す。相手が剣を振り下ろしたのを見て、構える。腰を使った居合いの一閃。刀は切るための武器。そして、居合いは全ての物を切断する。

障壁すら破壊し、大剣すら吹き飛ばす剛剣と、護士の能力のおかげで人外を超えた速度に達した高速の居合いが衝突。結果は一瞬で出た。

「くっ……」

真冬は表情を歪めた。穢れの剣は健在だった。逆に亀裂が入ったのは真冬の刀。

「下がれ、危険だ」

カインが大剣を構えて真冬の前に立とうとする。真冬は下がる事ができなかった。あまりにも近い。こちらの武器は今にも碎けそう

な刀。この刀で受け止めるしかない。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫の言葉が背後から聞こえた。穢れの剣を亀裂が入りながらも何とか弾き飛ばす。その間に真冬は後退した。カインが大剣を構えて前に立つ。その隣にフリージアが立った。

「時間を稼ぐ……準備をしろ」

短く言ってカインが疾走。

「間に合わせてね」

フリージアが一度微笑んでからナイフを投擲。真冬は刀を強く握った。

「祈りを込めます」

雫が真冬の手を掴む。突如、雫の体から緑色の光が溢れた。その光が刀を包んでいく。亀裂はどうにもならないが、一撃だけならどうにかなるだろう。真冬は前を見つめた。

カインは大剣を振り下ろす。だが相手は平気で受け止める。

「ふっ……まさか力比べができる相手がいるとはな」

カインは大剣に力を込める。２メートル級の大剣を吹き飛ばす穢れ。常月の特にこの地区の穢れの強さは尋常ではない。フェレアスにはここまで強い穢れは現れない。カインの腕なら一撃で倒せるレベルの穢ればかりだ。だがこの穢れはカインの大剣を吹き飛ばして、隙あれば踏み込んでくる。

穢れはカインの大剣を右に吹き飛ばす。何とか手から離れるのを阻止したが、無防備なカインに剣が迫る。

「何してるのよ！」

フリージアがナイフを両手に持って頭上で交差させて剣を受け止める。

「吹き飛ばし！」

すかさずアサルトブーツで穢れを蹴りつけた。穢れは数歩後ずさるだけで止まる。

「固すぎるわ……こいつ」

フリージアが傷む右足を気遣いながらつぶやく。

真冬の頬に汗が伝う。このままでは勝てない。壊れそうな刀。体調不良のフリージア。あの夢の通りだ。真冬は立ち上がろうとする。「待ってください」

雫が立ち上がろうとする真冬を押さえる。

「このままでは……」

真冬は止まってはいたらなかった。戦うのも傷つくのも自分だけでいい。自分だけが無事なのが許せない。

「……皆で勝つためです」

雫が強く真冬の手を握った。緑色の光が強さを増す。真冬は右手を強く握った。

カインが何度も大剣を振り下ろす。吹き飛ばされた時はすかさずフリージアが援護する。だが穢れが急に標的を変更した。

「コホっ……コホっ……」

フリージアが咳を繰り返しているからだ。穢れが一息でフリージアに接近。

「くっ……コホっ……こんな……時に……」

フリージアは苦しそうに咳き込む。体温が急激に落ちている。震えが止まらない。

「フリージア！」

真冬は雫の腕を振りほどいて地面を疾走。夢の通りにはさせない。ここで失ったら全てが前世と同じだ。もう抗えない。

「遅いんだよ……真冬は……」

フリージアが剣をナイフで受け止める。だがすぐにナイフが碎ける。剣がフリージアに迫る。

「間に合え……」

真冬の叫びが響いた。一閃。フリージアを狙う剣を真冬の刀が受け止める。止める事ができたのは数秒。刀は碎けて散った。舞ったのは鮮血。

「ぐっ……ただで倒れるかよ」

真冬は不気味な笑みを浮かべて、折れた刀を捨て穢れの剣を右手で掴む。真冬の手が黒く変色していく。手は切れて鮮血が流れる。だが離さなかった。

「カイン！」

真冬は穢れの後ろで大剣を振り上げているカインに向けて叫んだ。
「承知！」

カインが大剣を振り下ろす。剛剣が穢れの鎧を破壊。穢れは真冬を蹴り飛ばして左に飛んだ。

「真冬！」

フリージアが瞳に涙を溜めて真冬を抱き起こす。

「大丈夫だ……左手……動かないけどな」

真冬は儚く笑った。フリージアは穢れを睨む。

「許さない！」

フリージアが立ち上がってナイフを構えた。穢れは明らかに動きが鈍い。

「雫！」

フリージアは雫に向かって叫ぶ。手にはナイフをそれぞれの手に5本ずつ持っている。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。穢れの背後に障壁を展開。

「カイン……後は任せた！」

フリージアがナイフを投擲。ナイフが穢れの腕、足を貫き、障壁を背に標本のように串刺しにする。力が弱った穢れは身動きが取れない。

「消え去れ！」

カインが大剣を振り下ろす。閃光が場を満たす。それを最後に眩しい光が辺りを満たした。真冬はその光景を見た瞬間に力が抜けた。そのまま眠るように気絶した。

*

雫は椅子に座り気絶している真冬を眺めていた。あれからすぐに真冬を病院に連れて行った。傷は治った。だが真冬の左腕はもう動かないらしい。細胞が壊死しており、医者の話ではどんな物で斬られたらこうなるのか頭を抱えていた。

「……無理をしないでくださいよ」

雫が真冬の右手を取って頬に涙を流した。いつも平気そうな顔をしていた真冬。確かに落ち込んでいる事はあった。でも、すぐに元氣を取り戻していた。

「誰かを守れば……誰かを……何かを失うのですね」

雫が顔を落とした。肩が震えた。次は誰が何を失うのか。

「どうすればいいのですか……原因である私は……こんな……無傷で」

溢れる涙を抑える事ができなかった。それと同時に真冬の気持ちがかかった。誰かが傷つくなら自分が傷ついた方がました。だからあんな無理をした。

「もう……許してください……許して」

雫は自らを縛る鎖に何度も許しを請うた。

＊

エクソシストの少女は体調不良を押して戦場に立った。想いを抱く護士のために。まだ戦えると思っていた。だがその油断が致命的な結果を生んだ。

咳き込む少女に西洋甲冑を纏った穢れが迫る。動く事ができなかった。禍々しい剣が少女を切り裂いた。舞ったのは鮮血。少女は倒れる視界の中で護士の少年が雄叫びをあげて穢れを切り裂く姿が見えた。

少女は微笑んでいた。自らは命を落としたが、護士が無事であるのが嬉しかった。そして、信じる事ができた。彼なら変えてくれる

と。今回が無理ならまた次の自分達が変わてくると信じられた。
少女は瞳を閉じて眠るように息絶えた。

*

フリージアは体にかかっている蒲団を慌てて取り除いた。
「いや……なに……私……生きてる？」

額には汗がこびりついていた。震える肩を抱いて息を整える。あの穢れは今日戦った穢れだ。

「嘘……私……今日死ぬ予定だったんだ」

震えが止まらなかった。まるで自分が死んだかのような夢だったが自分はまだ生きている。

「……運命が変わった？」

フリージアは疑問の声を出した。だがお気楽には喜べなかった。その代償は真冬の左腕。ずっと側にいたかったが体調が優れず自室に戻るようになった。

「……どうしても私達から何かを奪いたいよね……でも、変えられる」

つぶやいて拳を握る。いつもの不適な笑みを浮かべる。

「だったらとことんまで付き合ってあげる。何を失っても……変えてあげるわ。あなたはそこで諦めて死んでなさい。私はフリージアよ！ 諦めて私になすりつけたあんたじゃない！」

フリージアは叫んだ。少女の心には一つの光が宿った。

輪廻の鎖 6

輪廻の鎖

― 6 ―

真冬はゆっくりと瞳を開けた。瞳に入っただのは真っ白な天井。

「……病院なのか？」

独語して辺りを見渡した。白くて薄い布団が自らの体にかけてられている。鼻につくのは消毒の匂い。どうやら間違いないらしい。どこかの病院の個室だ。真冬は起き上がろうと力を入れる。

「……あ……」

その時に異変に気がついた。襲ってきたのは異様な寒気と焦り。勢いよく起き上がり、震える右手で左肩に触れる。それからゆっくりとあるべきものを探す。

「……………」

言葉が出なかった。左上肢がない。切断されて動けないだけではない。まるごとなかった。

「……うっ……」

強烈な吐き気と寒気がした。これが運命を変えた代償とでもいうのだろうか。

「……それなら安いのかもな」

真冬は無表情でつぶやいた。恐怖で震える事はもうなかった。自らを守るために心が機能を停止させているのだろうか。

「……戦えるかな」

片手一つで刀を振るえるのだろうか。真冬は今考えるべき事でもなくても必死に考えた。頭を動かし、何か考えていないと気が狂いそうだったから。

「邪魔するわね」

聞き慣れた声がしてドアが開いた。そこには薄い茶色のセーターに、ベージュのロングスカートを履いたフリージアがいた。

「学校は？」

「……終わった。何時だと思ってるの」

フリージアがベッドの隣にある時計を指差した。今は午後の1時だった。テストも終わり、終業式だけだったため午前中で終わったらしい。

「そうか」

真冬は努めて平静を装って微笑んだ。フリージアは無言で真冬に近づいた。戸惑う真冬を無視して優しく抱きしめた。

「ありがとう……そして、ごめんなさい」

耳元でフリージアが囁いた。

「俺がやりたくてやったんだ。フリージアのせいではない」

真冬は右手でフリージアを押す。だがフリージアは離れない。

「ううん。私はあの日に死んでいたから」

腕に力を込める。言葉を想いを伝える。どんな鈍い相手でもこれなら伝わるだろう。

「俺は嫌だった。前世の記憶の通りに誰かが死ぬのが。あの少年とは違うんだと……証明しなかったんだ。それがこの様だけだな」

自嘲の笑みを真冬は浮かべた。

「でも……助けてくれた。そして、真冬は運命を変えた。私は諦めないわ」

真冬を解放してフリージアが微笑んだ。綺麗な笑みだと思った。どうしてフリージアはいつもこれだけ真っ直ぐでいられるのだろうか。

「命がある限り抗うわ。この私を生かした事を絶対に後悔させてあげるわ」

不適に笑ってフリージアが背を向ける。

「ほどほどにしろよ。体調良くないんだろう？」

その背中に声をかける。

「次はあんなミスはしないわ。あと……早く元気になって雫に笑顔を見せてあげなさいよ。あの子……見せられないくらいに酷い顔してるんだから」

フリージアが溜息をついた。

「……そうか。外に出てもいいのか？」

真冬が自らの左腕を見た。

「……そうやって平気な振りをしているといつか本当に壊れるよ」

フリージアがぼつりとつぶやいてから部屋を出た。憂いを帯びた瞳にはうつすらと涙が溜まっていた。

「もう壊れてるよ。春が死んでから」

真冬は顔を落としてつぶやいた。ふらつきながら外に出るための着替えを開始した。

*

雫は神社の右端にある巨木に背を預けて空を見上げていた。だが何も見てはいなかった。

「……………」

虚ろな瞳で空を見続けていた。頭の中を占めているのは真冬の事だ。フリージアはもう病院に行っただろう。だが自分は結局行けなかった。昨日は時間が許す限りは側にいられた。だが、今日はどんな顔をして会いに行けばいいのか分からない。

「自分で自分が分かりません」

雫はぼつりとつぶやいた。分からないから動けない。ふと前に人が立つ気配がした。

「……来ないと思ったから来たよ」

雫がゆつくりと視線を降ろす。声の主は真冬だった。微かに微笑んでいた。

「……どうしたらいいのか分からないです」

雫が顔を落とした。素直に喜べばいいのだろうか。だが、視界に

入る真冬の腕を見れば、笑う事はできなかった。

「俺もよく分からないよ。ただ伝えたくて……」

真冬は雫にゆっくりと近づく。雫の顔がよく見えた。泣き腫らした瞳。寝不足なのか不健康そうな顔をしていた。それだけ心配してくれたのだろう。

「伝える……？」

「ああ。こんな状態だけど……雫を守りたい。君の護士でいさせてくれないか？」

真冬は立ち止まって右手を差し出した。

雫は溢れる涙を止められなかった。まだ護士でいてくれる。こんな目に合わせているのにまだ守ってくれる。雫は感情のままに動いた。真冬の胸に飛び込んでひたすら雫が声を上げて泣いた。

真冬はこの少女を守りたいという気持ちさがさらに強くなるのを感じた。例え腕を失っても、死ぬ事になっても、心が壊れる事があるうとも、今この時に自分の胸の中で泣いている少女を守りたかった。

*

フリージアは白い吐息を吐きながら商店街を歩いていた。だが着いた途端に後悔した。一人でこんな所に来るものではない。虚しさが込み上げてくるだけだ。チラリと左を見ると仲が良さそうなカップルが婚約指輪だろうが、高級な指輪を見ていた。辺りを見渡せば男女の組み合わせが嫌でも目についた。

「はあ……」

溜息が出た。どれだけ迫っても惨敗続き。しかもライバルとは友達のように親しくなってしまった。どこかで応援している自分もいる。

「流行らないよね……身を引く女なんて」
独語しながらゆっくりと歩く。

「そっという女もまた魅力的じゃない？」

軽そうな口調の男が背後から声をかけてきた。どこかで聞いた事がある気がするが、ナンパなら止めてほしい。今はそれほど機嫌がよくない。なおもその男が追ってくる。

「しっつこい！」

声と共に放ったのは右回し蹴り。

「ぐおえ……」

男が体をくの字曲げて、耳障りな声を出した。フリージアの視界に入ったのは茶色髪の男。

「あら……あなただったの」

フリージアが蹴ったのは藤堂だった。

「ひ……酷いぜ。知人をいきなり蹴るか？」

咳き込みながら藤堂がつぶやく。

「何か用？ 私はあまり機嫌よくないわよ」

フリージアが腰に手を当てた。

「真冬か……本当にこんな可愛い子を拒否するんだからな」

「分かってるじゃない。でも……私は真冬一筋よ」

友に呆れる藤堂に対して、頬を赤らめてフリージアがつぶやいた。

「どうして？ 真冬みたいに前世の記憶があるから？」

フリージアと真冬の付き合いはそれほど長くはない。ここまで想うのはどうしてだろうか。藤堂は気になった。

「うーん。きっかけは確かに前世の記憶ね。出会う前から何度も夢で見たから。でも……私はいっではない。この想いは私の想いよ」

フリージアは胸の前で手を組んで言い切った。

「ふーん。俺はその前世の記憶とやらを見ないから分からないけどな……」

藤堂は頭を掻いた。

「見えても見えなくても一緒。自分らしく精一杯生きればいいのよ。それと確かに付き合いは短い……でも、同じ考えを持ち、命まで助けてもらえた。十分でしょう？ 足りない？」

フリージアが微笑む。どこか幸せそうだった。藤堂はこの少女は

もつと悲しんでいると思っていた。あれだけアピールしても振り向かないのだから。

「十分だろうな」

藤堂も微笑んだ。

「とっ……話がだいぶ脱線したわね。何だったかしら？」

「そうだな。今日は合宿の事でね。たまたま見かけたからさ」

藤堂が本題に触れる。

「ああ。以前言っていた……でも、真冬が……」

フリージアは溜息をついた。せつかくの楽しみなイベントもあの状況では中止だろう。

「たぶん中止にした方が奴の健康に悪いぜ」

藤堂が頭を掻いた。

「それは長年関わった人の意見？」

「ああ。あいつはどうも気を回しすぎる所がある。友達だろうと家族だろうとなかなか本音は言わない。もしも中止にしてみる。平気な顔をして微笑んでるけど、心では自分を責めまくる」

フリージアの質問に対して藤堂が友人としての意見を言った。フリージアにも何となく分かった。

「なら……強行で進めるわ。カインには言っておくわ」
フリージアが携帯を操作。

「俺は真冬に直接伝えておく。言いたい事もあるしな」

藤堂が手を振った。フリージアは携帯を操作しながら片手を上げた。

*

神社の空きスペースで真冬は片手で木刀を構える。目の前には刹が木刀を構えていた。

「……手は抜かんぞ」

刹が低い声でつぶやく。

「構いません。穢れは手加減してくれませんから」

真冬は踏み込んで木刀を振り下ろす。刹は両手で木刀を握り受け止める。そして、力任せに振り払う。真冬の木刀が後方に吹き飛んだ。

「力に頼るな」

刹が木刀を真冬に突きつける。真冬は一つ頷いて地面に刺さった木刀を抜いた。避けるか受け流すか。それしか手段がない。

「おっ……やってるな」

お気楽な声が張り詰めた空気を破壊した。真冬はチラリと右を見た。そこにいたのは藤堂だった。

「すみません」

真冬は刹に一度頭を下げて藤堂に駆け寄る。

「よう」

藤堂が片手を上げた。

「どうした？」

真冬の第一声はこれだった。

「……俺は用事がなければ話しかけてはいけないのか？」

藤堂がうな垂れる。フリージアに真冬とんだか冷たい気がする。

「そんな事はないけど……鍛錬中だったから」

真冬が刹を指差す。

「まだやるの？」

藤堂が真剣な顔で真冬に問うた。これが真冬に言いたかったことだ。

「ああ。当然だろう」

真冬が眉根を寄せた。

「普通じゃねえよ……。妹亡くして……。腕無くして……。他の高校生は休みに入って馬鹿みたいに浮かれてるのに鍛錬？」

藤堂は冷め切った顔をしていた。こんな顔をした藤堂は始めて見た。

「いけないか？」

真冬が藤堂を睨む。

「いけなくはない。ただ俺には理解できねえよ……」

藤堂が顔を落とした。

「もしも……心から大切な人が出来て……その人を守りたいと思ったらお前はとうする？」

真冬は藤堂に分かる言葉で伝える。藤堂は一度驚いた顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「……はっ……分かりやすい例えだな。んなもん命懸けで守る」

藤堂がいつもの笑顔を向けた。

「そういう事だ。俺はヒーローではない。だから腕も無くすし、必死で鍛錬もする。それでも命を落とすかもしれない。でも……守りたんだ」

真冬が藤堂に微笑んだ。聞きたい答えがそこにはあった。真冬は自分で道を選んだ。他人がどうこう言える段階ではない。

「ならもう何も言わねえさ」

藤堂はそれだけを言っただけで背を向けた。藤堂は藤堂なりに心配してくれていたのだろう。

「ありがとう」

「ああ。ただ合宿だけは来いよ。二日後な」

礼を言った真冬に対して藤堂は振り返ってニヤリと笑った。

「……結局はそっちがメインかよ」

真冬は笑ってしまった。なんだがありがたかった。少しだけ現実に戻れたから。馬鹿をしても許される普通の高校生に一瞬だけ戻れたから。

*

冬月高校の道場。カインは袴に着替えて禅を組んでいた。余計な考えを頭から消すためだ。

「……………」

無言で心を無にする。だがなかなか平静ではいらなかった。浮かぶのは自らの死のイメージ。2メートルはある獅子の体当たりを受けて息絶える。そんな姿が頭から離れない。まるで自らが体験したような気もする。それだけ生々しい。

カインは一度合唱をした。うまく集中できない。

「喝っ……！」

声と共にカインの肩に痛みが走る。後ろに立っているのは一刀斎だ。叩いたのは木製の棒。警策と呼ぶらしく、集中力が切れた時に合唱をすれば叩いてくれるらしい。

「……すまない……」

カインが姿勢を正す。

「……カインよ、気を強くもて」

一刀斎はゆつくりと言葉をかける。カインは目を見開いた。まさかこの夢の事を、前世の記憶の事を知っているのだろうか。

「……知っているのか？」

「うむ。刹から話は聞いておる。どんな終わりを迎えるのかも」

カインの質問に一刀斎は肯定を示した。この老人がここにいないのは偶然ではないらしい。

「……俺は死ぬのだろうか」

カインは瞳を閉じてつぶやいた。

「それはお主次第だ。真冬は運命を変えた」

一刀斎の表情が曇る。腕の事はすでに聞いている。

「……ならば抗おう……」

カインが立ち上がる。

「ほほっ……無謀な事にも立ち向かう。それが若者の特権じゃ。皆で生き、何も失わず……青春を謳歌しようではないか」

一刀斎が笑顔を向ける。

「ふっ……悪くない」

カインは口元を緩めて歩き出した。

「どうか……輪廻の鎖が切れる事を。だが、準備だけはしておかね

ばいかんのう」

一刀斎が短い祈りを捧げた。

*

真冬は月を見上げた。綺麗な満月だった。

「真冬……これを」

雫の声に真冬は振り向いた。それと共に驚愕の表情を浮かべた。

「それは……」

真冬は一步後ずさる。雫が持っていたのは春が使っていた薙刀。とある光景が嫌でも頭に浮かぶ。二度と見たくない光景。

「う……あ……」

真冬は呻いた。どれだけ頭を振っても止まらない。浮かぶのは眩しいばかりの浄化の光に満たされて倒れる春の姿。

「すみません……刀はまだ用意できませんでした」

雫が顔を落とす。

「雫のせいではない……違う……弱いのは……俺の心だ」

真冬が薙刀を掴んだ。震える真冬の手を雫が握る。

「春が……守ってください」

雫が微笑んだ。真冬の心が一瞬温まる。真冬は腕に力を込めて震えを止める。

「行こう……もう何も失わないために」

真冬はただ前だけを見た。

*

修道着姿のカインとフリージアが向かうのは広大な空き地。元は大企業の工場が建っていたらしい。

「ふっ……獅子が暴れるには適しているな」

カインがつぶやいた。

「……今日はカインの番なの？」

フリージアが隣に立ち視線を向ける。

「ああ。俺が見た夢は獅子の体当たりを受ける夢だ」

「そんな事はさせない」

カインの言葉を受けて、後ろから強い言葉をかける少年。カインは驚いて後ろを向いた。腕を失っても真冬はこの場に立っていた。

「……誰も死なず……何も失わず……抗いましょう。運命の鎖に」
雫がゆっくりと歩いていく。

「むろん」

「分かっている」

カインとフリージアがその後続く。

「行くぞ！」

真冬が疾走。皆が一斉に空き地に飛び込んだ。感じたのはいつもの寒気。やはり何かいる。

「我は望む……神聖なる温かさを」

雫の言葉で皆の体温が上がる。皆は前方を見た。そこにいたには2メートルはある真つ黒な獅子。口の両端には鋭利な牙を持ち、真つ赤な瞳がこちらを睨んでいた。

「足を潰す」

カインとフリージアが右回りに疾走。それを見て真冬は左回りに疾走を開始。だが、ふと違和感がした。後ろを確認すると雫がついてきている。

「雫、危険だ！」

真冬は足を止めずに後方に叫ぶ。雫は足を止める所かさらに加速。真冬の隣に並走。

「私も戦えます」

雫が右手には鉄扇を、左手には鋭利な針のような物を持っていた。
「待つてはくれないか……」

真冬は前方を睨む。獅子が標的にしたのはこちらだ。武器の威力が明らかに劣っているこちらを優先的に撃破するのだろつ。あの突

撃を正面から受け止めるすべはない。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。障壁が展開したのは獅子の目の前。獅子は急に展開された障壁に激突。だが突撃の威力が勝りそのままこちらに真っ直ぐに突っ込んでくる。

「少しでも鈍れば……！」

雫が獅子の足に針を投擲。速度が鈍った獅子の足を貫く。

「あそこを狙えばいいんだな」

真冬は独語して獅子に向かって突撃。薙刀を構えて深呼吸。突撃をギリギリの所で左に避け、薙刀を横薙ぎに振るう。針が貫いた場所を正確になぎ払う。

獅子は荒々しい鳴き声を出してバランスを崩し、地面を滑っていく。雫は落ち着いて獣から離れていく。

「やるな」

カインは獅子の後方から迫りつつつぶやいた。

「ええ。あれはこちらも出来るわ」

フリージアがナイフを構える。突如、鼓膜を破るかのような咆哮を上げて獅子が立ち上がる。見ているのは雫のみ。巨大な腕を雫目掛けて振り下ろす。

「そのまま私だけを見ていなさい」

雫は障壁を張らずに腕を回避し続ける。

「無理ばかりして！」

真冬が叫びながら地面を蹴る。それと同時にカインに目線で合図。一度、カインが頷いたのを確認して雫の前に立つ。

「ここは危険です！」

真冬の背中に叫ぶ。

「だから護士がいるんだろう」

真冬が獅子を挑発するように睨む。雫は一つ頷いて後方に飛ぶ。獅子は一度咆哮を上げ真冬に向けて腕を振り下ろす。

「我は望む……神聖なる神の使いを！」

雫が式神に力を込める。真冬を襲う獅子の腕を式神でカバー。真冬は一步も引かない。それ所か挑発するように腕を斬りつける。

獅子は荒い鼻息を出し、真冬に赤い瞳を向ける。攻撃してきた者を優先的に狙うだけ。

「単純な奴だな」

真冬は不適に笑った。獅子の頭上に見えたのはカイン。光輝く大剣を頭上高く振り上げる。

「消え去れ！」

カインが大剣を振り下ろす。真冬は勝利を確信した。何も失わず、誰も死なずに戦いを終えられる。もう運命の鎖に震える事はないのだとそう思った。だが、そう思えたのは一瞬だった。

何かの音がした。視線を向けるとカインの右側から大鎌が高速で回転。狙いはカインの腹部だろうが、今からでは防御は無理だ。カインは防御を諦め、穢れを倒す事に集中。剛剣が穢れの頭部に直撃するよりも速く大鎌がカインを切り裂いた。

「ぐっ……」

カインはそれでも獅子の頭部に大剣を振り下ろす。濃い霧が舞った。カインはそれを確認してバランスを崩した。地面に背中から倒れてカインが一度呻いた。

「カイン！」

近くにいたフリージアがカインの援護に向かう。だが獅子はまだ生きている。大鎌を投擲した敵がどこにいるのかまだ分からない。

判断に迷っていると突如、獅子が咆哮を上げてカインの正面から突撃。さらに突撃に合わせてように飛来した大鎌がカインの背中を狙う。対するカインは大剣を支えに何とか立てる段階だ。

「ふっ……抗えんか」

ゆっくりと大剣を構える。どこか落ち着いている自分がいた。

「諦めるな！」

真冬は懸命に地面を駆ける。雫も続く。

「まだ終わってない！」

フリージアがカインの背にピタリと自らの背をつけてナイフを構える。飛来した大鎌をナイフで投擲して落とす。

「……すまん」

カインは大剣を真つ直ぐに構える。

「零……やつの動きを鈍らせろ！」

カインは力の限り叫ぶ。

「我は望む……神聖なる護りを！」

獅子の目の前に障壁を展開。獅子は障壁に激突。

「援護する！」

真冬が獅子の足を切り裂く。獅子は力を失い障壁に何度も体当たりをする。

「予想以上だ……ならば」

カインは大剣を両手で持ち疾走。ようやく障壁を突き破った獅子がカインを睨む。カインも獅子を睨む。

「勝負！」

カインが大剣を振り下ろす。対する獅子はまっすぐに突撃。力と力が正面から激突した。閃光。眩しい浄化の光が辺りを満たした。

「ぐっ……」

カインは光に包まれながら膝をついた。そのまま力を失ったように倒れた。すかさずカインを守るように三人がそれぞれの武器を構える。前方にまだ何かいる。

真冬の視界に真つ白なローブを纏った大鎌使いが見えた。フードを被っているために顔までは見えない。大鎌使いはゆっくりとこちらに歩いてきた。大鎌を投げる気配はない。

「なんだ……？」

真冬は違和感がした。カインが動けない今が絶好のチャンス。だが相手はこちらを特に真冬を観察するような視線を送ってくる。

大鎌使いがゆっくりと大鎌を構えた。突如、地面を疾走。真冬は目を見開いた。あまりにも速い。

「我は望む……」

雫がそこまでしか言葉を紡げなかった。大鎌使いは一気に接近して雫を蹴り飛ばす。

「なっ……」

真冬は驚きつつ薙刀を構え疾走。振り下ろした薙刀を大鎌使いが止めた。

「邪魔をするな。お前に用はない」

大鎌使いが真冬の腹部に蹴りを入れた。

「ぐっ……」

真冬は体をくの字に曲げて倒れた。言葉も気になるが、どうして大鎌を使わないのか気になった。雫も真冬も余裕で殺せただろう。

「真冬！」

フリージアがナイフを構えて真冬の前に立った。

「貴様は排除する」

つぶやいて大鎌が煌く。フリージアの頬に汗が伝う。カインはもう動けない。自分が倒れたら負けは確定だ。

大鎌使いが地面を蹴る。それと同時にフリージアはナイフを投擲。だが掠ることもなかった。

「くっ……なにこいつ……」

ナイフを両手に持って構える。

大鎌の連撃。気づいた時には両手に握るナイフが音を立てて破壊されていた。それからの動きはとんでもなくゆっくりに見えた。振り上げられる大鎌。自らの首を狙い振り下ろされるのが分かった。少しでも変えられたと思ったのが間違いだった。運命を変えた瞬間にこんな存在が出てくるなんて。真冬と雫を殺さないのは運命通りだからだろう。ここで消すのはフリージアとカインだけだ。

「馬鹿みたい……」

フリージアは瞳を閉じた。

「フリージア！」

突如、叫び声が聞こえた。ずっと待っていた声だった。フリージアは弾かれるように動いた。大鎌を避けるように右に動く。フリー

ジアの左腕すれすれを薙刀が通過した。

「離れる！」

真冬はフリージアを突き飛ばして、薙刀で大鎌を止める。だが薙刀は綺麗に切断された。

「……何度転生しても邪魔な男だな」

死神が真冬を蹴り飛ばす。それから再度、フリージアを狙う。

「くっそ……まだ……」

真冬は地を這うように進む。見上げるとフリージアは奮戦しているが大鎌は防いでも、時折放たれる蹴りに対応できないらしい。膝をついて荒い息を整えていた。いつ気絶してもおかしくない。フリージアに再度、大鎌が迫る。

「ぐっ……結局は口先だけで終わるのか」

真冬はふらつきながらも立ち上がる。刹那、横を風が通り抜けた。突風にも似た高速の風。横を通り過ぎたのは袴を着た老齢な男性。

「なに！」

大鎌使いは始めて動揺の声を出した。老齢な男性が大鎌を弾き飛ばしたのだ。フリージアは緊張の糸が切れたのかそのまま気絶した。

「ほほ……ジジイもまだまだ現役じゃ」

大鎌を弾き飛ばしたのは一刀斎だった。両手にそれぞれ刀を持ち大鎌使いを涼しげな瞳で見ている。

「くっ……またしても貴様か。私を攻撃するとは分かっているのか！」

大鎌使いが叫ぶ。

「分からんわい。どんな理由があるにしても、これ以上は今を生きる少年達の未来を奪うな」

一刀斎が大鎌使いを睨む。

「ふっ……その体で勝てると思うなよ」

大鎌使いが一刀斎に向けて疾走。

「ちと厳しいのう」

一刀斎は左手に持った刀を真冬に投げた。真冬は立ち上がって地

面に刺さった刀を抜いた。この刀には祈りが込められているらしい。自然と力が湧いてきた。

「力を貸せ、真冬」

一刀斎が大鎌を受け止めながらつぶやく。

「はい」

真冬は地面を蹴った。何がどうなっているのか分からない。ただやる事は一つ。

「ただ……倒すだけだ!」

動きが止まっている大鎌使いに刀を振り下ろす。

「甘く見積もられたものだな」

大鎌使いは一刀斎を蹴り飛ばして、真冬の刀を止める。フードの中の表情は不適に笑っているように見えた。

「お前は何かしたい! どうしてこんな事をする。もう少しなんだ」

真冬は刀に力を込める。だが力で押し負けていく。片手では限界がある。

「我は監視者……。世界のバランスを保つために不要な存在を消す者」

大鎌使いが真冬の腹部を蹴る。殺さない所を見ると真冬はまだこの世界に必要な存在らしい。腹部を押さえて監視者を見つめた。

「真冬、耳を貸すな。あれはあちらの都合。現在を生きる者には関係のない話じゃ」

一刀斎はつぶやいて斬りかかる。

「……こいつが原因か……なら……」

真冬が刀を構え直す。溢れてきたのは怒り。自らの壊れた心にもまだそんな感情は残っていたらしい。監視者を睨み真冬は地面を疾走。

「調子に乗るな……!」

監視者の声に応えて空間が裂けた。裂け目から出たのは黒く禍々しい剣だった。以前戦った西洋甲冑を纏った穢れが持っていた物に近い。

「生きていれば問題はないだろう……少しでも動ければ戦うだろうからな」

不気味な笑みを浮かべて真冬を見た。

「真冬！」

一刀斎が真冬の前に立つ。10本の剣が真冬目掛けて飛んでくる。

一刀斎は剣を全て叩き落す。

「お前は生きていてもさほど変わるまい」

監視者が大鎌で一閃。一刀斎は咄嗟に刀で受け止める。溢れる火花を気にせずに監視者を睨む。だが、刀は耐えられずに亀裂が入っていく。

「今じゃ！」

一刀斎が叫ぶ。真冬は声を聞く前から動いていた。左に回りこみ刀を振り上げる。監視者はチラリと右を見た。今からでは刀を避けきれない。

「……………」

監視者は無言で右に亀裂を出現させた。左手で一刀斎の刀を押し返して、右手は亀裂から出現した禍々しい剣を引き抜き、真冬の刀を受け止める。

「これで……どうだ！」

監視者は叫び力を込める。一刀斎と真冬の刀が同時に折れた。武器を失った二人が数歩後ずさる。

「武器がなければ話になるまい」

監視者が狙いを一刀斎に絞る。

一刀斎の頬に汗が伝う。強く折れた刀を握り、何か手段がないかを探す。真冬は一刀斎を見て諦めていないという事が分かった。だが勝機はない。注意深く辺りを見渡す。一刀斎はずっと監視者を見つめていた。その視線の先。監視者の後ろに人が立っていた。鉄扇を構えていた雫だ。気絶からようやく回復したらしい。

「ほれ……さつさとこんかい」

一刀斎が監視者を手招き。

「……………」

監視者は無言で地面を蹴った。

「真冬、刀を構えよ！」

一刀斎と真冬は同時に刀を構え、監視者目掛けて疾走。それを見て雫が口を開いた。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫の力ある言葉。監視者は同時にミスに気づいた。だがもう止まる事はできない。大鎌と障壁が激突。

「ちっ……………」

監視者は左手に握る剣で障壁を切断した。その隙をついて一刀斎と真冬の刀が監視者の腹部を貫いた。飛び散ったのは鮮血。

「ぐっ…………この程度で…………なんともろい体だ」

監視者は口から血を吐きながら二人を両手の武器で切り裂く。二人は刀を離して数歩後ずさった。

「逃がしません！」

雫が鉄扇で背中を切り裂く。

「これ以上は…………不利か……………」

監視者は逃げるように地面を疾走。雫は後を追うために足に力を込める。

「深追いするでない！」

一刀斎の言葉が振り向いて今にも走り出しそうな雫の背に届く。

雫はその言葉を聞いて急制動をかける。自分一人では敵わない。冷静な自分が戻ってきた。監視者は空間に亀裂を発生させ、その中に飛び込み姿を消す。雫はとりあえず安堵の溜息をついて後ろを振り返った。誰も死なず、何も失わず、皆が生きていた。

「…………運命に勝てた……………」

雫は溢れる涙を止められなかった。新たな敵の出現、突如現れた一刀斎、謎だらけだった。でも、今は皆が生きている事が嬉しくて仕方なかった。

*

翌日。皆は冬月高校の道場に集まった。目の前には一刀斎が正座をして姿勢を正している。向かい合うように真冬、雫、フリージア、カインがいた。藤堂は道場の隅に背を預けて様子を見ていた。蚊帳の外である。

「まずは皆の生還を嬉しく思う」

一刀斎が第一声を発した。それは皆が思っていた。少し間違えばフリージアとカインは死んでいた。

「……感謝する」

カインは一度頭を下げた。

「また助けられたわね。命の恩人には後でサービスするわ」

フリージアが頬を朱色に染めて真冬に微笑む。

「……監視者とは何ですか？」

真冬は前置きを無視して本題に突入した。フリージアが頬を膨らませて、拳を握った。

「私も気になります。そして、どうして一刀斎さんが知っているのか」

雫も切り出した。

「ふむ。ワシは刹と共に護士として戦っていた事があってな」

一刀斎は瞳を閉じて語りだした。

「おじさんと……？」

雫は瞳を見開いた。真冬は怪訝な顔をした。なぜ雫が知らないのだろう。

「うむ。雫が生まれる前の話じゃ。刹から話を聞いてワシらも監視者に挑んだ。生まれてくる者が過酷な運命に縛られぬようにな。じやが……結果は惨敗だった。そこでワシらは巫女を失った。あの時こそ自らの無力さを痛感した事はなかった」

一刀斎は顔を落とした。

「監視者は不必要に殺さないようだったけど？」

真冬が疑問の声を上げた。真冬と雫はそのおかげで生きている。

「ワシらは生きていても死んでいてもこの世界に与える影響が少ならしいのう。そういう相手には手加減しない」

「……監視者はいつたい何がしたいんだ？」

真冬は納得ができない。理解もできない。

「……監視者は人でもあり、穢れでもある。この世界の均衡を保つ存在だ」

「保つ？ だからずっと同じ運命を辿っていたのか」

真冬はある考えに行き着いた。

「……何度、生まれ変わっても全く同じ結末を迎える。そうすれば極端な変化はない？ 極端な変化がないのならこの地くらいなら一人でも監視できるということかしら」

フリージアも同じ所に行き着いたらしい。

「だが……環境が違う。同じ者が転生しても同じ事をするとは限らんぞ」

カインが二人に向いた。

「だからあの夢を見るのではないですか？」

雫がつぶやいた。三人が雫を驚いた顔で見た。

「……俺はフリージアが死ぬ夢を見た。そして、同じ状況になった……一瞬無理だと思ってしまった」

真冬は顎に手を置いて思考。

「同じ状況になれば諦めてしまふ。そういうシステムね。抗うには前世と決別する必要がある。不可能だと頭では理解している事に、それでもと異を唱えぶつかる必要がある。それは簡単に出来る事ではないわ」

フリージアは呆れながらつぶやいた。これは前世が苦戦するわけだ。答えが一番最初に分かっても抗えたかどうか分からない。いや、自らの意志で立ち向かうくらいの気持ちでないと乗り越えられなかっただろう。だから、一刀斎は運命が変わるまで待っていた。

「そして、仮に変えてしまった場合に現れるのが監視者か」

真冬がつぶやく。一刀斎が現れなければフリージアとカインは死んでいた。真冬と雫はもしかしたらそこで諦めていたかもしれない。「ほほ……さすがは成績優等生軍団じゃのう。正解じゃ」

一刀斎は頷いた。

「だが一つ分かん事がある」

カインがつぶやいた。

「どうして監視者は穢れを維持しようとするのか」

真冬が言葉を補足。

「真冬……穢れとはなんじゃ？」

一刀斎が真冬に質問。途中参加の真冬には分からなかった。視線を雫に向ける。雫は顔を落とした。数秒沈黙してから、ゆつくりと顔を上げてつぶやいた。

「穢れは招かれざる異界の者です。でも……諸説あり……人の負の感情が生み出した産物とも言われています。過去に人は穢れに恐怖し、身を正したとも言われています」

雫は拳を握って言葉を吐いた。これは自らの行いを否定する言葉。「だが放っておけば……穢れはあの空間から飛び出してこの世界を襲う」

カインが雫を睨む。フリージアの故郷はそれが原因で滅んだ。とても捨て置ける存在ではない。

「ならば管理しようというのが監視者の考えじゃ」

一刀斎がつぶやいた。四人は押し黙る。

「じゃが……一人の勝手な考えで死ぬのもおかしいとは思わんか？」

一刀斎が四人を見た。四人は頷く。

「皆で生きて……少しずついい方向に進めていく。それがあべき姿だ」

真冬はつぶやいた。正しいのかは分からない。でも、迷いながらも進んで行こうと思った。

「……私もそう思います」

雫が真冬の手を取った。カインとフリージアが頷く。

「まとまったようじゃのう……ほれ、藤堂出番じゃ」

一刀斎が藤堂を手招き。

「待ってました！」

藤堂が駆け足で一刀斎の隣に座る。そして、四人の向かいに座る。

「なんだ？」

真冬が首を傾げる。

「ああ？ 合宿だって言っただろうが！」

藤堂が手に持った本で真冬の頭部を強打。

「痛いだろうが！」

真冬が叫ぶ。

「ほい。スケジュール」

藤堂がそれぞれに真冬を殴打した本を渡す。各員が内容を確認。

「あのー、どこに剣舞をする時間が？」

真冬が本の内容を見ながらつぶやく。

「ほぼ……せつかくじゃから鍛えてやるわい」

一刀斎が笑った。対穢れ&監視者対策の鍛錬メニューばかりだ。

だが午後5時にはきっぱりと終了。あとはバーベキューなどの遊びの項目だ。

「完璧だろう」

藤堂が笑った。

「ふむ。腕を磨きたかった所だ。異論はない」

カインが頷く。

「私も異論はない。ここで鍛えて、次に会ったらボッコボコにしてやるわ」

フリージアが不適に笑う。

「……行きましょう……難しく考えないで」

雫が微笑む。

「そうだな……行こう、合宿へ！」

真冬が握り拳を掲げた。

「おーー！」

皆が倣って拳を掲げた。皆の表情は笑顔だった。真冬はこのまま笑顔で歩み続ければいいと心からそう願った。

輪廻の鎖 7 前編

輪廻の鎖

― 7 前編 ―

不期的な振動が体に伝わってくる。その振動を体を感じながら真冬は窓の外を見た。窓の外に見えるのは木ばかり。どこまでいってモ木。下に視線を動かせば雪解け水に輝く可憐な花々が見えた。春先取りとはよく言ったものだと思う。ここだけは季節が一つズレているのかもしれない。

現在、真冬は一刀斎が運転する車に乗っている。三列シートの大きな車であり、参加人数6名全員が座る事ができた。当然、車には高齢者マークが張り付いている。皆は一瞬不安だったが一時間も走れば慣れたものだった。むしろ無駄にスピードを上げないだけ安心できた。

「さつて、皆さん！ もう少し登れば到着だ」

助手席に座る藤堂が微笑んで振り向いた。

「やっと着くのね……うつ……吐きそう」

フリージアが口を押さえる。山道を蛇のようにくねくねと曲がりながら登っているため、乗り物酔いが激しい人間には耐えられない。「大丈夫ですか？」

同じ二列目中央に座る雫が背中を撫でる。

「ふっ……未熟」

二列目右端に座るカインがつぶやく。この男は乗り物酔いとは无缘らしい。三列目に一人で座る真冬はフリージアに近い。山道を登ってから強烈な吐き気が襲ってきた。青ざめた顔で車の天井を見つめていた。窓の外を見ても吐き気が収まらないため半ば諦めている。「真冬も死にそうだな」

藤堂が後ろを見てつぶやく。お前のその元気が少しだけほしい、と真冬は車が停止するまで何度も思った。

*

20分弱の走行を終えて車が停止した。そこに見えたのは2階建ての木造で作られたコテージだった。近くにある木で作ったのか、この自然に上手く溶け込んでいた。そのコテージの前にはバーベキューをするための開けたスペースがある。鍛錬も、遊びも十分できそうだ。

車から駆け出すように真冬とフリージアが飛び出した。それから自然に満ちた山の透き通った空気を吸い込む。

「生き返ったー！ー！ー！」

二人が同時に叫んで空に腕を伸ばす。聖地にたどり着いたような爽やかな笑顔を浮かべる二人。その後ろでは乗り物酔いとは無縁な4名が車から降りた。

「さて荷物を置きましょう」

雫が車から荷物を降ろしていく。今日の雫は私服姿だった。以前にフリージアと買い物をした時に買った服らしい。この場にここまで適した服はないだろう。完全な山装備。

「どうしました？」

視線に気づいたのだろう雫が首を傾げる。

「いや……似合ってるなと思って」

真冬が微笑んでつぶやいた。雫は頬を真っ赤にしてうつむいた。

「そ……そうでしょうか？」

「ああ。どこか落ち着いた感じがする。そんな雰囲気似合っているのではないかな」

真冬が素直な感想をつぶやく。雫はさらに顔を赤くして真冬の隣を早足で通り過ぎた。

「あれ？」

真冬は首を傾げた。また何かしただろうか。

「わたしは？」

首を傾げる真冬の前でフリージアが一回転。薄手の白いセーターに、チェック柄のロングスカート。回転に合わせてフワリとロングスカートが舞う。

「戦闘中とはやはり違うな。清楚な感じがする」

真冬は自らが得た感覚を言葉にする。

「ま……真冬にしてはなかなか気が聞いた事を言っわね
フリージアがにこやかに笑った。

「……恋した乙女は何か言ってもらえればいいんだな」
藤堂が荷物を運びながらつぶやく。

「ほほ……青春じゃのう」

一刀斎が雫とフリージアの様子を見てつぶやいた。
「……いつ修羅場になるか恐いんだけど」

藤堂が一刀斎の耳に囁く。

「藤堂……負けて落ち込んだ方にすかさずフォローじゃ。これが漢の道」

一刀斎が耳元に囁き返す。

「さっすが師匠……」

藤堂がニヤリと微笑む。その瞬間に二人は首根っこを掴まれた。
「馬鹿言ってないで入るぞ」

真冬が二人を強制連行。

「真冬って……分かってるの？ 分かってないの？」
藤堂が師匠に視線を送る。

「読みきれん」

一刀斎が瞳を閉じて思考。だが答えは出なかった。

*

真冬はコテージ内を見渡す。玄関から右を見るとテーブルとソフ

ア。左を見ると四人が寝転んでも余裕がありそうな開けた空間があった。ここに布団を敷いて寝るのだろう。

「何この狭さは！」

2階からフリージアの叫び声がした。首を傾げて玄関前にある梯子を上る。2階に頭を覗かせて辺りを見渡した。1階の左側スペースの半分しかない。布団を敷いて荷物を並べたらもう何も置けないだろう。

「必要最低ですよ」

雫は気にしていないのかやんわりと微笑んでいた。

「……まあ、仕方ないか。ここに男四人を詰め込むのは無理があるわね」

フリージアが溜息をついた。真冬は想像した瞬間に寒気がした。こんな狭い空間に男四人。かなりむさ苦しい。

「勘弁してくれよ」

真冬が苦笑いを浮かべて梯子を下ろうとする。

「真冬」

フリージアが今にも降りようとする真冬に声をかける。

「どうした？」

「雫に夜這いしたら駄目よ」

フリージアが悪戯な笑みを浮かべてつぶやいた。雫の顔が真っ赤になる。

「す……するか！」

真冬は梯子からずり落ちそうになる体を何とか支えて叫んだ。

「なら私が夜這いしてあげよっか」

フリージアが同じ笑みを浮かべてつぶやいた。嘘に見えないのが恐ろしい。

「い……いけません。ふ……不潔です！」

雫がすかさず抗議の声を上げる。

「油断してるともらっちゃうよ」

フリージアが悪戯な笑みを雫に向ける。

「むー」

雫が頬を膨らませ、胸の前で拳を握る。怒っているようだ、可愛らしく見えてしまう。それだ毒気がないのだろう。

「ぷっ……なに？　それで怒ってるの」

フリージアが腹を抱えて笑う。

「ほ……本当に怒りますよ」

雫が拳を上げる。

「分かった。分かったから」

フリージアはまだ腹を抱えていた。

「そろそろ開始じゃぞー」

1階から一刀斎の声がした。

「分かりました！」

真冬は返事をして梯子を降りていった。

*

4人は袴、修道着など戦闘に使用する恰好に着替えを済ませてから、コテージの前にある開けた場所に集まった。軽く体を動かしてから整列。向かいにいるのは一刀斎と藤堂だ。藤堂は護士でもエクソシストでもないので参加はしないらしい。

第一メニユーは素振り。穢れと何度も戦ってきた者には不要にも思える行為。だが一刀斎はそれぞれの武器を構えさせた。

「始め！」

藤堂が手を叩いて合図。

それぞれが素振りを開始する。真冬は今日のために渡された刀を強く握り振り下ろす。だが全く馴染まない。今までの刀は握っただけですぐに馴染んだというのに。

「真冬、馴染まんか？」

一刀斎が真冬の不調に気づいたらしい。

「はい……これは……雫の祈りが入ってませんか？」

真冬はずっと雫の祈りが入った武器を使ってきた。他人が祈った武器はどうも扱いにくいらしい。

「ふむ。監視者との戦いで使った刀はどうだった？」

一刀斎が問う。真冬は素振りをしながら思考。何の違和感もなかった。

「自然でしたね」

真冬は思ったままをつぶやいた。

「あれは……雫の母親の祈りが込められた最後の刀だ」

一刀斎の言葉に動揺を現したのは雫だった。

「お母さん……？」

雫が一刀斎を見る。

「ほれ……続けて」

一刀斎が雫に向けて言葉をかける。雫は仕方なく素振りを再開。

「……守れなかった巫女……そして最後の刀」

真冬はつぶやきながら素振りをする。

「相変わらず鋭いのう。まあ、それはまた別の機会に話そう。雫……

……真冬の刀に祈りを」

一刀斎が雫を手招き。雫は素振りを止めて、真冬の手を握る。刀に雫の力が伝わっていく。

「ちょっと……私達は！」

フリージアがナイフの素振りをしながら叫ぶ。その隣では2メートル級の大剣で素振りをするカイン。

「ふむ。フリージアと言ったかのう？ お主は腕の筋力が足らん。

そのまま続けておれ。カインは片手で振れんか？ 小さくしても構わん」

一刀斎が二人に指摘。

「……それで勝てるならやってやるわ」

フリージアはナイフの素振りを繰り返す。カインはぎりぎり片手で持てるサイズに縮小。だが小さくしても大剣だ。一振りするだけでも辛そうだ。

「俺は……？」

真冬は一刀斎に問う。このまま待てと言うのだろうか。

「真冬……護士とは不便だと思った事はないか？」

対する一刀斎は冷静だった。顎に生えた髭を擦りながら言葉をつぶやく。

「不便？　そういえばエクソシストは自由に武器を出せるし、巫女は障壁を張れる……護士は何もないな。強いてあげれば祈りが込められた武器を使えば身体能力が向上するくらいですね」

真冬は刀を見ながらつぶやいた。徐々に刀が真冬に力を伝えていく。

「護士は巫女がいなければ戦えない。それが不便な点だ。ただ護士が巫女を信じ、巫女が護士を信じていれば得られる力は計り知れない……それが唯一の利点じゃ」

一刀斎が真冬の刀を見つめる。真冬と雫が刀を見つめた。

「どうか……折れませんように」

雫が短くつぶやく。真冬に温かい力が伝わる。一刀斎の言葉は感覚的に理解できた。真冬の力の源はこの温かい祈りだ。他の祈りでは駄目なのだ。

「例外があるとすれば雫に近い者が祈った武器ならば限定的に力を扱える場合もある。よく覚えておくのじゃぞ」

一刀斎が念を押す。

「これでだいたい大丈夫だと思います。本当は一日祈りたいのですが」

雫が真冬から手を離す。真冬は改めて刀を見た。眩しく輝く一本の刀。

「武器は出来たけど……これでどうすればいいんだ？」

真冬は素振りを開始。やはり手に馴染む。

「すまんが現在ではそれしかないのう。明日はとっておきの技を教えてやるう」

一刀斎が笑った。

「それだけ！」

真冬が驚きで目を見開く。

「まあピンチになったら巫女を信じ続けるのじゃ。それが護士が長生きする秘訣じゃ」

一刀斎は急に顔を引き締めてつぶやいた。真冬は仕方なく素振りを続行した。

「これは意味があるのか？」

カインは片手で大剣の素振りを続けながらつぶやく。フリージアも納得がいかない顔をしていた。

「ほほ……気が急いておるのう」

一刀斎は一度微笑んで藤堂を見た。

「少し早いが……5分後に第2メニューだ」

藤堂が手を叩いた。

カインとフリージアは一度武器を消して額に浮かんだ汗を拭う。武器を維持してずっと素振りを続けるのはかなりの体力を消耗する。特にカインは大剣だ。並みの体力では続かないだろう。フリージアも投擲する事が多いため長時間形を維持する事はない。維持するだけでかなりの体力を使ってしまった。

「若いのに力の持続力がないのう」

一刀斎が二人に指摘。

「なかなか言うわね。これで強くならなかったら容赦しないわよ」

フリージアが毒づく。

「……終われば分かる」

カインは腕を組んで冷静につぶやいた。

5分という休憩は思ったよりも短く感じた。藤堂が手を叩くのを合図に一刀斎が口を開く。

「第2のメニューは模擬戦じゃ」

一刀斎が宣言。

「またベタね」

フリージアが呆れた。

「戦えるのであれば構わん」

カインが腕を回す。挑戦的な笑みを三人に向ける。

「では初戦は……えっと真冬対カイン」

藤堂が紙を読み上げる。呼ばれた二人はそれぞれの武器を持って対峙する。

「カインは片手で戦うのじゃ。真冬はいつも通りに」

一刀斎が指示を出す。カインが両手で握っている状態から右手だけに持ち変える。それに応じてサイズを自らの身長に合わせる。

「始め！」

藤堂が合図。真冬は合図と共に地面を蹴った。力では勝てない。ならば速さで勝つしかない。こちらは護士の唯一の恩恵である身体能力の強化がある。

「ぬん！」

カインが片手で大剣を振り下ろす。真冬は刀で大剣を受け流す。がら空きの胴に左足での蹴りを繰り出す。

「くっ……」

カインは戸惑った。いつもなら両手で振るう大剣の力でねじ伏せる事ができる。だが現在はねじ伏せる所か、相手に懐に入られている。

「今じゃ。剣を出せ！」

一刀斎がすかさず叫ぶ。カインは左手に意識を集中させる。

「我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

カインの言葉に答え、左手に短剣が形成。真冬は咄嗟にカインの左手を蹴り飛ばす。短剣が手から離れ、形を失う。

「今度は受けれるか」

カインが受け流された大剣を再度、振り上げる。渾身の力を込めて振り下ろす。

「ちっ……」

真冬は半歩下がる。

「受けられます！」

雫が真冬の背に叫ぶ。

「……分かった」

真冬は言葉を信じて刀を振り上げる。刀と大剣がぶつかり火花を散らす。だが刀は折れなかった。

「これが護士の力か。だが単純な力比べで勝てるか！」

カインが右手で力押しをする。その間にも左手には短剣を形成。攻撃一筋だったカインに守りの選択が加わっている。迂闊に蹴りなとすれば短剣で切り裂かれる。

「斬らせてもらう」

真冬が強引に刀を横薙ぎに振るう。激しい火花を散らせて真冬の刀が大剣を切断した。刀は切断に特化した武器だが、真冬本人にもこの切れ味は異常だと思う。

「来い」

カインが短剣を構える。真冬は迷わず再度、横薙ぎに一閃。カインの短剣を切断した。武器を失ったカインに真冬が踏み込む。

放たれたのは高速の銀閃。

「まだ終わらん！」

カインは叫び地面を蹴って後方に飛ぶ。腹部すれすれを刀が走る。「我は望む……穢れを駆逐するための刃を！」

おそらく最後の形成。空高く掲げたのは2メートル級の大剣。両手を使い力の限り振り下ろす。全てを破壊する事だけを考えたカインの剛剣。真冬は剛剣をしっかりと見つめた。

剛音。巻き起こる砂煙が晴れるのを皆が固唾を吞んで見守った。

大剣は深く地面を抉っていた。だが真冬の姿はない。

「負けか」

カインがつぶやいた。真冬の刀がカインの首にピタリとついていった。

「先ほどのように片手で大剣を振り下ろされたら踏み込めなかった」真冬がつぶやく。カインが両手を使った場合は踏み込むと決めていた。確実に避ける自信はなかったが、踏み込める機会はその時し

かなかった。

「カインよ。お主はもう少し防御を学ぶのじゃ。真冬は速さと見極める目を持って」

一刀斎が二人に素早く指摘。

「防御か……エクソシストにはない言葉だな。だが選択肢を増やさねば監視者には敵わんか」

カインが大剣を地面から引き抜いた。

「俺は右腕しか使えないからな。もうそれしかないな」

真冬は溜息をついた。だが右腕一つでも大剣を切断できた。戦い方一つで十分にやれるらしい。

「さて後で特別メニューをやるとして……」

一刀斎が藤堂に視線で合図。

「次はフリージア対雫」

藤堂が手を叩いた。呼ばれた二人が対峙する。

「手は抜かないでね」

フリージアが微笑む。雫が無表情で一つ頷いた。張り詰めた緊張感が辺りを包む。原因は雫から放たれている身が震えるような威圧感だ。まさか戦闘になった途端にここまで変わるとは。フリージアも表情を引き締めた。手を抜いたら大怪我では済まない。

「始め！」

藤堂が開始を宣言。まずはフリージアが後方に飛び距離を取ろうとする。

「我は望む……神聖なる護りを！」

言葉を紡いだ瞬間に鉄扇を開いて地面を疾走。

「下がらせないって訳……なら接近戦ね。我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

後方に飛んだフリージアは背中から障壁にぶつかり、前方に吹き飛ばされる。咄嗟にナイフを形成して地面を疾走。地面を駆け抜けながら左手のナイフをすかさず投擲。

「我は望む……神聖な神の使いを！」

雫が式神を展開。投擲されたナイフを障壁が弾き飛ばす。だがこの程度では油断しない。雫の視線に移ったのは銀閃。咄嗟にナイフを鉄扇で受け止める。予想よりも一瞬速い。先ほどさんざん繰り返しした素振りの効果だろうか。

「どんどん行かせてもらおうわ！」

フリージアが右足を軸にして回し蹴りを放つ。視界を埋めたのは閃光。弾かれるように吹き飛ぶ自らの足を見つめてフリージアは不適に笑う。

「……やるわね」

フリージアの頬に汗が伝う。いつもは後ろにいるのにここまで戦えるとは。さすがに護士抜きで戦っていただけはある。フリージアはチャリと後ろを見た。投擲を続けて力が弱まるのも得策だと思ったのだ。

「下がるでない！」

一刀斎が叫ぶ。

フリージアは舌打ちをして両手にナイフを構える。確かに他に誰もいないなら両手のナイフと蹴りで倒すしかない。仮に1対1なら楽には下がらせてくれないだろう。フリージアは監視者に接近され成す術もなく倒された事を思い出した。もう少し接近戦ができれば凌げた。

「……打ち破ってください」

雫が目の前に式神を移動。雫自身はゆっくりと鉄扇を構える。この守りを突破してみろと言いたいらしい。

「生意気ね！」

フリージアは一度雫に微笑んでから地面を蹴った。左手のナイフをすかさず投擲。予想通りに式神が進路を塞ぐ。ガラスが割れるような音をフリージアは見逃さなかった。

「まずは一枚！」

叫びながら右手に握るナイフで一閃。式神は力を失い地面に落下。それを見ることもなく疾走。手数で勝るしかないのだ。止まらない。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。フリージアの目の前に障壁が展開。刹那、フリージアは左に跳躍。

「正面突破なんてするもんですか！」

フリージアは着地と同時に障壁を迂回。突如、視界に入ったのは細い光。雫が以前の戦いで使用した針のような武器だ。

「つつ……」

フリージアの足を針が掠った。倒れそうになる体を何とか支えて駆け抜ける。

「これでどうです！」

鉄扇での一閃が容赦なく振るわれる。フリージアはバランスが崩れたまま体だけを動かした。ナイフが鉄扇を受け止める。

「下がらず手数で押し切るのじゃ！」

一刀斎がフリージアの背に叫ぶ。フリージアは下がろうとする体を叱咤して左手にナイフを形成。狙いをつけずに振り上げる。決死の一撃を雫は半歩下がり避けてみせた。すかさず視界に入ったのは雫の蹴り。

「ぐっ……こんなに差があるなんて」

フリージアは咳き込みながらつぶやいた。接近戦ではまるで敵わない。だが自然と足が動いた。雫は手は抜かないが時折視線を向けてくる。その瞳は期待の眼差しだった。フリージアなら出来ると雫の視線が応援してくれる。だから踏み込める。

「本当に敵わないな」

フリージアはナイフを握り直して深呼吸。両手のナイフを時間差で投擲。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫は落ち着いて障壁を展開。同時にナイフを再形成。

「ただ……前に」

フリージアはつぶやいて地面を疾走。二本のナイフが障壁に当たり弾かれる。再形成したナイフを強く握り障壁に一闪。渴いた音を

聞いた瞬間に左足に全ての力を込める。

「……追いついてあげるんだから！」

フリージアが障壁に回し蹴りを放つ。障壁はガラスが砕けたように割れた。防御を失った雫が選んだのは接近戦。離れればフリージアはナイフを投擲するからだ。だがフリージアに下がる気はない。ここで下がれば追いつけないから。

フリージアのナイフと鉄扇が激突。激しい火花を撒き散らしながら二人は視線を重ねた。

「追いついたわよ」

フリージアがナイフで鉄扇を押しながらつぶやく。

「フリージアはやはり強いですね」

雫も鉄扇でナイフを押し返しながらつぶやいた。二人は示し合わせたかのように同時に半歩引いた。そして、同時に地面を蹴る。

再度、ナイフと鉄扇がぶつかる。動きが止まった二人は即座に動いた。二つの銀閃が煌く。

「相討ちじゃのう」

一刀斎が試合結果をみてつぶやいた。フリージアのナイフは雫の腹部に当たる寸前で止まり、雫が握る針はフリージアの首に触れる寸前で止まっていた。どちらも即死の一撃だ。

「次は負けないからね」

フリージアがナイフを消しながら微笑む。

「私もです」

雫も武器を収めて微笑んだ。

「次は小休止の後に昼だ！」

藤堂が皆に向けて叫ぶ。

「少し早くないか？」

「そうね」

真冬とフリージアが一刀斎を見つめた。

「根を詰めても意味はなからう。それに本番は明日じゃ」

四人の視線を受けて一刀斎は笑った。今まではお決まりのパター

ンだった。明日は何をするのか真冬には予想もできなかった。

「さてお昼ですか。ここは女性の出番ですね」

雫がレインウェアを脱ぎながらコテージに戻る。

「待ってよ」

フリージアも後に続く。真冬はカインに視線を送る。カインも無言でコテージに戻っていく。

「料理できるのか？」

カインの背中に問うた。

「むろんだ」

カインは振り向いて眉根を寄せる。出来て当然という顔をしている。真冬の頬に汗が流れる。

「お……俺もやるか」

真冬もカインの後に続いた。

*

藤堂と一刀斎は、食事用の折りたたみ式のテーブルとイスを組み立てる。屋外で食事するのに適したテーブルとイスがセットになったもので、ものの数分で完成だ。二人はイスに座り、様子を見る事にした。

白を基調としたネルシャツの上に水色のエプロンを纏った雫と、淡いピンクのエプロンを纏ったフリージアは野菜を包丁で切っていた。二人は持ち運びできる簡易テーブルを組み立て、その上にまな板を置いていた。

その隣で火を起こしているのは真冬。コテージの側にある水道近くでは、カインが底面が空豆型をした兵式ハンゴーの中に、米をとぐ必要がない無洗米を入れていた。そのまま水を入れて炊くだけという加工された米だ。野外では誤ってとき汁と一緒に流してしまう場合もあるので、藤堂と一刀斎は買出しの際に無洗米を選んだのだ。とき汁で山を汚さないという心遣いもある。

「手際がいいのう」

一刀斎が四人を見てつぶやく。

「相談もせずに分担されている。すごいな、こいつら」

藤堂がつぶやいた。

「火くらい起こしたどうじゃ？」

一刀斎がチラリと藤堂を見る。

「パス。俺は食べる専門」

藤堂がテーブルに顎を載せて休む。

「ふむ。現代は料理がでкин男は拾ってくれんのじゃぞ？」

一刀斎が耳元に囁く。

「作ってくれる子を見つけるさ」

藤堂は片手を上げた。

*

あれから30分が経過。食欲をそそるカレーの匂いを嗅ぎ付け藤堂が体を起こす。

「出来たのか、俺のカレーライス！」

何もしていない藤堂が叫ぶ。

「あんたねえ」

フリージアが藤堂に呆れて溜息をついた。

「完成と言いたいのですが……」

雫が苦笑い。その隣で何かをすり潰している男がいた。

「……足りんな。もう少し刺激がほしい」

カインが独語してなにやら赤い草をすり潰している。そして、味を見る。

「……これでは刺激が……ならば」

カインは次には何やら白い草をすり潰す。

「……なにしてるの？」

藤堂が質問。

「カレーライスにはスパイスを入れるのは当然だ。無しなど邪道」
カインが別の赤い草をすり潰す。

「待ってらんねー」

藤堂が起き上がりお皿を取った。刹那、背中に寒気を感じた。

「待て」

カインが藤堂の背を睨む。藤堂は冷汗を流して固まった。

「な……なんでしょう？」

なぜか丁寧な口調で返す藤堂。頬は引きつり嫌な汗がたらたらと流れて止まらない。

「もう少しだ。座れ」

カインは藤堂が座っていた席を見つめる。すり潰す手は止まらない。
い。

「……はい」

藤堂は仕方なく席についた。カインが何かをすり潰す事20分。
どうやら納得したらしくスパイスをカレーに入れる。

「……」

真冬は真っ赤に光るスパイスを見つめる。明らかに辛そうだ。

「カインの料理はこれだから食べたくないのよね」

フリージアが溜息をついた。皆が一斉にフリージアに視線を送る。
「安心して……食べられるから」

フリージアはお皿を取って、兵式ハンゴークからご飯を盛る。それを次々に渡してゆく。それぞれがご飯を盛られた皿を持ち、カレーをかけていく。皆は無言だった。明らかに警戒している。

「では……食すでしょう」

カインがテーブルに座り、スプーンでカレーライスをすくい口に運ぶ。迷う事なく一定のペースで口に運ぶ。特に変化はなかった。
「だから大丈夫だって」

次にフリージアが口に運ぶ。一口、二口。ここまでは変化なし。
皆が安心した所で変化が訪れた。額に汗をかいている。手で扇ぎながら三口。ついに水が入ったコップを掴み。水を一気に飲み。

「相変わらずね……」

額の汗を拭い一言。何やらライバルと戦っているかのような挑戦的な笑みをカレーライスに向ける。

「食わんのか？ 冷めるぞ」

カインが食べない一行を見つめる。皆は一度視線を交わした後に慎重に口に運ぶ。まずは一口。まだ変化はない。

「はっ……余裕じゃないか」

藤堂が早くも二口目に入る。だが二口目を飲み込んだ瞬間に変化が訪れた。

「か……辛い……いや……痛い！」

藤堂が左手で喉を押さえる。右手は水を求めて伸びる。

「はい」

フリージアがコップを手渡す。こうなる事は最初から分かっていたのだろう。

「ありがとう」

藤堂が礼を言い水を飲み干す。

「死ぬかと思った！」

藤堂が額の汗を拭って叫ぶ。

「真冬、どうぞ」

同じく喉を押さえて呻く真冬に雫が水を渡した。真冬も藤堂に倣い一気に飲み干した。

「……辛すぎだろ！」

真冬がカインに叫ぶ。

「辛いカレーなど邪道」

カインが表情を変えずにつぶやいた。

「食事中に叫ぶなんていけませんよ！」

雫が真冬を注意しながらカレーを口に運ぶ。カインと同じように一定のペースで食べている。チラリと視線を雫のコップに。全く減っていない。

「同意だな」

カインが真冬をチラリと見た。真冬はしぶしぶ席に座る。

「辛いなら言ってください。水ならすぐに注ぎますから」

雫が微笑んで真冬のコップに水を注ぐ。

「ありがとう。雫は辛いのは平気なんだな」

真冬は額に浮かんだ汗を拭いながらつぶやく。

「さほど辛いと感じませんけど……？」

雫が首を傾げた。

「おかしいな。雫のだけ違うのか？」

真冬が雫のカレーを一口。同じ痛さすら感じる辛さが口に広がる。

「……一緒だな」

真冬が感想を述べた。

「真冬もなかなか大胆な事をするな」

藤堂がニヤリと笑う。雫はそれを聞いてカレーと真冬を交互に見た。言われなければ意識などしないが、言われれば自然と気になってしまう。

「どうかしたか？」

真冬が首を傾げた。

「雫、残念だけど真冬のキスは先に貰ったわ。一方的だったけど」
フリージアが悪戯な笑みを浮かべて、唇に右手の人差し指を当てる。いつも積極的なフリージアだが、今日はいつもと様子が違う。

やけに大人びて見えた。

「いつ……何時だ！」

真冬はようやく話についてきた。だがフリージアとキスをした覚えはない。

「えっと……私が真冬のベッドを借りた日かな。真冬が寝ている時に……ね」

フリージアが笑う。どこか妖艶な雰囲気をするのは気のせいだろうか。

「……勝手にするなよ」

真冬が肩を落として溜息をついた。

「も……もしかしてファーストキスですか？」

雫が頬を赤らめてつぶやく。フリージア、藤堂、一刀斎も身を乗り出す。

「くだらん」

カインだけは興味がないのか淡々とカレーを食べていた。

「いや……ファーストキスは俺が中学の時に奪われた」

真冬が苦笑いを浮かべて頭を掻いた。

「中学かよ！ 初耳だぜ。俺に隠れていつの間に付き合ってた！ た！」

藤堂が拳を握り叫ぶ。全くそんな気配はしなかった。

「付き合っていない。真冬は中学になったらモテそうだから、先に貰ったとかなってさ」

真冬は思い出したのか苦笑した。場の空気が一瞬で冷えた。その相手が誰だか分かったからだ。

「は……春かよ！」

藤堂がさかさず突っ込む。何とかこの空気を破壊するためだ。

「さ……さっすがシスコンじゃのう」

一刀斎が援護。

「まあシスコンかもな。残念だったな、フリージア」

真冬は二人の空気に乗った。今日だけは悲しい雰囲気とは離れたいから。悲しむのはまた一人の時でいい。

「惜しいわね。ファーストキスを貰えば勝てると思ったのに」

フリージアもこの和らいだ空気に乗る事にした。わざとらしく溜息をつく。

「フリージアはまさか……」

藤堂がターゲットをフリージアに向ける。

「そうよ。ファーストキスよ！ 悪かったわね！」

フリージアが両手を上げて叫ぶ。雫は無言で唇に触れた。慌てて首を振る。

「こちらにも初々しいのが」

藤堂が次は雫をターゲットにした。雫が顔を真つ赤にする。

「そんな不潔な事はしません。でも……真冬が……どうしても言うなら……私は……」

顔を真つ赤にして雫が視線を向ける。真冬は雫を驚いた目で見た。どうしても雫の小さな唇から目を離す事ができなかった。

「もう……入る隙間もないわね」

フリージアが二人を見て微笑んだ。その微笑には悲しみや憂いはなかった。友達を優しく見守るようだった。だがそれと同時に心が痛んだ。どこかで諦められない自分がいるのだろう。

「本当に罪な男だな、真冬は」

藤堂がカレーを口にする。スパイスの辛さと、独り身の辛さが身に染みた。

*

食事を済ませ、洗い物を済ませた一向は軽い運動をして体調を整えてから、個人での鍛錬を進めていた。

真冬は右腕に重り入りのリストバンドを巻いて刀を振るっていた。場所はコテージから徒歩で10分降りた所にある湖。両足をすね辺りまで水に浸し、黙々と刀を振るう。極端に動きを鈍らせてでも通常の速さを出せるようにするためだ。もはや合宿というよりも修行の域に到達している。

チラリと右を見るとカインは鋼鉄よりも固いとされる巨木に対して大剣を振るっていた。この巨木は大陸南であるこの辺りにしかない。あまりの固さから捻りもなく鋼鉄の木と呼ばれている。

カインが大剣を横薙ぎに振るう度に、小さな木の実が落下してくる。この木の実も鋼鉄のように固い。約18メートルはある巨木から落下してくる鋼鉄。直撃すれば怪我をする恐れもある。

その環境の中でカインは落下してくる木の実を左手に握る短剣で弾いていく。攻撃と防御の特訓である。だがどうしても大剣を振るう

のに力が入ってしまう。噂に名高い鋼鉄の木を大剣で切り倒したくて仕方ないのだ。

真冬がカインの様子に苦笑いを浮かべた瞬間に、左側から金属がぶつかる音がした。真冬は刀を横薙ぎに振るいながら視線を向ける。そこではフリージアと一刀斎が模擬戦をしていた。自らよりも強い者と戦うのが一番早いと判断したらしい。殺気すら感じさせる容赦のない怒涛の攻撃を一刀斎は平然と受け止めていた。一発は決めないと気が済まないのか休む事無くナイフを振るい続けるフリージア。

「俺も頑張らないとな」

独語して刀を振るう。この鍛錬なら戻っても場所さえあれば出来そうである。真冬は真っ直ぐに前を見た。この先で鍛錬をしている自らの巫女を想う。

「守らないとな」

つぶやいた瞬間に力が湧いてくる。真冬はただひたすらに刀を振るい続けた。

雫はさらに5分ほど降りた場所で鍛錬をしていた。湖に体を半分沈めてひたすら集中する。自らが使用できる術式を全て展開、それを維持している。

湖に体を沈めているのは体温を上げる術式があるからだ。地に足をつけて行えば暑くて仕方ない。春先取りとはいえ溶けかけた氷が浮かぶ湖は穢れが出現する空間とほぼ同じ寒さであった。鍛錬には都合がいい。

「……………もう少し力が必要ですね」

雫が独語した。今のままでは監視者と本気でぶつかれば敵わない。自分達はまだまだ未熟だ。

「今……………できる事を……………許された時間の中で進めるしかないのでしょうね」

雫はつぶやいてから再度、集中をした。

*

藤堂は折りたたみ式のテーブルを組み立てながら空を見上げた。もう薄暗い。皆は結局鍛錬をずっと続けていた。命が掛かっているのだ。必死になるのも理解は出来る。

「俺は蚊帳の外だけだな」

理解は出来るがついていけないと言うのも本音である。ついつい言っても仕方のない言葉が口から漏れてしまう。

藤堂は皆が来る前にバーベキューの食材をテーブルの上に並べる。ガスボンベ式のバーベキューグリルをテーブルの中央に置いて準備は完了。ふと視線を上げると見慣れた黒髪が見えた。

「おっし。始めるぞ！」

藤堂はニヤリと笑ってバーベキューグリルを使い肉を焼き始める。藤堂、野菜からだろう」

疲れた表情をした真冬がコテージに向かいながら指摘。

「はっ……知った事か。食いたい物をただ焼くだけだ」

藤堂がわざとらしく微笑む。

「お前らしいな」

真冬は藤堂の笑顔を見て微笑んだ。張り詰めていた緊張の糸が切れた感覚がした。皆も一緒なのだろう。安心した顔をしていた。

「さっさと着替えて来いよ！」

藤堂が皆に向けて叫ぶ。蚊帳の外ではあるが、自分にも出来る事はある。真冬達が戻るべき日常に強引に連れ戻す事。どんな馬鹿な事をしてでもだ。

「すまんのう」

皆がコテージに戻った時に一刀斎が藤堂に話しかける。

「いいさ。変な空気になったら一緒に馬鹿をやってくれよな」

いつものどこか人懐っこい笑顔で藤堂が笑う。

「心得た」

一刀斎は短くつぶやいてコテージに戻った。

＊

それぞれが着替えを済ませてコテージの外に出た瞬間に、肉が焼かれる美味しそうな匂いがした。一日体を動かしたため焼かれた牛肉はいつも以上に美味しそうに見えた。

「どうぞ」

雫が箸とタレが入った小皿を渡す。

「ありがとう」

真冬は礼を言って受け取る。

「ぼうつとしてると無くなるわよ」

フリージアがお肉を真冬の小皿に入れる。礼を言おうと思った瞬間に、次はもやしやら、キャベツが小皿に入る。雫が小皿に入れてくれたらしい。

「どんどん食べてください」

雫が微笑む。

「あ……ああ」

真冬は戸惑いながら肉やら野菜やらを口に運ぶ。二人の少女が満足した顔で真冬を見つめていた。

「くっ……なんで真冬ばかり！」

藤堂が箸を握って叫ぶ。

「ジジイと一緒にでは不服かのう」

右に座る一刀斎がつぶやいてお肉を口に放り込む。

「寂しいなら付き合おう」

カインが藤堂の左に移動。

「男二人に囲まれてバーベキュー……はは……これも青春か」

藤堂が力なく笑い小皿一杯に肉を放り込む。

「豪快じゃのう。では、ワシも」

一刀斎が藤堂に倣って肉を小皿一杯に詰め込む。

「それもまた一興」

カインまでも同じように肉を詰め込んだ。男三人は小皿一杯の肉

を競うように食べ始めた。

「ちよっ……私達のお肉ないわよ！」

フリージアが肉と格闘を続ける男三人を見てつぶやいた。

「焦らなくても野菜はたくさんありますよ」

雫は微笑んで小皿に山盛りの野菜を入れた。うつとりとした瞳で見ながらゆつくりと口に運ぶ。

「あんたは草食動物か！」

フリージアは素早く突っ込んでから、早々に肉の確保に乗り出す。

「俺はもういいや」

二人から散々小皿に盛られたためにもうお腹は一杯だった。ふと前を見るとフリージアと藤堂が争っていた。

「私のお肉を渡しなさい！」

フリージアが藤堂から肉を強奪。

「肉は渡さん！今日はやけ食いだー！ー！」

フリージアから再度、肉を奪い返す。しばし睨み合う二人。ふとフリージアが表情を改める。

「……悪かったわ。お腹が空いたからと醜い姿を見せたわね。今日は頑張ったから小腹が空いたの。許して」

瞳にうつすらと涙を流してフリージアが藤堂を見つめる。先ほどの勢いはどこへ行ったのやらか弱さすら感じる涙。藤堂は一瞬で罪悪感が芽生えた。

「なんだ。それなら早く言ってくれよ」

藤堂が微笑んでフリージアに差し出す。刹那、藤堂の手から一瞬で肉が消えた。

「常月の男なんてチョロいもんね」

フリージアが小悪魔の笑みを浮かべ、素早く藤堂から離れて自らの小皿に放り込む。

「な……お前……！」

藤堂が慌てて追いかける。

「いただきます」

ゆっくりとフリージアが肉を口に運ぶ。

「おいしー」

「もう女の涙は信じない」

藤堂ががつくりと肩を落とした。

「はい」

フリージアが自らの小皿に入った肉を藤堂に差し出す。藤堂は訳が分からないという顔をしていた。

「え……？」

「どんな顔をしてるのよ。さすがの私も全部奪ったりなんてしないわよ」

フリージアが微笑む。呆れたようで、どこか楽しそうな笑みを浮かべていた。

「……まあ、そうだよな」

藤堂がいつもの笑顔に向けて自らの小皿を持って、フリージアの隣に座る。

「……………」

「……………」

藤堂が去った後、一刀斎はチラリと横を見た。黙々と肉を食べるカイン。

「寂しいのう」

一刀斎はつぶやいて肩を落とした。

*

食事を終えコテージの中に戻った真冬は黙々と布団を床に敷き始める。

「まさかもう寝るのか？」

藤堂が驚きの表情を浮かべる。

「風呂に入ったら寝たいな。疲れた」

真冬はあくびをしながらつぶやいた。その隣ではカインも布団を

敷いている。

「おいおいおい。ここからが本番だろうが！」

藤堂が拳を握る。どこまで元気なんだこいつは、と心の中で思ったが決して言葉には出さない。

「勝手にしてろ」

布団を敷き終えた真冬がコテージの隣に備え付けられている風呂場に向かう。どうやら湯沸しの装置はあるらしくスイッチ一つでいいらしい。スイッチを押して、電子音が鳴った瞬間。背中に弾力と何とも言えない柔らかさを感じた。

「おっと……」

真冬がバランスを取る。こんな事をするのは一人しかいない。

「一緒に入る？」

フリージアが抱きつき、胸を押し当てながら耳元に囁く。

「フェレアスではふ……普通なのか？」

今まで積極的だったフリージアだが、これは明らかに度が過ぎるような気もする。

「さすがにここまでしないわよ。特別」

「こういうのは段階を踏んでだ……な」

真冬は右手でフリージアの抱擁を解こうとする。

「ここまでしてるんだよ……どこまで鈍くても分かるよね……？」

フリージアが腕に力を込める。放す気はないらしい。

「……分かってる」

「……そんなに雫が大切なのか？ やっぱり護士だから？」

フリージアが言葉をぶつける。真冬に触れている腕は震えていた。後ろは見えないので分からないが、もしかしたら泣いているのかもしれない。

「……俺は雫を守ってあげたい。雫は護士になると言った時も、俺が腕を失った時も……泣いてた。しっかりしてそうだけど……どこか頼りないんだ。だからさ……俺で守りきれるかどうか分からないけど……可能なら守りたい。この命を掛けて」

真冬ははつきりと言った。中途半端な言葉をかけて傷つけないという選択もある。でも、真剣に気持ちをぶつけた相手には失礼だと思ったのだ。

「……そこまではつきり言うなんてさ。だいたいそれは雫に言いなよ……馬鹿。あの子……またボロボロ泣いて……喜ぶんだから」

フリージアが真冬を解放した。真冬は振り向かなかった。

「……ありがとう」

フリージアは瞳に溜まった涙を拭いてから背を向けた。泣いてる顔なんて見せたくはなかった。今は見つともない顔をしていると思うから。

「……ごめん」

真冬はフリージアが去ってから短くつぶやいた。

*

雫は就寝用の服を整理している時に梯子を上ってくる音がして振り向いた。そこにいたのは瞳を真っ赤にしたフリージア。

「……」

無言で雫が見つめる。どう声をかけていいのか考えているようだ。情けは無用よ。敗れた女を笑いなさい」

フリージアは自嘲の笑みを浮かべた。そのまま立ち尽くしていると、ゆっくと雫が近寄ってきた。何をするのかと思っているとフリージアを雫が優しく包んだ。

「……そんな事を言ったら駄目です。私はどんなフリージアでも笑いませんよ」

優しい言葉がフリージアの心を温めていく。

「う……止めてよ。恋敵に……慰められるなんて……」

フリージアは逃れるために体を動かす。でも、雫は放してくれなかった。

「友達が泣いているのです。元気になるまで放しませんよ」

雫はしっかりとフリージアを抱きしめた。

「本当に敵わないな……もう……いいや……ここまできたら……応援してあげるわ」

フリージアは優しく微笑んだ。悔しくはある。でも、雫なら良いと思えた。

「ありがとう……ごめんね」

感謝と謝罪の言葉。謝罪の言葉なんて聞きたくはないが、どこか嫌味を感じなかった。その言葉を受け入れている自分がいる。

「そうと決まれば……覚悟しなさい」

フリージアがいつもの不適な笑顔を浮かべた。雫はフリージアを解放して小首を傾げる。

「何するんですか？」

「後のおっ楽しみー」

フリージアが楽しそうに笑う。

「気になりますよー」

雫が腕を上げて抗議。だが結局フリージアは教えてくれなかった。

*

高さ20メートルはあるだろう巨木の枝に黒いロープを纏った人物が立っていた。見つめる先は一つのコテージ。

「……ここで襲うのもありか」

コテージを見つめながら淡々とつぶやく。彼らが寝静まった所を襲えば、誰か一人くらいは重傷もしくは即死させる事もできるだろう。だが、行動に移らないのは傷が完全に癒えていないからだ。戦闘はできるが傷口が開き、思わぬ不覚を取る可能性もある。

「不便な体だ」

自らの体が穢れに近くないのが残念だった。どちらかと言えば人に近い。傷つけば同じように血も流れる。

「ここは人に倣って会話くらいするべきかもしれないな。対話で解

決できる人間がどれだけいるのかは知らないがな」

黒いローブを纏った人物は枝から跳躍。突如出来た空間の裂け目に入り姿を消した。

*

お風呂が沸いた事を知らせる電子音が鳴ったのを聞いた真冬は少女二人に声をかけた。

「沸いたぞー！ー！」

2階に叫ぶと二人はバスタオルと就寝着を持って降りてきた。

「先に入らせてもらっわ」

「すみません」

にこやかに笑うフリージアに、ペコリと頭を下げる雫。強気な姉に、しっかりした妹のような雰囲気漂わせている二人を男四人が見送る。

二人が出るまではゆっくりしていようと布団の上に腰を降ろした時だった。何やら不審な動きを見せる二人組み。

「ここは……行くよな？」

藤堂が一刀斎に囁く。

「もちろんじゃ」

一刀斎がニヤリと笑い腰を上げる。

「お前ら……まさか」

真冬が二人の前に立ち塞がる。

「少しくらいいいだろう」

「なんなら真冬もどうじゃ」

道を塞がれた藤堂と一刀斎が真冬を説得。

「駄目だ！」

真冬が強気に言葉を発する。だがこの程度で止まる二人ではない。

「これを見ずして何のための男か！」

「そっじゃー！」

二人は負けじと強気に迫る。

二人の勢いに押されて真冬はついに最後の関門に背をつけた。このドアを開ければ脱衣所。そして、ガラスのドアを開ければ二人の目的地。

「いやいやいや。勝手に見たらいけないだろう。落ち着けよ」

真冬がなだめる。その時に二人の理性を完全に破壊する声が聞こえた。

「さ……触らないで下さい。くすぐったいです」

「いいでしょう。女同士なんだから」

雫とフリージアの声だ。

「こ……これは……夢にも見たシチュエーション！」

「真冬……ここで朽ちるか、退くか選ぶのじゃ」

藤堂が拳を握り、一刀斎が刀を抜いた。

「ちょ……真剣は駄目だろう。カイン、助けてくれ」

真冬の顔が青ざめる。本を読んでいるカインに視線を送る。

「くだらん」

カインは本に視線を向けたままだ。

「さあ……真冬。どけ」

藤堂がニヤリと笑う。

「どかねば……斬る」

一刀斎の刀が眩しく輝いた。真冬は生唾を飲み込む。

「私はそろそろでるわ。あまり長くお風呂に入らないから」

フリージアの声と共にドアが開く音。おそらく脱衣所にいる。

「今だ！ 師匠」

藤堂が叫ぶ。

「成敗！」

一刀斎が刀を振るう。真冬の背筋に寒気が走った。成敗されるのはお前たちだろうと心の中でつぶやいたが真剣が迫ってきている。
「一か八か」

真冬は迫る刀を一指し指と、中指で挟む。一瞬で力を込める。真

冬の額に触れる寸前で刀が止まった。

「白刃取りじゃと！」

一刀斎が目を見開いた。命の危機に晒されればどうやら出来るらしい。安堵の息を吐いた時に後ろのドアが開いた。

「あんたたち騒ぎすぎ。ゆっくりお風呂も入れない」

バスタオルを体に巻いたフリージアがそこに立っていた。

「ぬおーーーーー！　これだーーーーー！」

藤堂が拳を握って叫ぶ。

湿った淡い金髪に上気した頬。色っぽさが2倍、いや3倍以上はあるだろうか。

「ほほ……長生きはするものじゃのう」

一刀斎が刀を納めて微笑む。

「この……変態と……エロジジイ！」

フリージアがすかさず藤堂の腹部に膝蹴り、一刀斎には正拳突きを放った。

「ぐえ……」

「見つかってしまった罰じゃ……甘んじて受けよう」

一刀斎の腹部に正拳突きがめり込む。二人が同時に倒れた。

「ふう。全く……さて真冬はどうしようかしら」

フリージアが顎に手を置いて思考。

「俺は止めようとしてだな」

真冬が慌てて説得。

「あ、そうだ。サービスするわ」

フリージアがニヤリと笑う。何をするのか真冬は首を傾げる。嫌な予感がしたのですぐに動けるように準備。

「雫ーーーー、変態は倒したわ。出てきて良いわよ！」

フリージアが叫ぶ。

「ありがとうございます。では、出ますね」

雫の声がしてドアノブが回転。

「やっぱりかーーーーー！」

真冬は逃げるように駆け出した。雫はドアを開けた瞬間に背を向けて駆け出す真冬が見えた。雫は顔を真っ赤にしてドアを閉めた。ドアは壊れるのではないかと思うような轟音がコテージに響く。

「ちっ……逃げたか。せっかく距離を縮めてあげようと思ったのに」フリージアが腰に手を当てて溜息をついた。

「結構です!」

雫がドアの向こうから叫ぶ。

「本当に常月の人間は奥手ねえ。そう思わない、カイン?」

「全くだ」

カインは本から視線をフリージアに。全く動揺していない。ここまで自然だと違和感がない。フェレアスの人間は予想以上に大胆らしい。

「勘弁してくれ」

真冬は重い溜息をついた。

気絶から回復した藤堂と一刀斎は雫の説教を一時間聞かされ、二度としないと誓約書にサインをしてから解放された。こうして合宿初日は過ぎていった。

輪廻の鎖 7 後編

輪廻の鎖

― 7 後編 ―

腰まで伸びた金髪を揺らしながら、とある女性が山道を歩いている。年齢は20代中頃だろうか。一定のペースでただひたすらに歩を進める。

「ここかしら」

女性が顔を上げる。見えたのは2階建てのコテージ。

「ずいぶんと久しぶりに会う気がするわ」

女性は年齢に合わない弾んだ声でつぶやき、緑色の瞳を優しく細める。先ほどまで一定のペースで歩いていた女性は弾んだ気持ちを抑えられずにペースを上げる。

女性がペースを上げた時にコテージのドアが開いた。外に出てきたのは女性と同じ眩しい金髪の背の高い男性。女性が満面の笑顔を浮かべた。ペースはさらに上昇。

「カーーーーイーーーーンーーー!!」

女性が勢いはそのままにカインに抱きついた。

「ぐっ……姉さん……どうしてここに……」

走った勢いのまま抱きついてきた女性を何とか支える。

「心配だからに決まってるでしょ？ 全く連絡を寄越さないんだから。フリージアちゃんはちゃんと連絡してくるのに」

女性が頬を膨らませる。

「そういうのは……合わん」

カインがそっぽを向いてつぶやく。

「カインらしいわね。フリージアちゃんは？」

女性が抱きついたまま質問。

「まだ上ではないか？ 時間を考えろ」

カインが溜息をついた。時刻は5時だ。カインはどうも体を動かしていないと落ち着かないため外に出たのだ。

「ふーん。寝顔でも見てこようかな」

女性がカインを解放して楽しそうにコテージに入っていく。

「不審人物だと思われないういにな。近くに大人しそうな顔をした危険なのがいる」

カインがつぶやいた。それが雫に対して持っているカインのイメージだ。普段は草食動物のように大人しい。だが、戦闘の時や、怒らすと危険度が急上昇。絶対に敵にたくはない人間だ。

「あら。フリージアちゃんの言ってたライバルね。これは見ておかないと」

さらに上機嫌になって梯子を掴む。だがその前に女性の視線が左に。誰を見ているのかはすぐに分かった。おそらく真冬だろう。

真冬は毛布に包まって眠っていた。

「……………」

女性が無言で真冬を採点中。カインは溜息をついて、この自由な姉が何かしないか不安で仕方なかった。

*

同じ頃。フリージアは寒気を感じて瞳を開けた。

「ゴホっ…………ゴホっ…………なんで…………何ともなかったのに…………」

咳が止まらない。同時に強烈な吐き気がする。原因はすぐに分かる。以前、戦った穢れが残した呪いだ。

「ゴホっ…………うっ…………」

一つ咳をした瞬間にフリージアの顔は真っ青になった。手に感じるのは生温かい感触。目に飛び込んできたのは鮮血。

「…………ふふ…………結局死ぬんだ…………恋にも負けて…………無様に死ぬ。やつてられないわね」

フリージアは儚く微笑む。でも、ここで死ぬわけにはいかない。そんな時にフリージアの声で目が覚めたのか雫が起き上がる。異変を感じ取ったのだろう。すぐに視線をフリージアに。

「すぐに浄化の術式を使います」

雫が深呼吸。フリージアは瞳を閉じた。まだ死ねない。生きて抗いたい。

「我は望む……神聖なる癒しを」

青い光がフリージアを包む。

「……少しはましになったけど……」

フリージアは血がついた手を見つめる。効果が薄れている。

「やはり私の術式では……」

雫が顔を落とした。

「まだ戦えるだけましよ」

フリージアが雫に微笑む。無理をしているのが自分でも分かる。

でも、雫が悲しむ顔は見たくなかった。

「ライバルと仲良しになるなんて成長したわね、フリージア」

落ち着いた女性の声。

「その声は……セシリア姉さん！」

フリージアが弾んだ声を上げる。

「当たり前」

梯子を上ってきたのは見慣れた眩しい金髪。カインの姉であるセシリアだ。家族がいないフリージアには姉のような存在である。カインとパートナーを組んでいるのもこの義理の姉の影響が強い。

「どうしたの？ いつ常月に？ いつまでいるの？」

フリージアは体調が悪いのを忘れたように質問を繰り返す。雫はこんなに嬉しそうにしているフリージアは始めて見た。

「あらあら。フリージアちゃん、子供みたいね」

セシリアが梯子を上りきって微笑む。

「だって……久しぶりなんだもん」

フリージアがはにかんだ。

「まずは……はい。フリージアちゃんの聖書よ」

セシリアが一冊の分厚い本を手渡す。

「これが……聖書。扱えるのかしら」

フリージアがまじまじと見つめる。

「これを扱えないと後方支援のエクソシストは辛いわ。いつそ巫女になった方がいくらいよ」

セシリアの声のトーンが一つ下がる。表情は真剣だ。

「……分かってる。でも……その前に……メールで伝えたよね」

「……死なせないわ。そのために来たんだから」

顔を落とすフリージアにセシリアが優しく微笑む。

「どういう方法ですか？」

雫がセシリアに問う。

「……巫女に教えるത്？」

セシリアが微笑んで質問で返す。雫は拳を握って口を開く。だがその前にフリージアが口を開いた。

「ごめんね。雫に冷たい態度を取るなら……例え……セシリアでも……」

フリージアがセシリアを見つめながらつぶやく。だが途中で口を開ざしてしまった。変わりに口を開いたのは雫。

「エクソシストも巫女も関係ありません。私は友を救いたいです。どうか……教えて下さい」

雫が頭を下げた。セシリアは再度、優しく微笑む。

「いい友を持ったわね。フリージアちゃん」

セシリアがフリージアを撫でる。

「うん」

フリージアは微笑んでから頷いた。

「方法の一つ……聖書の中に能力を高める術式があるわ。それを教会で複数のエクソシストで使用する。浄化の術式は雫さん……あなたが勤めなさい」

セシリアが雫を見つめる。真摯な瞳。その瞳は覚悟を問うていた。

おそらく体にかかる負荷が予想以上に高いのだろっ。

「フリージアのためなら……やります」

雫が頷いた。

「なら……合宿が終わったらフェレアスに行くわよ。ここではみっちり鍛えてあげるわ」

セシリアが微笑み、再度頭を撫でる。

「うん。お願い」

フリージアは安心した表情で一度だけ頷いた。

*

真冬は2階が騒がしい事に気づいて目を覚ました。起き上がり軽く体を動かす。悪くはない。

「起きたようじゃな」

一刀斎は袴に着替えながら真冬に声をかける。

「はい。今日は何か教えてくれるんですね？」

真冬が一刀斎に問う。一刀斎はニヤリと笑う。

「護士に許された特別な技じゃ。雫の愛に感謝して使用するように」

「愛い！」

真冬が驚きに目を見開いた。どんな技なのだろうか。

「後のお楽しみじゃ。では……先に行くぞ」

一刀斎は袴を着終えて外に出る。真冬は頭を掻いた。

「愛に満ちた必殺技。護士ってすごいな」

藤堂が瞳を輝かせる。

「はあ……」

真冬は不安で溜息が出た。

*

軽い朝食を終えて、朝の鍛錬は巫女組みとエクソシスト組みに分

かれた。

袴と巫女服に着替えた真冬と雫は例の特別な技を教えてもらう予定だ。コテージの前にある開けた場所で二人は一刀斎を見つめる。

「さて……まずは質問じゃ」

一刀斎が刀を真冬に向ける。質問に答えるという事らしい。

「はい」

真冬が頷く。

「護士の力の源は……なんじゃ？」

「巫女の力ですかね」

一刀斎の問いに真冬が答える。一刀斎は渋い顔をした。刀を雫に。

「巫女の祈りですね」

雫は自らが祈りを捧げた刀を見つめる。

「うむ。正解じゃ。護士は巫女が祈ってくれなければ凡人に等しいじゃが、何も出来ない訳ではないのじゃ」

一刀斎の言葉に耳を傾ける。何か他に出来るなら身につけたい。

「それは……」

真冬は緊張した声を出す。

「巫女の祈りを完全に解放する事ですな」

雫が答えた。

「……………」

一刀斎が無言でうな垂れる。どうやら一番美味しい所を持っていかれたらしい。

「完全に解放？」

真冬はついていけない。

「真冬であれば刀ですね。その中に込めた祈りを一気に完全解放するんです。一時的に護士の能力を高める事ができます。ただし祈りの消費も激しいです。使い切れれば無力になる事を忘れないで下さい」

雫は一刀斎がうな垂れている間に全てを説明した。

「そんな切り札があったなんて。先に知っていれば」

真冬が悔しそうに拳を握る。

「簡単にできる技ではないぞ」

復活した一刀斎が言葉をかける。

「そうなのですか？」

真冬は使用した事がないので分からない。

「試してみる。まずは刀を構えて力を込める」

一刀斎が刀を構えながら真冬に言葉を伝える。真冬も倣う。

「そのまま力を引き出し続けるイメージを……」

一刀斎の言葉に反応して白銀色に輝く刀がさらに輝きを増す。真冬の刀も同じように輝く。

「ぐっ……なんだこれ……力が強すぎる……」

真冬が顔を歪ませる。湧き上がる力が真冬の体を内側から破壊しようとしている。

「3分が限界じゃ。それ以上使えば身が朽ちると思え！」

一刀斎も余裕はないのか顔を歪ませて叫んだ。

「こんな状態で戦え……るのか！」

真冬の体を激痛が襲う。これでは自らを破壊しているようなものだ。強い力を使うならば、それなりの代償を払えという事らしい。

「行くぞ、真冬！」

一刀斎が刀を振り上げる。刹那、姿が消えた。

「こんなに違うのか！」

真冬は咄嗟に刀を構える。人外を越えた速度で接近した一刀斎の初撃を受け止める。受け止めた瞬間に一刀斎は半歩下がる。

「……桜一刀流奥義……乱れ桜！」

銀閃が煌く。真冬が反応できたのは4連撃目まで。目では見えないう高速の連撃を体の感覚だけで受け止めていく。だが次第に速くなる連撃に体が追いつかない。

「終いじゃ」

ピタリと刀が真冬の首に当てられる。5撃目は全く見えなかった。……嘘だろ……これが護士の切り札」

真冬は体の震えが止まらなかった。あまりにも速すぎる。

「じゃが……これが限界じゃ」

一刀斎の刀が光を失う。同時に真冬の刀も光を失った。

「祈りが……きれたのか」

真冬が刀を見つめる。刀からは力が全く伝わってこない。実戦でこの状態になればただの足手纏い。だがあの技が使えるのであれば切り札にはなる。

「技を教えてください」

真冬はすぐに頭を下げた。

「そのためにワシがおるのじゃ」

一刀斎は笑う。

「ありがとうございます」

真冬は顔を上げて礼を述べた。

*

フリージアとカインはコテージから10分ほど降りた場所にある湖の近くに来ていた。先日、特訓をした場所だ。

「さて……まずは聖書を使った実戦を披露ね」

セシリアがカインを手招き。

「……戦いになるのか？」

カインは大剣を形成して溜息をついた。

「鍛錬だと思いなさい。たまには打ちのめされるのも必要よ」

セシリアが笑う。次の瞬間には表情を引き締める。刹那、カインの背に寒気が走る。強烈な殺気。

「……笑っていたと思ったら……すぐにこれか」

カインが大剣を強く握る。姉の変わりようは今でも慣れない。普段は優しそうに微笑んでいる。だが、一度真剣になれば強烈な殺気を放ってくる。雫を危険だと思うのは半分はこの姉の影響かもしれない。

「……我は望む……穢れを貫く光の矢を……」

セシリアの冷たい声に応じて、聖書が開く。一定のページで止まった瞬間に光の矢が六本出現。カインは大剣を片手で持ち替え、左手に短剣を形成。

「貫け！」

声に応じて宙に浮いた光の矢がカインに向けて空を切る。

カインは大剣を力任せに横薙ぎに振るう。光の矢を剣圧で全て弾き落とす。次の瞬間には隙なく短剣を構える。全く油断などしていなかった。だが目の前には鋭利な瞳を向けるセシリアがいた。

「遅い」

短い一言と同時に閉じた聖書でカインの左腕を殴打。短剣が落ちていくのも見ずに、すかさずカインの腹部に蹴りを放つ。

「ぐっ……」

カインが数歩後ずさる。だがすかさず大剣を振り上げる。ここで引いたら攻撃の機会はない。

「……我は望む……穢れを滅す異界の友を……」

セシリアが再度言葉を紡ぐ。再度、聖書が開くと同時に、セシリアの右隣にある空間が裂けた。まるで穢れが出現するかのような光景。だが眩しいばかりの閃光が辺りを包む。

カインは構わず大剣を振り下ろす。セシリアは瞳を閉じて無防備。こんな機会を逃すつもりは毛頭ない。

「……マカちゃん、手加減してね」

セシリアが瞳を開けて右隣を見た。刹那、閃光が辺りを包む。何かが折れる音が響いた。

「な……に？」

カインが声を上げた時には大剣が折れていた。そして、全身の力が抜ける。膝について顔を上げた時には目の前には槍を持った天使がいた。槍の柄で腹部を殴打されたのだろう。

「お疲れ、戻っていいよ」

セシリアが天使に笑いかける。天使は何事もなかったように光となって消えた。

「召喚……？」

フリージアは肩を震わせて数歩後ずさる。

「フリージアちゃんもこれくらい出来るようになってね」

笑顔で話しかけてくるセシリア。次元が違いすぎる。この人は笑いながらカインとフリージアを殺せる。それも気づかないうちに。

「逃げたら駄目よ」

セシリアが瞳を鋭く細める。フリージアは金縛りにあったかのようにならなかつた。

「うん。若い子は素直でないと。特訓始めるよー」

セシリアが笑顔で拳を上げた。

「お……お願いします」

フリージアは何とか言葉を搾り出した。

*

高速の銀閃がぶつかりあう。遠目で見ている雫には衝突の際に飛び散る火花しか見えない。雫は二人の刀が力を失った時に再度祈りを込めているのだ。

「ようやく追いついてきたか」

一刀斎が刀を振るいながらつぶやく。手は休めない。

「なんとか……ですけどね」

額に汗をかいて何とか速度を合わせる。こちらは全く余裕がない。気を抜けば高速の一閃が真冬を切り裂くだろう。

「……来い」

一刀斎が半歩引いて刀を構える。真冬は深呼吸をしてから踏み込む。一刀斎が一度瞬きをした瞬間に三つの銀閃が煌いた。

「……この短時間では上出来」

一刀斎は全てを受け流し、から空きになった真冬の腹部に拳をめり込ませる。

「ぐっ……まだ敵わない……」

真冬は力を失って倒れ込む。

「ふっ……言ったじやろ。ジジイもまだ現役じゃて」

一刀斎は真冬の肩を掴み支えた。それと同時に視線を前に向ける。

「……そろそろ出てきてはどうじゃ」

一刀斎が前方を見てつぶやいた。

「やはり貴様は気づくか」

涼やかな声が木々の合間から聞こえた。姿を現したのは黒いローブを纏った監視者。真冬は慌てて振り向く。

「その物騒な物はしまってくれないか」

監視者は武器を持たずにゆっくりと歩いてくる。視線は真冬の刀から逸らさない。真冬は視線を一刀斎に向ける。

「戦う気はないらしいのう」

一刀斎が刀を下げる。それを見て真冬も刀を下ろした。だが警戒は緩めない。雫は二人の後ろで鉄扇を構えて様子を窺う。

「そこまで構えられてもな」

監視者はつぶやいてフードを取った。眩しい銀髪をした中性的な顔立ちに、穢れを思わせる真紅の瞳。人とも穢れとも見える不思議な印象の人物だった。

「ワシも顔を見るのは始めてじゃのう。長生きはするものじゃな」

一刀斎が睨みながらつぶやいた。

「目的は何だ」

真冬が一步步む。

「人間らしく会話をしようと思ってな。不服か、織部真冬？」

監視者は不適に笑う。

「……ならば話を聞こう」

真冬は鞘に刀を納める。

「迂闊です！」

雫が後ろで叫ぶ。だが真冬は武器を持たずにさらに一歩進む。

「その距離……一息つく間に殺せるぞ。いいのか？」

監視者は真冬に真紅の瞳を向ける。

「ああ。話す気があると伝えているつもりだ」

真冬は真紅の瞳を受け止めた。

「ならば……こちらの用件を言おう」

監視者はようやく本題を切り出すらしい。三人は言葉を待つ。

「ここ……常月の穢れが他の地よりも強力なのは気づいているか？」

監視者はまず問うた。

「……この地の穢れが一番強いじやろうな」

一刀斎が变わりに答えた。

「そうだ。理由は簡単だ。この地が世界の中心で人と穢れの影響を強く受ける土地だからだ」

「人と穢れの影響を受ける？」

監視者の言葉に真冬は疑問の声を上げた。

「そうだ。穢れとはこの世界に生きる者の負の感情が生み出す者。

現在で言えば驕った人間が生み出していると言っても過言ではない」

監視者が溜息をついた。こちらに下等生物を見るような目を向けてくる。何十年も何百年も驕り高ぶった人間を見てきたのだろう。

「……人が生み出した者なら、穢れに倒されるのも自然だと言いたいのですか？」

雫が監視者を睨む。

「それも必要だと思う。自らが招いた事だ。身を持って償うしかあるまい？ 善良な人間は悔い改め全うな生活に戻るさ」

監視者が不適に笑う。

「あなたと話しても無駄のようですね」

雫が鉄扇を握る。

「待ってくれ！ ならば何故、監視者なんているんだ。放っておいてもバランスは取れるのだろう？」

真冬が皆に問う。雫は目を見開いた。監視者も驚いたらしく目を見開いた。

「ほう。そこまでたどり着いたか。ただ甘いだけではないらしいな。私が存在する理由……それは簡単な事だ。放っておけばバランスが

取れる事はない。人間はいつか穢れに全て飲み込まれる」

監視者はそこで言葉を切った。三人は言葉を返す事ができなかった。

「このまま穢れを倒し続ければ、穢れは外に出る事はない。限られた空間の中で、君達のような護士やエクソシストに狩られるだけ。それで済めば私は何もしない」

「不都合があるのか？」

淡々と語る監視者に真冬は問うた。

「ああ。穢れに恐怖しない人間はさらに好き勝手に生きる。自らの生き方を反省しようとはしない。その結果穢れはさらに強さを増していく。君達では手に負えないほどにな。最終的には私でも手には負えない穢れも一体だけいる。奴が外に出たら終わりだ」

監視者は悔しそうに拳を握った。

「……そうか。もしそいつを倒せたら終わるのか？」

真冬は顎に手を置いて思考。監視者はどうやらバランスを保って、一体の穢れが外に出るのを恐れているらしい。その穢れを倒せば監視者を縛るものはない。

「織部真冬……ふざけているのか？」

「いいや。ふざけてはいない。問いに答えてくれ」

真冬は真摯な瞳を向ける。

「……そいつを倒せば終わりだ。全部な。後は私が影で穢れを倒していく。もう護士もエクソシストも必要ない」

監視者は空を見上げた。ずっとそう願っていた。だが叶えられない願い。

「一人では無理なら力を貸す。皆で倒そう。俺は君を縛る鎖を断ち切ってあげたい」

真冬が手を差し出す。監視者は驚いて真冬を見つめる。

「……君は危険だな。まさかこの私を口説こうとはな」

監視者がぼつりとつぶやく。

「駄目か？」

「口先だけの人間を信じるほど甘くはない。まずは見せてもらおう。君達の力を……。次に死ぬのは……君以外の全て。君の大切な巫女も含まれている」

監視者は雫をゆっくりと指差した。

「春……フリージア……カイン……そして、最後に雫が死んで終わり。それがあの少年が通った道か」

真冬が拳を握る。

「そうだ。少年は最後は絶望して戦わなかった。穢れが外に飛び出して故郷が火の海になってもな」

監視者は最悪の結末を述べた。

「……一つの街が焼かれ、人は悔い改めたのでした……それで穢れの強さが弱まり、めでたしという訳じゃな」

一刀斎がまとめた。それを何度も繰り返しているらしい。

「そうだ。人でも穢れでもある私に与えられた使命だと思っている。その力も与えられている」

監視者が拳を握る。

「……そのシナリオ通りにはさせない。雫は絶対に死なせない！」

「……では、見せてもらおう。今夜、この地を守ってみせる。ここが突破されたら私のシナリオ通りだ」

監視者は背を向けて去って行った。

*

光の矢が淡い金髪を切り裂く。宙に舞う髪を見ずにただ足を動かす。

「逃げてばかりだと……貫くよ」

セシリアが冷え切った視線を向ける。フリージアは荒い呼吸を一度深呼吸して整える。聖書に力を込める。

「我は望む……穢れを貫く光の矢を！」

2本の光の矢がセシリアを狙う。同時に左手にナイフを形成。

「考えるようになったわね」

セシリアが微笑む。刹那、光の矢がセシリアに迫る。右に跳躍して回避。着地と同時に地面を蹴った。一息でフリージアとの距離を詰めたセシリアは左手に騎士剣を形成。

「せいっ……！」

横薙ぎに振るわれた剣をナイフで受け止める。

「ぐう……」

フリージアの表情が歪む。ナイフでは力負けをしてしまう。

「どうするの？」

セシリアは亀裂が入ったナイフを見つめた。まるで歯が立たない。勝てるわけがない。だが引くわけにはいかなかった。瞳に力が宿る。「それでこそフリージアちゃんだわ」

セシリアが微笑む。微笑んではいるが力は緩めない。ナイフはついに耐え切れずに砕け散った。フリージアは半歩下がり振り下ろされた剣を回避。追撃に横薙ぎに振るわれた剣も回避した。

ナイフを再形成した時に、セシリアの声が聞こえた。咄嗟に身構え顔を左向きに背けたが遅かった。フリージアの長い髪が光の矢に貫かれたのだ。外してくれたのが分かる。実戦なら頭部を貫いていただろう。意気込んでみたが結局敵わなかった。

「これが力の差ね」

フリージアが地面に落ちた淡い金髪を見つめた。それと共にナイフを形成。右に伸びている髪を切り裂く。片方だけ長いのは見苦しい。

「後ろ向いて」

セシリア武器を収めて指示。フリージアは背を向けると同時にナイフを手渡す。後ろの髪が切られて風に流れていく。

「……似合っかな、ショート」

フリージアが肩までの長さになった髪に触れる。

「私は好きよ」

セシリアが微笑んで髪を撫でる。どうやらセシリアはショートの

方が好きらしい。何だか先ほどの矢には悪意を感じる。

「まあいいかな。失恋もしたし……すっきりしたわ」

フリージアはぼつりとつぶやく。

「もう少し続けたら戻りましょうか」

「うん」

フリージアは再度、聖書を強く握った。

*

それぞれの鍛錬が終わった時には薄暗くなっていた。本日の夕飯は魚ばかり。大小様々な魚が簡易テーブルの上に置かれている。

「どうよ」

藤堂が胸を張る。一日かけて釣って来たらしい。

「なあ釣れなかったらどうするつもりだったんだ」

真冬が魚を見てつぶやく。

「その時はお湯で温めれば食べれる物で済ませるつもりだった」

藤堂がニヤリと笑う。

「ほほ……それは切ないのう。まあ、これだけあるのだ。食すしよう」

一刀斎が魚を捌き始める。その隣ではカインが魚を串に刺して焼き始めた。

「ところで昼に監視者が来たのは本当なの？」

フリージアが真冬に問うた。

「ああ。今夜……穢れが出現する」

真冬は表情を引き締める。

「詳しく聞かせて」

フリージアが迫る。カインも視線を寄越した。

真冬の説明を受けた二人は難しそうな顔をしていた。

「理由は分かったわ……でも、はいそうですかと死ぬつもりはない

わ。それに雫も殺させない」

フリージアが雫を見つめる。カインも一つ頷いた。

「死なせないわ。そのために私達がいるのよね、おじいさん」

セシリアが一刀斎に微笑む。

「そうじゃのう」

一刀斎は魚を捌きながら微笑む。

「なら……見せてやろう。俺達がどこまで出来るのかを」

真冬が皆を見た。皆が頷く。

「……フリージアちゃんが惚れた男か」

セシリアが頬に一指し指を当てて真冬を見つめる。今回の出来事でだいぶ成長したのだろう、凜々しさすら感じさせる表情。ひたすら進もうとする想いが伝わる瞳。

「なるほどね……何があっても死なせてはいけないわね」

「若い世代を守る。それはジジイの仕事じゃ。お主はまだ若い」

一刀斎がセシリアにつぶやく。

「あなたはまだ必要よ。最後の一押しをするのがあなたの役目だと思っわ」

セシリアが言葉を返す。

「そうか。まだまだお互いに死ねんのう」

一刀斎はやりわりと微笑んだ。

*

月夜が輝く。藤堂を除いた皆はそれぞれ着替えを済ませて前を見つめる。

「来たわ」

セシリアが言葉をかける。それと同時に寒気を感じた。雫は一つ深呼吸をした。

「我は望む……神聖なる温かさを」

雫の言葉に応じて皆の体温が上がっていく。

「雫……力が不足した時には合図をして……強化の術式をかけるから」

フリージアが雫の隣に立った。

「絶対に守る」

真冬が雫の前に立つ。変わりに前線に立ったのはカイン、一刀斎、セシリアだ。

「敵は大量ね……半分は任せて。後はガス欠になるから任せるわ」

セシリアが微笑む。目の前に迫るのは西洋甲冑を纏った穢れ20体。

「分かった」

「心得た」

カインと一刀斎がそれぞれの武器を構える。

「まずはご挨拶といきますか」

セシリアが目の前を見る。一つ深呼吸をして聖書に力を込め言葉を紡ぐ。

「我は望む……穢れを滅す異界の友よ……」

セシリアの冷たい声に応じて眩しい光が辺りを包む。

「マカちゃん……全力でいいよ」

前方を睨みながらつぶやく。

刹那、槍を持った天使が穢れに向けて突撃。槍での横薙ぎの一閃が甲冑を破壊。次に仲間を踏み碎きながら前方から迫る穢れを槍で一突き。力任せに横薙ぎに吹き飛ばす。衝突した穢れはドミノ倒しのように倒れていく。次には倒れた穢れを高く飛翔して踏み碎く。鎧が碎ける音が広場に響き渡った。

「圧倒的じゃのう」

一刀斎が感想を述べた。

「信じられん」

カインも感想を述べた。真冬達四人が力を合わせて撃破した穢れをたった一人で蹴散らしている。半分所か一人で全て倒してしまいうる勢いだ。

だがその考えはすぐに捨てる事になる。一刀斎とカインの目の前にある空間が裂けた。そこから現れたのは4体の甲冑を纏った穢れ。「2体ずつじゃな」

一刀斎がカインに指示を出して踏み込む。刹那、一刀斎の刀が輝きを増した。それを横目に見てカインが片手を上げる。それを見てフリージアが聖書を握る。

「我は望む……穢れを駆逐する純粹なる力を！」

フリージアの言葉に応じて聖書が開く。発動した術式がカインの大剣に伝わる。フリージアが使用したのは他の術式を強化するものだ。エクソシストの武器の強化、巫女の障壁の強化など応用が利く術式である。

「消え去れ！」

カインは強化された大剣を振るう。威力を増した剛剣が穢れの鎧を粉々に破壊。もう一体の穢れが振り下ろす剣を短剣で受け止めて、大剣で腹部を切断。

「乱れ桜！」

チラリと横を見ると高速の銀閃が穢れ2体を倒す姿が見えた。残るは天使が駆逐している穢れだけだ。前を見ると残りは5体ほど。そのまま終わると思った瞬間に天使の動きが鈍る。

「セシリア！」

フリージアの叫び声が後ろから聞こえた。

「大丈夫……マカちゃん、戻って……私が耐えられない」

セシリアは蒼白な顔で天使を呼ぶ。天使は空に飛翔してから光となって消えた。一刀斎とカインの武器も力を失う。

5体の穢れが剣を振り上げて駆ける。それと同時に空間が裂けた。姿を現したのは黒いローブを纏った監視者。

「お出ましじゃな」

一刀斎が輝きを失った刀を構える。

「ここまでやるとは思わなかった。私自ら……進めさせてもらう。私のシナリオを」

監視者の周りに亀裂が入る。裂け目から出現したのは禍々しい騎士剣。

「我は望む……神聖なる護りを！」

「我は望む……穢れを駆逐する純粹なる力を！」

雫とフリージアが同時に言葉を紡ぐ。一刀斎とカインを狙う禍々しい騎士剣を弾き飛ばす。それを合図にしたかのように監視者は地面を駆ける。両手に持っているのはハンドガン。

監視者は素早く両手のハンドガンを構える。騎士剣が衝突して亀裂が入った部分を正確に撃ち抜いて障壁を破壊。そのまま男性二人に向けて駆ける。まずは力を失った一刀斎に接近。

「力の使い過ぎだな」

短くつぶやき、右手に握るハンドガンを腰のホルスターに戻す。

空いた右手を握り、一刀斎の腹部を殴打。そのまま生きた盾としてカインに向けて突撃。

「くっ……」

躊躇した瞬間にハンドガンでカインの右腕を狙い撃つ。大剣を落としたのを見て一刀斎を投げつけ、そのまま疾走。穢れもその後に続く。

「……止めてみる……織部真冬……！」

監視者が真冬に叫ぶ。真冬は一度深呼吸をした。刀が輝きを増す。

「3分……これで決める」

真冬が地面を蹴る。

「監視者は真冬が倒すとして……残りは倒すわよ。女の意地……見せる時だわ」

セシリアが聖書を握り光の矢を出現させる。

「あんなのがら体……でも、今なら！」

フリージアは聖書を地面にゆっくりと置いてナイフを形成。

「負けません！」

その隣には雫が鉄扇を持って立つ。少女二人が同時に地面を駆け抜けた。

両手から放たれるハンドガンの弾丸を真冬は刀で弾いていく。祈りを解放している状態でなければ反応すら出来ないだろう。だが、今なら追いつける。

「以前とは違うな……言うだけはある！」

監視者が間合いを詰めて蹴りを繰り出す。それを半歩下がって回避。

「食らえ！」

真冬は叫びながら刀を振り下ろす。監視者が右手に持ったハンドガンで受け止めたのを確認してから、左足で回し蹴りを放つ。

「……………」

監視者は無言で半歩下がり回し蹴りを回避。左手のハンドガンを上げた瞬間に銀閃が煌いた。真冬は回し蹴りの勢いのまま一回転。横薙ぎの一閃を放ったのだ。

「ちっ……………」

舌打ちをしたが遅かった。刀はハンドガンを切断。真冬は畳み掛けるように地面を踏みしめる。監視者は即座に左手で裂け目から剣を抜いて刀を受け止める。二人の視線がぶつかる。

「ここまで力があれば私など不要なのかもしれないな」

監視者が真冬の瞳を見ながらつぶやいた。

「…………俺はだけでは無理だ」

真冬は刀を押しながら言葉を返す。

「……………先ほどまでの威勢はどこにいった！」

監視者が剣を強引に横薙ぎに振るう。真冬は数歩後ずさりバランスを整える。

「私を縛る鎖を断ち切ると言ったのはやはり口先だけか！」

監視者が容赦なくハンドガンの引き金を引いた。真冬は刀で全て弾き返す。

「ならば……………終わりだ。織部真冬！」

監視者が剣を振り下ろす。だが斬った感触はなかった。

「俺はヒーローではない。だから、皆の力が必要だ。皆がいるから…… 今も全力で戦える！」

真冬の叫びを監視者は背で聞いた。それと同時に負けたのだと気づいた。

「負けたか……」

監視者は膝をついた。背をバツサリと斬られていた。

「…… 本当なら負ける訳ないんだろう？」

真冬は輝きを失った刀を見つめる。

「ふふ…… どうだろうな。ただお前の語る理想があまりにも心地よくてな。ずっとお前の生まれ変わりを見てきたが…… 織部真冬、お前が一番真っ直ぐだったよ」

監視者は力を失ったように倒れた。

*

フリージアは両手のナイフで左右からの剣を受け止める。

「は…… 早く！」

カインの大剣を吹き飛ばすくらいの力だ。すでにナイフには亀裂が入り、腕は悲鳴を上げている。

「貫け！」

セシリアの言葉と共に光の矢が穢れを貫いた。フリージアはそれを見て後方に跳躍。残りは3体。その3体をまとめて相手しているのは雫だ。障壁と、式神で左右の2体を押さえつけ、残る一体は鉄扇で正面から受け止めている。

「あの子、見た目とはだいぶ違うわね」

セシリアが感嘆の声を出した。もったか弱いとっていた。だが、穢れ3体とまともに対峙する姿は凛々しさすら感じる。

「フリージアちゃん。決めるわよ」

セシリアが言葉を紡いで、光の矢を出現させる。

「分かってる」

フリージアが背を屈めて地面を疾走。フリージアの背に触れるギリギリの場所を光の矢が通り過ぎる。雫が障壁で弾き、動きが鈍った穢れの腹部を光の矢が貫く。

「まずは一体！」

フリージアが叫んでナイフで一閃。亀裂が入った部分を正確に破壊する。

「フリージア！」

雫が叫びながら鉄扇で剣を受け止める。右から迫る穢れは式神が障壁を張って防ぐ。

「まっかせて！」

フリージアは穢れの背後に回り込みナイフを突き刺す。穢れの力が弱まるのを見て、雫は半歩下がり穢れの剣をやり過ごす。無防備な穢れに鉄扇での一閃。鎧が砕けるのを見て雫が口を開いた。

「二体目終了です」

雫が残り一体を睨む。

「マカちゃん、出番だよー」

セシリアののほほんとした声が響く。

「最後だから手加減いらないよ」

穢れを冷たく見つめて天使に指示を出す。天使が槍を掴んで飛翔。少女二人は巻き添えを食わないように後方に跳躍。

「消えなさい」

セシリアの言葉と共に穢れが槍で貫かれた。眩しい閃光が辺りを覆う。

「まあ私がいたのが最大の誤算かしらね。あなたのシナリオに私はいないから」

セシリアが監視者を見つめた。勝利はした。でも、これで監視者が長年続けてきたシナリオを破壊してしまった事になる。

「さて……何が出るやら」

セシリアは一度溜息をついた。

輪廻の鎖 8

輪廻の鎖

— 8 —

「よく寝てるな」

真冬は優しい笑みを浮かべてつぶやいた。左肩には柔らかい黒髪が触れている。雫が真冬にもたれかかるようにして眠っているのだ。眠る時に抱き癖があるのか真冬の体は抱き枕の代りにされている。真冬は微笑んで眠る雫を見つめた。

場所は飛行機の中。現在は二人ずつに別れて席に座っている。真冬達の後ろの席には毛布に包まって眠っているフリージアと、退屈そうに窓の外を見つめているセシリアがいる。

カインと一刀斎は常月で帰りを待つことにした。常月に残った戦力は乏しいが、心強い助っ人が加わったので何の心配もいらないう。

当初はフェレアスには雫、フリージア、セシリアだけで行くという案があった。だが、雫一人で向かわせるのは心配であったためついできたのだ。隣で心地良さそうに眠る雫を見ているとついてきて良かったと心からそう思う。

真冬は雫を起こさないように窓の外を見つめる。だが何も見ええない。時刻は午後の12時を越え辺りは真っ暗。退屈ではあるが他にやる事もない。数分外を見つめた真冬は耳をすっぱりと覆うヘッドホンを装着。音漏れを気にして音量をできる限り落とす。

「……………」

真冬が目の前にある機器を操作。「森の音色」と題された癒しのメロディを流す。時間の設定を30分にしてから真冬は瞳を閉じる。メロディのおかげか疲れていたのかは分からなかったが、真冬はす

ぐに眠る事ができた。

*

カインは自室のベランダに出て空を見上げる。朝日を浴びようと思ったが、本日の天気はいにくの曇り空。自然と心も沈んでくる。ふとポケットに入れてあった携帯が振動した。

「……」

無言で携帯を取り出す。開くとメールが届いていた。内容をチェック。

「無事にフェレアスに到着！ フリージアちゃんを絶対に元気にさせるわ」

メールにはそう書かれていた。カインは返事を送るかしばらく迷う。携帯を閉じようとした所で再度開いた。

「元気な姿で会おう」

そう短く送信。送った相手はフリージアだ。

「……思えば私的な内容で送った事はないな」

カインが独語してベランダから自室に戻る。ベランダの窓を閉めた時に携帯が振動。

「……」

無言で開く。

「ありがとう」

フリージアから短いメールが返ってきた。カインは一度微笑んでから携帯を閉じた。

*

場所は雨月神社。三人の人物は温かい緑茶を飲んでた。現在は朝食を済ませて休憩中。卓袱台の上にはまだ茶碗や小皿が置いたままである。

「ふう……悪くないな」

監視者が不適に笑う。

「勝手に居ついて文句があるのか？」

正面に座る刹が鋭い眼光を向ける。

「今は敵意がないんじゃ。睨むでない」

監視者の右斜め前に座る一刀斎が溜息をついた。

「だが……！」

刹が拳を握る。

監視者はチラリと二人を見た。この二人だけではなく、真冬以外はまだ納得していないらしい。当然と言えば当然だが。何時斬りかかって来るか分からない。

「私を恨むならそれもいい……ただ少しだけ待って欲しい」

監視者は刹を真っ直ぐに見つめた。

「分かっている。決戦の日が終わるまでは待つ」

刹が視線を外した。これが皆が選んだ答え。戦力になる者と無駄に争った所で意味はない。協力できるなら協力する。でも、内心では納得はできていない。

「すまない……だが、いつかは……」

監視者がぼつりとつぶやく。その瞬間に刹が監視者を睨む。

「分かり合えるといいのう」

一刀斎が監視者の言葉を続ける。監視者は驚いて一刀斎に視線を向ける。一刀斎はニヤリと笑う。

「すまない」

監視者は礼を述べ、一刀斎に微笑を向けた。

*

フェレアスの地に四人は足をつけた。

「……綺麗な国だな」

真冬が最初の感想を述べる。白銀に輝く地面、落ち着いた色合い

で統一された建物。

雪で閉ざされた国フェレアス。常月より北に位置する国で一年中雪が降る。雪のため貿易が難しく隣国と関わる事が極端に少なかった国で、閉ざされた国と呼ばれていた。現在では文明の発達のおかげで貿易の行路を確保。国交が進んでいる。

「こんな場所を人は破壊できるのですね」

雫がフェレアスを見つめた。

「過去にあった大戦ね。散々に破壊されたみたいよ。あなた達、常月の人間に。でも、フェレアスの人間もあなた達を大量に殺めた。今となっては言っても仕方ないわ」

セシリアが儂く笑う。

「そうね。今では常月も巫女も恨む気持ちはないわ」

フリージアが雫に微笑む。雫も微笑んで頷く。真冬は二人を見て安堵の息を吐いた。

「……でも、あの頭の固い司祭に通じるのか」

セシリアは視線を上げる。

視界に入るのは一つの大聖堂。セシリアが所属するエクソシストの総本山だ。神聖なる聖地に巫女を入れる。それが果たして許されるのかセシリアは不安で仕方なかった。

「まあ、いざとなったらマカちゃんに任せようかな」

セシリアが冷え切った瞳を大聖堂に向けた。

*

司祭服に身を包んだ細身の男が手紙を握り潰す。かけている眼鏡を上げて鋭い眼光を光らせる。

「セシリアは何を考えている。巫女をここに上げるとは。しかも今日だと？」

司祭が苛立ちを隠さずにつぶやく。

「ですが……上げる理由はフリージアの命を救うためです」

手紙を渡した修道服を着たエクソシストの少女が怯えながらつぶやく。

「分かっている……分かってはいるが」

司祭は溜息をついた。

まさかエクソシストを救うために、頼んでもいないというのにわざわざここまで来る巫女がいるとは。話くらいは聞くのが道理。だが皆が納得するだろうか。何か皆が納得する理由が欲しい。

「いかがしますか？」

エクソシストが対応を問う。

「明日、来るように伝える。宿はこちらで用意する」

司祭はそれを言うのがやっとだった。

「はい」

エクソシストが背を向けて駆けていった。

*

石で出来た歩道を四人が進んでいく。前をセシリアとフリージア、後ろから真冬と雫が続く。四人はそれぞれ私服の上に厚手のコートを纏い、雪が降り続くこの地の寒さに耐えていた。

左右を見渡すと果物や、魚、肉などの食品を売る店、セーターやコートなど衣服を売る店など商店街が広がっていた。朝の8時だというのに人で溢れており活気がある。

真冬の隣では雫が顔を真っ赤にして顔を落とす。雫が見ているのは商品ではない。フェレアスの人々だ。路上の真ん中で挨拶のキスを交わす恋人、抱き合い見つめあう熟年夫婦。探さなくても至る所にいた。常月とはまるで違う。身体的なコミュニケーションが自然であるようだ。

「私が正常だって分かった？」

フリージアが振り向いて二人に微笑む。この環境で育てばあそこまで積極的になるのも頷ける。いや、フェレアスの人間はあれくら

い自然で積極的とは言わないのかもしれないと真冬は思った。

「二人も抱き合ったら？ 温かいわよ。ここでは恥ずかしがる必要はないわよ」

セシリアが悪戯っぽく微笑む。

「そ……そんな恥ずかしい事できません！」

雫が拳を握って叫ぶ。

「ふーん。飛行機では真冬の肩に頭を載せて、抱きしめて寝ていたのに？」

フリージアがニヤリと笑って指摘。

「そ……それは……寝ていて気づかなくて」

雫が真っ赤になった頬に両手を触れる。真冬は恥ずかしそうにしている雫が可愛らしく思えた。優しく包んであげたい、と自然に思えた。心臓が一度だけ鳴る。

「俺は構わないよ」

真冬は雫の髪を撫でた。雫は上目遣いで見上げる。真冬は一度頷いた。

「もうラブラブなんだから」

フリージア溜息をついて前方を見つめる。

「フリージアちゃんもいい人見つかるわよ。いなかったらカインをあげるわ」

セシリアがフリージアに微笑む。

「カイン……か」

フリージアがぼつりとつぶやいた。

朝に送られてきた短いメールを思い出す。気にかけてくれたのは素直に嬉しかった。もう少し早くこういう関係になりたかったとも思う。今では一緒にいる時間が長すぎて恋愛感情は沸いてこない。

「うーん。一緒にいすぎたかしら」

セシリアが顎に手を置いて思考。まさにその通りである。幼馴染が恋愛対象にならないのと同じ事だ。

「すいません！」

前方から小走りに駆けてくる少女が見えた。修道服を着ている所を見ると大聖堂のシスターか、エクソシストだろう。150センチに届くか届かないかの小柄な少女で、髪はフェアアスらしく金髪。青い瞳は真冬と雫を見て怯えているのか若干涙目。

「あら……メイサ、どうしたの？」

セシリアがメイサと呼んだエクソシストに微笑みかける。温かい笑顔にメイサは安心したのか、ほっと安堵の息を吐いた。

「……これを」

メイサが手紙を渡す。セシリアが一読してから手紙を握り潰す。

「ふっ……私を待たせる？ あの司祭いい度胸してるわね」

セシリアが冷徹な瞳を大聖堂に向ける。

「ひっ……」

メイサが急に豹変したセシリアに震え上がる。

「シャキつとしなさいよ。イライラする」

フリージアがメイサの反応を見て溜息をついた。

「だって……本気を出したセシリアは本当に恐いんだから」

メイサが涙目でフリージアを見た。

それは同意できる。死の門を統轄していると言われる天使「マカテル」を「マカちゃん」と気楽に呼べるのはあの人くらいだ。フリージア辺りが「マカちゃん」などと気楽に呼んだら確実に串刺しだ。気づく前に絶命しているだろう。それほどの力を持った天使を呼び出し、一日をかけてこの街を半壊させての激しいバトルの末ようやく使役したのだそうだ。

「言うようになったわね。メイサ」

セシリアがメイサに微笑む。この温かな笑みが恐くて仕方がない。「ご……ごめんなさい！」

メイサは背を向けて来た道を全力で戻っていった。

「どうなっているんだ？」

真冬がセシリアに問う。

「……選択肢は二つ。一つ。強引に乗り込んでさっさと済ませる。

二つ。大人しくホテルに泊まって連絡を待つ。私は前者、皆は？」
セシリアが一行を見つめる。皆は顔を見合わせる。真冬が代表して口を開いた。

「後者で」

セシリアは真冬の言葉を聞いてがっかりした顔を浮かべる。

「ま、いいか」

セシリアは指定されたホテルに向けて足を伸ばしたのだった。

*

「二部屋しかとっていない！」

ホテルのフロントにつくなり真冬が叫んだ。

「ちよっと叫ばないでよ。恥ずかしい」

フリージアが真冬を注意する。周りを見るとスーツを着た人々がこちらに視線を向ける。真冬は恥ずかしそうに口を閉じた。

地面には赤い絨毯が敷かれ、ソファはフカフカで柔らかい。煌びやかな照明は高級感を漂わせている。私服で入るのが恥ずかしいくらい的高级ホテルだった。宿泊費は教会が持つてくれるためそれはいい。問題は二人用の部屋が二つしか用意されていない事だった。
「申し訳ありません。予約で埋まっています二つしかご用意できません」

30代くらいのスタッフが申し訳なさそうにつぶやく。女性三人に、男性一人。どうしても男女同部屋になる。真冬は三人を順番に見ていく。

「お好きな子をどうぞー」

セシリアが微笑む。どうやらこの状況を楽しんでいるらしい。フリージアは複雑な顔をしている。少し前なら真冬の手を引っ張って同部屋を望んだことだろう。だが、合宿での出来事以来フリージアは真冬に触れない。気持ちの整理をしている最中らしい。短くなつた髪もだいぶ印象が違つ。まるで別人と関わっている錯覚を覚える

時もある。

「……………女性と男性に別れるのは駄目ですか？」

顔を真っ赤にした雫が提案。妥当ではある。

「狭いのは嫌だわ。却下」

セシリアが即座に却下。

「あーもう。常月の人間はイライラするわ。さっさと同部屋になりなさい！」

フリージアが雫の腕を取る。そして、真冬の腕を掴ませる。顔を真っ赤にして見つめ合う二人。

「決まりましたね。理解あるお客様で助かりました」

スタッフがにこやかに笑う。このスタッフも心の中ではこの状況を楽しんでいるような気がする。

「か……………構わないか？」

真冬が視線を逸らして問う。

「……………はい」

雫が顔を真っ赤にして一つ頷いた。

「では、部屋に行くわよ」

セシリアを先頭にして一行が部屋に向かった。

*

報告を聞いた司祭はまずは安堵の溜息をついた。ここでセシリアに暴れられたら敵わない。

「私が本気を出して五分五分だからな」

もはや溜息しか出ない。

「報告です」

メイサが司祭の前で姿勢を正す。

「セシリアか？」

司祭が問う。

「それもあります。先ほど私に電話がありました……………」

「なんだね」

メイサが言い澀むが、司祭も暇ではない。さっそく催促。
「あまり待つつもりはないそうです」

メイサが涙目でつぶやく。セシリアと司祭の間に挟まれ、胃が痛くて堪らない。

「分かってる。他には？」

司祭は別件がありそうなので、まずはそちらを片付ける。

「はい。本日この地で大きな歪みを感じしました。おそらく今夜は……」

メイサが肩を震わせる。

「常月よりもまずはこちらからか。ちょうどセシリアが帰ってきていたのは助かったな。今夜は私も出よう」

司祭が眼鏡を上げる。

「自ら……ですか？」

「指導者自ら前線に出ねば示しがつかん」

司祭は眼光を鋭くする。今日はおそらくこの地に大量の穢れが現れる。メイサが表情を引き締める。

「どうか……守り抜くための力を」

司祭は短く祈った。

*

真冬が緊張した面持ちでカードを部屋に通す。電子音が鳴りドアロックが解除。

「……真冬」

雫が真冬の背に言葉をかける。

「なんだ？」

ドアノブに手をかけて真冬が問う。

「あなたを信じます」

雫はそれだけを言った。真冬はその信頼に応えるために勢いよく

ドアを開けた。二人が部屋に入っていく。

数歩進み右側を向くと浴室に続くドア。そして、さらに数歩進んだ所で頭痛がした。

「これは……」

雫が頭を押さえる。視界に飛び込んできたのはまさかのダブルベッド。真冬はすかさずフリージアに電話をかける。

「もしもし。何よ。振っておいて離れたら寂しいの？」

まずはフリージアが冗談を一言。

「今はそれ所ではない。緊急事態だ！」

真冬が叫ぶ。

「叫ばないでよ。耳が痛い。なに？」

「そちらのベッドはダブル、ツイン？」

真冬は緊張した面持ちで問う。

「うん？ ツインね。シングルベッドが二つあるから」

さらにフリージアが答える。

「部屋を変えてくれ。こちらはダブルベッドが一つしかないんだ！」

真冬が叫んだ時に携帯にノイズが走る。

「あら。良かったわね。ごゆっくりー」

ノイズが消えた瞬間にセシリアの声がした。

「待ってくれ。切らないで！」

真冬が携帯に叫ぶ。

「私は狭いのは嫌だからシングルがいいわ。あなたはフリージアちゃんにソファで寝るといの？」

セシリアが溜息をつきながら述べる。

「ダブルでフリージアと一緒に眠る選択はないのか！」
「ない」

真冬の叫びは虚しく一言で両断された。そして、聞こえてきたのは通話の終了を伝える音。真冬はがっくりと肩を落とした。あいつらわざとやっていないか、真冬はそう思わずにはいられなかった。女性が苦手になりそうである。

「駄目でしたか……」

雫は頬を真っ赤にしてつぶやく。もはや観念したようだ。

「お互いに背を向ければ問題ないか？」

真冬が頭を掻く。

「はい……でも私は抱き癖があつて……その……たぶん真冬を抱き枕に……」

そこまで言つて雫が口を閉じた。飛行機での光景を思い出す。

「もつといいや」

真冬は諦めて微笑んだ。その方が気楽だ。それに雫と二人でゆっくり過ごせるのもありがたかった。前向きに考えればこちらが嫌がる理由は一つもない。恥ずかしさはあるのだが。

「……順応早いですね」

雫は真冬の反応に笑つてしまった。二人は細かい事は気にせずにお互いに笑い合った。心が軽くなったそんな気がした。

*

フリージアはベッドの上で寝転び、薄い茶色の天井を見上げる。

「……………」

無言でただ見つめる。他に特にやる事がないのだ。この部屋で一緒に過ごすセシリアは誰かと電話している。会話の内容を聞く限りではあまりいい内容ではなさそうだ。どうやらここに穢れが出現する恐れがあるらしい。どこに行っても戦いばかり。残りの寿命も少ない。

「助かるかな」

フリージアはぼつりとつぶやく。視界が霞む。その瞬間に泣いているのだと気づいた。いつからこんなに弱くなっただろうか。不適に笑っていた自分が遠い過去のように思う。

「フリージアちゃん」

電話を終えたセシリアがフリージアを優しく見つめる。フリージ

アは慌てて涙を拭う。

「もう……隠さなくていいのに」

セシリアがフリージアのベッドに腰を降ろす。

「生きたい……まだ死にたくない」

フリージアは右腕で瞳を隠し、弱々しくつぶやく。

「私を守るから安心して。それに皆いるわ」

優しい言葉と共にフリージアの髪を優しく撫でるセシリア。フリージアは心が落ち着くまでそのままだった。

*

部屋に溢れているのは緑色の光。時間が出来たと思ったら雫は真冬の刀に祈りを込め始めたのだ。真冬はその様子を黙って見ていた。退屈だらうからどこかに行つて来ていいと言われたが、今は側にいたかった。

「……退屈ではないんですか？」

雫が真冬に問う。どうやら祈っていても会話は出来るらしい。

「まあ特にやる事はないかな。でも、こういう時間もいいと思う」

真冬が微笑む。

「そうですね」

雫は短く返す。

「なあ……」

「なんですか？」

声をかけた真冬に雫が瞳をつぶつたまま返す。

「雫はどう考えている？ 監視者の事、これからの事」

真冬は雫がどう考えているか気になった。雫は特に何も言わずに従ってくれた。それは嬉しくも思う。だが、内心はどう思っているのか気になるのだ。

「私は真冬を信じます。ただひたすらに」

雫は迷わずに即答。

「いいのか？」

「はい。だから何も心配せずに突き進んで下さい。あなたの道を。私はどこまでもお供しますから」

雫は祈りながら微笑んだ。真冬は込み上げてくる感情を抑えられなかった。

「ありがとう」

真冬は優しく雫を右腕だけで抱きしめる。左腕がない事がここまですぐ不便だと思った事はない。両腕でしっかりと抱きしめたかった。

「……はい」

雫は優しく微笑んで祈り続ける。真冬は雫のほっそりとした肩をずっと抱きしめ続けた。

*

セシリアとフリージアは空が薄暗くなる時間によく大聖堂に呼ばれた。大聖堂のエクソシスト達の中で話し合った結果を伝えるためだ。ここまで遅くなったのは今夜現れる穢れについての話し合いが長引いたからだ。

修道着に着替えなおした二人が重いドアを開ける。

フリージアは周りを見渡す。祈りを捧げる信者のために用意された長机に長椅子が左右に並び。天井を見渡せば無数のステンドグラス。何もかも懐かしい。まだ離れて時間はそう経っていないというのに懐かしくて仕方がなかった。それだけいろいろとあったのだろう。

「よく来たな。セシリア、フリージア」

教壇にいたのはこの大聖堂を纏める司祭。眼鏡の奥の険しい瞳をセシリアに向ける。

「どうも。仕事遅すぎるわ。即決しなさいよ」

セシリアは溜息をついた。隣にいるフリージアは焦った。司祭に對してここまでの態度が取れるのはセシリアくらいだろう。この二人は付き合いが長いらしく、仲が悪そうに見えるがお互いを理解し

合っていると噂で聞いた事がある。

「君の力と功績は認めるが、その態度はどうなのだろうね」

司祭が眼鏡を上げる。

「用件を言って」

セシリアは殺気を込めた瞳で司祭を見た。大聖堂の温度が体感で5度は下がった気がする。あまりにも冷たい殺気にフリージアは肩を抱いた。

「ふう。相変わらずだね。結果は……ここで浄化の儀を行っても構わない。ただし条件がある」

司祭がセシリアの殺気を受け止めてつぶやいた。真正面からこの殺気を受けて平然としていられるのはこの人くらいだとフリージアは思う。

「条件？」

「ああ。今夜、ここに穢れが現れる。その殲滅に力を貸してもらいたい。もちろん最前線でだ」

司祭が表情を変えないでつぶやいた。

「あんたねえ……あの二人はフリージアのためにここまで来たのよ！ 分かっているの。話せば穢れと戦うのも拒否しないわ」

セシリアが司祭を睨む。こんなに怒ったセシリアを見たことはなかった。それだけ真冬や雫の事を気に入っているのだろう。

「どうだかな。それが本当か見せてもらおう」

司祭は背を向けた。

「会いもせずに決め付けて……こんなだからいつまで立っても！」

叫んでセシリアも背を向ける。この司祭にどれだけ言っても無駄だ。ならば行動するのみ。セシリアは大聖堂を飛び出した。

*

時刻は午後8時過ぎ。賑やかだった商店街には人はいなかった。今は大聖堂の中に皆集まっている。大聖堂を背にして立っている真

冬と雫は修道着姿のエクソシスト達よりも前にいた。約束通り最前線だ。今は袴と巫女服に着替えている。

前方を見つめる事数分。突如、空間が裂ける。数えるのも馬鹿らしいほどの数。

「行こう」

真冬が刀を抜いた。雫は鉄扇を構える。その後ろにはフリージアとセシリアがいた。4人を監視するように後ろに立っているのは司祭。

「お言葉ですが……これは……」

メイサが真冬の腕を見つめる。片手の剣士。あんな状態で戦うというのか。司祭は一度眼鏡を上げる。皆が一斉に司祭を見つめる。あんな幼い者が最前線で命を懸けようとしている。異国の街を守るために。

「恥を知れ」

セシリアは低くつぶやいた。

司祭は一度瞳を閉じた。まだ早い。今、動いたら確かめられない。そして、彼らの想いを皆に伝えられない。司祭は強く拳を握って耐える。

地面を蹴る音が聞こえた。その瞬間に司祭は瞳を開ける。

裂け目から飛び出したのは甲冑を纏った穢れ。穢れに向けて怯む事無く異国から来た二人が駆けていく。約束通り彼らは向かっていった。たった一人のエクソシストを助けるために。

「では……行かねばな。ここからは私達の戦いだ。皆……武器を取れ！ 彼らに傷一つ負わせるな！」

司祭が叫びながら地面を駆け抜ける。

「我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

「我は望む……穢れを駆逐する純粋なる力を！」

両手に光輝く剣を持って。メイサの強化術式を受けて一気に加速。真冬と雫の間を一つの突風が吹き抜ける。高速の一閃と共に、真冬の目の前にいた穢れ二体が光となって消える。

「どうして……？」

真冬は呆氣に取られて司祭を見つめる。

「悪いが試させてもらった。君達がどこまで真剣なのか」

司祭は向かってくる穢れを両手に握る剣で切り倒しながらつぶやく。

「なら、見ていてください。俺達を」

真冬が司祭の背につぶやく。司祭は片手を上げて答えた。刹那、後方から雄叫びが聞こえた。エクソシストがそれぞれの武器を手にとって地面を疾走する。皆の想いは一つ。

「……ああいう素直でない所は大嫌い。試すような事をして……自分はいつも最前線で」

セシリアが最前線で戦う司祭の背を見つめる。

「……セシリアって、カフス司祭の事好きだよね」

フリージアがぼつりとつぶやく。

「知らない。マカちゃん、今日は徹底的に暴れて」

セシリアが天使を召喚。空間から見慣れた天使が飛び出して飛翔。穢れの群れに突撃していく。それを見届けたセシリアは後方に下がっていく。守るべき場所を放棄している司祭の代わりに守るべき場所を守るために。

フリージアは遅れて前進。前方に駆けながら光の矢を展開。真冬の動きをよく見て空間を切り裂いた。

*

監視者は両手に禍々しい剣を持ち、空高くを睨む。

「どうやら待ってくれなかったようだ」

監視者が見つめているのは空高くにある大きな裂け目。徐々に下がり黒い霧が冬の地全体を包み込む。

「来るのか」

刹が空を睨む。一刀斎は無言で刀を抜いた。

「まだ時間はある。一日か……二日か。それくらいはあるだろう。彼らは間に合うだろうか」

監視者が溜息をついた。

「聞いた話ではフェレアスでも大規模な戦闘が始まっている。それが片付いたらすぐに戻ってくるだろう」

カインが監視者の背につぶやく。

「それまでは守ろう。この地を」

監視者がゆっくりと歩を進める。皆は無言で監視者の後に続いた。裂け目から現れたのは無数の穢れ。先遣隊みたいなものだろう。

「大口を叩いたのだ。間に合わせて見せるよ、織部真冬」

監視者は微笑んでぼつりとつぶやいた。

＊

真冬は目の前にいる甲冑姿の穢れを刀で横薙ぎに切り裂く。穢れが光に変わる。だが警戒は緩めない。まだ目の前に穢れが3体いる。周りを見渡すと今も増え続けている。唯一の救いは常月と比べて強力な穢れがない事くらいだろう。見た目は同じだが全く強さが違う。だが彼らは押されていた。数が多すぎるのだ。倒しても、倒しても沸いて出てくる。

「くっ……止まるわけには」

真冬は正面から向かってくる穢れの剣を受け止める。動きが止まったのを見て残りの2体が左右から剣を振り上げる。

「我は望む……穢れを貫く光の矢を！」

フリージアの言葉が背後から聞こえた。左右から迫る穢れを光の矢が貫く。それと共にフリージアが真冬の側に駆け寄る。

「真冬！ 信じて……私の祈りを！」

雫が真冬の背に叫ぶ。

「信じるさ……雫を。俺の大切な巫女を！」

刀が輝きを増す。力を増した刀が穢れの剣を両断。そのまま鎧を

切り裂く。

「真冬」

雫がつぶやいて真冬の背にピタリと自らの背をつける。フリージアは真冬の左側に立った。

その瞬間に無数の裂け目が出現。10体を越える穢れが真冬達に剣を向ける。一瞬で包囲された三人は視線を走らせる。周りにいるエクソシスト達は一人また一人と倒れている。こちらもどこまで続かない。

真冬達は戦いが始まってから穢れを倒しながら坂を下っている。大聖堂からはだいぶ距離が開いてしまった。現在近くにいるのは、司祭とメイサだけだ。他は力尽きて倒れていた。

「援護に行つて！　ここは私一人で十分よ」

大聖堂に入るドアの正面に立っているのはセシリア。ここを突破されれば中にいる住民は全滅だ。出来れば前進したかったが、ここを護るべき人間が最前線で戦っているのだ。代理は必要である。

エクソシストが戸惑う。その間にも天使が穢れを殲滅していく。

「私一人であな達10人分だから安心して」

セシリアがエクソシストに軽く手を振る。迫ってきた穢れは分厚い聖書で殴打。鎧が砕けるのを確認して前だけを見る。本当は使役している天使を維持するだけで辛い。

「でも……前で頑張ってる人もいる。弱音なんか吐かないわ」

セシリアは荒い息を整える。その時に4メートルを越える裂け目が目の前に現れる。

「……守るわ。ここだけは」

セシリアが前を睨み続けた。

*

禍々しい剣が真冬の左肩を切り裂く。

「そっちはもう使い物にならないんでね。残念だったな」

真冬は不気味な笑みを浮かべてお返しに穢れを切り裂いた。だがそれで終わる事はない。左、右、後ろから甲冑が地面を蹴る音が聞こえる。もう数も分からない。頭が回らない。

「真冬！」

背を守る雫が真冬に向けて叫ぶ。失いかけた意識が戻ってくる。

一つ深呼吸をする。

「あれを！」

フリージアが真冬の目の前を指差す。4メートルを越える裂け目が二つ。真冬の正面と、大聖堂に入るドアの正面。

「これを破壊すれば……！」

真冬が裂け目を睨む。刀が輝きを増していく。

「援護します」

雫が真冬の右から迫る穢れを切り裂く。

「行つて！」

フリージアが真冬の後ろと左から迫る穢れをナイフと光の矢で貫く。

「ただ前に！」

真冬は叫んで地面を蹴った。

*

4メートルはある裂け目から、黒い毛が生えた太い腕が姿を現す。

「……マカちゃん、行ける？」

セシリアが荒い息を整えて天使に問う。天使はセシリアの前に降り立ち槍を構える。腕に引き続き現れたのは、穢れの頭部。真紅の瞳に鋭い牙、そして二本角。

「まるで悪魔ね」

セシリアはつぶやく。

おそらく人を恐怖させるためにこの姿を選んだのだろう。裂け目か

ら現れたのはセシリアが思い浮かべる悪魔に類似していた。背にはコウモリの羽、足は馬のようだ。

セシリアは鋭く悪魔のような穢れを睨む。決して怯まない。どんな姿をしようとも。

「マカちゃん！」

セシリアが指示を出す。刹那、強烈な吐き気がした。空いた左手で口を塞ぐ。一つ咳をすると手には血がこびりついていた。限界が近い。全身が内側から破壊されるように痛い。でも、決して穢れから目を離さない。天使が羽を羽ばたかせて飛翔。悪魔は飛翔した天使を真紅の瞳で睨む。

天使が槍を構えた瞬間に悪魔は地面を蹴って駆ける。狙いは弱ったセシリア。

「甘く見積もられたものね」

セシリアは一つ深呼吸をして聖書を握る。次の瞬間には悪魔に向けて駆け出した。

「我は望む……穢れを駆逐する刃を！」

血で染まった左手に光輝く剣を形成。穢れが振り上げた手を身を捻って回避。すかさず剣で腹部を切り裂く。だが剣は腹部を通過して右腕に触れた瞬間に弾かれた。左手に伝わるのは金属を叩いたような固さ。

「ぐっ……」

穢れの左腕がセシリアの頭部を掴む。骨が軋む不快な音が響く。だがセシリアは真っ直ぐに穢れを睨む。穢れはその瞳が気に入らないのかさらに力を強める。だが、頭部を潰す前に力が弱まる。

「ありがと、マカちゃん」

緩んだ腕から脱出したセシリアが、穢れの背中を突き刺した天使に礼を述べる。自身は剣を穢れの喉元に渾身の力を込めて突き刺す。浄化の光が穢れの首から溢れる。だが、セシリアは力を弱めない。この程度で死ぬとは到底思えない。

穢れの赤い瞳が輝きを増す。掲げた右腕を天使が槍で貫いて固定。

だが次の瞬間には左腕が横薙ぎに振られる。

「ぐっ……の……マカちゃん」

岩で出来た固い地面に二回体を打ちつけてもセシリアは穢れを睨み続ける。指示を受けた天使が槍を引き抜いて悪魔の首に槍を突き刺す。穢れが耳をつんざくような雄叫びを上げて暴れる。腕を激しく振り、強引に天使を吹き飛ばす。浄化の光を首から溢れさせながらセシリアに向けて疾走した。

*

真冬の正面に立つ穢れが剣を振り下ろす。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫の声と共に穢れの剣が吹き飛ぶ。真冬はバランスを崩した穢れを蹴り飛ばして、ただ前に進む。裂け目までの距離は20メートル。進路を塞ぐ甲冑姿の穢れは軽く10体はいる。左右から挟撃しようとする穢れがそれぞれ3体ずつ。正面には4体いる。まずは左右から穢れが迫る。

「フリージアは右を！」

メイサが光の矢を展開して、真冬の左から迫る穢れを足止め。それに倣ってフリージアが光の矢を放つ。足止めを食った敵を無視して真冬は前を見た。

「残り4体……」

真冬は加速した体で地面を駆ける。今なら突破できる。

「任せろ」

カフス司祭が正面に立つ穢れの剣を両手の剣で受け止める。

「ぬおおーーーーー！」

雄叫びを上げ、力任せに吹き飛ばす。その合間を縫って真冬が駆け抜ける。前方の裂け目を睨んだ所で、悪魔のような穢れに殴打され吹き飛ばされるセシリアが見えた。目の前の裂け目を無視して坂を駆け上がりたいが、その余裕はない。

「もう少し耐えられれば……！」

真冬は全身の痛みに耐えて裂け目に刀を振るう。これが真冬の限界だった。裂け目から閃光が溢れ、消えるのを見るのを最後に全身の力が抜ける。だがここで気絶する訳にはいかない。

「セシリアを！ 助けて！」

真冬はカフス司祭に向けて叫ぶ。カフス司祭は驚いて大聖堂を見上げる。

「メイサ！」

叫びながら地面を蹴る。

「我は望む……穢れを駆逐するための純粹なる力を！」

強化の術式を受けてカフス司祭はさらに加速。悪魔のような穢れの太い腕がセシリアの頭部を潰そうと振り下ろされる。

「間に合え……！……！」

カフス司祭は力の限り叫んだ。

「……ごめんね……マカちゃん……フリージアちゃん」

セシリアは動けなかった。天使は力を失い光へと変わる。セシリアの力が伝わらなくなったのだ。後は潰されて終わり。

「我は望む……穢れを」

セシリアは聖書をしっかりと握る。最後まで諦めない。この穢れだけでも一緒に連れて行く。穢れを睨みながら言葉を続ける。

「貫く光の矢を！」

光の矢が穢れを狙う。霞む視界で穢れを睨み続ける。その時に叫び声が聞こえた。悪魔がチラリと坂の下を見た。腕が一瞬だけ止まる。その腕を投擲された剣が貫く。悪魔が咆哮を上げる。

「貫け！」

セシリアは力の限りに叫ぶ。光の矢が悪魔の首を、腕を、足を貫いた。激しい閃光が溢れて穢れは消えた。セシリアはそれを見届けてから気を失った。

「終わったの？」

フリージアはぼつりとつぶやく。辺りにいた穢れは力を失ったように倒れて光となって消える。

「真冬！」

雫が倒れた真冬に駆け寄る。確認すると気絶しているだけだった。ほつと安堵の息を吐いた。

「生き残った方々は負傷者を運んで下さい！」

メイサが素早く指示を出す。生き残ったエクソシストが仲間を大聖堂に運んでいく。

「これは明日かな」

フリージアが溜息をつく。この状態ではさすがに浄化のために人を集めるのは無理だろう。そう思った時にカフス司祭が坂を降りて来た。後ろには3人の聖書を持ったエクソシストがいる。

「浄化の儀だが、すぐに行った方がいい」

カフス司祭が雫に語りかける。

「どういう事ですか？」

雫が眉根を寄せて問う。

「常月の上空……冬月という地名の場所に大きな裂け目が出現したらしい。街はほぼ半壊状態らしい。これからの時間に飛べる飛行機はない。今日終わらせて、明日経つといい」

カフス司祭が提案。雫はしばし迷ってから一つ頷いた。

*

「終わったか」

監視者がぼつりとつぶやいた。纏っていた黒いローブはもはやボロボロの布切れ状態。隣では膝をついたカインに一刀斎がいる。唯一立っていられたのは監視者と刹だけだ。

「……だがこれでは……」

刹が商店街を見つめる。無事な店を見つけるほうが難しい有様だ

った。半壊した建物ばかり。二人が立っている場所も、もはや瓦礫の山。

「落ち込んでいる時間はない。また明日もだ……いや……奴を倒すまでだ」

監視者は少しずつ降りてくる裂け目を睨む。刹は拳を握り、同じように空に浮かぶ裂け目を睨んだ。

輪廻の鎖 最終回

輪廻の鎖

―最終回―

一人の少年がゆっくりと瞳を開ける。

見慣れた白い天井。だが霞んでいた。よく見えない。震える右手をゆっくりと左に移動させて掴む。確かにある。失っていない。それを確かめるように左腕を動かす。

「……大丈夫？」

少年と同じ黒い髪の少女が覗き込む。少年は毎日顔を合わせている妹を懐かしいと思った。込み上げてくる感情を抑えられない。

「ど……どうしたの？」

妹が頬を朱色に染めて目を見開く。少年が妹を抱きしめたのだ。

「ずっと会いたかった……会いたかった」

少年は涙を流して妹を抱きしめ続ける。今度は失わない。絶対に。そう心に誓う。

「……見たんだね。僕も見たよ……辛い夢だった」

妹が少年を抱き返す。耳元で囁く声は優しくかった。

「妹を失って……左腕を失って……そして……最後もまた失って……」

少年は夢の中の少年を思い出した。失い続けても前に進み続けた少年、織部真冬。自分の前世。彼のおかげで自分は今も笑っているのだろうか。

「ここにいたら駄目だよ……抱きしめてくれるのは嬉しいけど」

妹が耳元で囁く。

「……」

少年は無言で妹を離す。

「会いに行つて……大切な人が待っているから」
妹が微笑む。

「ああ……会いに行くよ……」
少年は笑った。もう自分達を縛る鎖はないのだから。

*

雫は緊張した面持ちで大聖堂の中に一步を踏み出した。修道着を着たエクソシストが一斉に雫を見た。

「そんな顔をしていたら負けてしまうわよ」

左隣に立っているフリージアが雫の背を叩く。

「きゃあ！」

可愛らしい声を出して雫が悲鳴を上げる。その様子を見てエクソシスト達が微笑む。一部、腹を抱えている者もいた。笑っているが刺々しさは感じなかった。今日だけはこの場に足を踏み入れる事を祝福してくれるようだ。

「いい顔になったわね」

フリージアが微笑む。雫は微笑んでいた。ただ前だけを見て。

「はい……絶対に成功させます。そして……皆で生きるんです」

雫が拳を握る。

「その調子よ」

腕をギプスで固定し、頭に包帯を巻いたセシリアが笑う。明日まではこの姿で過ごさらしい。

「準備は出来ている」

カフス司祭も声をかける。二人は教壇の前にいた。雫はゆっくりと教壇まで向かう。

「いつでもいいわ」

フリージアは雫の背に言葉をかける。

「はい」

フリージアと雫がお互いに向き合い手を握る。

カフス司祭はその光景を瞳に焼き付けた。エクソシストと巫女が手を取り合う姿。神聖で神々しく見えた。

「セシリア……長年、どうして争ってきたのだろうな」

カフス司祭がつぶやく。

「……そうね。この光景を見たら……争っていたのが馬鹿みたい」

セシリアは微笑んだ。だがすぐに表情を引き締める。聖書を持って合図。二人を囲むように、セシリアを含むエクソシスト5人が聖書を掴む。聖書が開きとあるページで止まる。

「……我は望む……神聖なる癒しを」

雫が言葉を紡ぐ。青い光がフリージアを包む。浄化の光に抗うようにフリージアの体から黒い霧が溢れる。

「うつ……くう……」

フリージアが苦悶の表情を浮かべる。

「我は望む……穢れを駆逐する純粋なる力を！」

二人を囲むエクソシストが一斉に言葉を紡ぐ。雫の青い光が力を増していく。

「……うつ……」

次に苦悶の表情を浮かべたのは雫。力が内側から溢れると同時に、自らの体を破壊していく感覚。だが止める事はできない。

「……負けないわ……」

フリージアが雫の手をしっかりと握る。雫は痛みに耐えて握り返す。体のあちこちに鋭利な刃物で切り裂かれたような傷が複数見えた。雫の巫女服が血で染まる。だが、力は緩めない。

「……私も……雫も！」

フリージアが叫ぶ。刹那、黒い霧がフリージアの体から逃げる。

雫がその霧を睨む。霧は逃げ場を探すが、複数の光の矢が貫く。閃光が大聖堂内部を照らした。

「終わりました」

雫が膝をつく。

「大丈夫？」

フリージアがつぶやいて支えた。

「汚れますよ」

雫が儂く笑う。

「そんなの気にしないわ。ありがと……雫」

フリージアが雫を抱きしめた。雫は温もりを感じて、一度瞳を閉じた。

*

真冬はホテルのベランダで雪を見ていた。明日は決戦だろう。

「勝たないと」

真冬は独語した。早く寝なければいけないが、眠れなかった。緊張もあるが雫が心配だからだ。

「……大丈夫だよな……」

真冬は急に心配になってきた。ベランダから部屋に戻り、ドアを閉める。それと同時に向かいのドアが開いた。立っていたのは包帯だらけの痛々しい雫。

「……お待たせしました」

雫は心配させたくないのだろう。微笑んで真冬を見つめる。そんな気遣いまでが愛しく思えた。真冬がゆっくりと雫に近寄る。駆け寄って抱きしめたいが、傷が開いたらいけない。

「頑張ったな」

雫の柔らかい髪を撫でる。

「はい」

雫が一度微笑み真冬の胸にゆっくりともたれる。

「もう寝よう」

真冬が提案。心配事も無くなった今なら眠れる気がする。

「もう少しこうして……いたいですけど。まあいいです」

雫がベッドに潜り込む。真冬も続く。

真冬はチラリと右を見た。雫は瞳を閉じていた。急に心臓が高鳴

る。抑えられない。

「緊張してますか？」

雫が左を見た。視線が合いさらに心臓の音がうるさく鳴る。

「そ……そうだな」

真冬は視線を天井に向ける。

「少しいいですか？」

雫はつぶやいて真冬に近づく。柔らかい感触が真冬の腕に触れた。それだけではなくて雫の腕が真冬の胸に触れる。胸を通じて鼓動が雫の手に伝わる。

「ど……どうした？」

真冬は天井を見たままつぶやく。

「いえ……どれだけ緊張してるかと思ひまして」

雫が微笑む。間近で見た雫の微笑みは綺麗だった。

「……あまりからかうなよ」

真冬は頬を赤らめてつぶやく。雫はクスリと笑う。そして、真冬に右腕を抱きしめた。

「お……おい」

真冬が戸惑う。抱き癖があるのは知っているが早すぎるのはなからうか。

「寝たら抱きしめるのですから……今からでも問題ありません」

雫は幸せそうな笑顔を浮かべた。真冬はその幸せそうな笑顔を見たらもう何も言えなかった。

数分後、微かな寝息が聞こえた。

「今だけは……この幸せを満喫させてくれ」

真冬は雫の寝顔を見てから瞳を閉じた。

*

フリージアは指を開いたり閉じたりを繰り返している。時折、体を動かす。何の異常もない。

「どう？」

セシリアが問うた。そう聞かれても反応に困る。

「異常はないわね。むしろ力が余ってる感じね」

フリージアの内側から力が溢れてくる。今なら何でもできそうだ。

「そう。男でもいればねえ」

セシリアが溜息をついた。チラリとこちらに視線を送る。

「今……何を想像したのよ」

フリージアは溜息をついた。この人は決戦前夜でもマイペースだった。緊張感の欠片もない。

「いろいろと」

セシリアが笑う。フリージアも笑った。どこか晴れやかな気分だった。セシリアが入れば緊張して眠れないなんて事はなさそうである。

「そうだ……メールしないと」

フリージアが携帯を操作。

「……ふーん」

セシリアが楽しそうに微笑む。

「事務的な……報告よ」

フリージアがつぶやいてメールを送信。送り先はカインだ。

「残念……フリージアちゃんのお姉さんになれると思ったのに」

セシリアは残念そうだ。

「私は……一途な女なの」

フリージアはベッドに倒れ込む。今頃、幸せに過ごしているだろうか。フリージアは自然と笑顔を浮かべていた。

*

刹が雨月神社の外で木刀を振るう。

「真面目だな」

監視者が刀に祈りを込めながらつぶやく。刹は木刀を振りながら

チラリと視線を向ける。

「落ち着かないだけだ」

素っ気無く答えた。

「そうか……私も落ち着かない」

監視者は聞き取れないくらいの小声でつぶやく。

「意外だな」

刹は同じように素っ気無くつぶやいたが、内心では驚いていた。不適に笑うこの監視者も緊張するらしい。半分は人であるという事を改めて感じた。

「失礼な奴だ」

監視者は溜息をついた。これ以上言々と祈りを止めそうなので刹は口を閉じる。

「……」

無言で木刀を振るう。

「……信じてくれとは言わない……ただ……」

監視者が刹に言葉をかける。刹は素振りを止めて、監視者を見つめた。

「分かっている」

刹は一つ頷く。監視者が顔を上げた。真紅の瞳が刹を見つめた。

「……すまない」

監視者はそれだけしか言えなかった。

「……お互いに生き残れたら続きを話そう」

刹はつぶやいて素振りを再開。

「そうだな。そのためにはこの刀に……私の力を込めよう」

監視者がつぶやく。チラリと視線を向けると監視者はうつすらと微笑んでいた。

*

カインは神社の太木に背を預けて瞳を閉じていた。

「……」

無言で明日の事に考えていたら携帯が振動した。

「……？」

無言で首を傾げる。それほどまでにカインの携帯は鳴らない。開いてメールをチェック。

「無事に復活！ 先に死んだら許さないから……以上！」

フリージアからのメールだった。カインは微笑んで携帯を閉じた。マメな男なら返信するだろうが、カインはそれほど器用ではない。返さなくてもどう思っているかは知っているだろう。それだけ付き合いが長い。

「お主が笑うとは……彼女か？」

一刀斎が微笑んで小指を立てる。

「フリージアから浄化の儀が終わったと連絡があっただけだ」

カインは瞳を閉じて腕を組んだ。

「クールでつまらんのう」

一刀斎はがっかりしているようだ。

「……俺にジョークを求めるな。穢れを倒すほうがまだ容易い」

カインがつぶやく。

「……なかなか言うではないか」

一刀斎が笑う。

「ふっ……貴殿と話していると飽きんな」

カインは微笑む。

「ほほ……それはよい事じゃ」

二人は時間が許す限り話した。明日を不安に思っ心はどこかに霧散して消えた。

*

監視者は新たに新調した漆黒のローブを纏う。両手に刀を持ち、雨月神社から外に出る。時刻は午前8時だというのに外は黒い霧に

覆われて薄暗い。その元凶である裂け目を監視者が睨む。

「どう思っ？」

同じく裂け目を睨んでいる袴姿の刹が問う。その隣には一刀斎がいた。

「わざわざ問わねば分らないか」

監視者が不適に笑う。肌を感じるのは寒気。

「可愛げがないのう」

一刀斎は溜息をついて手を差し出す。監視者は無言で刀を渡す。刹には刀を放り投げる。

「……すまない」

刹が刀を受け取って監視者に礼を言った。

「必要な措置だ。気にするな」

監視者が溜息をついた。祈りがなければ戦えないのが護士である。ここで二人も戦力がなくなるのは辛い。

「では……行こう」

カインが三人の背に言葉をかける。

「そうだな……各地の護士と巫女が集まってきている。最後の……総力戦だ」

監視者が歩を進める。三人は表情を引き締めて続いた。

*

同時刻。準備を済ませた真冬と雫はホテルから出る。出迎えるように立っていたのはカフス司祭。

「準備に手間取ってすまない」

カフス司祭が一度頭を下げた。

「いえ……こんな状況で常月に戻れるだけでも感謝しています」

真冬も一度頭を下げた。現在は常月へ向かう飛行機は全て止まっている。カフス司祭の権力で先ほどようやく輸送機を確保した所である。

「無事を……祈る」

カフス司祭が手を差し出す。

「……ありがとうございます」

真冬は手を握る。それを確認してから梯子が視界に入った。上空を向けると腹が膨らんだ一台の輸送機が見えた。

「掴まって！」

フリージアの声を聞いて、真冬は梯子に足をかけて上っていく。雫も続く。それを見て輸送機が浮上。瞬く間に今まで話していたカフス司祭が小さくなっていく。

「……終わらせる……この命を懸けて……」

真冬は独語してから前を見つめた。

*

辺りを包むのは漆黒の闇。もうここが常月という国だとは思えなかった。瓦礫を踏み碎きながらカインは走る。

「……」

無言で大剣を横薙ぎに振るう。狼の姿をした穢れが吹き飛び浄化の光を放つ。どれだけの穢れを倒しただろうか。正確な数は分からないがすでに20体は倒しているような気がする。

「あれから……2時間か」

カインは周りを見渡す。前方で銃声と共に、浄化の光が見える。

両手にハンドガンを持った監視者がいる。素早くこちらに視線を向ける。

「止まるな！」

監視者が叫ぶ。カインは重い足を前に進ませる。

後方からは無数の狼の足音が聞こえる。追いつかれたら終わりだ。そして、前に進んでも大量の穢れがいる。どちらも同じならばただ前に進むのみ。

「援護する」

声と共に銀閃が煌く。

「若い者がここで終わりでは悲しいからのう」

二つの銀閃が道を切り開く。カインは大剣を担いで前にただ走った。

*

輸送機が空を切り裂くように飛ぶ。内部は激しく揺れ、装甲に穴が開くのではないかと思える。だが、誰も文句は言わない。一刻も早く目的地に辿り着きたいからである。

「このまま行けば夜には着くわ」

輸送機の操作を任されたセシリアがつぶやく。その隣には副操縦士のメイサがいる。

「夜か……行きと比べれば早いかな」

真冬がつぶやく。行きは丸一日かかってしまった。それが半日に短縮されたのだから喜ぶべきだろう。

「間に合うかしら」

フリージアが拳を握る。決着がついてから到着という最悪のケースが頭に浮かぶ。

「信じましょう……皆を」

雫が瞳を閉じて祈る。この空いた時間にも雫は真冬の刀に祈りを込めている。

「そうね……私の力もあげるわ」

フリージアが刀に触れる。淡い緑色の光が体から溢れる。エクソシストになり力を落とした巫女の力。だが何もしいよりかはいい。

「ありがとう」

真冬は微笑む。二人は一つ頷いた。

*

正午を過ぎた頃。監視者はハンドガンで穢れを撃ち抜いてから上空を見上げる。

「ついに見えたか……」

監視者がつぶやく。上空には巨大な空間の裂け目がはっきりと見える。中から現れるのは幾多の穢れ。

「こつも多いとはな」

刹が吐き捨てるようにつぶやく。

狼は群れを成し、空中には鳥のような穢れが魚群のように群れていた。これだけの数を倒しきるのは不可能。各地で戦っている護士や巫女には焦りや諦めの表情を浮かべていた。そんな絶望的な状況にさらに変化が訪れる。

「……ふふ……まさかここまでするとはな」

監視者が上空を見て笑った。

裂け目は大量の穢れを吐き出して、上空に逃げていく。周りを無視して突撃。裂け目の中にいる元凶を倒して終わらせる。相談もせずには皆はその道を選んだ。そのため例え仲間が倒れても後ろを振り向かずになだ前に向かった。だが、目指す場所は嘲笑うように空へ、空へと上がっていく。

「……聞こえるか！」

監視者が辺りにいる者に向けて叫ぶ。皆が一斉に監視者に注目。

「今からあの裂け目を……私の全ての力を使ってあの場に留める！だから……私を守ってくれ！」

監視者が力の限り叫ぶ。皆は怪訝な顔をする。今にも数で押されそうなのだ。あの場に固定しただけでは倒せない。その行為に何の意味があるのか。

「あの裂け目に入る者は決まっているな……」

カインが監視者の前に立ち大剣を構えた。

「そうだな」

刹が監視者の右側に立つ。

「ジジイも頑張るかの」

一刀斎が左側に立つ。各地に散らばっていた護士と巫女が一斉に駆け出す。

「……」

監視者が一度深呼吸をした。聴こえてきたのは一つの詠唱。言葉は分からない。ただ悲しくて、力強い歌に聴こえた。

閃光が辺りを包む。裂け目が一度歪み、動きを止める。それを見て皆が覚悟を決める。

（……早く来い……織部真冬……）

監視者は心の中でつぶやいて歌うように詠唱を続けた。

＊

瞳を閉じ常月の地に付くのを待っていた真冬は突如寒気を感じた。

「近いのか……？」

真冬は瞳を開ける。

「まだ一時間はあるわ」

操縦するセシリアがつぶやく。それでもこれだけの寒気を感じる。

「心を乱さないで下さい」

雫が祈りながらつぶやく。

「そうよ。あなたが決めるんだから」

フリージアが微笑む。

「……俺はそんなかつこいい英雄ではないよ」

真冬は微笑む。そう英雄なんかではない。ちっぽけなただの高校生。何かを得るために、何かを失ってきた弱者。だから最後まで足掻く。醜い姿を晒したとしても戦い続ける。

「……真冬らしいですね」

雫は笑った。フリージアも優しく微笑んだ。

＊

裂け目を留めるため詠唱を続ける監視者。無防備な監視者に向けて穢れが飛び掛る。だが眉一つ動かさずに詠唱を続ける。銀閃が手当たり次第に穢れを切り裂く。だが一体が監視者の喉元を狙い飛び掛る。

「させん！」

カインが前に立ち塞がる。狼の姿をした穢れがカインの右腕に牙を食い込ませる。宙に舞った鮮血を見ずにただ穢れのみを睨む。

「この程度……！」

カインが左手に握る短剣で穢れの首を切り裂く。浄化の光を見てカインが右腕に素早く視線を走らせる。震えて上手く力が入らない。

「カイン……下がるのじゃ！」

一刀斎がカインを庇う。目の前には穢れが20体はいた。このまま守っていたら防ぎきれない。

「真冬……お前は何かを守るために失い続けた……」

カインが一刀斎の隣を駆け抜ける。短剣を捨てて2メートルの大剣を構える。両手に可能な限りの力を込める。

「ならば……俺も！」

カインが穢れを睨む。一斉にカインに向けて穢れが飛び掛る。

「消え去れ！」

カインの剛剣が穢れを切り裂く。一撃で10体の穢れを駆逐する剛剣。だが逃れた穢れがカインの足と腕に牙を食い込ませる。

「がああー！ー！」

カインが絶叫を上げる。

「カイン！」

一刀斎が駆け寄るために地面を蹴る。だが、すぐに肩を掴まれた。振り向くと刹が一度首を振る。視線を前に向けるとカインの目の前には新たに20体以上の穢れがいた。

「……ふっ……上等だ……」

カインが穢れを睨む。一斉に穢れが飛ぶ。刹那、カインの大剣が輝きを増す。

「……守れよ……お前の大切な人を……」

カインがつぶやく。光は止まらず溢れていく。爆発的に溢れた光が穢れを纏めて吹き飛ばす。残ったのは力を失い倒れていくカイン。

「馬鹿者が……！」

一刀斎が拳を握った。

「すまない……」

カインは薄れる意識で言葉をつぶやく。頭に浮かんだのは昨日のフリージアのメール。許してくれるとは思わないが、これが最善だとカインは信じた。それを最後にカインは地面に倒れ、光となって消える。溢れた光が意識をもったように戦場を舞った。

*

輸送機の腹部が開く。地面までの高さは20メートルあるだろうか。

「……」

真冬は言葉が出なかった。瓦礫の山となった故郷。戦い続ける護士と巫女。生々しい戦場が広がっていた。

「マカちゃん、お願い」

セシリアの声が聞こえた瞬間に天使が出現。槍を背負って雫とフリージアを抱えて浮上。視線だけで真冬に合図。

「乗れという事か」

真冬はタイミングを合わせる。天使が飛翔した瞬間に飛ぶ。そして、天使の背に着地。戦地に向けて真冬達は突撃した。

*

狼の群れが監視者を包囲する。荒い息を整えて一刀斎と刹が刀を構える。

「来たか……」

刹が上空を見つめる。

「遅すぎるわい」

一刀斎が笑う。

上空には一台の輸送機。膨らんだ腹が開き、飛び出したのは天使。天使は少女二人を腕に抱え、その背に乗っているのは片腕の剣士。「多すぎる！」

真冬は天使の背で刀を振るう。

鷹のような姿をした穢れを叩き落とした真冬は下を見つめる。溢れているのは眩しいばかりの浄化の光。カインが放った光は今もなお戦場を満たしていた。

「……まさか」

雫が口を塞ぐ。

「……馬鹿……」

フリージアが瞳に涙を溜めてつぶやく。だがすぐに涙を拭う。泣いている暇はない。そんな事をしていたらカインに顔向けできない。フリージアは拳を握って辺りを注視する。

唯一、表情を変えない天使が向かうのは空間の裂け目。だが無数の穢れが天使に突撃。真冬が刀でなぎ払い、フリージアが光の矢を放つが落としきれない。

「真冬……あれを！」

フリージアが前方を指差す。そこに見えたのは障壁で出来た道。下を見ると巫女が一斉に障壁を展開していた。

「行つて！」

フリージアは天使の腕から離れて、ナイフと光の矢を展開。穢れに向けて一斉に放ち撃ち落す。それと同時に真冬と雫が飛んだ。「行こう！」

真冬は叫んで障壁で出来た道を駆け抜ける。雫も後に続く。ただ前だけを見る。決して視線は逸らさない。

「絶対に傷なんか負わせないんだから！」

フリージアは自らを守らなかつた。ひたすらにナイフと光の矢を

放ち続ける。無防備なフリーズアを鷹の姿をした穢れの鋭利な爪が切り裂く。それを無視して真冬を狙う穢れに光の矢を放ち続けた。

「行け……もう十分だ」

監視者が一度、つぶやく。それから再度瞳を閉じる。

「すまない」

刹が地面を蹴る。一刀斎も続く。

守りを失った狼の姿をした穢れが一斉に監視者に飛び掛る。腕を足を噛まれても決して詠唱を止めない。彼らが突入をするまでは何があっても止めるつもりはない。

監視者の歌のような詠唱を背に聴いて真冬は障壁の道を駆け上がる。

「もう少し！」

真冬が叫ぶ。空間の裂け目まで残り5メートル。

「裂け目が！」

雫が悲鳴に近い声を出す。真冬も表情を歪める。

裂け目が閉じかけている。真冬が刀を上げる。ここで祈りを解放させる訳にはいかないが、中に入らなければどうしようもない。

「その役目は……俺が引き受ける」

刹が高速で真冬の隣を駆け抜ける。銀閃が裂け目を切り裂く。だが一撃だけでは威力が足りない。裂け目がその口を閉じていく。一人がギリギリで通れる広さ。

「……飛べ……真冬！」

一刀斎の声を聞いて真冬は裂け目に向けて飛ぶ。真冬達が入るよりも早く一刀斎が飛び込む。裂け目が一刀斎の体を潰そうとする。

「この道は……ワシが開く！」

一刀斎の刀から閃光が溢れる。爆発的な光に向かい真冬と雫が飛び込んだ。痛みは感じなかった。強烈な閃光に押されて二人は裂け目の内部に突入。

「……後は任せた」

刹は足場を失って地面に落ちていった。

*

眩しい閃光が収まり二人は前方を見つめる。漆黒の闇が辺りを包んでいた。ただただ暗い。

「……行こう」

真冬は足元を確かめてから歩を進める。

「……はい」

雫は頷いて後を続く。

平らで固い地面を進んだ所で濃い霧が溢れる箇所を見つけた。二人は凍死しそうなほどの寒さを無視して武器を構える。

「……我は望む……神聖なる温かさを」

雫が言葉を紡ぐ。二人の体温が上昇。それが合図だった。黒い霧の中から一体の穢れが現れる。まず見えたのは頭部に生えた角。そして、漆黒の腕が姿を現す。

「見た目に惑わされないうでください」

雫が鉄扇を構える。力を持った穢れは人を恐怖させる姿になると言われている。以前、セシリアが戦った悪魔の穢れなどがいい例だ。

「……鬼の穢れか……常月らしいな」

真冬は穢れを睨む。

目の前にいるのは引きしまった体躯をした鬼の穢れ。巨大な竜でも出てくるかと思っていたが違った。だが見た目に惑わされてはいけない。監視者でも倒せないという穢れ。

「二人でなら」

雫が鉄扇を構える。頷いた時に穢れが地面を蹴る。突如出現した裂け目から金棒を取り出して真冬に向けて振り下ろす。

「我は望む……神聖なる護りを！」

雫が言葉を紡ぐ。真冬は警戒して刀を構える。金棒と障壁が激突。刹那、無数の破片が散らばる。真冬の手には伝わるのは重い衝撃。

「ぐっ……！」

真冬は顔をしかめた。それと共に感じたのは腕が引きちぎられるような恐怖。

「……それでも……」

真冬は刀を押す。激しい火花を撒き散らしながら刀が金棒を切り裂いていく。穢れが真紅の瞳を真冬に向ける。その瞳を睨んでから強引に横薙ぎに振るった。

「……諦めない！」

真冬は強引に刀を横薙ぎに振るう。金棒を切断してから一回転。穢れの胴を刀で切り裂く。雫とフリージアの祈りが込められた刀。折れるなんて思ってもいない。その信頼に応えるように刀が輝きを増す。

「援護します！」

雫が細い針を穢れに投擲。だが穢れは一度咆哮を上げて針を弾き飛ばしながら突撃してくる。真冬は舌打ちをしてから刀を構える。今からでは避けられない。ならば受け止めるだけだ。

「そんなの受け止めたら死んでしまうわよ」

上空から声が聞こえた。視界に入ったのは光の矢と、輝くナイフ。幾重の光が穢れの足を貫く。

「フリージア！」

真冬は声を上げて左に跳躍。穢れとの距離を開ける。上空から降ってくるように現れたのはフリージアだった。

「お待たせ」

フリージアは弱々しく笑う。着ている修道着は血で染まっていた。浄化の儀を受けていなかったら、ここまで辿り着く事はできなかっただろう。今でも気を抜いたら倒れてしまいそうである。それでも勇敢にナイフを構えて立ち尽くす。穢れは真紅の瞳でフリージアを睨んだ。

「来なさい！ この命を懸けて……」

フリージアがナイフを投擲。輝くナイフが空間を切り裂く。穢れ

は高速のナイフを左腕で弾き飛ばして突撃。それを予測していたフリージアは光の矢を形成。

「……抗うから！」

声と共に光の矢が穢れを貫く。腕を足を貫かれても霧が溢れるだけで動きを止めない穢れ。真冬は動きが鈍った穢れの背を斬りつける。だが、真冬を無視してフリージアに向ける足を止めない。

「……」

フリージアは聖書を捨ててナイフを構える。ナイフが光を増していく。今ならカインの気持ちがあった。道を開く事ができるなら命なんて安いものだ。

「……そう簡単に諦めるな」

冷たい声がフリージアの後ろから聞こえた。突如、体が浮いた。それと同時に耳を塞ぎたくなるような銃声。

「監視者……どうして？」

フリージアは自らを抱えて跳躍した監視者を見つめる。

「ただ……奴を消す。それだけだ」

監視者はつぶやいて引き金を引き続ける。目標を失った穢れが監視者を睨む。

「お前の相手は俺だ！」

真冬が穢れを切り裂く。穢れが真冬をうつとうしそくに睨む。両手に金棒を形成して、真冬に振り下ろす。先ほどとは比べ物にならない衝撃が真冬を襲う。腕だけでなく、足までもが悲鳴を上げる。

「潰されるかよ！」

真冬は力の限りに吼える。祈りを解放して金棒を押し返す。

「マカちゃん！ 今だよ」

この場に似合わないのんびりとした声が響く。刹那、天使の槍が穢れの腕を突き刺す。鬼は咆哮を上げて天使を殴打。天使はバランスを崩して数歩後ずさる。

「効いてないのか？」

地面に着地した監視者が苦々しくつぶやく。

「援護して……効かないなら効くまで……」

フリージアは両手にナイフを持って地面を駆ける。

「やるだけよ!」

フリージアはナイフを投げながら接近。穢れがフリージアに向く。

「無茶ばかりだな」

監視者は溜息をついて両手に握るハンドガンで援護。フリージアは銃弾を受けて怯んだ隙にナイフを腹部に突き刺す。だが穢れは全く怯まずにフリージアの頭部を掴み、力任せに投げ捨てる。

「フリージア!」

雫が慌ててフリージアを受け止める。穢れはフリージアと雫に向けて地面を駆け抜ける。

「つう……」

フリージアはふらつきながら雫から離れる。このままでは二人とも体当たりを受けて終わりだ。セシリアの光の矢を受けても、銃弾を受けても止まらない穢れ。

雫は障壁を張るために深呼吸をする。

「我は望む……きゃあ!」

だが途中で言葉が途切れる。フリージアが雫を突き飛ばしたのだ。……最後にあんたを守れてよかった」

フリージアは雫に微笑む。それから前を見た。真冬が地面を駆け抜けているのが見える。

「……間に合わせなさいよ、真冬」

フリージアは地面を蹴った。もう一度ナイフを穢れの胴に突き刺す。

「一斉に……攻撃して……ありたっけの力で!」

フリージアは叫ぶ。監視者とセシリアは一瞬だけ迷う。

「早く!」

フリージアは叫ぶ。それと同時にナイフが輝く。穢れの腕がフリージアの頭部に伸びる。その瞬間に光の矢と銃弾が穢れの背に直撃。大量の霧が溢れる。

「食らえ！」

閃光が辺りを包む。爆発的な光が穢れの体を焼いていく。穢れは体が焼かれるのもお構い無しにフリージアの頭部を左腕で掴む。骨が軋む音が不快な音が聞こえた。

「フリージア！」

真冬が穢れの左腕に向けて刀を振り下ろす。激しい閃光に焼かれた腕は今までの固さを失い、軽々と切断できた。穢れは数歩下がる。切断された腕と共にフリージアが固い地面に落ちた。真冬は慌ててフリージアを抱き上げる。

「……貸しにしとく……来世で返しなさいよ」

フリージアは真冬の口に口付けをする。幸せそうな微笑を最後に光となって消える。光が真冬の刀を包む。力が戻っていく。真冬の心を埋め尽くしたのは悲しみではなかった。穢れに対する怒り。「

……………」

無言で怒りを力に変えた真冬はゆっくりと立ち上がり振り向いた。穢れが金棒を振り上げる。金棒が障壁とぶつかるのを見て真冬は地面を駆け抜けた。

どうして人は大切なものばかり失うのだろうか。そう少年は問うていた。真冬にも答えは分からない。でも、こんな思いをするのはもう嫌だった。泣いている時間も与えられずに戦い続ける。そしてまた失う。

「もう嫌なんだ！」

輝きを増した刀が穢れを切り裂く。だが穢れは倒れない。真紅の瞳をただこちらに向けるだけ。無防備な真冬に穢れが腕を振り上げる。

「無茶ばかりするのだな」

監視者が振り下ろされた腕を左腕で受け止める。骨が碎ける不快な音がしたが、監視者は無表情で穢れを見つめる。

「それが若さの特権よ」

両手に剣を持ったセシリアが穢れを切り裂く。

「もう……止める」

真冬は刀を強く握る。セシリアと監視者が穢れの腕に吹き飛ばされる。そして真冬の前に立ったのは雫。

「止める……！」

真冬は叫んで突撃した。刀を真つ直ぐに構えて穢れの胴を突き刺す。それと同時に衝撃が真冬を襲った。遅れて頭部を殴打さたのだと分かった。

「真冬！」

悲痛な叫びを最後に真冬は意識を失った。

*

真つ暗な空間だった。先ほどいた空間も真つ暗だった。だが寒気は感じない。敵意も感じない。ここが別の場所だとすぐに分かった。
「死んだのかな」

真冬は顔を落として自嘲の笑みを浮かべる。これで終わりならば、今まで一体何をやっていた事だろうか。もう一度立ち向かいたいが、ここから戻る方法すら分からない。

「……まだ間に合うよ」

懐かしい声がする。真冬は顔を上げた。そこには懐かしい人物がいた。

「春！」

真冬は叫んで一步步み寄る。立っていたのは巫女服を着た春だった。陽だまりのような笑顔を浮かべて温かく見つめる。真冬は溢れる涙を止められなかった。

「泣かないで……まだ真冬にはやる事がある」

春が指を差す。真冬は後ろを振り向いた。2メートルを超える巨大なドアがあった。そのドアがゆっくりと開く。溢れる閃光が道を示す。帰るべき道がそこにあった。

「……そうだな。守らないと……俺の大切な人を」

真冬は振り向く。

「うん！」

春が元気よく頷く。真冬はその声を聞いて走り出す。次は失わなために。大切な人を守るために、光が溢れるドアを潜り抜けた。

*

障壁が粉々に砕け散る。横薙ぎに振るわれる金棒を後ろに飛んで回避した雫は額に浮かぶ汗を拭う。肩では荒い息をしていた。

「……最後は一人ですか」

雫は独語した。一人で戦っていた時を思い出す。あの時は平気だった。でも、今は心細くて仕方ない。隣にはいるべき人がいない。自分はどれだけ弱くなっただろうか。

「つつ……」

振り下ろされる金棒をギリギリで回避した雫はバランスを崩す。立ち上がるよりも前に金棒が横薙ぎに振るわれる。

「終わりに……なんてさせません」

雫は鉄扇で受け止める。だが鉄扇は数秒も耐える事ができなかった。砕けた破片が雫を切り裂く。迫ってくる金棒が見える。ものの数秒でぶつかる金棒がゆっくりに見えた。雫は拳を握った。

真冬は傷む体を起き上がらせる。霞む視界で守るべき人を探すと、雫に迫る金棒が視界に入った。

「失わない」

真冬が刀を握る。刀は輝きを増す。

「もう……二度と！」

叫ぶと同時に高速で地面を駆け抜ける。

銀閃が雫の視界に入る。雫は目を見開いた。金棒を切断して目の前に立っていたのは真冬。こんな目に合わせてしまったのに、大切なものを失い続けたというのに戦い続けてくれる護士。今もこうし

て前に立ち守ってくれる大切な人。

「遅いです」

雫は溢れる涙が止まらなかった。

「ごめん……」

真冬はそれだけをつぶやいた。雫は違和感がした。この謝罪はどこかおかしい。

「待って……」

雫が手を伸ばす。

「待って！」

もう一度叫ぶ。だが真冬は地面を蹴った。刀が輝きを増していく。穢れが金棒を上げた瞬間に銀閃が煌く。高速の三連撃が穢れを切り裂いた。

「……」

動きが鈍った穢れに刀を突き刺す。そして、穢れの赤い瞳を真っ直ぐに睨む。

「……消え去れ！」

真冬が叫んだ瞬間に刀から閃光が溢れる。爆発的な光が空間を照らす。光に対抗するために穢れの体から霧が溢れる。二つの力が拮抗。

「……くっそ……」

真冬は力を込め続ける。だがそれでも足りない。徐々に霧に押されていく。その証拠に力に負けて刀に亀裂が入った。刀が折れた時が真冬の最後。

「まだだ……まだ！」

真冬は刀を見つめて叫ぶ。叫んだ瞬間に真冬の手を温かい手が触れた。真冬の手を通じて祈りが込められていく。

「……一人で無茶しないで下さい。どこまでもお供すると言いましたよね」

雫は瞳に涙を溜めて真冬の手をしっかりと握った。

「ごめん……」

真冬は前を見たままつぶやく。刀が力を取り戻す。

「勝ちますよ」

雫も前を向いてつぶやいた。溢れる閃光が霧を押し返す。それを見て真冬はありったけの力を刀に込める。

「消え去れ！」

真冬は再度叫ぶ。それを合図に閃光が空間を満たす。雫は眩しさに瞳を閉じる。

再度、瞳を開いた時には光で満たされていた。刀は役目を終えたように砕け散る。

「……………」

雫は肩を震わせて手を握る。そこに真冬の手はなかった。あの温もりはもうない。触れられない。雫は全身の力が抜けた。膝が固い地面に触れる。

「……守るなら……最後まで守ってください……」

雫は顔を落とす。頬には涙が流れた。固い地面に涙の雫が落ちる。「ずっと側にいてください……もう……一人にしないで……」

雫は溢れる涙を堪えてつぶやいた。

*

少年は通い慣れた道をひたすら走る。息が上がっているが構わない。どうしても会いたい人がいる。守りたい人がいるから。

Ｔ字路を右に曲がり、さらに加速。そこで足を止めた。

「……………」

少年は言葉をかける事ができなかった。込み上げてくる感情を抑えられない。これはおそらく自分の気持ちではない。織部真冬の……前世の記憶。

目の前にいたのは艶やかな黒髪を腰まで伸ばした少女。夢の中で見た雨月雫だった。でも、この少女は雨月雫ではないのだろう。

「……………」

少女が視線に気づいて振り向いた。少年を見た瞬間に涙を流す。

「初めまして」

少年は少女に微笑む。

「初めまして」

少女も涙を浮かべながら微笑んだ。二人はお互いに駆け寄って抱き合う。

「今度は……一人にしないでください……」

少女が耳元で囁く。

「ああ……守るよ。君を……」

少年は抱きしめる力を強くする。少女が応えるように腕の力を強める。夢の中の彼らは幸せにはなれなかった。でも、道を切り開いてくれた。だから自分達は懸命に生きようと思う。彼らの分まで。

輪廻の鎖 最終回（後書き）

最終回までお読みいただきありがとうございました。感想をいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9898w/>

輪廻の鎖

2011年10月8日03時20分発行